

秋田県文化財調査報告書第407集

# 深 渡 遺 跡

—森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVI—

2 0 0 6 • 3

秋田県教育委員会



遺跡遠景（北から）



遺跡遠景（東から）



S I 2001竪穴住居跡確認状況（東から）



S I 2001竪穴住居跡跡検出状況（東から）



第Ⅰ群土器群



第Ⅱ群 A 類土器群



第二群 B類土器群



第三群土器群

## 序

本県には、これまでに発見された約4,600か所の遺跡に加え、先人の遺産である埋蔵文化財が数多く残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、これまで大きな洪水や渴水の被害に見舞われてきた米代川や阿仁川の流域では、自然災害の脅威や不安を解消するためのダム建設が長く望まれ、洪水被害の軽減、灌漑用水・水道用水の供給、水辺環境の保全などを目的とする森吉山ダムの建設事業が行われてきました。

このことをうけ、秋田県教育委員会では地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに取り組んできました。

本報告書は、森吉山ダム建設に先立って、平成15年度に北秋田市において実施した深渡遺跡の発掘調査成果についてまとめたものであります。調査の結果、縄文時代前期から晩期にかけての竪穴住居跡や土坑等が検出され、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助になることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所、北秋田市、北秋田市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

秋田県教育委員会

教育長 小野寺清

## 例　　言

1 本書は、秋田県北秋田市(旧森吉町)森吉字深渡家ノ前104-1外に所在する深渡遺跡の埋蔵文化財発掘調査の成果を収めたものである。

2 発掘調査は森吉山ダム建設事業に係り、平成15(2003)年度に秋田県教育委員会が実施した。

3 深渡遺跡の調査は今回が第3次となる。過去2回の調査概要は以下の通りであり、それぞれ報告書が刊行されている。

（第1次）調査主体：森吉町教育委員会　　調査年度：平成8年度

　　調査面積：919m<sup>2</sup>　　調査原因：第12回日本ジャンボリー開催に伴うアクセス道路建設

（第2次）調査主体：秋田県教育委員会　　調査年度：平成9年度

　　調査面積：4,000m<sup>2</sup>　　調査原因：第12回日本ジャンボリー開催に伴うアクセス道路建設

4 今回の調査では、未調査部分16,800m<sup>2</sup>のうち、工事用道路下に係る遺跡西端部1,100m<sup>2</sup>を除く15,700m<sup>2</sup>、及び平成9年度調査の際に現地保存された石棺様組石を調査した。

5 遺跡の調査結果は平成15年度に刊行された『秋田県埋蔵文化財センター年報22』、『深渡遺跡発掘調査資料』において概要を公表したが、整理作業の進捗に伴う検討の結果、時期・性格など所見を変更した部分がある。本書と相違のある場合、本書をもって訂正したものとする。

6 本書の執筆分担は下記のとおりである。編集は菅野美香子が行った。

第1章～第3章：菅野美香子、三浦俊成　　第4章：菅野美香子、榮一郎

第5章：株式会社古環境研究所、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社大和地質研究所

第6章：菅野美香子

7 本書に使用した地図の原図は、第1図は1995年秋田県農政部農村振興課発行「土地分類基本調査大葛 表層地質図」、第2図は国土地理院発行1/50,000地形図「米内沢」「大葛」、第3図は国土地理院発行1/25,000地形図「阿仁前田」「太平湖」である。第4・5図は森吉山ダム工事事務所提供の1/1,000平面図をもとに作成した。

8 土層断面図などの土色の表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』(2001年度版)に準拠した。

9 発掘調査、自然科学分析、整理作業においては一部を下記の機関に委託した。

水準測量及び方眼杭設置：株式会社共和技研　　石器実測・製図：株式会社アルカ

遺跡空中写真撮影：有限会社デジタルビジネス秋田　　遺物写真撮影：いろは写房

遺構図面製図、土器実測・製図：株式会社シン技術コンサル

放射性炭素年代測定、樹種同定：株式会社古環境研究所

花粉・プラントオバール・珪藻科学分析、S I 2001出土礫肉眼鑑定、火山灰(テフラ)分析

：パリノ・サーヴェイ株式会社　　石器石材肉眼鑑定：株式会社大和地質研究所

10 調査に関する記録と出土品は秋田県教育委員会が保管している。

11 発掘調査及び構造・遺物の整理に当たって、県内の教育委員会・諸機関のほか、以下の方々及び機関からご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表す。(五十音順、敬称略)

秋元信夫 岩井浩介 榎本剛治 児玉大成 小林達雄 富樫泰時 三浦貴子

## 凡　　例

- 1 本書に掲載した平面図の方位は日本測地系平面直角座標第X系座標北である。本文及び巻末の報告書抄録の経緯度は世界測地系に準拠する。
- 2 本書で用いる略記号は以下のとおりである。

S I : 竪穴住居跡	P : 竪穴住居跡に伴う柱穴	S K : 土坑
S Q : 配石遺構	S N : 焼土遺構、炉跡	S D : 溝跡
S K I : 竪穴状遺構	S B : 掘立柱建物跡	S Q N : 石組炉
S Q S : 石棺様組石	S K P : 柱穴様ピット	
R P : 土器	R Q : 石器	S : 碓
- 3 遺構図及び遺物図の縮尺は以下のとおりである。各図にスケールを付してある。

竪穴住居跡: 1 / 30, 1 / 50	竪穴住居に伴う炉跡: 1 / 20, 1 / 40	掘立柱建物跡: 1 / 50
土坑: 1 / 30, 1 / 40	竪穴状遺構、溝跡: 1 / 40	配石遺構: 1 / 20
焼土遺構: 1 / 20, 1 / 40	石棺様組石: 1 / 30	炉跡、石組炉: 1 / 20, 1 / 40
土器実測図: 1 / 3	石器実測図: 2 / 3, 1 / 3	
- 4 遺物写真の縮尺は不同である。
- 5 土層は基本層序にローマ数字(I, II・・・)、遺構堆積土にアラビア数字(1, 2・・・)を用いた。基本層位は7か所で観察しており、それぞれにA～Gの識別番号を付した。「A I層」は「基本層序A地点におけるI層」を表す。
- 6 土器実測図は、土器断面図の左側に外面図(拓影)、右側に内面図(拓影)を配した。
- 7 遺物番号は挿図ごとに1から付した。
- 8 遺物番号は必要に応じて第1図1を1-1のように略述した。遺構内出土遺物分布図、遺物図版などの遺物番号は、挿図中の遺物番号と一致する。
- 9 挿図中に用いたスクリーントーンの凡例は以下のとおりである。

被然痕



炭化物  
範 囲



タール  
付着範囲

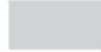


礫(断面)



赤彩範囲

磨 痕



アスファルト  
付着範囲



# 目 次

序

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	2
第2章 遺跡の環境	4
第1節 遺跡の位置と立地	4
第2節 遺跡の歴史的環境	6
第3章 発掘調査の概要	14
第1節 遺跡の概観	14
第2節 調査の方法	14
1 野外調査	14
2 室内整理	16
第3節 調査の経過	18
第4章 調査の記録	19
第1節 基本層序	19
1 高位段丘面	19
2 中位段丘面	20
3 低位段丘面	20
4 泥濘原	26
第2節 検出遺構と出土遺物	27
1 概要	27
(1) 検出遺構	27
(2) 出土遺物	27
2 繩文時代	40
(1) 遺構と遺構内出土遺物	40
① 壺穴住居跡	40
② 土坑	53
③ 溝跡	68
4 古代以降	179
(1) 遺構と遺構内出土遺物	179
① 掘立柱建物跡	179
② 壺穴状遺構	179
③ 土坑	180
④ 炉跡	181
⑤ 石組炉	182
⑥ 柱穴様ビット	183
5 第3節 S Q S 12石棺様組石の再調査について	191
第5章 自然科学分析	197
第1節 放射性炭素年代測定	197
第2節 樹種同定	200
第3節 火山灰(テフラ)分析	201
第4節 花粉・プラントオバール・珪藻科学分析	203
第5節 岩石肉眼鑑定	210
第6節 岩石肉眼鑑定(S I 2001出土礫)	216
第6章 まとめ	217
報告書抄録	285

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺の表層地質	5	第30図 S I 2001堅穴住居跡(1)・S K 2013 ・2014土坑(1)	88
第2図 周辺の遺跡	8	第31図 S I 2001堅穴住居跡(2)	89
第3図 森吉山ダム建設事業区域に分布する 遺跡	10	第32図 S I 2001堅穴住居跡(3)・S K 2013 ・2014土坑(2)	90
第4図 周辺地形図	15	第33図 S I 2001堅穴住居跡(4)	91
第5図 グリッド配置図・遺跡内地形図	17	第34図 S I 2001堅穴住居跡(5)	92
第6図 基本順序位置図	22	第35図 S I 2001堅穴住居跡(6)・S K 2013 ・2014土坑(3)	93
第7図 基本順序(1)	23	第36図 S I 5013堅穴住居跡(1)	94
第8図 基本順序(2)	24	第37図 S I 5013堅穴住居跡(2)	95
第9図 基本順序(3)	25	第38図 S I 2004堅穴住居跡	96
第10図 遺構配置図(1)	28	第39図 S I 3266・5010堅穴住居跡	97
第11図 遺構配置図(2)	29	第40図 S K 2010・2012・2015・2022土坑	98
第12図 遺構配置図(3)	30	第41図 S K 2019・2021土坑	99
第13図 遺構配置図(4)	31	第42図 S K 2023・2029・3101・3121土坑	100
第14図 遺構配置図(5)	32	第43図 S K 3175・3181・3213・3261土坑	101
第15図 遺構配置図(6)	33	第44図 S K 3218・3228・3236・3262・3263土坑 .....	102
第16図 遺構配置図(7)	34	第45図 S K 3265・3267・3268・3285土坑	103
第17図 遺構配置図(8)	35	第46図 S K 3281・3282・3286・3288土坑	104
第18図 遺構配置図(9)	36	第47図 S K 3289・3290・3291・3292・3294土坑 .....	105
第19図 遺構配置図(10)	37・38	第48図 S K 3295・3304・3313・5007・5008 ・5009土坑	106
第20図 S I 5001堅穴住居跡(1)	78	第49図 S K 5017・5018・5024・5057・5063 ・5067土坑	107
第21図 S I 5001堅穴住居跡(2)	79	第50図 S D 3315溝跡・S N 04焼土遺構	108
第22図 S I 5001堅穴住居跡(3)	80	第51図 S N 2005・2030・3303焼土遺構	109
第23図 S I 5001堅穴住居跡(4)	81	第52図 遺構内(S I 5001)出土土器類(1)	110
第24図 S I 5003・5004・5005堅穴住居跡(1)	82	第53図 遺構内(S I 5001)出土土器類(2)	111
第25図 S I 5003・5004・5005堅穴住居跡(2) ・S Q 5025配石遺構(1)	83	第54図 遺構内(S I 5003・5004) 出土土器類(3)	112
第26図 S I 5003・5004・5005堅穴住居跡(3)	84	第55図 遺構内(S I 5005)出土土器類(4)	113
第27図 S I 5003・5004・5005堅穴住居跡(4) ・S Q 5025配石遺構(2)	85		
第28図 S I 5012堅穴住居跡(1)	86		
第29図 S I 5012堅穴住居跡(2) ・S I 1015堅穴住居跡	87		

第56図 遺構内(S I 2001・2004・5004・5005 ・5012・S K 2015・2019)出土土器類(5).....	114	第80図 遺構外出土土器類(6).....	138
第57図 遺構内(S I 3266・5010・5013)出土 土器類(6).....	115	第81図 遺構外出土土器類(7).....	139
第58図 遺構内(S K 2012・2015・2019 ・S D 2007)出土土器類(7).....	116	第82図 遺構外出土土器類(8).....	140
第59図 遺構内(S K 2019・S D 2007)出土 土器類(8).....	117	第83図 遺構外出土土器類(9).....	141
第60図 遺構内(S K 3101・3262・3263・3267 ・3281・3290・3291)出土土器類(9).....	118	第84図 遺構外出土土器類(10).....	142
第61図 遺構内(S K 3282・3292・3294・5007 ・5018・5020)出土土器類(10).....	119	第85図 遺構外出土土器類(11).....	143
第62図 遺構内(S D 2007)出土土器類(11).....	120	第86図 遺構外出土土器類(12).....	144
第63図 遺構内(S I 5001)出土石器類(1).....	121	第87図 遺構外出土土器類(13).....	145
第64図 遺構内(S I 5001)出土石器類(2).....	122	第88図 遺構外出土土器類(14).....	146
第65図 遺構内(S I 5001)出土石器類(3).....	123	第89図 遺構外出土土器類(15).....	147
第66図 遺構内(S I 1015・5001)出土 石器類(4).....	124	第90図 遺構外出土土器類(16).....	148
第67図 遺構内(S I 5003・5004)出土 石器類(5).....	125	第91図 遺構外出土土器類(17).....	149
第68図 遺構内(S I 5005)出土石器類(6).....	126	第92図 遺構外出土土器類(18).....	150
第69図 遺構内(S I 5012)出土石器類(7).....	127	第93図 遺構外出土土器類(19).....	151
第70図 遺構内(S I 2001・5012・5013)出土 石器類(8).....	128	第94図 遺構外出土土器類(20).....	152
第71図 遺構内(S I 2004・3266・5010 ・S K 2022)出土石器類(9).....	129	第95図 遺構外出土土器類(21).....	153
第72図 遺構内(S K 2019・3263・3282・3304) 出土石器類(10).....	130	第96図 遺構外出土土器類(22).....	154
第73図 遺構内(S K 3289・3290・3292 ・S Q 5025)出土石器類(11).....	131	第97図 遺構外出土土器類(23).....	155
第74図 遺構内(S K 5024・5067・S N 3303 ・S D 2007)出土石器類(12).....	132	第98図 遺構外出土土器類(24).....	156
第75図 遺構外出土土器類(1).....	133	第99図 遺構外出土石器類(1).....	157
第76図 遺構外出土土器類(2).....	134	第100図 遺構外出土石器類(2).....	158
第77図 遺構外出土土器類(3).....	135	第101図 遺構外出土石器類(3).....	159
第78図 遺構外出土土器類(4).....	136	第102図 遺構外出土石器類(4).....	160
第79図 遺構外出土土器類(5).....	137	第103図 遺構外出土石器類(5).....	161
		第104図 遺構外出土石器類(6).....	162
		第105図 遺構外出土石器類(7).....	163
		第106図 遺構外出土石器類(8).....	164
		第107図 遺構外出土石器類(9).....	165
		第108図 遺構外出土石器類(10).....	166
		第109図 遺構外出土石器類(11).....	167
		第110図 遺構外出土石器類(12).....	168
		第111図 S B 3259・3260掘立柱建物跡.....	186
		第112図 S K I 5064堅穴状遺構・S K 1019 ・2028土坑.....	187
		第113図 S K 2033・3299・5020土坑・S N 1025 ・3216倒跡.....	188
		第114図 S N 3293炉跡.....	189

第115図 S Q N 2025石組炉	190	第122図 主要花粉化石群集の層位分布	209
第116図 S Q S 12石棺様組石(1)	194	第123図 石器の岩石構成	215
第117図 S Q S 12石棺様組石(2)	195	第124図 遺構分布図	218
第118図 S Q S 12石棺様組石(3)	196	第125図 時期別遺構・遺物分布図	219
第119図 火山ガラスの屈折率	202	第126図 深度遺跡検出堅穴住居跡	223
第120図 プラントオバール群集の層位分布	209	第127図 第I群土器文様属性図	228
第121図 主要珪藻化石群集の層位分布	209		

## 表 目 次

第1表 周辺の遺跡	9
第2表 森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡	10
第3表 調査の経過	18
第4表 基本層序対応表	26
第5表 検出遺構一覧	39
第6表 繩文時代柱穴様ピット	71
第7表 石器・石製品出土量	76
第8表 土器・土製品観察表	169
第9表 石器観察表	175
第10表 古代以降柱穴様ピット	184
第11表 S Q S 12石棺様組石類例	193
第12表 土壌分析試料一覧	208
第13表 プラントオバール分析結果	208
第14表 珪藻分析結果	208
第15表 花粉分析結果	209
第16表 器種別石質一覧	215
第17表 石器の岩石構成	215
第18表 岩石肉眼鑑定(S I 2001出土礫)	216
第19表 深度遺跡堅穴住居跡一覧	223

## 図版目次

巻頭図版 1

巻頭図版 2

巻頭図版 3

巻頭図版 4

- |  |                      |
|--|----------------------|
| 図版 1 遺跡全景  | 図版29 遺構外出土土器類(1)     |
| 図版 2 S I 5001堅穴住居跡                                     | 図版30 遺構外出土土器類(2)     |
| 図版 3 S I 5003・5004・5005堅穴住居跡                           | 図版31 遺構外出土土器類(3)     |
| 図版 4 S I 5004・5005・5012堅穴住居跡                           | 図版32 遺構外出土土器類(4)     |
| 図版 5 S I 2001堅穴住居跡(1)                                  | 図版33 遺構外出土土器類(5)     |
| 図版 6 S I 2001堅穴住居跡(2)                                  | 図版34 遺構外出土土器類(6)     |
| 図版 7 S I 2001堅穴住居跡(3)                                  | 図版35 遺構外出土土器類(7)     |
| 図版 8 S I 5013・204堅穴住居跡                                 | 図版36 遺構外出土土器類(8)     |
| 図版 9 S I 5010堅穴住居跡                                     | 図版37 遺構外出土土器類(9)     |
| 図版10 S I 3266堅穴住居跡                                     | 図版38 遺構外出土土器類(10)    |
| 図版11 S K 2013・2014・5009・5017土坑                         | 図版39 遺構外出土土器類(11)    |
| 図版12 S K 3213・3261・3262・3267土坑                         | 図版40 遺構外出土土器類(12)    |
| 図版13 S K 3282・3286・3289・3290土坑                         | 図版41 遺構外出土土器類(13)    |
| 図版14 S K 3291・3292・3294・3295土坑                         | 図版42 遺構外出土土器類(14)    |
| 図版15 S D 2007・3315溝跡・S Q 5025配石遺構<br>・S N 2030燒土遺構     | 図版43 遺構外出土土器類(15)    |
| 図版16 S K I 506-4堅穴状遺構・S B 3259掘立柱建物<br>跡・S Q S 12石棺様組石 | 図版44 遺構外出土土器類(16)    |
| 図版17 S Q N 2025石組炉                                     | 図版45 遺構外出土土器類(17)    |
| 図版18 遺構内出土土器類(1)                                       | 図版46 遺構外出土土器類(18)    |
| 図版19 遺構内出土土器類(2)                                       | 図版47 遺構外出土石器類(1)     |
| 図版20 遺構内出土土器類(3)                                       | 図版48 遺構外出土石器類(2)     |
| 図版21 遺構内出土土器類(4)                                       | 図版49 遺構外出土石器類(3)     |
| 図版22 遺構内出土土器類(5)                                       | 図版50 遺構外出土石器類(4)     |
| 図版23 遺構内出土土器類(6)                                       | 図版51 出土樹種(1)         |
| 図版24 遺構内出土土器類(7)                                       | 図版52 出土樹種(2)・火山ガラス   |
| 図版25 遺構内出土土器類(8)                                       | 図版53 出土珪藻化石・プラントオパール |
| 図版26 遺構内出土石器類(1)                                       | 図版54 出土花粉化石          |
| 図版27 遺構内出土石器類(2)                                       |                      |
| 図版28 遺構内出土石器類(3)                                       |                      |

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経過

秋田県北部を東から西へ貫流する米代川の流域では、過去、幾多の洪水による被害を受けてきた。<sup>(註1)</sup>

昭和47年7月、梅雨前線の停滞による集中豪雨の被害は過去最大規模のもので、能代市では堤防が決壊し、甚大な被害が発生した。この大洪水を契機に「米代川工事実施基本計画」が改訂され、洪水調節を目的とする米代川上流ダム群の一つとして、阿仁川支流の小又川に阿仁川ダムが建設されることとなった。のちに森吉山ダムと改称されるこのダムは、水量調節のほか、灌漑用水・水道用水の供給、水力発電等を目的とする多目的ダムである。<sup>(註2)</sup><sup>(註3)</sup>

森吉山ダム建設に伴い、事業本体である建設省東北地方建設局(現国土交通省東北地方整備局)森吉山ダム工事事務所は、文化財保護法に基づき、秋田県教育委員会に対し貯水池流域面積248.0km<sup>2</sup>の遺跡分布調査を依頼した。これを受けて秋田県教育委員会は、平成4・5年の2か年にわたって遺跡分布調査を実施し、桐内遺跡、二重鳥遺跡<sup>(註4)</sup>、塗下遺跡、棚岱遺跡、碎渕遺跡、丹瀬口遺跡の新発見の6遺跡が、開発区域に関わることを確認した。この結果に基づき、森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会は、平成3年発行の『秋田県遺跡地図(県北版)』に記された「周知の遺跡」、及び遺跡分布調査で発見された「新発見の遺跡」の双方についての範囲確認調査を、秋田県教育委員会に依頼することを申し合わせた。範囲確認調査は平成6年度から平成10年度にかけて秋田県教育委員会によって実施され、現在貯水予定地周辺では、範囲確認調査でさらに新しく発見された遺跡を含め、60遺跡が確認されている。<sup>(註5)</sup>

森吉山ダム関連工事は、平成6年度に下流工事用道路から開始され、翌年には事業地内の材料運搬路に移った。一方、同年、第12回日本ジャンボリーが平成10年に奥森吉で開催されることが決定し、会場への幹線道路として、森吉山ダム工事用道路を一部共用することになった。これを受け、森吉町教育委員会により、平成7年に日廻岱A遺跡・碎渕遺跡、平成8年に上悪戸D遺跡<sup>(註6)</sup>・深渡遺跡<sup>(註7)</sup>・地蔵岱遺跡・森吉家ノ前B遺跡・天津場C遺跡<sup>(註8)</sup>のアクセス道路部分の発掘調査が実施され、記録保存が図られている。

森吉山ダム建設事業に係る発掘調査については、確認調査を行った遺跡の中から、記録保存の必要なものについて、工事工程に合わせて発掘調査を実施する旨意が森吉山ダム工事事務所と秋田県教育委員会の間でなされている。秋田県教育委員会では、平成9年から平成14年の6年間で、深渡遺跡(一部)<sup>(註9)</sup>、姫ヶ岱C・D遺跡<sup>(註10)</sup>・桐内A～D遺跡<sup>(註11)</sup>・桐内沢遺跡<sup>(註12)</sup>・日廻岱A・B遺跡<sup>(註13)</sup>・向様田A～F遺跡<sup>(註14)</sup>・碎渕遺跡<sup>(註15)</sup>・塗下遺跡<sup>(註16)</sup>の発掘調査を実施した。また、平成15年には、森吉家ノ前A遺跡<sup>(註17)</sup>・同C遺跡<sup>(註18)</sup>・深渡遺跡・深渡A遺跡(一部)<sup>(註19)</sup>を発掘調査し、記録保存を図った。

深渡遺跡は、第12回日本ジャンボリー開催に伴うアクセス道路建設に係り、森吉町教育委員会によつて平成7年に試掘調査、平成8年に南西端919m<sup>2</sup>の発掘調査が実施されている。その後、平成9年に遺跡全体の範囲確認調査を秋田県教育委員会が実施し、同年、遺跡内を東西に走る材料運搬路部分4,000m<sup>2</sup><sup>(註20)</sup>について、秋田県教育委員会が発掘調査を実施した。残る16,800m<sup>2</sup>のうち15,700m<sup>2</sup>は、ダム本体のフィルター材採取に伴い、平成15年度に発掘調査を行い記録保存を図ったが、遺跡西端の工事用道路下1,100m<sup>2</sup>については未調査である。本書は平成15年度に行われた第3次調査の発掘調査報告書である。

## 第2節 調査要項

遺跡名	深渡遺跡(略号2FW)
所在地	秋田県北秋田市(旧北秋田郡森吉町)森吉字深渡家ノ前104-1外
調査期間	平成15年5月13日~11月7日
調査目的	森吉山ダム建設事業に係る発掘調査
調査対象面積	15,500 m <sup>2</sup>
調査面積	15,700 m <sup>2</sup>
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	榮一郎(秋田県埋蔵文化財センター 学芸主事) 三浦俊成(同 学芸主事)菅野美香子(同 文化財主事) 藤田真利子(同 調査・研究員)松橋淳(同 調査・研究員)
総務担当者	
〔平成15年度〕	金義晃(秋田県埋蔵文化財センター 総務課長) 池端徹(同 副主幹) 高橋修(同 主任) 田口旭(同 主事)
〔平成16年度〕	渡辺憲(秋田県埋蔵文化財センター 総務課長) 池端徹(同 副主幹) 高橋修(同 主任) 田口旭(同 主事)
〔平成17年度〕	渡辺憲(秋田県埋蔵文化財センター 総務課長) 池端徹(同 副主幹) 柴田卓也(同 主任) 田口旭(同 主事)
調査協力機関	国土交通省東北地方整備局森吉山ダム工事事務所 北秋田市(旧森吉町) 北秋田市教育委員会(旧森吉町教育委員会)

註1 無明舎出版編『秋田県昭和史』無明舎出版 1989(平成元)年

註2 無明舎出版編『秋田県近代総合年表』無明舎出版 1988(昭和63)年

註3 川村公一『子孫に残す歴史の記録 森吉路 過去から未来へ』モリトビア選書2

建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所 1993(平成5)年

註4 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第251集 1994(平成6)年

註5 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第259集 1995(平成7)年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第267集 1996(平成8)年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第270集 1997(平成9)年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第281集 1998(平成10)年

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第291集 1999(平成11)年

註6 森吉町教育委員会『平成7年度 埋蔵文化財発掘調査報告書~森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査~』  
1996(平成8)年

註7 森吉町教育委員会『上悪戸D遺跡発掘調査報告書~比内森吉線地方道改良工事に係る発掘調査~』1997(平成9)年

註8 森吉町教育委員会『平成8年度 埋蔵文化財発掘調査報告書~森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査~』

1997(平成9)年

- 註9 秋田県教育委員会『深渡遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』  
秋田県文化財調査報告書第286集 1999(平成11)年
- 註10 秋田県教育委員会『姫ヶ岱C遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』  
秋田県文化財調査報告書第287集 1999(平成11)年  
秋田県教育委員会『姫ヶ岱D遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』  
秋田県文化財調査報告書第300集 2000(平成12)年
- 註11 秋田県教育委員会『桐内C遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』  
秋田県文化財調査報告書第299集 2000(平成12)年  
秋田県教育委員会『桐内B遺跡・桐内D遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V－』  
秋田県文化財調査報告書第318集 2001(平成13)年  
秋田県教育委員会『桐内A遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI－』  
秋田県文化財調査報告書第334集 2002(平成14)年
- 註12 秋田県教育委員会『桐内沢遺跡・日廻岱A遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VII－』  
秋田県文化財調査報告書第335集 2002(平成14)年
- 註13 秋田県教育委員会『桐内沢遺跡・日廻岱A遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VIII－』  
秋田県文化財調査報告書第335集 2002(平成14)年  
秋田県教育委員会『日廻岱B遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XV－』  
秋田県文化財調査報告書第394集 2005(平成17)年
- 註14 秋田県教育委員会『向様田A遺跡・遺構篇－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VII－』  
秋田県文化財調査報告書第346集 2003(平成15)年  
秋田県教育委員会『向様田A遺跡・遺物篇－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XII－』  
秋田県文化財調査報告書第370集 2004(平成16)年  
秋田県教育委員会『向様田B遺跡・向様田C遺跡・向様田E遺跡  
－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IX－』秋田県文化財調査報告書第347集 2003(平成15)年  
秋田県教育委員会『向様田D遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVI－』  
秋田県文化財調査報告書第392集 2005(平成17)年  
秋田県教育委員会『向様田F遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書X－』  
秋田県文化財調査報告書第348集 2003(平成15)年
- 註15 秋田県教育委員会『砂沢遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XI－』  
秋田県文化財調査報告書第349集 2003(平成15)年
- 註16 秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センターワーク報21 平成14年度』2003(平成15)年
- 註17 秋田県教育委員会『森吉家ノ前A遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XXI－』  
秋田県文化財調査報告書第409集 2006(平成18)年
- 註18 秋田県教育委員会『森吉家ノ前C遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XXII－』  
秋田県文化財調査報告書第393集 2005(平成17)年
- 註19 秋田県教育委員会『深渡A遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XXIII－』  
秋田県文化財調査報告書第408集 2006(平成18)年
- 註20 註8に同じ
- 註21 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第281集 1998(平成10)年
- 註22 註9に同じ

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の位置と立地

深渡遺跡は秋田県北秋田市(旧北秋田郡森吉町)に所在し、森吉山の北麓を西に流れる小又川左岸の河岸段丘上(北緯 $40^{\circ}02'42''$ 、東経 $140^{\circ}30'11''$ )に位置する。北秋田市役所森吉支所からは南東方角へ約25km、秋田内陸縦貫鉄道阿仁前田駅から南東約9kmの距離にある。

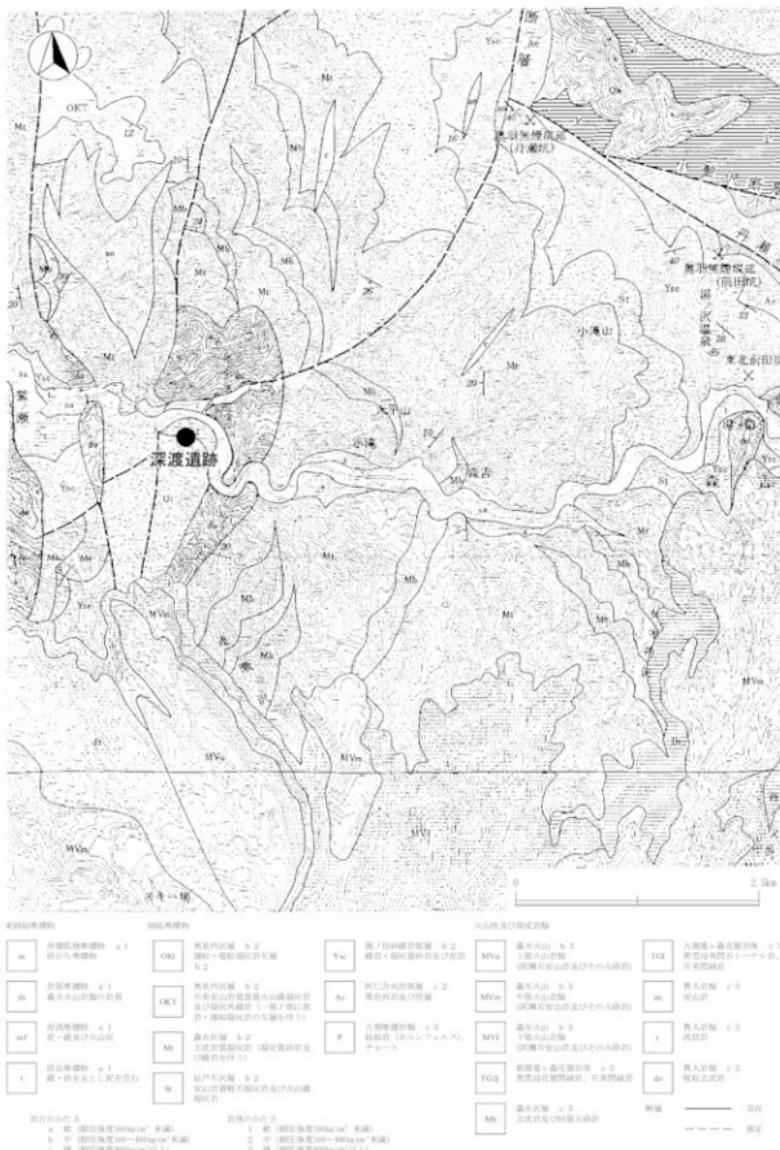
深渡地区には深渡遺跡のほかに深渡A遺跡がある。深渡A遺跡は、深渡遺跡の約300m上流の小又川左岸に立地する。平成15・16年度に秋田県教育委員会が森吉山ダム建設事業に伴い発掘調査を実施し、<sup>(註1)</sup>縄文時代及び近世の遺構などが確認されている。

遺跡の所在する北秋田市は平成17年3月に森吉町、鷹巣町、合川町、阿仁町の4町の合併により誕生した。秋田県の内陸北部に位置し、東は鹿角市、南東は仙北市、北東は大館市、北西は山本郡藤里町、西は能代市、南西は北秋田郡上小阿仁村、南は秋田市と接する。市域面積は約1,200km<sup>2</sup>で、市北部を西流する米代川と、市内を南北に貫流し米代川に合流する阿仁川の流域からなる。大部分が山地で占められ、市南端には標高1,454mのアスピーテ・トロイデ複式火山である森吉山が位置する。市北部の米代川流域には、鷹巣盆地が広がる。<sup>(註2)</sup>鷹巣盆地の南部に張り出した舌状台地状上には、国指定史跡である伊勢堂岱遺跡が位置する。

本遺跡の北側を西流する小又川は、阿仁川の支流である。北秋田市・仙北市・鹿角市の境界をなす三ツ又森(標高1,119m)・柴倉岳(標高1,178m)の西麓に源を発する六郎沢・粒様沢・ノロ沢、北秋田市と大館市の境界をなす小繁森(標高1,010m)の南麓に源を発する多々良沢などの支流が、太平湖(森吉ダム)<sup>(註3)</sup>に流れ込み小又川となる。小又川は森吉山北麓を蛇行しながら西流し、阿仁前田地内で阿仁川と合流する。

小又川沿いには集落や耕作地が分布する段丘面が認められ、中流域では最大6段の段丘面が確認される。平坦地は、広いところで南北約500m、狭いところでは約20mである。南北両側より山が迫ってきており、おおむね小又川右岸側にあたる北側山地の山腹斜面の方が勾配が急である。山麓の平地縁辺部は、集村形態をとる集落の居住地として利用され、平坦部の多くは畑地や水田として利用されていた。昭和40年代以降、畑地から水田への転換が急速に進み、大規模なほ場整備事業が行われたことによって、平坦地の地形は改変されている。現在は、桐内集落より上流に点在していた集落は、森吉山ダム建設に伴いすべて移転を完了している。<sup>(註4)</sup>

この地域の地質は、東北地方日本海側グリーンタフ地域に属する。小又川の北側に位置する小繁森や童ヶ森の山腹などで、先第三紀の古期堆積岩が見られるが、ほかは新第三紀中新世の火山岩類が基盤岩となる。小又川の南側では、第四系の柴倉火山噴出物や森吉火山噴出物が被覆する地域も見られる。また、小又川流域の低地には、完新世の沖積層が堆積する。<sup>(註5)</sup>深渡遺跡が立地する地点は、地形分類図では低地区分である谷底平野となっている。表層地質は、第四紀更新世の段丘堆積層であり、礫・砂を主とし泥を含む未固結堆積物である。



第1図 遺跡周辺の表層地質

## 第2節 遺跡の歴史的環境

『秋田県遺跡地図(県北版)』(1991年発行)では、北秋田市内に数多くの埋蔵文化財包蔵地(遺跡)が周知されている。その後、秋田県教育委員会による平成4・5年の森吉山ダム建設事業に係る分布調査と、<sup>(註6)</sup>平成6~10年の確認調査により、60遺跡が小又川流域で新たに発見された。<sup>(註7)</sup>ここでは、発掘調査が行われた森吉山ダム建設地内の遺跡を中心に、本遺跡を取り巻く歴史的環境を概観する。なお、文中( )内に示す数字は、第3図、第2表と対応する。各遺跡の参考文献は第2表に記載した。

旧石器時代の遺跡は、平成15年度に発掘調査が行われた二重鳥A遺跡(第3図26、以下第3図は省略)がある。2か所の石器集中出土地点が確認され、今から15,000~13,000年前頃の後期旧石器時代のナイフ形石器、搔器、石刃、剥片など約330点が出土している。また、平成7年の範囲確認調査により二重鳥B遺跡(27)やネネム沢A遺跡(45)でも若干量であるが、旧石器時代の遺物が報告されている。

縄文時代においては、草創期の遺跡は確認されておらず、人間の活動の痕跡が確認できるのは早期以降である。早期から前期初頭の遺跡には、桐内A遺跡(5)、姫ヶ岱C遺跡(12)、日廻岱B遺跡(15)、向様田B遺跡(36)、地蔵岱遺跡(53)などがある。いずれも遺物が断片的に出土しているのみである。そのため、当該期の遺跡立地などの詳細については判然としない。前期中葉~後葉になると、堅穴住居跡の確認例が一定数認められるようになる。前期中葉では地蔵岱遺跡(53)で3軒、後葉には日廻岱B遺跡(15)2軒、二重鳥C遺跡(28)3軒、森吉家ノ前A遺跡(48)1軒が確認されている。この頃からこの地域において徐々に定住化が進んでいったと考えられる。本遺跡でも当該期の堅穴住居跡が5軒検出されており、小規模な集落が営まれていたと想定される。

中期では、前葉の遺跡数は前期と変わらないが、中葉以降遺跡数が徐々に増加し、それに伴い堅穴住居跡の検出例も増加する。前葉では、桐内沢遺跡(9)、漆下遺跡(25)、二重鳥C遺跡(28)でそれぞれ1軒の堅穴住居跡が検出されているのみで、前期と同じく小規模な集落が点在していたと考えられる。中葉になると、桐内A遺跡(5)、桐内C遺跡(7)、二重鳥D遺跡(29)、水上ミ遺跡(34)、森吉家ノ前A遺跡(48)でそれぞれ1軒、二重鳥E遺跡(30)、二重鳥G遺跡(32)で各2軒、漆下遺跡(25)で3軒、二重鳥C遺跡(28)で14軒が検出されており、前葉に比べ住居数の増加が看取できる。この時期には円筒式土器と共に大木式土器を出土する遺跡が多くなり、大木式土器文化圏の影響を受け始めたと捉えることができよう。後葉には、上ハ岱B遺跡(24)、二重鳥D遺跡(29)、二重鳥E遺跡(30)、向様田A遺跡(35)、向様田D遺跡(38)、碎測遺跡(57)、深渡A遺跡(59)でそれぞれ1軒、桐内D遺跡(8)、水上ミ遺跡(34)、深渡遺跡(58)で各2軒、姫ヶ岱D遺跡(13)、二重鳥C遺跡(28)で各3軒、上ハ岱A遺跡(23)で4軒、姫ヶ岱C遺跡(12)で5軒、森吉家ノ前A遺跡(48)で6軒の堅穴住居跡が検出されており、中葉よりもさらに住居数が増加する。1遺跡における検出数は1~6軒と少数であるが、遺跡数は15遺跡を数える。このことから同時期にいくつかの小規模な集落が併存していた可能性が考えられよう。

今回の調査では、本遺跡及び隣接する深渡A遺跡(59)で、壁際に礎が巡る中期後葉の堅穴住居跡がそれぞれ1軒検出された。壁際に配された礎は住居構築時に伴うものではなく、住居廃絶後に巡らされたものと考えられる。

後期では、初頭は中期後葉に引き続き多くの堅穴住居跡の確認例があり、桐内C遺跡(7)、姫ヶ岱D遺跡(13)、深渡遺跡(58)でそれぞれ1軒、姫ヶ岱C遺跡(12)で2軒、漆下遺跡(25)で5軒が検出されて

いる。また、日廻岱B遺跡(15)では25軒の住居が検出されており、削平された住居を含めると延べ50軒前後の住居が、環状に位置していたものと復元されている。以上のように中期後葉から後期初頭は当該地域では最も多くの竪穴住居跡が確認されている時期である。しかし後期前葉から中葉になると、竪穴住居跡の検出例は激減する。前葉では二重鳥C遺跡(28)で1軒、桐内C遺跡(7)で3軒、中葉では漆下遺跡(25)で4軒、向様田D遺跡(38)で1軒が検出されているのみである。後葉には再び竪穴住居跡の検出数が増え、姫ヶ岱D遺跡(13)で1軒、二重鳥D遺跡(29)で12軒、二重鳥E遺跡(30)で6軒、桐内A遺跡(5)で5軒が検出されている。遺跡の分布状況から後葉には小規模な集落が点在していたことがうかがえる。

晩期になると、竪穴住居跡の検出例は少なくなる。姫ヶ岱D遺跡(13)で2軒、日廻岱B遺跡(15)で1軒、二重鳥E遺跡(30)で3軒、向様田F遺跡(40)で2軒、また今回の深渡遺跡の発掘調査で1軒確認されている。これらの住居跡はいずれも晩期初頭から前葉に帰属し、後葉には水上ミ遺跡(34)で2軒、上ハ岱B遺跡(24)、二重鳥E遺跡(30)でそれぞれ1軒検出されているのみである。しかしながら、向様田A遺跡(35)や向様田D遺跡(38)では晩期前葉から中葉にかけての大規模な祭祀域が確認されている。

弥生時代では、二重鳥F遺跡(31)で、弥生時代前期と思われるフラスコ状土坑4基、土坑1基などが確認されているのみで、住居は確認されていない。桐内A遺跡(5)、日廻岱B遺跡(15)などで遺物が出土しているが、当該期の詳細は不明瞭である。

古代の遺跡では、地蔵岱遺跡(53)で多数の住居跡に加え、上屋を伴う鍛冶炉や炭窯が確認されており、鍛冶工房を伴う集落が営まれたことが明らかとなっている。また、向様田E遺跡(39)では、標高156m程の丘陵地で古代の竪穴住居跡3軒が検出されており、小規模な防御性集落が形成されていた可能性が報告されている。惣瀬遺跡(41)、天津場A遺跡(42)、ネネム沢A遺跡(45)、森吉家ノ前A遺跡(48)でも古代の遺構・遺物が少量確認されている。

中世では、森吉家ノ前A遺跡(48)、森吉家ノ前B遺跡(49)、森吉家ノ前C遺跡(50)、地蔵岱遺跡(53)で遺構や遺物を検出している。特に、森吉家ノ前A遺跡(48)では多くの掘立柱建物跡が検出され、大規模な集落の存在が想定される。また、森吉家ノ前A～C遺跡の対岸に位置する地蔵岱遺跡(53)でも多数の掘立柱建物跡や、火葬施設などが検出されている。また、平成9年度の本遺跡の発掘調査の際に確認された石棺様組石に類似する遺構が、桐内A遺跡(5)や向様田E遺跡(39)などで確認されている。いざれも平面長方形の掘り込みで、底面が強く被熱することを特徴とする。現状では性格の特定には至っていないが、生産関連の炉もしくは火葬施設と考えられる。当該地域の中世の様相を考える上で注目すべき資料となっている。

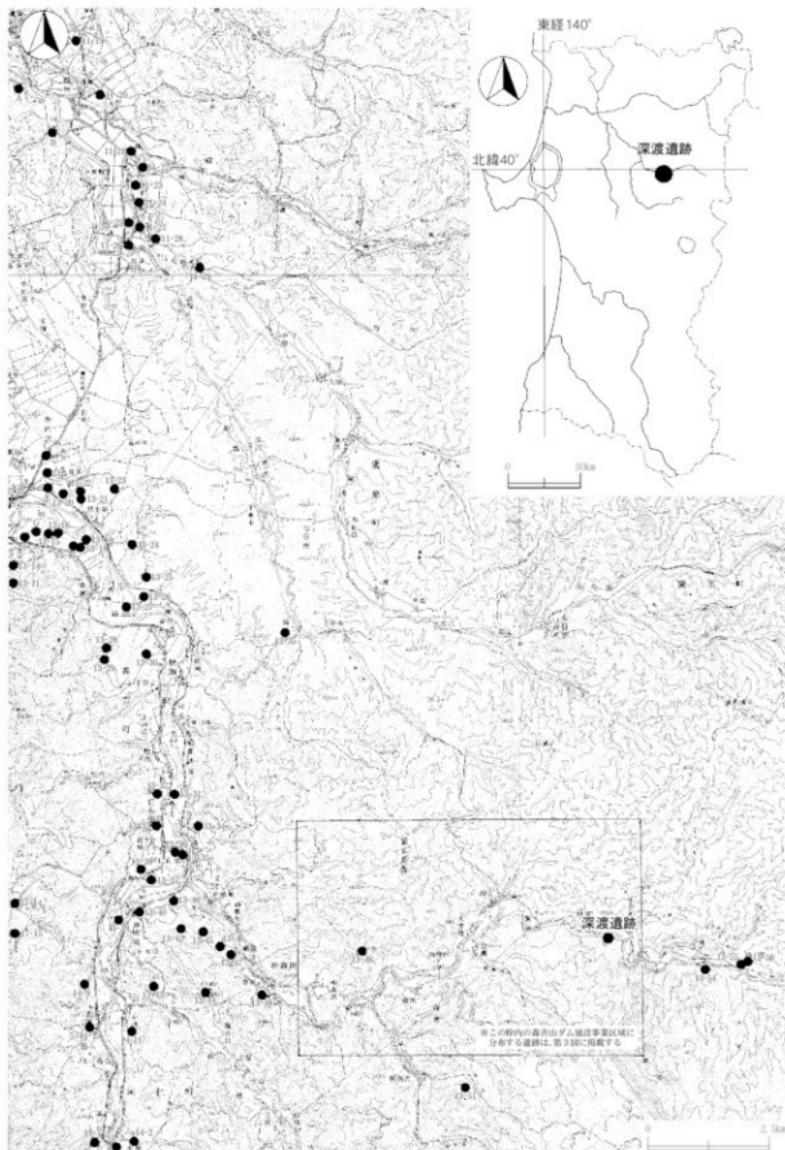
近世の遺跡では、日廻岱A遺跡(14)で掘立柱建物跡が2棟、日廻岱B遺跡(15)で掘立柱建物跡が7棟それぞれ検出されている。小又川流域での掘立柱建物跡の報告は僅少であることから、建物の構造や、近世の集落の様相等を考察する数少ない資料となっている。

註1 秋田県教育委員会『深渡A遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書III－』

秋田県文化財調査報告書第408集 2006(平成18年)

註2 秋田県教育委員会『伊勢堂岱遺跡－県道木戸石鷹巣線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II－』

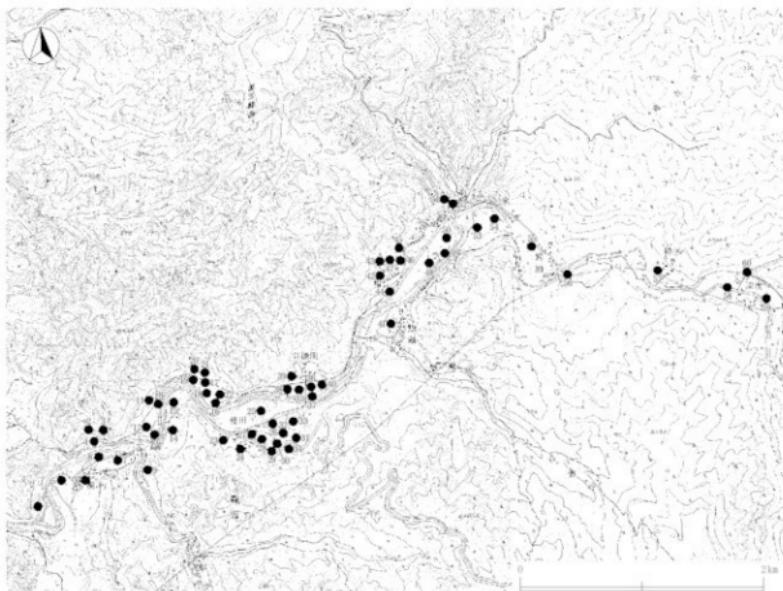
秋田県文化財調査報告書第293集 1999(平成11年)



第2図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡

地名 番号	遺跡名	遺跡所在地	主な時代	遺構・遺物	文献
11-19	高森岱	北秋田市輪神字高森岱16	縄文	縄文土器片(前期・中期)、追光屋土偶	14-16
11-20	雄林	北秋田市輪神字雄林原ノ143-4	縄文	縄文土器(前期)、灰陶・灰陶瓦・堅六住居跡、上製品、石器ほか	8-14
11-21	タモノ木	北秋田市小森字タモノ木17	縄文	縄文土器片(中期)	14
11-22	小森	北秋田市小森字子森88-1	縄文	縄文土器片(晚期)	14
11-23	根本屋敷岱	北秋田市七日市字根本屋敷岱20	古代	土師器	14
11-24	根本屋敷岱	北秋田市七日市字根本屋敷岱1	縄文	縄文土器片(後期・晚期)	14
11-25	山の上	北秋田市七日市山の上57	縄文	縄文土器片(中期)	14
11-26	圓の内	北秋田市七日市圓の内80	縄文	縄文土器片(後期)、環状河石	14
11-27	石食岱	北秋田市七日市石食岱1	縄文	縄文土器片(中期)	14
11-28	伊勢堂岱	北秋田市七日市字伊勢堂8-4	縄文	縄文土器片(前期～後期)	3-14-67-68
11-29	野尻	北秋田市七日市字野尻2	縄文	縄文土器片(後期)	3-14
11-30	若木岱	北秋田市七日市字若木岱2	縄文	縄文土器片、石器	14
11-31	米内西城	北秋田市米内字米内799ノ寺ノ上77-1	中世	空堀、土堤、井戸跡	9-14
11-32	伊勢の森	北秋田市米内字伊勢ノ森52-67	古代	土師器片	14
11-35	冷水岱	北秋田市米内字冷水岱77-1	縄文・古代	縄文土器片(前期～後期)、堅穴住居跡、土師器、上製品ほか	14-21
13-16	狐岱	北秋田市米内字冷石岱88	縄文・古代	縄文土器片(前期～後期)、堅穴住居跡、土師器、配石器、配石瓦、石器	1-3-10-12-14
13-17	山崩	北秋田市米内字山崩6-3	縄文	縄文土器片	1-3-10-12-14
13-18	古野	北秋田市米内字古野1-1	縄文・弥生	縄文土器片、器生土器片、土坑	1-3-10-12-14
13-19	古野前	北秋田市米内字古野前1	古代	土師器片	1-3-10-12-14
13-20	長野岱2	北秋田市米内字長野岱44-1	縄文	縄文土器片(中期)	14
13-21	長野岱1	北秋田市米内字長野岱56	縄文・弥生	縄文土器片(前期～中期)、堅穴住居跡、円錐ビット、石器群、土器、燒成土、配石器、石器	3-5-14-19
13-22	根小屋岱	北秋田市米内字根小屋56-1	中世	空堀	7-9-14
13-23	根小屋岱	北秋田市米内字根小屋1-34	縄文・古代	縄文土器片(前期)	14
13-24	酒造るし岱	北秋田市浦田字酒造るし50-1	縄文	縄文土器片、石器	14
13-25	北城下山根	北秋田市浦田字白坂山根2	縄文	縄文土器片(後期)、石器	14
13-26	摩ノ岱	北秋田市浦田字摩ノ岱/摩ノ原8	縄文	縄文土器片(前期～後期)、堅穴住居跡、土坑、鰐形造頃、柱六稊ビット、口注土器、鍍帯土器、燒成土、配石器、口注土器、石器	6-14-48
13-27	白坂	北秋田市浦田字白坂上岱19-22	縄文	縄文土器片(中期)、石器	3-14-15-22
13-28	愛宕堂	北秋田市浦田字白坂前原40	縄文	縄文土器片(中期)、石器	14
13-29	南山根	北秋田市浦田字愛宕堂下4-4	中世	船跡	9-14
13-30	石舟岱	北秋田市浦田字石舟80	縄文	縄文土器片(前期～中期)、石器	14
13-31	下野・野岱	北秋田市阿仁字下野・野岱345	縄文	縄文土器片	14
13-32	桃山	北秋田市阿仁字桃山道316-1	縄文	縄文土器片	14
13-33	高船	北秋田市阿仁字高船道318-118	中世	空堀	9-14
13-34	下原田下山根	北秋田市阿仁字下原田下山根36	縄文	縄文土器片、石器	14
13-35	八幡森	北秋田市阿仁字八幡森8-1	縄文	縄文土器片(前期～中期)、石器	14
13-36	前山根	北秋田市阿仁字前山根1-1	中世	船跡	7-9-14
13-37	膳場岱1	北秋田市阿仁字膳場岱140-1	縄文	縄文土器片(前期～中期)、石器	14
13-38	膳場岱2	北秋田市阿仁字膳場岱15-18、15ノ井7	縄文	縄文土器片	14
13-39	五味塚	北秋田市五味塚字五味塚1	縄文	縄文土器片、石器	14
13-40	サツ堂	北秋田市五味塚字サツ堂3-45	縄文	縄文土器片(後期)	3-14
13-41	五味塚高架堂	北秋田市五味塚字下寺ノ下久保174	縄文	縄文土器片	14
13-42	五味塚大保岱	北秋田市五味塚字大保岱20	縄文	縄文土器片(後期)、焼成石	14
13-43	花崩	北秋田市五味塚字花崩1-82	中世	空堀	9-14
13-44	大船	北秋田市五味塚字大船1-0	中世	船跡	9-14
13-45	小又平里A	北秋田市小又字平里7-4	縄文	縄文土器片(後期)、石器	14
13-46	小又平里B	北秋田市小又字平里9	縄文	縄文土器片(後期)、石器	14
13-47	片平根	北秋田市根森字片平根3	縄文	縄文土器片(後期)、石器	14
13-48	萩の原	北秋田市根森字萩ノ原1-33、田ノ原1-1	縄文	縄文土器片(前期～中期)、堅穴住居跡、土坑、配石遺構、燒土遺構、土器埋設道、溝状遺構、捨て壺、土製品、石器	14-17-23
13-49	仲ノ又船	北秋田市森吉字仲ノ又75	中世	空堀	9-14
13-51	輪内沢清川衛衝	北秋田市森吉字輪内沢清川衛衝46	縄文	縄文土器片(後期～後期)	14
13-54	向小原	北秋田市森吉字向小原613	縄文	縄文土器片(後期)、石器	14
13-55	小間兵衛岱1	北秋田市森吉字小間兵衛岱1-2	中世	青銅古鏡	3-14
13-56	小間兵衛岱2	北秋田市森吉字小間兵衛岱1-2	縄文	縄文土器片(中期)、石器	3-14
14-1	鹿堂	北秋田市阿仁字鹿堂1451-1	縄文	縄文土器片(中期)、土坑、石器	14
14-2	上岱1	北秋田市阿仁字上岱104-2	縄文	縄文土器片(前期)、堅穴住居跡(中期)、天然アスフルトほか	11-14
14-3	上岱2	北秋田市阿仁字上岱135-2	縄文	縄文土器片(中期)	14
14-9	鳳・強城	北秋田市阿仁字強城布1-7	中世	空堀、井戸跡	14
14-11	高山根	北秋田市阿仁字高山根1-32	中世	空堀	14
14-15	家の上	北秋田市阿仁字我家ノ上	縄文	縄文土器片、石器	14
17-14	赤水沢A	北秋田市小阿仁村赤水沢赤水沢	縄文	縄文土器片(中期)、石器	14
17-15	赤水沢B	北秋田市小阿仁村赤水沢赤水沢	縄文	縄文土器片(後期)、石器	14
A	法泉坊跡II	北秋田市輪神字法泉坊49-外	古代	土器片、燒成土器片(中期)、土坑(縄文・古墳)、堅穴住居跡(古代)、堅穴住居跡、燒成土器片、燒成土器片、石器、土器、燒成土器片、石器、刀羽	32
B	輪神館跡	北秋田市輪神字タラノ瀬31外	古代・中世	堅石器、燒成土器片(中期・後期)、堅穴住居跡、堅穴住居跡、堅穴住居跡、堅穴住居跡、燒成土器片、燒成土器片、石器、土器、燒成土器片、石器	25-35
C	長野岱	北秋田市米内字長野岱6-1外	古代	堅穴住居跡、土坑、井戸跡、土器	43
D	長野岱	北秋田市米内字長野岱131外	縄文・古代	縄文土器片(後期)、プラスチック土器片、土器	43
E	長野岱2	北秋田市米内字長野岱149-2外	縄文・古代	縄文土器片(中期)、堅穴住居跡(中期)、天然アスフルトほか	38-41-53
F	諏訪岱	北秋田市米内字諏訪岱1-1外	縄文・古代	縄文土器片、堅穴住居跡、土器	18-21
G	諏訪岱II	北秋田市米内字諏訪岱111外	古代・中世	縄文土器片(中期～後期)、土器(縄文・古墳)、堅穴住居跡(古墳)、燒成土器片、石器、土器、燒成土器片、石器、刀羽	10-21-41-53



第3図 森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡

第2表 森吉山ダム建設事業区域に分布する遺跡

番号	遺跡名	遺跡所在地(北秋田市)	主な時代	文・題	番号	遺跡名	遺跡所在地(北秋田市)	主な時代	文・題
1	上巣戸A	相森田字上巣戸41外	縄文	27-31	31	二重島F	森吉字二重島124外	縄文・弥生	25-44
2	上巣戸B	相森田字上巣戸8-12	弥生	27-34	32	二重島G	森吉字二重島80外	縄文・近世	25-47
3	上巣戸C	相森田字上巣戸7外	縄文	27-34	33	二重島H	森吉字二重島の外	縄文	25-69
4	上巣戸D	相森田字上巣戸34-33外	縄文	27-29	34	木戸上	森吉字木戸上42外	縄文・弥生	65
5	廟内A	森吉字廟内31-1外	縄文・弥生・近世	27-45	35	向畠田A	森吉字向畠田ノ下毛8外	縄文	27-49-58
6	廟内B	森吉字廟内33-1外	縄文	27-42	36	向畠田B	森吉字向畠田671外	縄文	27-50
7	廟内C	森吉字廟内東ノ上毛11外	縄文	24-39	37	向畠田C	森吉字向畠田76外	縄文	27-50
8	廟内D	森吉字廟内東ノ上毛19外	縄文	24-42	38	向畠田D	森吉字向畠田ノ下毛14-1外	縄文	27-59
9	廟内E	森吉字廟内東ノ上毛19外	縄文	24-46	39	向畠田E	森吉字向畠田ノ下毛130外	縄文・古代・中世	27-50
10	蛇ヶ岱A	相森田字蛇ヶ岱89	縄文	27-34	40	向畠田F	森吉字向畠田57外	縄文	27-51
11	蛇ヶ岱B	相森田字蛇ヶ岱14-10外	縄文	27-34	41	慈瀬	森吉字慈瀬86外	縄文・古代	30
12	蛇ヶ岱C	相森田字蛇ヶ岱12-2外	縄文	27-34-97	42	天津瀬A	森吉字天津瀬15-3	縄文・古代	25
13	蛇ヶ岱D	相森田字蛇ヶ岱12-31外	縄文	27-40	43	天津瀬B	森吉字天津瀬16-1	縄文	25
14	日御傍A	森吉字日御傍65外	縄文・近世	25-26-46	44	天津瀬C	森吉字天津瀬71外	縄文	25-28
15	日御傍B	森吉字日御傍86外	縄文・近世	25-54	45	牛字A	森吉字牛字ノ武26外	財石器・縄文・古代	25
16	橋場借A	森吉字橋場借48外	縄文	27	46	牛字B	森吉字牛字ノ武17外	縄文	25
17	橋場借B	森吉字橋場借69外	縄文	27	47	牛字C	森吉字牛字ノ武6-1	縄文	25
18	橋場借C	森吉字橋場借42外	縄文	27	48	森吉家ノ前A	森吉字森吉家ノ前50外	縄文・古代・中世	25-61
19	橋場借D	森吉字橋場借110-1	縄文	27	49	森吉家ノ前B	森吉字森吉家ノ前138外	縄文・中世	25-28
20	橋場借E	森吉字橋場借109	縄文	27	50	森吉家ノ前C	森吉字森吉家ノ前114外	中世・近世	25-60
21	橋場借F	森吉字橋場借101外	縄文	27	51	森吉A	森吉字森吉95	縄文	25
22	橋場借G	森吉字橋場借96-1外	縄文	27	52	森吉B	森吉字森吉69	縄文	25
23	上八岱A	森吉字上八岱102外	縄文・弥生	65	53	地藏岱	森吉字地藏岱14外	縄文・古代・中世	63
24	上八岱B	森吉字上八岱70外	縄文	65	54	地藏岱A	森吉字地藏岱124外	縄文	30
25	拂下	森吉字拂下2-1外	縄文・中世	25-55-56	55	笠原	森吉字笠原ノ80外	縄文	14-30-33
26	二重島A	森吉字二重島11-1外	財石器・縄文	25-57	56	細岱	森吉字細岱74外	縄文	20
27	二重島B	森吉字二重島11外	財石器・縄文	25-69	57	野瀬	森吉字野瀬144-1外	縄文・近世	20-26-52
28	二重島C	森吉字二重島93外	縄文	25-47-69	58	深瀬	森吉字深瀬家ノ前102-1外	縄文	28-30-36
29	二重島D	森吉字二重島39	縄文	25-44	59	深瀬A	森吉字深瀬29外	縄文・近世	30-64
30	二重島E	森吉字二重島65外	縄文・弥生	25-44	60	丹瀬口	森吉字丹瀬12外	縄文	20

- 鷹巣町教育委員会『伊勢堂岱遺跡 詳細分布調査報告書(1)～(4)』鷹巣町埋蔵文化財調査報告書第4～7集  
1998(平成10)～2001(平成13)年
- 鷹巣町教育委員会『伊勢堂岱遺跡 発掘調査報告書Ⅰ～IV』鷹巣町埋蔵文化財調査報告書第8～10・12集  
2002(平成14)～2006(平成17)年
- 註3 川村公一『子孫に残す歴史の記録 森吉路 過去から未来へ』モリトビア選書2  
建設省東北地方建設局森吉山ダム工事事務所 1993(平成5)年
- 註4 秋田県農政部農村振興課『土地分類基本調査 大葛』1995(平成7)年
- 註5 註4と同じ
- 註6 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(県北版)』1991(平成3)年
- 註7 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第259集 1995(平成7)年  
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第267集 1996(平成8)年  
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第270集 1997(平成9)年  
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第281集 1998(平成10)年  
秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第291集 1999(平成11)年

第1・2表文献(表中の番号は文献番号に対応する)

- 1 大和久義平「北秋田郡森吉町米内沢狐岱調査報告」『昭和三十二年度調査研究報告』秋田県文化財保護協会  
1958(昭和33)年
- 2 大和久義平「円筒上層式の縦分」『秋田考古学』第16号 1960(昭和35)年
- 3 秋田県『秋田県史考古編』1960(昭和35)年
- 4 奥山潤、高橋昭悦『長野岱1遺跡』森吉町教育委員会 1967(昭和42)年
- 5 加賀利男「長野岱1遺跡について」『広報 もりよし』第120号 1968(昭和43)年
- 6 加賀利男「環の岱遺跡発掘調査について」『広報 もりよし』第131号 1969(昭和44)年
- 7 沼船愛三『出羽諸城の研究』1980(昭和55)年
- 8 秋田県教育委員会『藤株遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第85集 1981(昭和56)年
- 9 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56)年
- 10 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第179集 1989(平成元)年
- 11 秋田県教育委員会『上岱1遺跡発掘調査報告書－国道105号改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査－』秋田県文化財調査報告書第184集 1989(平成元)年
- 12 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第201集 1990(平成2)年
- 13 大野憲司「狐岱遺跡について～1989年の範囲確認調査から～」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第5号  
1990(平成2)年
- 14 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(県北版)』1991(平成3)年
- 15 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第217集 1991(平成3)年
- 16 鷹巣町史編さん委員会『鷹巣町史』第一巻 1992(平成4)年
- 17 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第226集 1992(平成4)年
- 18 森吉町教育委員会『諏訪岱遺跡～堤沢川流路溝工事に係る発掘調査報告～』1992(平成4)年
- 19 高橋学「森吉町長野岱1遺跡採集の岩側」『秋田考古学』第42号 秋田考古学協会 1993(平成5)年
- 20 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第251集 1994(平成6)年
- 21 森吉町教育委員会『諏訪岱・柳田・冷水岱～仮称「ふるさと村整備事業」に係る遺跡範囲確認調査報告～』  
1994(平成6)年

- 22 秋田県教育委員会『白坂遺跡発掘調査報告書—県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告一』  
秋田県文化財調査報告書第244集 1994(平成6)年
- 23 秋田県教育委員会『桂の沢遺跡発掘調査報告書—小浦阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財  
発掘調査報告一』秋田県文化財調査報告書第247集 1994(平成6)年
- 24 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第259集 1995(平成7)年
- 25 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第267集 1996(平成8)年
- 26 森吉町教育委員会『平成7年度 埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』  
1996(平成8)年
- 27 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第270集 1997(平成9)年
- 28 森吉町教育委員会『平成8年度 埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』  
1997(平成9)年
- 29 森吉町教育委員会『上悪戸D遺跡発掘調査報告書～北内森古墳地方道改良工事に係る発掘調査～』1997(平成9)年
- 30 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第281集 1998(平成10)年
- 31 森吉町教育委員会『平成9年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 上悪戸A遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財  
発掘調査～』1998(平成10)年
- 32 秋田県教育委員会『法泉坊沢Ⅱ遺跡～地方特定道路整備工事湯車工区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一』  
秋田県文化財調査報告書第278集 1998(平成10)年
- 33 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第291集 1999(平成11)年
- 34 森吉町教育委員会『平成10年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 上悪戸B・C遺跡 姫ヶ岱A・B・C遺跡  
～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』1999(平成11)年
- 35 秋田県教育委員会『脇神館跡－県道木下石鷹集線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I～』  
秋田県文化財調査報告書第284集 1999(平成11)年
- 36 秋田県教育委員会『深渡遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I～』  
秋田県文化財調査報告書第286集 1999(平成11)年
- 37 秋田県教育委員会『姫ヶ岱C遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II～』  
秋田県文化財調査報告書第287集 1999(平成11)年
- 38 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第308集 2000(平成12)年
- 39 秋田県教育委員会『桐内C遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書III～』  
秋田県文化財調査報告書第299集 2000(平成12)年
- 40 秋田県教育委員会『姫ヶ岱D遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IV～』  
秋田県文化財調査報告書第300集 2000(平成12)年
- 41 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第324集 2001(平成13)年
- 42 秋田県教育委員会『桐内B遺跡・桐内D遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V～』  
秋田県文化財調査報告書第318集 2001(平成13)年
- 43 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第342集 2002(平成14)年
- 44 森吉町教育委員会『平成12年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 二重鳥D・E・F遺跡  
～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』2002(平成14)年
- 45 秋田県教育委員会『桐内A遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI～』  
秋田県文化財調査報告書第334集 2002(平成14)年
- 46 秋田県教育委員会『桐内沢遺跡・日郷岱A遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VII～』  
秋田県文化財調査報告書第335集 2002(平成14)年

- 47 森吉町教育委員会『平成13年度 球根文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～二重鳥C・G遺跡』2003(平成15)年
- 48 森吉町教育委員会『塚ノ岱遺跡発掘調査報告書～町道石坂大渕線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査～』2003(平成15)年
- 49 秋田県教育委員会『向様田A遺跡・遺構篇－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』秋田県文化財調査報告書第346集 2003(平成15)年
- 50 秋田県教育委員会『向様田B遺跡・向様田C遺跡・向様田E遺跡  
－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ－』秋田県文化財調査報告書第347集 2003(平成15)年
- 51 秋田県教育委員会『向様田F遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ－』秋田県文化財調査報告書第348集 2003(平成15)年
- 52 秋田県教育委員会『砂渕遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ－』秋田県文化財調査報告書第349集 2003(平成15)年
- 53 秋田県教育委員会『諏訪岱Ⅱ遺跡・長野岱Ⅲ遺跡－国道105号国道路改造工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』秋田県文化財調査報告書第353集 2003(平成15)年
- 54 秋田県教育委員会『日廻岱B遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩV－』秋田県文化財調査報告書第394集 2005(平成17)年
- 55 秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター一年報21 平成14年度』2003(平成15)年
- 56 秋田県埋蔵文化財センター『塗下遺跡発掘調査資料』2003(平成15)年
- 57 秋田県埋蔵文化財センター『平成16年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』2005(平成17)年
- 58 秋田県教育委員会『向様田A遺跡・遺物篇－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩI－』秋田県文化財調査報告書第370集 2004(平成16)年
- 59 秋田県教育委員会『向様田D遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩII－』秋田県文化財調査報告書第392集 2005(平成17)年
- 60 秋田県教育委員会『森吉家ノ前C遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩV－』秋田県文化財調査報告書第393集 2005(平成17)年
- 61 秋田県教育委員会『森吉家ノ前A遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩVI－』秋田県文化財調査報告書第409集 2006(平成18)年
- 62 秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター一年報23 平成16年度』2005(平成17)年
- 63 秋田県埋蔵文化財センター『地蔵岱遺跡発掘調査資料』2003(平成15)年
- 64 秋田県教育委員会『深瀬A遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩVII－』秋田県文化財調査報告書第408集 2006(平成18)年
- 65 森吉町教育委員会『平成10・11年度 球根文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～上八岱A遺跡・上八岱B遺跡・水上M遺跡』2001(平成13)年
- 66 秋田県教育委員会『伊勢堂岱遺跡－黒道木戸石築塀線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』秋田県文化財調査報告書第293集 1999(平成11)年
- 67 鷹巣町教育委員会『伊勢堂岱遺跡 詳細分布調査報告書(1)～(4)』鷹巣町埋蔵文化財調査報告書第4～7集 1998(平成10)～2001(平成14)年
- 68 鷹巣町教育委員会『伊勢堂岱遺跡 発掘調査報告書Ⅰ～IV』鷹巣町埋蔵文化財調査報告書第8～10・12集 2002(平成14)年～2005(平成17)年
- 69 森吉町教育委員会『二重鳥B・C・H遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～』2004(平成16)年

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

深渡遺跡は、森吉山の北麓を西流する小又川左岸の最低位河岸段丘上に立地する。本遺跡が立地する河岸段丘は、長軸(北西－南東)約600m、短軸(北東－南西)約150m、標高は約185～191mを測る。遺跡は段丘面の北西部に位置し、同段丘上には深渡A遺跡が位置する(第4図)。

深渡遺跡が位置する最低位河岸段丘には、さらに小規模な段丘面が形成される。遺跡範囲は南北3面の 小規模な段丘面と氾濫原に広がる(第5図)。長軸250m、短軸130m、面積は約21,700 m<sup>2</sup>を測る。遺跡南部は標高187～189mの高位段丘面で、西側へ緩やかに傾斜する。遺跡中央部は標高185～187mの中位段丘面である。中位段丘面は高位段丘面と同様に、西側へ低く傾斜する。中位段丘面の北側は低位段丘面で、標高は181～184mである。遺跡西部は標高181m前後で、小又川の氾濫原である。調査前の現況は、集落移転に伴い放棄された旧水田であり、高位段丘面と中位段丘面の境には町道が東西に走っていた。また、平成9年度調査範囲には工事用道路が建設されていた。

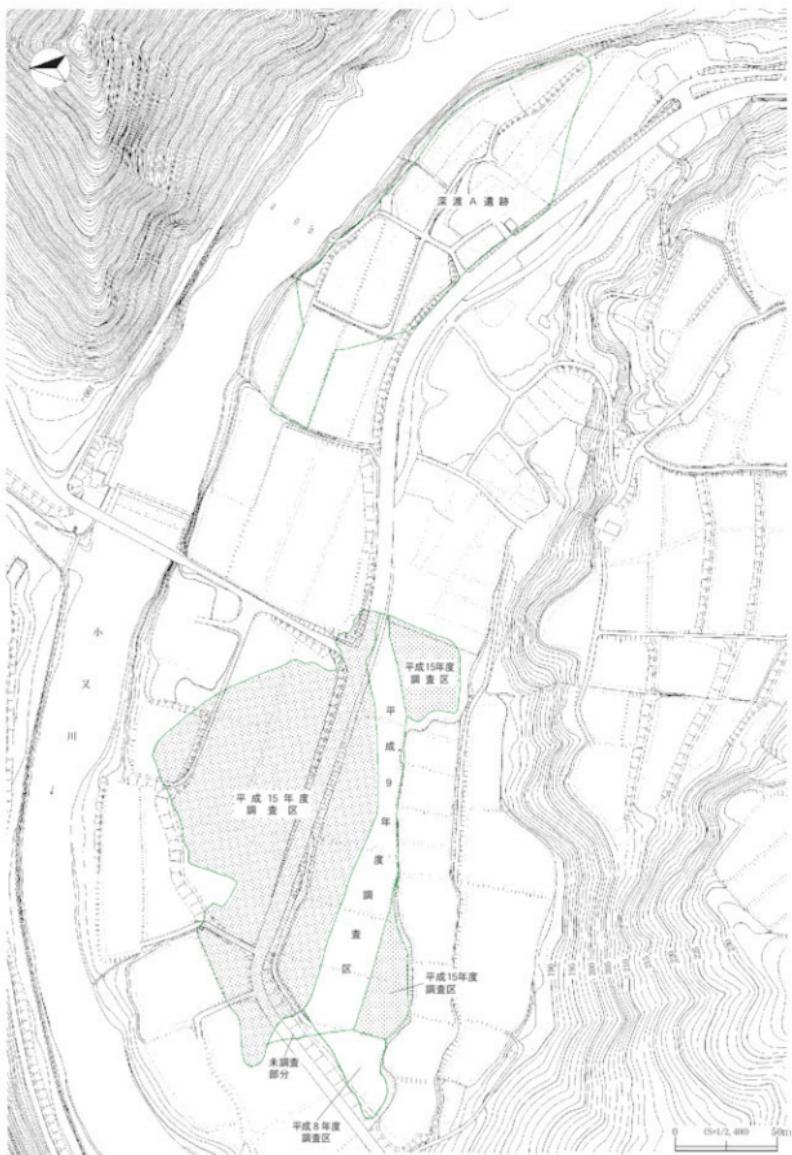
遺跡は昭和50年頃のほ場整備により、ほぼ全面を削平されている。遺物包含層が確認できたのは、中位段丘面の南端を通っていた町道下部分、北部の低位段丘面沢状部分、西端の氾濫原のみであった。中央部は特に大きく削平されており、水田耕作土の直下に段丘礫層が露出する。そのため中央部では遺構・遺物は未確認である。おそらく水田造成時に削平されたものと考えられる。第1章でも述べたように、遺跡南西端部919 m<sup>2</sup>は平成8年に森吉町教育委員会が発掘調査を実施しており、縄文時代の土坑群が検出されている。また、遺跡内を東西に貫通する工事用道路部分4,000 m<sup>2</sup>は、平成9年に秋田県教育委員会が発掘調査を実施しており、縄文時代の竪穴住居跡などが検出されている。今回は未調査部分である16,800 m<sup>2</sup>のうち、工事用道路下の遺跡西側1,100 m<sup>2</sup>を除いた15,700 m<sup>2</sup>の調査を行った。調査の結果、縄文時代前期中葉～晚期前葉・古代・中世の遺構と遺物が検出された。古代・中世については、削平により遺構の残存状況が悪く、その詳細は判然としない。縄文時代では前期中葉の竪穴住居跡が6軒、中期後葉で2軒、中期後葉以降1軒、後期前葉1軒、後期1軒、晚期前葉で1軒、それぞれ地点を異にして確認され、縄文時代を通じて断続的に小規模な集落が営まれていたことが明らかとなった。

### 第2節 調査の方法

#### 1 野外調査

本遺跡の調査前の状況は旧水田であり、表土・旧水田耕作土・盛土の除去は平成15年4月23日～7月2日に重機を使用して行った。

発掘調査はグリッド法で行った(第5図)。平成9年度の調査時に設定したグリッドに則り、森吉山ダム建設事務所(現森吉山ダム工事事務所)が昭和62年に打設した3級基準点No.31をグリッド原点(M A50)とした。ただしNo.31は平成9年度発掘調査後に、工事用道路建設に伴い消失したため、今回は3級基準点No.25を用い、グリッド原点(M A50)を復元した。このM A50(世界測地系X = 5330, 595



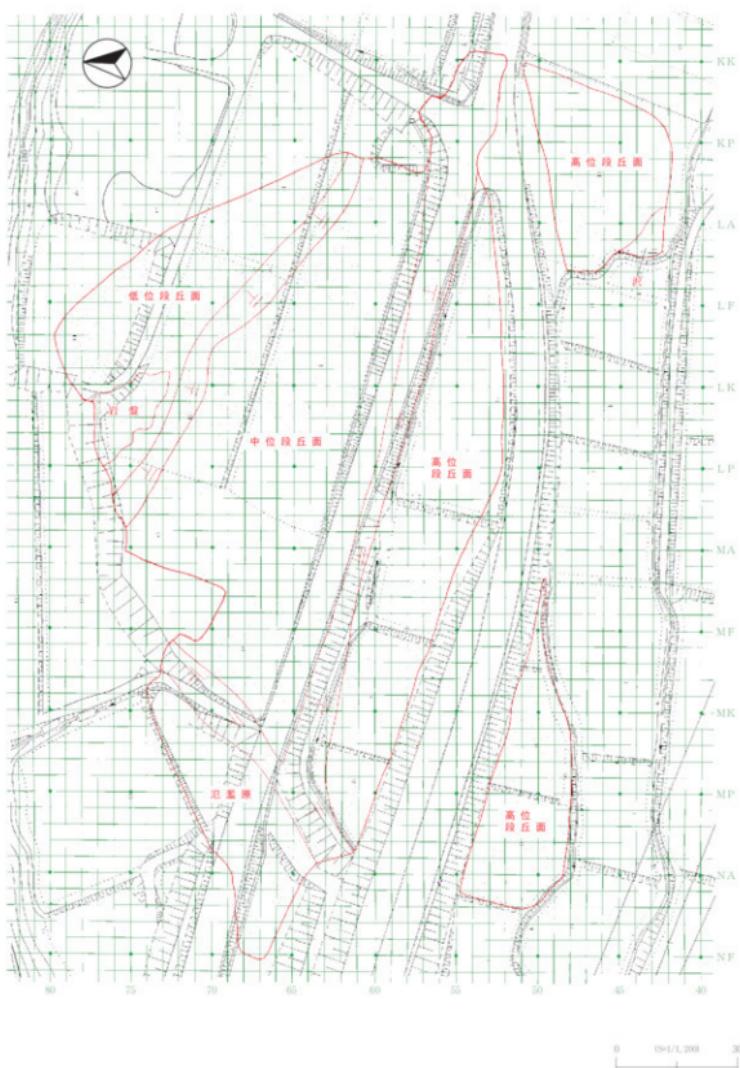
第4図 周辺地形図

$Y = -26969.161$  日本測地系  $X = 5023.181$   $Y = -26670.965$  を基準とし、この原点を通る日本測地系平面直角座標第X系の南北方向に南北基準線X軸を設定した。これに直交して、原点を通る線を東西基準線Y軸とし、両基準線に平行して当該区域に  $4 \times 4$  m のグリッドを組んだ。原点をMA50として、東西方向には、基準線上を西に4m進むごとにMB・MC・…と正順に、東に4m進むごとにLT・LS・…と逆順に各々A～Tまでの、2文字のアルファベットの組み合わせを付した。南北方向には、基準線上を北に4m進むごとに51・52・…、南に4m進むごとに49・48・…と増減する2桁のアラビア数字を付した。各区は、南東隅を画す南北線と東西線の呼称を組み合わせて、MA50・MB51…のように呼ぶこととした。なお、標高値は3級基準点No.29の直接標高値を使用した。平成9年度発掘調査時点では、直接標高値の測量が行われておらず、間接標高値を使用している。このため今回の調査と平成9年度の調査では標高値の誤差が生じ、今回の調査のほうが約8.9cm高い。水準測量及び方眼杭設置は、平成15年5月6日～12日、7月2日～7日、10月7日～10日に株式会社共和技研に委託した。

調査面積が広大であることから、調査は6つの調査区に分割して行った。調査区名は遺跡内での相対的な方位で、N区(北端部)、C N区(中央北部)、N W区(北西部)、C S区(中央南部)、S E区(南東部)、S W区(南西部)と呼称した。C S区・S E区・S W区は高位段丘面、C N区南西部は中位段丘面、N区・C N区北東部は低位段丘面、N W区は氾濫原に対応する。遺構は、N区01～、C N区1001～、N W区2001～、C S区3001～、S E区4001～、S W区5001～の通し番号を付し、遺構の性格を表す略記号と組み合わせてS K01のように呼称した。ただし、調査の進行に伴い、遺構の略記号を変更した場合や、途中で遺構でないことが判明して欠番とした場合がある。確認後の遺構精査は、長軸に沿う2分割法と、長軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを残す4分割法で行うことを原則とした。遺物は必要に応じて出土地点を記録し、遺跡名・出土遺構名またはグリッド名・出土層位・出土年月日・種別と、出土地点を記録した場合はさらに遺物番号を、チャック付ボリ袋もしくは耐水用荷札に記入し、取り上げることを原則とした。記録は図面と写真によった。遺構実測は各グリッド杭を基準として手作業による計測を行った。土層断面図には土層の特徴を注記した。遺構図の原図縮尺は1/20を基本としたが、細部状況を表すために適宜縮尺1/10の図も作成した。写真是35mmカメラを使用し、フィルムはモノクロ・カラーリバーサル・ネガカラーを主に使用したが、必要に応じてプロニー一判のモノクロ・カラーリバーサルも使用した。また、発掘調査終了の際はアドバルーンによる遺跡全貌の空中写真撮影を行った。

## 2 室内整理

各遺構は、現場で作成した図を第一原図とし、これを基に平面図と断面図を組み合わせ、適宜縮尺を変更し第二原図を作成した。第二原図の作成は平成15年11月～平成16年3月にかけて行った。第二原図の製図は平成17年1月～3月にシン技術コンサルに委託した。遺物の整理は、平成15年11月～平成17年3月にかけて秋田県埋蔵文化財センター北調査課で行い、一部を委託した。洗浄・注記・接合・復元作業の間、報告書に記載する遺物の選別を行い、土器約350点、石器約150点を実測した。実測は基本的に1/1で実測図を作成し、土器は拓影図の作成を合わせて行った。報告書に記載するにあたっては適宜縮尺を変え製図した。実測・製図は、土器13点を平成16年3月にシン技術コンサルに、石器150点を平成16年5月～8月に株式会社アルカに委託した。遺物写真是平成17年8月にいろは写房に委託した。



第5図 グリッド配置図・遺跡内地形図

### 第3節 調査の経過

調査は平成15年5月13日～10月22日までの予定で、調査員5名、作業員約40名の体制で開始した。8月4日には森吉家ノ前C遺跡の調査終了に伴い作業員約40人が合流し、最終的には作業員約80名体制で調査を行った。面積が広大であったため、表土除去は発掘調査と並行して7月まで行った。また、調査区内には町道が貫通しており、迂回路を造成した後に表土除去及び調査を行う予定であったが、この迂回路の開通が9月4日となり、当該地点の表土除去は10月第2週までを要した。町道下は水田造成による削平を免れて、遺構・遺物が比較的良好に遺存していたこと、また当初の調査区外である遺跡東側に遺構の分布が広がることが予測され、拡張調査が必要となったことから、調査期間を11月7日まで延長した。調査面積は最終的に15,700m<sup>2</sup>を対象とした。なお調査の結果、氾濫原で検出した縄文時代中期の遺物を多量に含む遺物包含層(GV～VI層)が工事用道路下へ延びることが明らかとなつたことから、その部分1,100m<sup>2</sup>については未調査である。

当初終了予定から11日間調査期間を延長し、平成15年11月7日に出土遺物、発掘機材等を埋蔵文化財センター北調査課へ搬出し、発掘調査を完了した。以下、調査経過の概要は第3表に示す。

第3表 調査の経過

	作業状況	特記事項
4月	23日重機による表土除去開始(～7/2)。	
5月	13日調査開始。現場・事務所周辺の条件整備。 14日S E区とSW区にベルトコンベアー設置。 N区とE区調査開始。N区は23日調査終了。 S E区は柱穴、羽根河を検出。 19日S W区調査開始。堅穴住居跡1軒検出、精査。	14日松浜北調査課長来路。 22日大野所長来路。
6月	3日S W区堅穴住居跡3軒検出、精査。 6日S E区調査終了。 9日C S区調査開始。ベルトコンベアー移動及び設置。水田造成時の削平により、遺構・遺物の密度は東側を除き極めて低い。 11日S W区堅穴住居跡3軒検出、精査。	4日文化財保護室職員学芸主事・藤沢学芸主事来路。 12日シン技術コンサルによるトータルステーション講習。 19日松浜北調査課長来路。
7月	2日表土除去終了。 25日S W区調査終了。 28日C S区東側調査開始。ベルトコンベアー移動及び設置。	3日大野所長・企画課課長来路。 11日学芸主事安全ハンドル出席。 16日森吉山ダム工事事務所芭木専門員来路。 17日森吉山ダム工事事務所と協議。芭木専門員他2名、文化財保護室職員学芸主事・松浜北調査課長来路。 31日森吉家ノ前C遺跡冬小屋より機材搬入(～8/1)。
8月	6日C N区調査開始。水田造成時の削平により、遺構・遺物の密度は低砂丘面部分を除き極めて低い。 9日C N区堅穴住居跡調査開始。	4日森吉家ノ前C遺跡より作業員40人合流。 27日大野所長来路。
9月	2日NW区調査開始。 5日C S区調査終了。S Q S 12石棺様組石の再調査開始(～10/1)。 8日町道部分表土除去開始(～10/8)。 12日NW区堅穴になる配石(S I 2001)確認、精査。 17日C S区町道下調査開始。堅穴住居跡1軒検出、精査。	18日松浜北調査課長・高校初任研6名来路。 22日鹿角市公民館約30名来路。
10月	9日C S区町道F S N 3298m土堆検出、土壤採取、洗浄。 15日NW区S Q S 12の類似遺構S Q N 2025検出、精査。 遺構東側斜面に伴う表土剥去。 22日NW区堅穴の深掘試掘溝により、深さ約2mに及ぶ河川堆積物及び砂性堆積物を確認。開文中期の遺物を多く含む。 27日NW区河川堆積物及び砂性堆積物下でS N 2030地盤上遺構検出。 28日NW区河川堆積物重機による掘削。 31日空中写真撮影。	1日産業局による問診。 9日武田副所長来路。 10日菅原泰氏来路。 17日松浜北調査課長・鍛山研修員・石田研修員来路。 24日青森市教委先生・文化財主事来路。 27日鹿角市教委先生・生涯学習課長袖佐・三浦主事、蘆泉町教委根本主事来路。 6・8・23・30・31日松浜北調査課長来路。
11月	7日調査区全域にて精査を終了。 深汲遺跡の発掘調査を終了。	6日國學院大學小林達雄教授、富樫泰氏、歴史環境計画研究所秋山邦夫所長、文化財保護室藤澤学芸主事、蘆泉町教委根本主事来路。 7日武田副所長・松浜北調査課長来路。

## 第4章 調査の記録

### 第1節 基本層序

遺跡は大きく南北3段の小規模な段丘面、氾濫原からなる。面積が広大であり、調査区が工事用道路及び町道によって分断されていたことから、地点ごとに基本層位を観察した。連続して層位を観察することができなかったこと、各地点の堆積環境が一様とは考えがたいことから、地点ごとの層位を厳密に対応させることは困難である。各層位の推定堆積時期による対応関係については第4表に示した。

#### 1 高位段丘面(第6～7図、基本層序A～C地点)

南側の高位段丘面(以下高位面と表記)は標高187～189mで、東から西へ低く傾斜する。調査時には工事用道路(平成9年度調査区)により南東部、南西部、北部に分断されていた。

高位面南東部(基本層序A地点)は、調査前は集落移転に伴い放棄された旧水田であった。調査の結果、南西側には平成8年度の森吉町教育委員会による遺跡の範囲確認調査の際に遺跡外とされた沢の東側の一部を検出した。ほ場整備の際に東側を削平し、南西側の沢を埋め立てて平坦面を造成している。A地点の基本層序は4層に分層した。AⅠ層は旧水田耕作土層で層厚約20cmであるが、南西側は約40cmとやや厚い。AⅡ層は縄文時代晚期の遺物を含む黒褐色～暗褐色土層で層厚10cm弱である。沢の落ち際部分のみに残存している。AⅢ層はAⅡ層からAⅣ層へ至る漸移層である。本地点は削平を受けているため、大部分で旧水田耕作土(AⅠ層)直下に漸移層(AⅢ層)が位置する。AⅣ層は黄褐色砂質土層で、基盤層である。本層は、氾濫原を除くすべての地点に共通する層で、縄文の遺構は、氾濫原を除き、すべてこの基盤層(もしくは漸移層)上面で確認した。本層の下位には段丘礫層が位置する。段丘礫層と基盤層は基質が同じであることから、連続する河川堆積物と考えられる。

高位面西南部(基本層序B地点)は、調査前は集落移転に伴い放棄された東西2面の旧水田であった。中央付近に比高差約30cmの段差が形成され、東側が高い水田面である。旧表土層は残存しておらず、旧水田耕作土もしくは造成土直下に、基盤層が位置する。旧水田耕作土、造成土と基盤層とは不整合であることから、ほ場整備により上位が大きく削平され、二面の平坦面が造成されたと推定される。旧地形は小又川の流路に沿って東から西へ低く傾斜していたと復元できよう。B地点の基本層序は4層に分層した。BⅠ層は旧水田耕作土層で層厚約10cmである。BⅡ層はほ場整備に伴う水田造成土層で、西側の水田面のみに認められる。BⅢ層は削平により消失した上位層から基盤層へ至る漸移層である。西端部のみに残存する。BⅣ層は褐色シルト質土の基盤層で、部分的に段丘礫が露出する。

高位面北部(基本層序C地点)は、調査前は集落移転に伴い放棄された東西4面の旧水田であった。西側ほど低く、各面の比高はそれぞれ50cm程度である。全面的に削平されており、旧水田耕作土層の直下には、東西両側で黄褐色砂質土の基盤層、中央付近では段丘礫層が露出する。C地点の基本層序は8層に分層した。CⅠ層は旧水田耕作土層であり、CⅡ層はほ場整備に伴う水田造成土層である。CⅢ層は昭和50年代ほ場整備以前の旧水田耕作土であり、部分的に確認できる。CⅣ層は段丘礫層(CⅦ層)直上に堆積する黒褐色土層である。基盤層(CⅦ層)が窪む箇所のみに認められ、比較的均質な黒泥層であることから、滯水成堆積層と推定する。CⅤ層は東西両端に部分的に残存する黒褐色土層であり、大部分

は削平により消失したと推定される。下位層との境界が不明瞭であり、基盤層であるCⅦ層と基質を同じくすることから、CⅦ層が土壤化したものと判断する。遺物は出土しておらず、縄文時代の生活面はさらに上位であった可能性が高い。CⅥ層はCⅤ層からCⅦ層へ至る漸移層であり、CⅤ層が残存する部分にのみ確認できる。CⅦ層は褐色砂質土層である。CⅧ層は段丘礫層であり、上位の褐色砂質土層が削平された結果、露出したと考えられる。

### 2 中位段丘面(第6～8図 基本層序D、E地点)

遺跡中央部は中位段丘面(以下中位面と表記)で、標高は185～187mを測る。高位面との比高は約2mである。調査前は集落移転により放棄された旧水田であり、高位面と接する南側には東西に町道が通っていた。旧水田部分はほ場整備により削平され、水田造成土または旧水田耕作土直下に段丘礫層が露出する。一方、町道部分は削平を免れ、遺物包含層が残存する。町道部分と旧水田部分の比高は最大で約1.5mを測る。のことから、旧水田部分はほ場整備により最大約1.5m削平されたと考えられる。北側は漸移層が部分的に残存していることを考え合わせると、旧地形は南から北へ若干低く傾斜していたと推定できる。なお、水田部分には遺構や遺物は確認されていない。おそらく削平により消失したものと考えられる。

旧水田部の基本層序(基本層序D地点)は6層に分層した。DⅠ層は旧水田耕作土層、DⅡ層はほ場整備の際の水田造成土、DⅢ層はほ場整備以前の旧水田耕作土層、DⅣ層はDⅢ層に伴う水田造成土である。DⅤ層は削平により消失した上位層からDⅥ層へ至る漸移層である。北部及び南部にのみ若干残存する。DⅥ層は段丘礫層である。北部と西端部は黄褐色砂質土の混入度が高い。

町道部分(基本層序E地点)は6層に分層した。EⅠ①～③層はほ場整備以前の旧水田耕作土層である。EⅡ層は黒色砂質土層である。南側の高位面からの表土の流出による堆積と推定する。EⅢ層は暗赤褐色砂質土である。堆積要因はEⅡ層と同様に、南側の高位面からの流れ込みによるものと推定される。EⅡ層、EⅢ層とともに、比較的均質であることから風成と水成の相互作用によりある程度の期間にわたって、周囲の表土が堆積したものと考えられる。なおEⅢ層はEⅡ層よりも腐植が少なく砂粒が比較的大きいことから、相対的に水の影響が強いと推測される。EⅡ層、EⅢ層ともに縄文時代後期から晩期の遺物が含まれることから、縄文時代晩期以降の堆積と判断できよう。なお、EⅢ層は低位面の基本層序FⅢ層と土色や基質が類似する。EⅣ層は黒褐色砂質土である。遺物が含まれず、EⅥ層と基質を同じくすることから、EⅥ層の土壤化層と考えられる。ただし、後背に高位面が位置することから、EⅢ層堆積以前も、後背の高位面からの土の供給があったと推測できる。のことから、分層はできなかったが、EⅣ層の上位は堆積土である可能性が高い。EⅣ層上面から縄文時代晩期の遺構が掘り込まれていることから、EⅣ層上面が当時の地表面であったと判断できる。EⅤ層はEⅣ層からEⅥ層へ至る漸移層である。EⅥ層は黄褐色砂質土で基盤層である。

### 3 低位段丘面(第6・8図 基本層序F地点)

遺跡北部は小又川に臨む低位段丘面(以下低位面と表記)である。標高は181～184mで、北へ低く傾斜する。中位面からの比高は約1mである。低位面は、北西部とそれ以外の部分との、大きく2つの地形に分けられる。北西部は、基盤の岩盤が16×20mの範囲で露出し、中位面と岩盤の間が東西方向に細長く浸食されて沢状の地形となっている。北西部は調査時には埋没しており、埋積土には縄文時代前期中葉、中期後葉の遺物が多く含まれていた。一方、北西部以外の部分は、北に低く傾斜する平坦面である。

平坦面南半は水田造成により埋め立てられ、中位面と一連の水田面が形成されていた。造成土の直下は基盤の黄褐色砂質土であり、造成土と基盤層とは不整合であることから、造成時に上位を大きく削平されたと推定できる。平坦面北半は中位面より約1m低い水田が造成されていた。水田耕作土の直下は基盤層の黄褐色砂質土であるが、遺構が1基確認されていることから、南側に比べて削平の度合いが弱かったと考えられる。

基本層序は北西側の沢状に浸食された部分で観察した(基本層序F地点)。埋積土は大きく6層に分層した。FⅠ層は暗褐色土で、旧水田耕作土層である。FⅡ層は黒褐色土である。遺物を含む。FⅢ層は極暗褐色土である。遺物の混入は少ない。中位面基本層序EⅢ層に類似することから、EⅢ層と堆積要因が同じである可能性が考えられる。FⅣ層は黒色～黒褐色土の粘質土である。堆積要因や時期などを細かく特定することができなかつたためFⅢ層とFⅤ層の間を一括でFⅣ層とし、色調などでFⅣ①～FⅣ④に細分した。FⅤ層は両壁際に堆積する極暗褐色～褐色土で、北壁際堆積層をFⅤ①層、南壁際堆積層をFⅤ②層とした。FⅥ層は底面に堆積する粘質の強い黒色～暗褐色土である。下位には疑似グライ斑が形成されている。

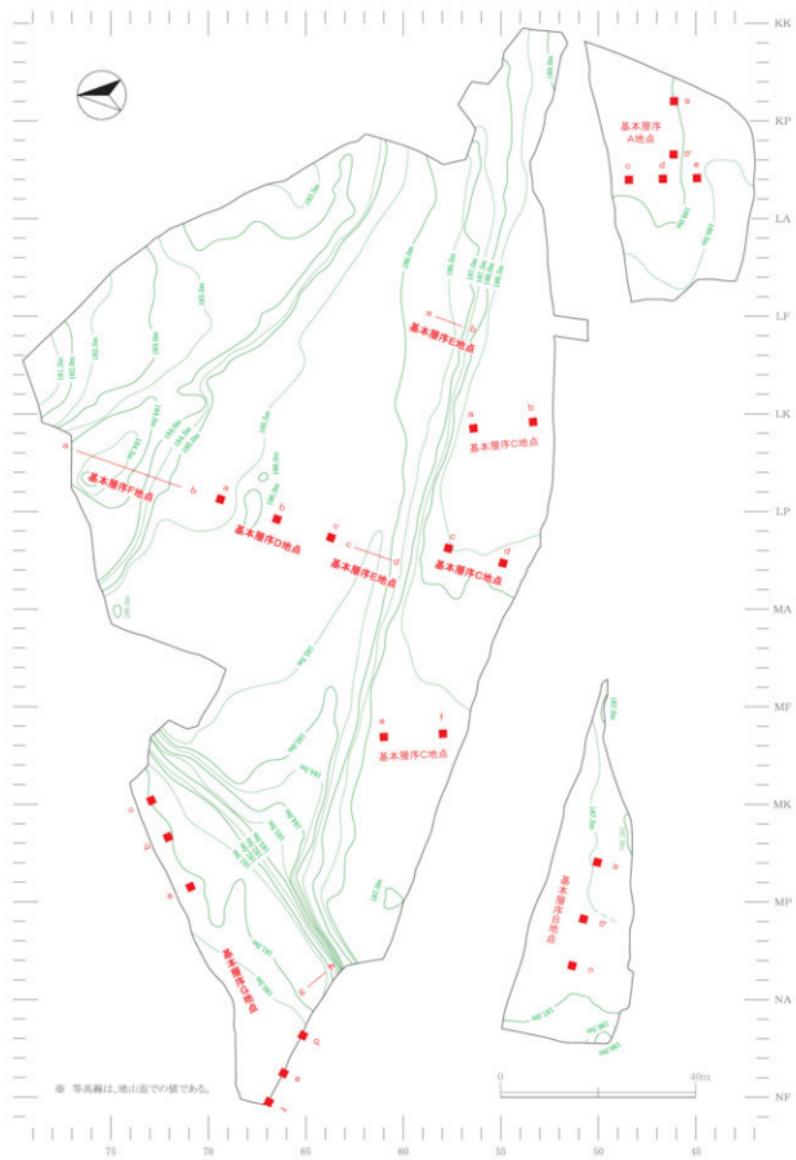
各層の遺物の出土状況や特徴から堆積要因、時期を推定すると、最下層であるFⅥ層では、縄文時代前期中葉の遺物が出土することから、堆積時期は縄文時代前期中葉以降と推定される。粘質が強く、下層(FⅦ層)が一部グライ化すること、下位には疑似グライ斑が形成されていることから、FⅥ層は滞水下で堆積した層であると推定する。

FⅤ層もまた、縄文時代前期中葉(円筒下層b式)の土器が出土することから、堆積時期は縄文時代前期中葉以降と推定される。とくにFⅤ②層(LK70区・LO73区)では遺存状況のよい土器が、まとまって出土した。後背の中位面から土器が廃棄された可能性が想定されるが、中位面は強く削平されているため、同時期の遺構や遺物は確認しておらず、確証は得られていない。なお、FⅤ層は極暗褐色～褐色を呈することから、縄文時代前期中葉には黒ボク土の生成は進んでいなかった可能性が高い。また、FⅤ①層は角礫が多く混入することから、北側に存在する岩盤の風化に伴う崖錐性の堆積と想定される。

FⅣ層は縄文時代前期中葉(円筒下層b式)の土器が多く出土するが、中期後葉(大木10式)の土器片も広い範囲で出土する。特に、FⅣ④層から大木10式土器片がまとまって出土したことから、FⅣ層は縄文時代中期後葉以降の堆積と判断する。後背の中位面からの流れ込みによる堆積と考えられることから、出土遺物も二次堆積と推定される。なお、南東側には南壁際によつて最大約1m程の円礫が約500点検出された。周囲には礫層の基質である黄褐色砂質土は検出されておらず、土層断面においても崖の崩落などの痕跡は確認できなかったことから、中位面から人為的に投げ入れられたものである可能性が高いと推定される。時期は、周囲から出土する遺物の時期から中期後葉以降と推定する。

FⅢ層は後背の中位面からの流れ込みによる堆積と推定される。しかし、腐植が少なく砂粒が比較的大きいことから、洪水などの多量の流水により淘汰された可能性が考えられる。本層は中位面基本層序EⅢ層に類似し、EⅢ層とFⅢ層は堆積要因や時期が同じである可能性が高い。植生の変化や多雨などで、深渡地区が流水にさらされる時期があったと想定できようか。本層からは縄文時代前期中葉の遺物が出土している。しかし、下位層であるFⅣ層の堆積時期が縄文時代中期後葉と推定されることから、混ざり込みと判断する。EⅢ層と同時期とすれば、縄文時代晩期以降の堆積と考えられよう。

FⅡ層からも縄文時代前期中葉の遺物が出土しているが、FⅢ層と同様に混ざり込みと考えられる

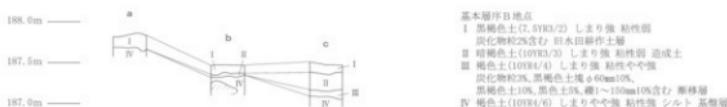


第6図 基本層序位置図

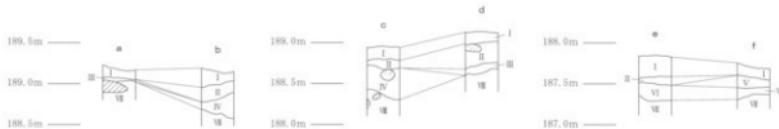
## 基本層序A地点



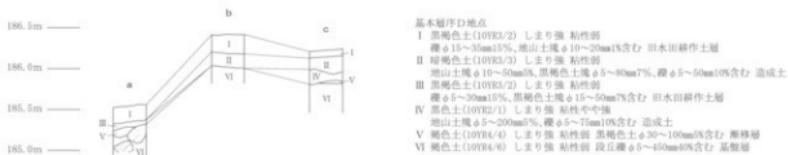
## 基本層序B地点



## 基本層序C地点

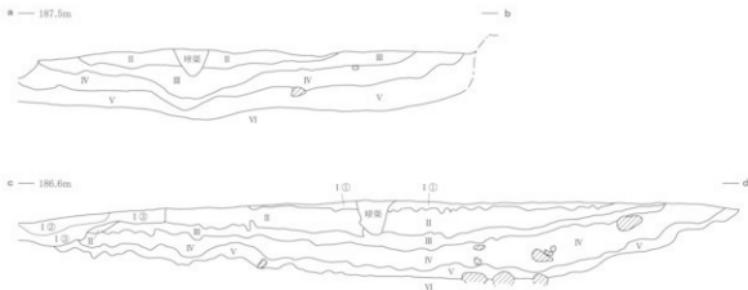


## 基本層序D地点



第7図 基本層序（1）

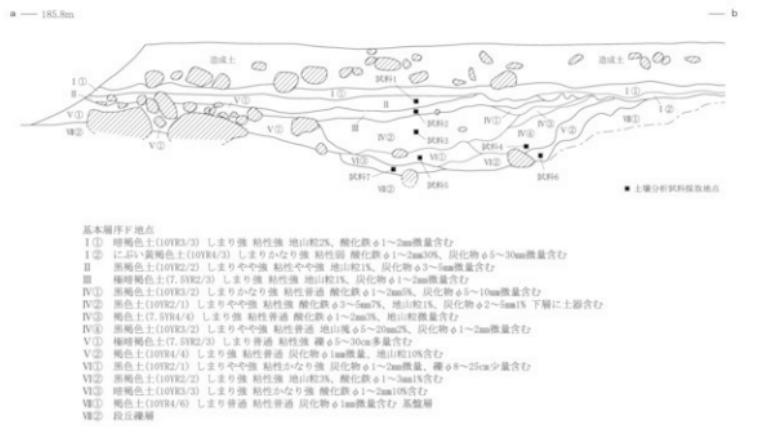
## 基本層序E地点



## 基本層序E地点

- I ① 黄褐色土(10YR2/1) しまり強 粘性弱 硬化物粒7%, 繩 6.5~70mm10%含む 水田耕作土層  
II 黄褐色土(10YR2/2) しまり強 粘性弱 増山土塊 ø10~20mm5%, 黃褐色土 ø10~40mm7%, 繩 ø5~25mm10%含む 造成土  
I ② 黄褐色土(10YR2/1) しまり強 粘性やや強 地山土塊 ø10~20mm5%, 地山土粒5%, 繩 ø30~50mm10%含む 造成土  
II 黄褐色土(10YR2/1) しまり普通 粘性普通 硬化物 ø10~30mm5%, 繩 ø5~10mm10%含む 墓積土  
III 黄褐色土(10YR3/2) しまりやや弱 粘性強 地山土粒10%, 微化物粒2%, 黑土土塊 ø10~50mm3%, 繩 6.5~70mm5%含む 墓積層  
IV 黄褐色土(10YR2/2~10YR3/2) しまり強 粘性やや強 地山土塊 ø50~100mm10%, 微化物粒5%, 繩 ø5~30mm10%含む 土壌化層  
V 黄褐色土(10YR3/2) しまり強 粘性やや強 地山 ø20~150mm10%, 繩 ø15~30mm30%含む 移動層  
VI にふく黄褐色土(10YR4/3)~褐色土(10YR4/4) しまりやや弱 粘性弱 繩 ø20~25mm10%含む 基盤層

## 基本層序F地点

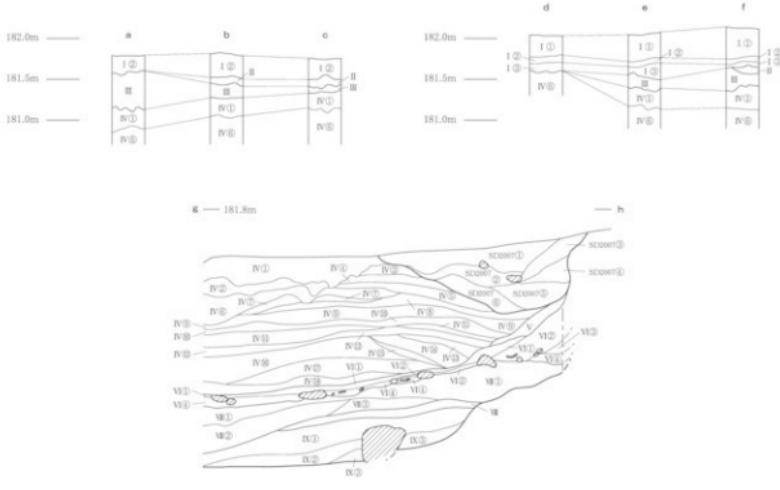


## 基本層序F地点

- I ① 線褐色土(10YR2/3) しまり強 粘性強 地山粒2%, 硬化物 ø1~2mm微量含む  
I ② にふく黄褐色土(10YR4/3) しまりかなり強 粘性弱 硬化物 ø1~2mm30%, 硬化物 ø5~30mm微量含む  
II 黄褐色土(10YR2/2) しまりやや強 粘性やや強 地山粒1%, 硬化物 ø3~5mm微量含む  
III 線褐色土(7.5YR2/3) しまりやや強 粘性弱 地山粒1%, 硬化物 ø1~2mm微量含む  
IV ① 黄褐色土(10YR3/2) しまりかなり強 粘性普通 硬化物 ø1~2mm5%, 硬化物 ø5~10mm微量含む  
IV ② 黄褐色土(10YR2/1) しまりやや強 粘性強 硬化物 ø3~5mm7%, 地山粒1%, 硬化物 ø1~5mm1 下層に土器含む  
IV ③ 黄褐色土(7.5YR4/4) しまり強 粘性普通 硬化物 ø1~2mm3%, 地山粒微量含む  
IV ④ 黄褐色土(10YR2/2) しまりやや強 粘性弱 地山粒 ø1~2mm5%, 硬化物 ø1~2mm微量含む  
V ① 黄褐色土(10YR4/3) しまり強 粘性普通 硬化物 ø1~2mm微量含む  
V ② 黄褐色土(10YR4/4) しまり強 粘性普通 硬化物 ø1mm微量含む 地山粒1%含む  
VI ① 黄褐色土(10YR2/1) しまりやや強 粘性かなり強 硬化物 ø1~2mm微量含む 繩 ø8~25mm少少量含む  
VI ② 黄褐色土(10YR2/2) しまり強 粘性強 地山粒3%, 硬化物 ø1~3mm1%含む  
VI ③ 黄褐色土(10YR3/2) しまり強 粘性かなり強 硬化物 ø1~2mm1%含む  
VI ④ 黄褐色土(10YR4/4) しまり普通 粘性普通 硬化物 ø1mm微量含む 基盤層  
VI ⑤ 放生層

第8図 基本層序 (2)

## 基本層序G地点



## 基本層序G地点

- I ① 線褐色土(10YR3/0) しまり弱 粘性やや強 繩 60~200mm50%含む 造成土
- I ② 黒褐色土(10YR2/3) しまりやや強 粘性やや強 黄褐色土(0) 繩 20~200mm10%含む 造成土
- I ③ 黒褐色土(10YR2/3) しまりやや強 粘性やや強 黄褐色土(0) 繩 10~20mm5%含む 造成土
- II 黑褐色土(10YR3/0) しまりやや強 粘性やや強 黄褐色土(0) 繩 10~20mm5%含む 造成土
- III 黑褐色土(10YR3/0) しまりやや強 粘性やや強 黄褐色土(0) 繩 30~40mm7% 黄褐色土(0) 30~50mm5%含む 河成層
- IV① 黑褐色土(10YR3/0) しまりやや強 粘性やや強 黄褐色土(0) 繩 50~60mm5%含む 河成層
- IV② 黑褐色土(10YR3/0) しまりやや強 粘性やや強 黄褐色土(0) 繩 30~40mm7% 黄褐色土(0) 30~50mm5%含む 無層界
- IV③ 黑褐色土(10YR3/0) しまりやや強 粘性やや強 黄褐色土(0) 繩 10~20mm5%含む 河成層
- IV④ 黑褐色土(10YR4/0) しまり強 粘性弱 黄褐色土(0) 繩 10~20mm5%含む 河成層
- IV⑤ 黑褐色土(10YR3/0) しまり弱 粘性弱 黄褐色土(0) 繩 10~20mm5%含む 河成層
- IV⑥ 黑褐色土(10YR4/0) しまり強 粘性弱 黄褐色土(0) 繩 10~20mm5%含む 河成層
- IV⑦ 黑褐色土(10YR4/0) しまり弱 粘性弱 黄褐色土(0) 繩 10~20mm5%含む 河成層
- IV⑧ 黑褐色土(10YR4/0) しまり強 粘性弱 黄褐色土(0) 繩 10~20mm5%含む 河成層
- IV⑨ 黑褐色土(10YR4/0) しまり強 粘性弱 黄褐色土(0) 繩 10~20mm5%含む 河成層
- IV⑩ 黑褐色土(10YR4/0) しまり強 粘性弱 黄褐色土(0) 繩 10~20mm5%含む 河成層
- IV⑪ 黑褐色土(10YR4/0) しまり強 粘性弱 黄褐色土(0) 繩 10~20mm5%含む 河成層
- IV⑫ 黑褐色土(10YR3/0) しまりやや強 粘性弱 黄褐色土(0) 繩 10~20mm5%含む 河成層
- IV⑬ 黑褐色土(10YR3/0) しまりやや強 黃褐色土(0) 繩 10~20mm5%含む 河成層
- IV⑭ 黑褐色土(10YR4/0) しまり弱 粘性弱 黄褐色土(0) 繩 10~20mm5%含む 河成層
- IV⑮ 黑褐色土(10YR4/0) しまり弱 粘性弱 黄褐色土(0) 繩 10~20mm5%含む 河成層
- IV⑯ 黑褐色土(10YR4/0) しまり弱 粘性弱 黄褐色土(0) 繩 10~20mm5%含む 河成層
- V 黑褐色土(10YR3/0) しまり強 粘性やや強 沈化物10% 黄褐色土(0) 5%含む 剥離性地盤層
- VI① 黑褐色土(10YR4/0) しまり弱 粘性弱 沈化物10% 黄褐色砂質土(0) 5%含む 黑褐色土(0) 5% 黄褐色土(0) 25%含む 剥離性地盤層
- VI② 黑褐色土(10YR4/0) しまり弱 粘性やや強 沈化物10% 黑褐色土(0) 黄褐色土(0) 25%含む 河成層
- VI③ 黑褐色土(10YR4/0) しまり弱 粘性やや強 沈化物10% 黑褐色土(0) 黄褐色土(0) 25%含む 河成層
- VI④ 黑褐色土(10YR4/0) しまりやや強 粘性弱 沈化物10% 黑褐色土(0) 10%含む 河成層
- VI⑤ 黑褐色土(10YR4/0) しまりやや強 粘性弱 沈化物10% 黑褐色土(0) 10%含む 河成層
- VI⑥ 黑褐色土(10YR4/0) しまりやや強 粘性弱 沈化物10% 黑褐色土(0) 10%含む 河成層
- VI⑦ 黑褐色土(10YR4/0) しまりやや強 粘性弱 沈化物10% 黑褐色土(0) 10%含む 河成層
- VI⑧ 黑褐色土(10YR4/0) しまりやや強 粘性弱 沈化物10% 黑褐色土(0) 10%含む 河成層
- VI⑨ 黑褐色土(10YR4/0) しまりやや強 粘性弱 沈化物10% 黑褐色土(0) 10%含む 河成層
- VI⑩ 黑褐色土(10YR4/0) しまりやや強 粘性弱 沈化物10% 黑褐色土(0) 10%含む 河成層
- VI⑪ 黑褐色土(10YR4/0) しまりやや強 粘性弱 沈化物10% 黑褐色土(0) 10%含む 河成層
- VI⑫ 黑褐色土(10YR4/0) しまりやや強 粘性弱 沈化物10% 黑褐色土(0) 10%含む 河成層
- VI⑬ 黑褐色土(10YR4/0) しまりやや強 粘性弱 沈化物10% 黑褐色土(0) 10%含む 河成層
- VI⑭ 黑褐色土(10YR4/0) しまりやや強 黃褐色土(0) 黑色土(20) 黑褐色土(0) 5%含む 河成層
- VI⑮ 黑褐色土(10YR3/0) しまり弱 粘性やや強 沈化物10% 黄褐色土(0) 5%含む 黄褐色土(0) 10%含む 河成層
- VI⑯ 黑褐色土(10YR3/0) しまり弱 粘性やや強 沈化物10% 黄褐色土(0) 5%含む 黄褐色土(0) 10%含む 河成層
- VI⑰ 黑褐色土(10YR4/0) しまり弱 粘性弱 沈化物10% 黄褐色土(0) 5%含む 黄褐色土(0) 20%含む 河成層
- VI⑱ 黑褐色土(10YR4/0) しまり弱 粘性弱 沈化物10% 黄褐色土(0) 5%含む 黄褐色土(0) 20%含む 河成層

第9図 基本層序(3)

ことから、本層の堆積時期は特定しがたい。

土壤分析の結果によると、自然環境はFⅢ層以上とFⅣ層以下で異なる結果が得られている。FⅢ層以上では好気性の珪藻化石が産出し、花粉はスギ属が優勢である。FⅣ層以下では珪藻化石は産出せず、花粉はブナ属やコナラ属が多い。このことから、FⅣ層堆積後FⅢ層堆積までに周囲の植生が変化したと判断できる。

#### 4 沼澤原(第6・9図 基本層序G地点)

遺跡西端部は小又川の沼澤原である。標高は約181mで、中位面との比高は約4m、小又川との比高は約7mである。調査前は集落移転に伴い放棄された旧水田であった。本地点では3面(上位面・中位面・下位面)の遺構面を確認したことから、少なくとも3回の離水時期があったと判断できる。

もっとも新しい上位面は標高約181.6m前後で、近世の遺構(SQN2025石組炉)を検出した。基盤層は黒褐色砂質土(GⅡ層)で、SQN2025石組炉の構築時期において地表面である。GⅡ層の色調は、下位のGⅢ層へ漸移的に変化することからGⅢ層の腐植層と考えられる。GⅢ層は均質な暗褐色砂質土である。上位面から中位面に至る河成層である。詳細な堆積時期は不明であるが、上位面で近世の遺構が営まれ、中位面で縄文時代後期の遺構が営まれることから、その間の堆積と判断できる。

中位面の標高は181.3m前後で、縄文時代中期末～後期前葉の遺構(SI2001竪穴住居跡ほか)を検出した。基盤層は黒褐色砂質土(GIV①層)で、下位層の暗褐色砂質土(GIV②層)との境界が漸移的であることから、GIV②層の腐植層と考えられる。中位面から下位面に至るGIV～VII層は、崖錐性堆積層であるGV～VI層を挟み、上位の河成層(GIV層)、下位の河成層(GVII層)からなる。崖錐性堆積層(GV～VI層)は縄文時代中期前葉から中葉の遺物が混入することから、上位の河成層(GIV層)の堆積時期上限は縄文時代中期中葉と判断できる。また、下限は中位面に構築された遺構の時期から、縄文時代中期後葉と判断する。下位の河成層(GVII層)の堆積時期は上下層の時期から、縄文時代前期中葉を上限、中期中葉を下限と判断する。

下位面の標高は179.5m前後で、縄文時代前期の遺構(SN2030焼土遺構)を検出した。基盤層は褐色砂質土(GVIII層)である。腐植層の発達は認められないが、SN2030焼土遺構に伴う掘り込みは確認できなかったことから、GVIII層上面が当時の地表面であったと推測される。

第4表 基本層序対応表

	A地点	B地点	C地点	D地点	E地点	F地点	G地点
旧水田耕作土/造成土	A I	B I～II	C I～IV	D I～III	E I ①～③	F I ①～②	G I
近世	—	—	—		↑	↑	↑
古代	—	—	—		E II～III	F II～III	G II～III
縄文時代晚期	A II	—	—		X	X	
縄文時代後期	—	—	—	D IV		F IV	
縄文時代中期後葉	—	—	—		E IV		
縄文時代中期中葉	—	—	—				G IV～VI
縄文時代中期前葉	—	—	—				
縄文時代前期中葉	—	—	—				G VII
基盤層	A III～IV	B III～IV	C V～VII	D V～VI	E IV～VI	F V～VI	G VIII～IX

## 第2節 検出遺構と出土遺物

### 1 概要

#### (1) 検出遺構

調査の結果、縄文時代及び古代以降の遺構を確認した。

縄文時代の遺構の内訳は、竪穴住居跡12軒(前期中葉6軒、中期後葉2軒、中期後葉以降1軒、後期前葉1軒、後期1軒、晚期前葉1軒)、土坑46基、溝跡2条、焼土遺構4基、配石遺構1基、柱穴様ピット32基である。古代以降の遺構の内訳は、掘立柱建物跡2棟、竪穴状遺構1基、土坑5基、炉跡3基、石組炉1基、柱穴様ピット125基である。

縄文時代の遺構は時期ごとに分布域が異なる。前期中葉の遺構は高位面南西部に集中する。主な遺構は竪穴住居跡で、6軒確認した。ほかにも、高位面南西部に位置する土坑は該期に属するものがあると推測される。そのほかに、氾濫原下位面で確認したS-N2030焼土遺構も該期に属する可能性が高い。縄文時代中期後葉には、複式炉を伴う竪穴住居跡が高位面南西部と氾濫原中位面でそれぞれ1軒検出されている。氾濫原中位面で検出した竪穴住居跡は、壁に礫を巡らす特異な形態である。氾濫原中位面ではそのほかに、竪穴住居を埋め戻す際の土取り穴とみられる土坑2基、溝跡1条確認した。縄文時代後期では、氾濫原中位面で前葉に属する竪穴住居跡を1軒、高位面南西部で1軒を検出した。また、中位面東部に位置する土坑群のうち、後期前葉に属するものが1基認められる。縄文時代晚期前葉では、中位面東部に竪穴住居跡を1軒確認した。周囲には同時期の土坑群を13基検出した。以上のように、本遺跡には縄文時代の住居跡が時期ごとに散在している。このことから、本遺跡は縄文時代を通じて、小規模な集落が断続的に営まれていた場所と推定できる。

古代以降の遺構は、掘立柱建物跡、竪穴状遺構、炉跡、石組炉などが確認されている。高位面、中位面、氾濫原にそれぞれ遺構が散在する。本遺跡はほ場整備に伴い大きく削平されていることから、深く掘り込まれた遺構のみが残存したものと推定される。

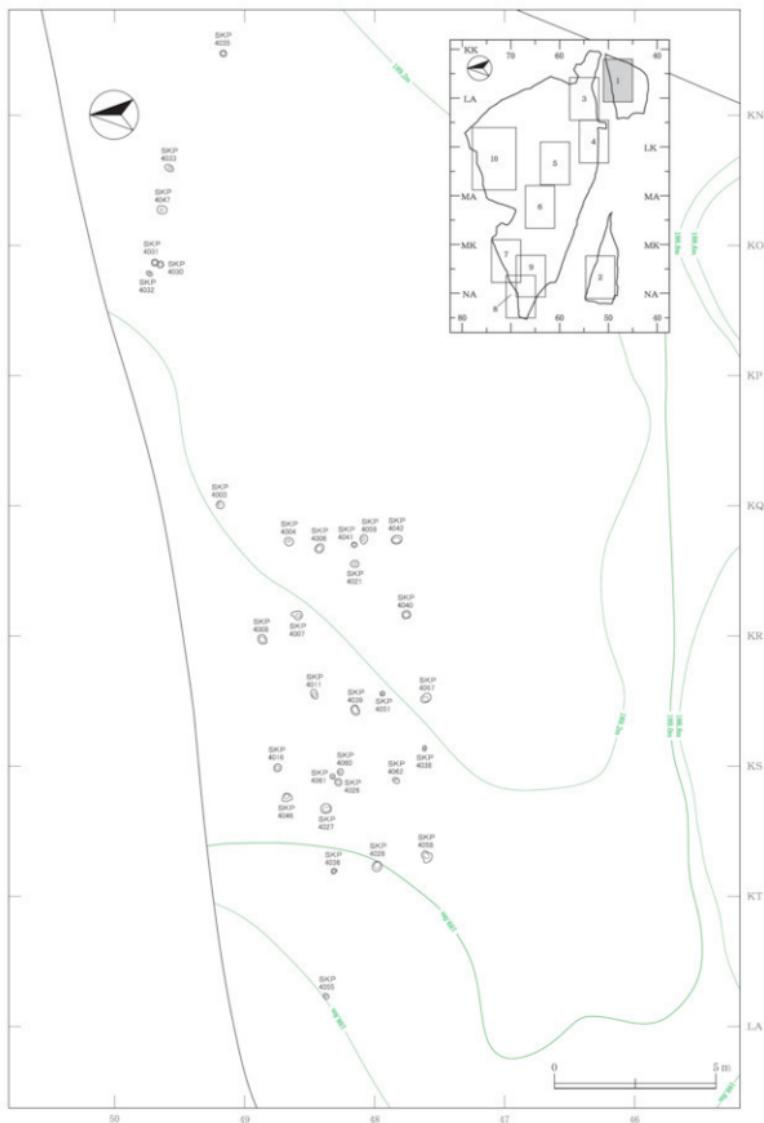
なお、検出した遺構の一覧を第5表に掲載した。また、柱穴様ピットは、第6・10表に掲載した。

#### (2) 出土遺物

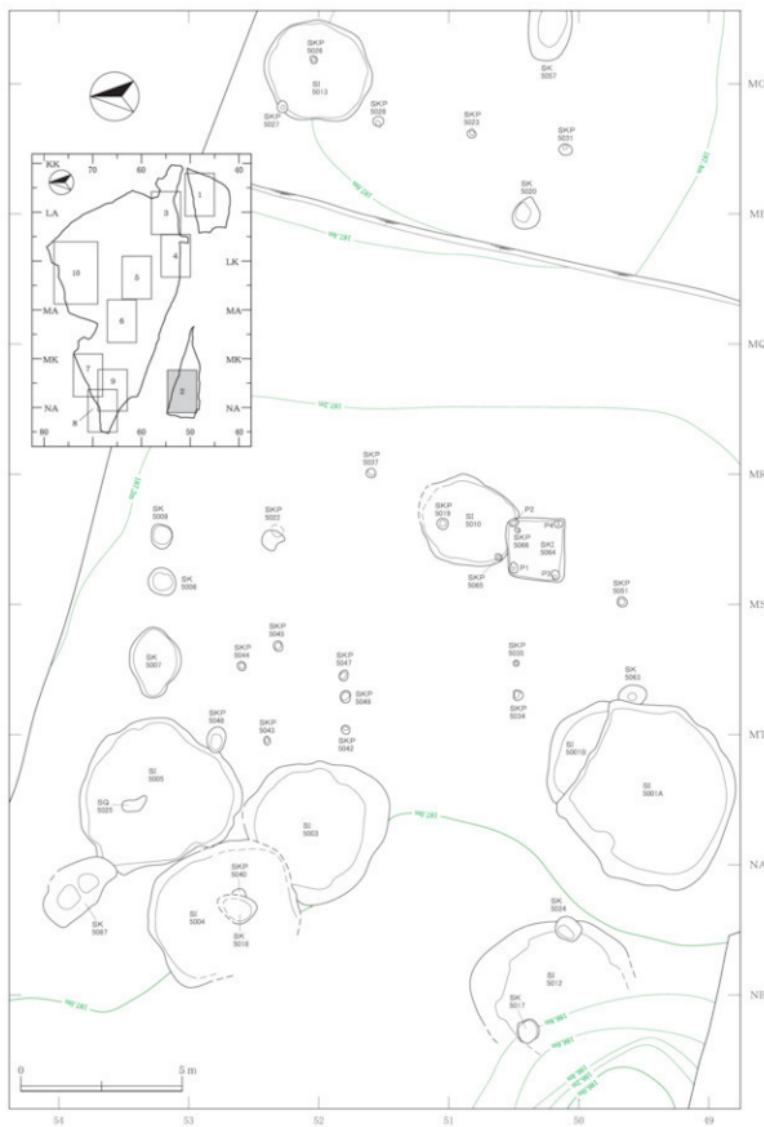
縄文時代と古代以降の遺物が出土した。

縄文時代の遺物は、180の遺物収納箱で土器210箱、石器84箱が出土した。そのうち遺構内出土が土器53箱、石器46箱、遺構外出土が土器157箱、石器38箱である。土器の時期別の内訳は前期中葉89箱、中期中葉69箱、中期後葉38箱、後期6箱、晚期8箱である。本遺跡は削平されているため、遺物包含層が残存していない部分が多い。遺物包含層が残存していたのは、中位面南側町道下部分、氾濫原、低位面のみであった。中位面南側からは縄文時代後期～晚期、氾濫原では縄文時代中期、低位面からは縄文時代前期中葉及び中期後葉の遺物が出土している。なお、縄文時代の遺物の詳細な分類は「第4章 第2節(2) 遺構外出土遺物」に記載しており、遺構に伴う遺物の記述もそれに基づく。

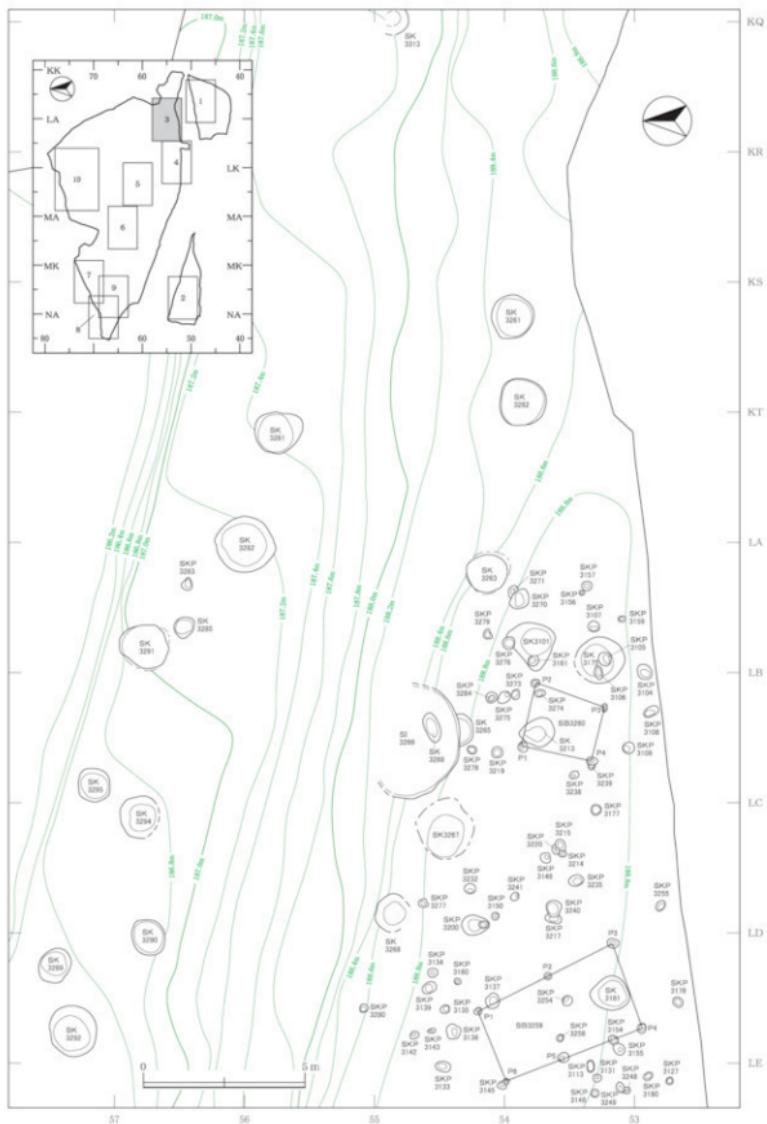
古代以降の遺物は、18世紀代の国産陶磁器が180の遺物収納箱で1箱出土したほか、寛永通宝4枚、煙管の雁首が1点など、金属製品が少量出土した。これらは遺構に伴う遺物でないため、今回は掲載していない。



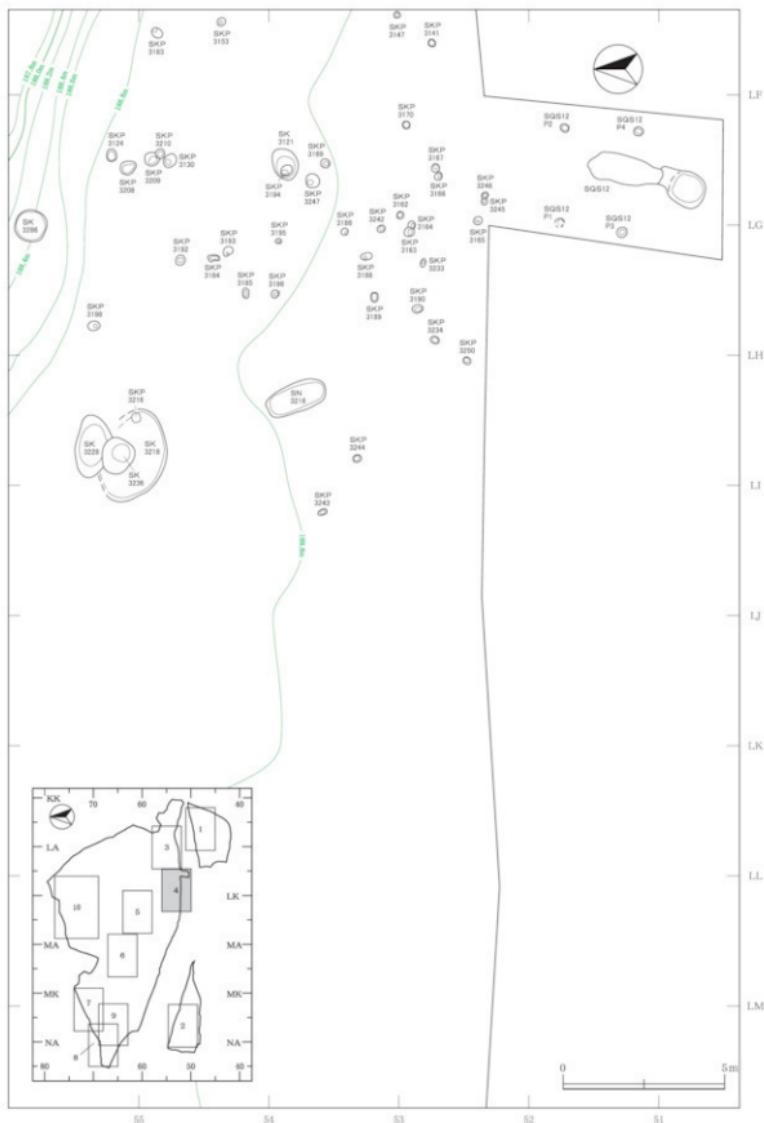
第10図 遺構配置図（1）



第11図 遺構配置図（2）



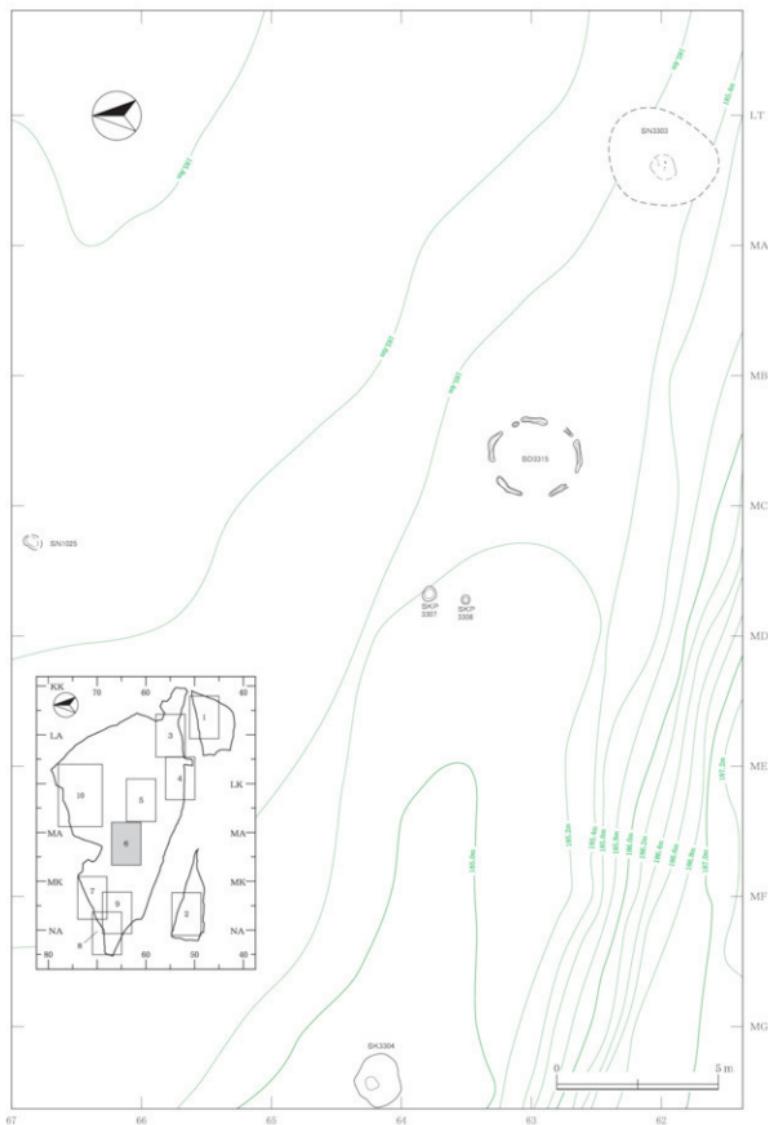
第12図 遺構配置図（3）



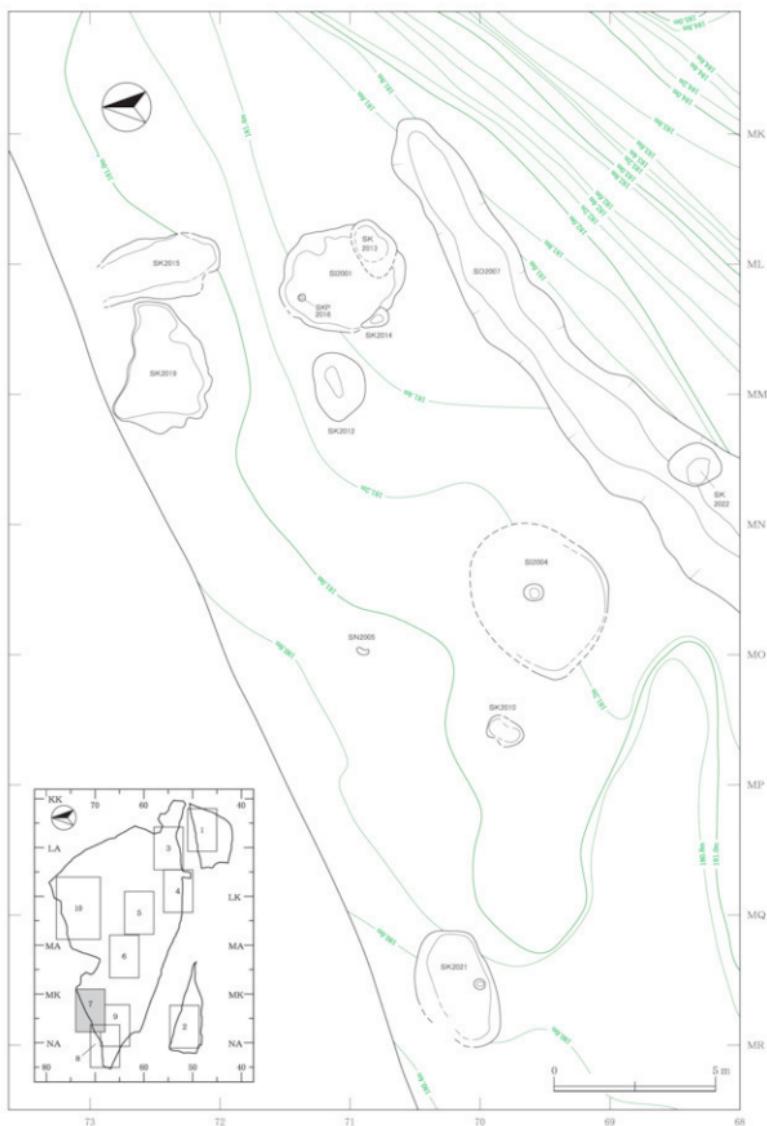
第13図 遺構配置図（4）



第14図 遺構配置図（5）



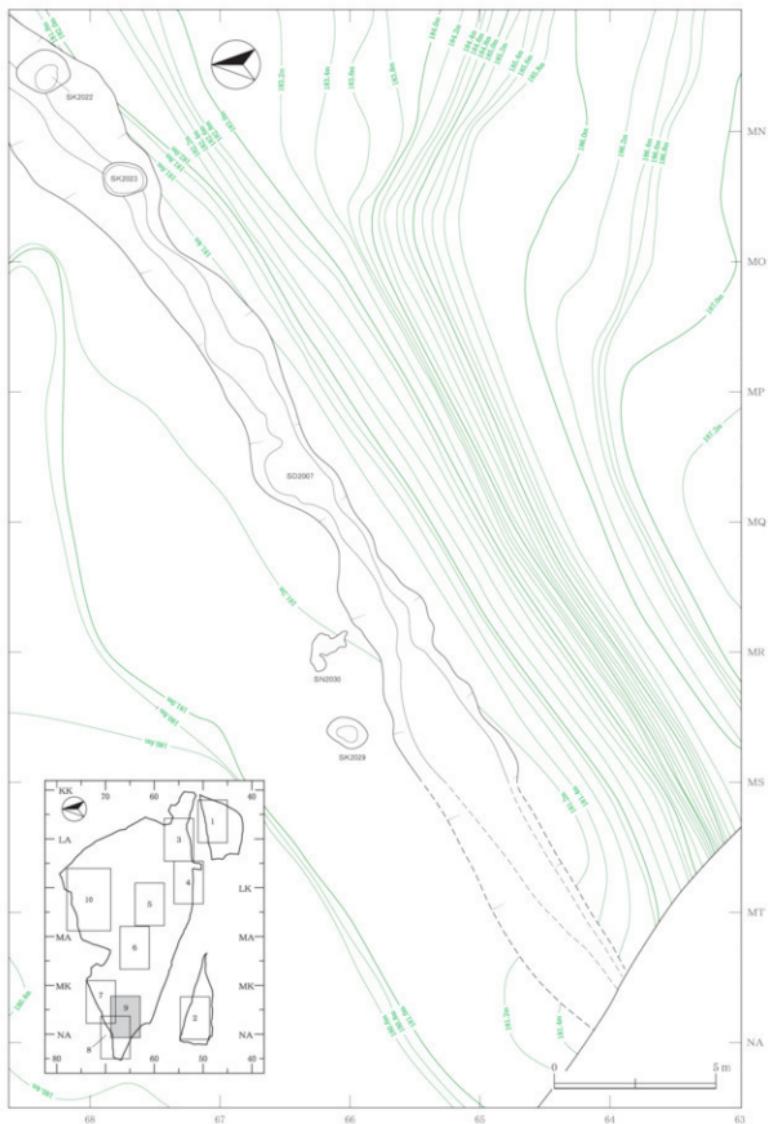
第15図 遺構配置図（6）



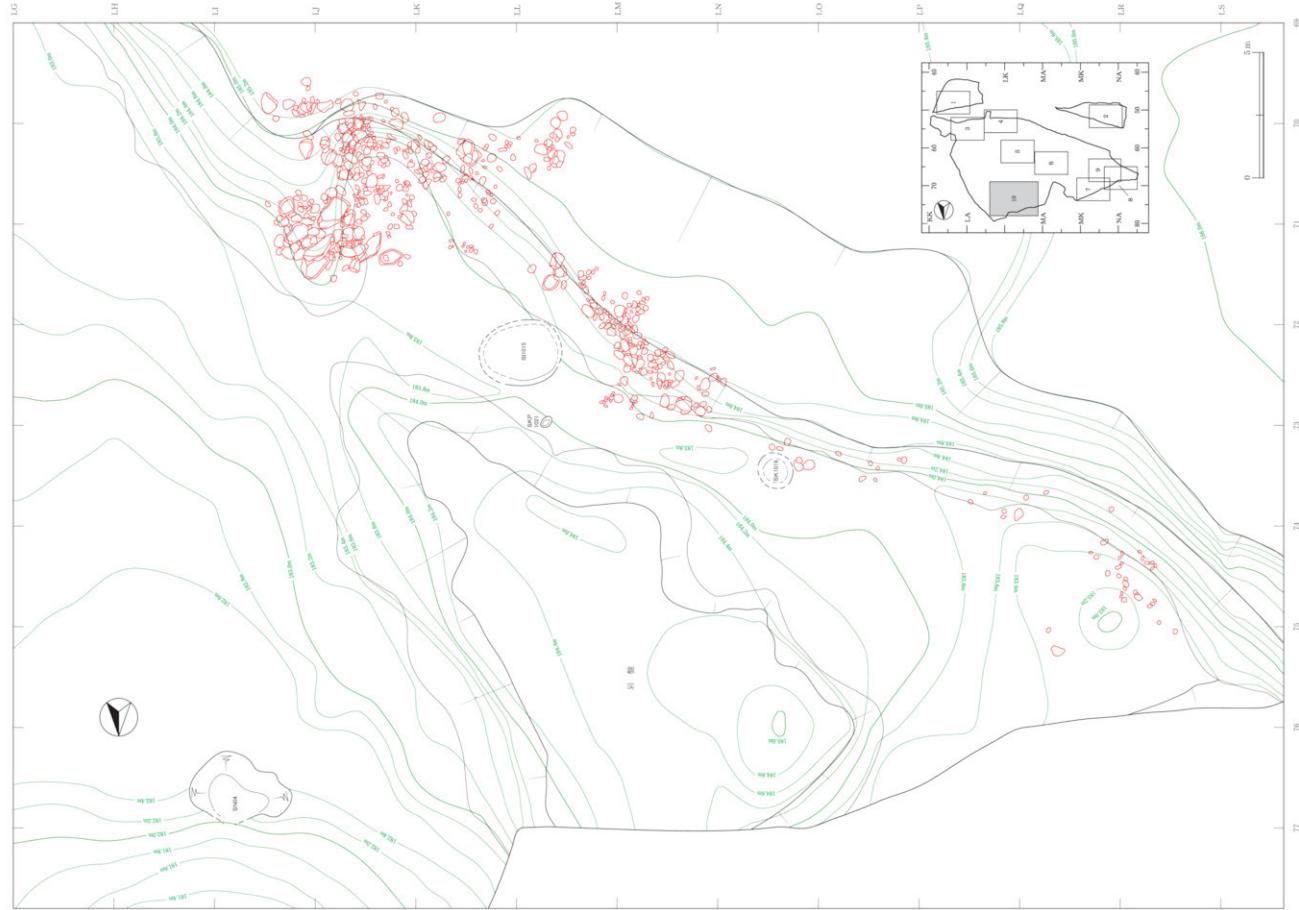
第16図 遺構配置図（7）



第17図 遺構配置図（8）



第18図 遺構配置図（9）



第19図 遺構配置図 (10)

第5表 検出遺構一覧

種別	遺構番号	調査区	位 置	時 期	垂 製
SI	5001A	MS ~ NA48 ~ 50	高位段丘面	縄文(前期中葉)	SK5063・SK5001より新しい
SI	5001B	MS ~ NA48 ~ 50	高位段丘面	縄文(前期中葉)	SI5001Aより古い
SI	5003	MT~NA51~52	高位段丘面	縄文(前期中葉)	SI5004より古い
SI	5004	MT~NA52~53	高位段丘面	縄文(前期中葉)	SI5003より新しい
SI	5005	MS~MT52~53	高位段丘面	縄文(前期中葉)	SK5025・SK5067・SKP5048より古い
SI	5012	NA~NB49~50	高位段丘面	縄文(前期中葉)	SK5017より古い SK5024(新旧不明)
SI	1015	LK~LL71~72	低位段丘面	縄文(中期中葉以降)	
SI	2001	MK~ML70~71	起壘原上位面	縄文(中期中葉)	SK2013・SKR2014・SKP2016より古い
SI	5013	MN~MO51~52	高位段丘面	縄文(中期中葉)	SKP5026・SKP5027より古い
SI	2004	MN69~70~MO69	起壘原上位面	縄文(後期中葉)	
SI	5010	MR50~51	高位段丘面	縄文(後期)	SK5064・SKP5019・SKP5065より古い
SI	3266	LB54	高位段丘面	縄文(後期)前葉	SK3265・SK3288より新しい
SK	2010	MO69	起壘原上位面	縄文(詳細不明)	
SK	2012	ML~MM70~71	起壘原上位面	縄文(中期後葉～後期)	
SK	2013	MK~ML70	起壘原中位面	縄文(中期後葉～後期)	SI2001より新しい
SK	2014	ML70	起壘原中位面	縄文(中期後葉～後期)	SI2001より新しい
SK	2015	MK~ML72	起壘原中位面	縄文(中期後葉)	
SK	2019	ML~MM72	起壘原中位面	縄文(中期後葉)	
SK	2021	MR69~70	起壘原中位面	縄文(中期後葉～後期)	
SK	2022	MM68	起壘原中位面	縄文(中期後葉～後期)	SD2007より新しい
SK	2023	MN67	起壘原中位面	縄文(中期後葉～後葉、後葉以前)	SD2007より古い
SK	2029	MR65~66	起壘原中位面	縄文(中期後葉～後葉、後葉以前)	
SK	3101	LA53	高位段丘面	縄文(後期)	SKP316より新しい SKP3276より古い
SK	3121	LF53	高位段丘面	縄文(後期～後期)	SKP314より新しい
SK	3176	LA~L163	高位段丘面	縄文(後期～後期)	SKP3105・SKP3106より古い
SK	3181	LD53	高位段丘面	縄文(後期～後期)	SB3259より古い
SK	3213	LB53	高位段丘面	縄文(詳細不明)	SB3260より古い
SK	3218	LH~L154~55	高位段丘面	縄文(前期中葉)	SK3236・SKP3216より古い SK3228(新旧不明)
SK	3228	LH55	高位段丘面	縄文(前期中葉)	SK3236より古い SK3218(新旧不明)
SK	3236	LH55	高位段丘面	縄文(前期中葉)	SK3218・SK3228より新しい
SK	3261	KS53~54	高位段丘面	縄文(晚期)前葉以降	
SK	3262	KS~KT53~54	高位段丘面	縄文(晚期)前葉	
SK	3263	LA53~54	高位段丘面	縄文(晚期)前葉	
SK	3265	LB54	高位段丘面	縄文(晚期)	SI3266より古い
SK	3267	LB~LC54	高位段丘面	縄文(晚期)前葉	
SK	3268	LC54	高位段丘面	縄文(後期)前葉以降	
SK	3281	KT55	中位段丘面	縄文(晚期)前葉	
SK	3282	KT~LA55~56	中位段丘面	縄文(晚期)前葉	
SK	3285	LA56	中位段丘面	縄文(晚期)前葉	
SK	3290	LF~LG55	中位段丘面	縄文(詳細不明)	
SK	3288	LB54	高位段丘面	縄文(晚期)前葉以前	SI3266より古い
SK	3289	LD57	中位段丘面	縄文(晚期)前葉	
SK	3290	LC~LD56	中位段丘面	縄文(晚期)前葉	
SK	3291	LA56	中位段丘面	縄文(晚期)前葉	
SK	3292	LD57	中位段丘面	縄文(晚期)前葉	
SK	3294	LB~LC56	中位段丘面	縄文(晚期)前葉	
SK	3295	LB57	中位段丘面	縄文(晚期)前葉	
SK	3304	MG64	中位段丘面	縄文(詳細不明)	
SK	3313	KP~KG54	中位段丘面	縄文(詳細不明)	
SK	5007	MS53	高位段丘面	縄文(中期)	
SK	5008	MK53	高位段丘面	縄文(中期)	
SK	5009	MR53	高位段丘面	縄文(詳細不明)	
SK	5017	NB50	高位段丘面	縄文(前期中葉以降)	SI5012より新しい
SK	5018	NA52	高位段丘面	縄文(前期中葉～後期初葉)	SI5004・SKP5040より新しい
SK	5024	NA49~50	高位段丘面	縄文(詳細不明)	SI5012(新旧不明)
SK	5057	MN50	高位段丘面	縄文(詳細不明)	
SK	5063	MS49	高位段丘面	縄文(前葉)	SI5001Aより古い
SK	5067	MT~NA53~54	高位段丘面	縄文(前葉)前葉以降	SI5005より新しい
SD	2007	MU70~MT64	起壘原上位面	縄文(中期後葉～後期後葉)	SK2022より古い SK2023より新しい
SD	3315	MB62~63	中位段丘面	縄文(詳細不明)	
SN	04	LH~L176	低位段丘面	縄文(詳細不明)	
SN	2005	MN70	起壘原上位面	縄文(中期)	
SN	2030	MQ~MR66	起壘原上位面	縄文(前葉) (?)	
SN	3303	LT~LS61~62	中位段丘面	縄文(詳細不明)	
SN	5025	MT53	高位段丘面	縄文(前期中葉)	SI5005より新しい
SB	3259	LD~LE52~54	高位段丘面	古代	SK3181・SKP3214より新しい
SB	3260	LB53	高位段丘面	古代	SK3213・SKP3239より新しい
SKJ	5064	MR50	高位段丘面	古代	SI5010・SKP5066より新しい
SK	1019	LN73	低位段丘面	古代	
SK	2026	ND68	起壘原上位面	中世～近世	
SK	2033	NE67	起壘原上位面	中世～近世	SQN2025より古い
SK	3299	LJ58~59	中位段丘面	古代	
SK	5020	MO~MP50	高位段丘面	近代	
SN	1025	MC66	中位段丘面	古代	
SN	3216	LH53~54	高位段丘面	古代	
SN	3293	LL59	中位段丘面	古代	
SQN	2025	NE67	起壘原上位面	中世～近世	SK2033より新しい

## 2 繩文時代

### (1) 道構と道構内出土遺物

#### ① 竪穴住居跡

##### a 前期の竪穴住居跡

S I 5001A 竪穴住居跡（道構第20～23図 遺物第52図1～第53図16、第63図1～第66図6）

《位置・確認状況》高位面M S～N A48～50区、漸移層（BⅢ層）上面で確認した。当初は1軒として調査を進めた。しかし、土層断面（G-Hライン）で2軒の切り合いであることを確認し、さらに壁溝と炉が重複していたことから、住居2軒の切り合いと判断した。

《重複》SK5063土坑、S I 5001B 竪穴住居跡より新しい。

《形状・規模》S I 5001Bと重複する北東部は平面形を明確に検出することが出来なかったが、平面不整隅丸方形であったと推定する。長軸約6.2m、短軸約5.4m、床面積21.6m<sup>2</sup>である。壁は開いて立ち上がり、床面は平坦で固く締まる。確認面から床面までの深さは0.6m前後で、床面標高は約186.6mである。

《炉》住居のほぼ中央に掘込炉が位置する。断面を観察した結果、上下に焼土面を確認し、新旧2基の炉が存在すると判断した。

旧炉 掘込炉である。住居中央、新炉の下位に位置する。円形の浅い掘り込みの内面及びその周間に厚さ2cmの焼土面を確認した。掘り込みは径約45cmの円形で、住居床面からの深さは3cmである。焼土面は平面不整梢円形で、長軸約1.3m、短軸約0.4mである。

新炉 掘込炉である。住居中央、旧炉の上位に位置する。浅い掘り込み内面に焼土面を確認した。掘り込みは、平面不整梢円形で長軸約2.0m、短軸約1.2mである。なだらかに窪み、住居床面からの深さは5cmである。焼土面は掘り込み全面に広がり、厚さは約5cmである。掘り込み内南西部にはさらに径約40cmの円形の窪みを確認した。深さは約5cmで、底面は周囲の焼土面と連続して焼土化している。焼土面の上面には固化した黒色土が薄く堆積しており、焼土面上が床面として使用された痕跡と推定される。のことから、新炉は徐々に移動し、その結果広い焼土面が形成されたと考える。

《柱穴・付属施設》柱穴様ピット8基（P 1～P 8）、土坑1基（SK14）を検出した。P 1～P 4・P 6・P 8は炉を中心に位置することから、いずれも主柱穴であった可能性が高い。炉が新旧2基存在することから、柱穴が2時期に分かれる可能性もある。いずれも平面梢円形で、長軸28cm～52cm、住居床面からの深さは37cm～59cmである。覆土は地山土由来の暗褐色土～黄褐色土である。P 1は形状より、2基の柱穴の重複もしくは柱抜き取り痕の可能性が考えられるが、判然としない。P 7は新炉の焼土と重複して位置する。P 7上面に焼土が確認できることから、新炉と同時期もしくは新炉より新しいと考えられる。

SK14土坑は住居床面で検出した。平面梢円形を呈し、長軸約1.0m、短軸約0.8mである。壁はやや開き気味に立ち上がる。底面は段丘礫が露出する。住居床面からの深さは約0.2mである。覆土は褐色の單一層である。性格は不明である。

床面北側には部分的に壁溝を検出した。壁溝は幅約10cmで、西端部分は幅約45cmと広がる。住居床面からの深さは5cm前後、底面形状は丸みを帯びる。

《覆土》覆土は8層に分層した（1層～8層）。8層は遺物の混入が少なく、地山由来土であることから人為堆積土と判断する。周堤が伴っていたとすれば、周堤由来と想定することもできよう。5層～7層

は縄文時代中期の土器が出土せず、前期中葉(円筒下層b式)の土器が出土することから、前期中葉の堆積と判断する。2層～4層は中期中葉(円筒上層c式)の土器の出土が顕著である。また、東側上層からは中期後葉(大木10式)の土器が出土している。以上より、本住居跡の埋没過程を復元すると、住居廃絶後に壁際部分のみ埋め戻され、縄文時代前期中葉に一旦竪穴の窪みを利用した廃棄場として利用されつつ、自然堆積により下位が埋没したと推定する。さらに中期中葉～後葉にかけて、再び東側で土器の廃棄が行われたと判断できる。ただし、遺構中央部分はより深くまで土壌化が進んでいる(1層)ことから、廃棄場として使用されなくなった後も竪穴の窪みは残存しており、その後時間をかけて完全に埋没したものと推定する。

9層・13層は床面直上に堆積する黒褐～暗褐色土であり、固化していることから住居使用時の床面堆積土と判断する。14層は旧炉<sup>3</sup>の堆積土であるが、14層上面に新炉の焼土面が位置することから、炉改築時の貼床の可能性も考えられる。

《出土遺物》覆土及び床面より縄文土器615点、石鏃2点、石錐3点、石匙2点、石箆4点、スクレイバー16点、二次加工のある剥片2点、剥片類138点、半円状扁平打製石器2点、礫器1点、凹石1点、磨石4点が出土し、土器30点、石鏃2点、石錐3点、石匙2点、石箆4点、スクレイバー9点、二次加工のある剥片2点、半円状扁平打製石器2点、礫器1点、凹石1点、磨石4点を図示した。

土器は、第Ⅰ群は床面及び覆土下位から、第Ⅱ群は覆土上位から、第Ⅲ群は確認面付近からの出土が顕著である。本遺構周辺には前期中葉の住居(S I 5003～S I 5005、S I 5012)、中期中葉の住居(平成9年度調査S I 107)、中期後葉の住居(S I 5013)が位置しており、それぞれの時期に竪穴の窪みに土器や石器などが廃棄されたと想定される。

《時期・所見》出土遺物から縄文時代前期中葉(円筒下層b式期)と判断する。旧炉より出土した燃料材と考えられる炭化材の放射性炭素年代測定の結果では、較正年代calBC3520～3350(2σ)の値が得られており、出土土器からの年代観との相違はない。

本遺構覆土から出土した土器(第52図2)は、S I 5003竪穴住居跡覆土から同一個体片が出土している。どちらの遺物も竪穴の窪みを利用し廃棄されたものと考えられる。このことから、当遺構とS I 5003が同時に廃棄場として利用されていた可能性が考えられる。

#### S I 5001B 竪穴住居跡(遺構第20～23図 遺物第52図1～第53図16、第63図1～第66図6)

《位置・確認状況》高位面M S～N A48～50区、漸移層(BⅢ層)上面で確認した。当初は1軒として調査を進めた。しかし、土層断面(G-Hライン)で2軒の切り合いであることを確認し、さらに壁溝と炉が重複していたことから、住居2軒の切り合いと判断した。

#### 《重複》S I 5001A竪穴住居跡より旧い。

《形状・規模》南西側がS I 5001Aと重複するため平面形は明確ではないが、残存部分より不整梢円形であったと推定する。壁はやや開いて直線的に立ち上がる。

床面は2面確認した(新期床面、古期床面)。古期床面は、確認面からの深さは約45cm、床面標高は約186.7mである。平坦で固く締まる。古期に伴う遺構として炉1基と柱穴5基を確認した。

新期床面は、古期床面上に暗褐色土で約13cmの貼床をし、形成される。確認面からの深さ約30cm、床面標高は約186.8mである。平坦で固く締まる。新期の付属施設として壁溝を確認した。

#### 《炉》古期床面で地床炉を確認した。S I 5001A床面に連続し、S I 5001A壁溝により部分的に削平

される。焼土面は平面梢円形で、長軸約70cm、短軸約60cm、厚さ約5cmである。炭化物等は残存していないかった。新期床面に伴う炉は確認していない。S I 5001A 竪穴掘削時に削平された可能性が考えられる。

《柱穴・付属施設》古期床面で柱穴様ピット5基(P 9～P 13)を検出した。P 9～P 11・P 13は炉の脇に近接して位置し、重複する。P 10からは被熱した土器小片や小礫が出土した。このことから、これらは炉に伴う施設の可能性が考えられる。

新期床面では壁溝を確認した。幅は15cm前後である。住居床面からの深さは10cm前後、底面形状は丸みを帯びる。壁溝覆土は住居覆土(19層)と一連の堆積である。

《覆土》 竪穴覆土は2層に分層した(19層・20層)。20層は貼床であり、20層上面が新期床面である。19層は地山土由来の褐色土單一層である。人為的に埋め戻されたと判断する。

《出土遺物》 S I 5001A出土遺物と一括で取り上げたため、本遺構に伴う遺物は抽出しがたい。

《時期・所見》 本住居跡は、床面が2面確認されたことから、1度の改築が行われたと判断する。前述したように、古期に伴う施設としては炉と柱穴、新期に伴う施設としては壁溝を確認している。

時期は、S I 5001Aより旧いこと、覆土や周辺からは縄文時代前期中葉以前の遺物は出土していないことから、縄文時代前期中葉と考えられる。

#### S I 5003 竪穴住居跡(遺構第24～27図 遺物第54図1～10、第67図1～7)

《位置・確認状況》 高位面M T・N A 51・52区、地山漸移層(B III層)上面で確認した。規模・形状から検出時に竪穴住居跡と判断した。

《重複》 S I 5004竪穴住居跡と重複し、本遺構が旧い。

《形状・規模》 北西側がS I 5004に壊されているが、平面形は南東側が張り出す不整梢円形である。推定長軸4.7m、短軸約4.3mである。床平面形は径約3.5mの円形で、床面積は9.6m<sup>2</sup>である。壁は開いて立ち上がり、南東側は中位に段がある。床面は段丘礫が一部露出するが、平坦で固く締まる。確認面から床面までの深さ約0.3m、床面標高は約186.7mである。

《炉》 住居のほぼ中央に南北に並んで地床炉が2基存在する。北側の炉の上面に貼床を確認したことから、北側の炉が旧いと判断する。炉周囲には、約1.5mの範囲に炭化物の層が不整形に広がる。厚さは1～2mm程度で、固化する。

旧炉 挖込炉である。住居中央やや北寄りに位置する。円形の浅い掘り込みの内面東側に厚さ2cmの焼土面を確認した。掘り込みは径約50cmの円形で、住居床面からの深さは9cmである。掘り込みの西側には炭化物を多く含む層(17層)が堆積しており、西側から灰を掻き出したと想定する。炉上面には、粘土質の淡黄色土塊を含む層(16層)を確認した。炉を造り替えた際に、旧炉に貼床を施したと考えられる。

新炉 挖込炉である。住居中央やや南寄りに位置する。円形の浅い掘り込み内面に焼土面を確認した。掘り込みは、西側は明瞭に立ち上がるが、東側はなだらかである。住居床面からの深さは9cmである。焼土面は平面馬蹄形で、厚さは2cmである。

《柱穴・付属施設》 柱穴様ピットは4基(P 1～P 4)を検出した。炉を中心方に位置する。いずれも平面円形だが、最も小型のP 1は径15cm、最も大型のP 3は径約60cmと規模は大きく異なる。覆土はいずれにもぶい黄褐色土で、住居の埋土である12層と類似することから、住居廃絶時に柱を抜き取り、竪穴と一緒に埋め戻されたと推定する。

《覆土》 覆土は8層に分層した(10層～17層)。15層～17層は旧炉の埋土で、16層は貼床と想定する。15層

は貼床の沈下により生じた窪みに堆積した住居使用時の自然堆積層、14層は住居使用時の堆積と考える。12層・13層は地山土に由来する暗褐色～ぶい黄褐色土で、遺物の混入は少ない。周堤が伴っていたとすれば、周堤由来と想定することもできようか。11層は地山塊を多く含む。12層・13層に連続する人為堆積であろう。10層は遺物の混入が顕著で、接合できる個体も多い。住居廃絶後の窪みを利用して、遺物が廃棄された際の堆積と判断する。

《出土遺物》縄文土器167点、石鏃1点、石槍1点、スクレイバー4点、剥片類14点、半円状扁平打製石器1点、凹石1点が出土し、縄文土器10点、石鏃1点、石槍1点、スクレイバー4点、凹石1点を図示した。

新炉南西際床面直上では第Ⅰ群3類の土器(第54図1)が口縁を北に向け横倒しの状態で出土した。廃絶儀礼であろうか。覆土出土の縄文土器は第Ⅰ群が多くを占めるが、第Ⅱ群A類の小片も出土している。最上層の10層からの出土が多く、住居廃絶後の窪みに廃棄されたものと推定する。

《時期・所見》床面直上で出土した土器(第54図1)から、縄文時代前期中葉と判断する。旧炉より出土した燃料材と考えられる炭化材の放射性炭素年代測定の結果では、較正年代calBC3650～3500、3460～3380(2σ)の値が得られており、出土土器からの年代観との相違はない。また、S I 5004との新旧関係においても矛盾はない。

覆土からの遺物出土状況から、住居廃絶後はS I 5001と同様に、前期中葉及び中期中葉において竪穴の窪みを利用した廃棄場として使用されたものと想定される。本住居跡覆土からは、S I 5001竪穴住居跡覆土より出土した土器(第52図2)の同一個体が出土した。どちらの遺物も竪穴の窪みに廃棄されたものと考えられ、本遺構とS I 5001が同時に廃棄場として機能していた可能性が高い。

S I 5004竪穴住居跡(遺構第24～27図 遺物第54図9、第56図7、第67図8～12)

《位置・確認状況》高位面M T・N A 52・53区、地山漸移層(BⅢ層)上面で確認した。規模・形状から検出時に竪穴住居跡と判断した。

《重複》S I 5003竪穴住居跡より新しく、SK 5018土坑、SK 5040より古い。遺構内北西～南東方向に、分布調査時の試掘溝と思われる擾乱があり、床面近くまで掘削されている。

《形状・規模》南西側が攪乱及び削平されるが、残存部の形状から長軸約5.0m、短軸約4.5m前後の不整梢円形と推定する。壁は削平によりほとんど失われている。床面積は推定13.5m<sup>2</sup>である。床面は部分的に段丘礫が露出するが、平坦で固く締まる。確認面からの深さ約0.2m、床面標高は約186.8mである。

《炉》掘込炉である。住居北寄りに位置する。掘り込みは平面梢円形で、長軸約50cm、短軸約40cm、床面からの深さ約3cmである。焼土面は掘り込みの東肩部分に位置する。長軸5cmの範囲で確認した。厚さは約2cmである。なお、SK 5018西肩付近にも焼土塊を確認したことから、SK 5018に重複してさらに炉が1基存在していた可能性がある。

《柱穴・付属施設》柱穴様ピット4基(P 1～P 4)を検出した。P 1～P 3は炉を中心とし、三角形に位置することから、柱穴と判断する。いずれも平面不整円形で径25cm、床面からの深さは8cm～18cmである。覆土は暗褐色土の單一層で、住居の埋土である7層と類似することから、住居廃絶時に柱を抜き取り、住居と同時に埋め戻されたと推定する。P 4は住居内や北寄り、炉に重複する。炉に近接して位置することから住居の柱穴とは考えがたい。炉に伴う施設である可能性も考えられる。平面不整梢円形で長軸60cm、短軸35cm、床面からの深さ41cmである。覆土は地山土塊が混入する暗褐色土の單一層である。

《覆土》覆土は3層に分層した(7層～9層)。1層・2層は後世の擾乱である。9層は地山土由來の黄

褐色土で遺物の混入が少ない。壁崩落土と推定する。8層は地山土を多く含むことから、人為堆積と判断する。7層は土器片や礫の出土が一定量認められることから、遺物の廃棄場として機能しながら土が流れ込み、堆積したものと推定する。

《出土遺物》遺物は遺構覆土及び遺構上面の攪乱層からの出土である。攪乱を受けてはいるが遺構上面から出土した遺物は、当遺構に由来する可能性が高いと想定し、ここでは遺構内土器として扱った。縄文土器27点、石鏸1点、石匙1点、スクレイバー2点、剥片類3点、凹石1点が出土し、縄文土器2点、石鏸1点、石匙1点、スクレイバー2点、凹石1点を図示した。

縄文土器はいずれも第1群に比定される。S I 5003出土土器と接合した土器片(第56図9)があるが、本遺構とS I 5003は重複することから、遺物が混入したものと判断する。また、S I 5005出土土器と接合した土器片(第56図7)もあるが、本遺構とS I 5005とは近接することから、これも遺物が混入したことによるものと判断する。

《時期・所見》本住居は、近接するS I 5003及びS I 5005に形態が類似すること、出土遺物がS I 5003及びS I 5005出土遺物と同時期であることから、S I 5003やS I 5005と連続して営まれたものと推定される。このことから、縄文時代前期中葉(円筒下層b式期)と判断する。

新炉より出土した燃料材と考えられる炭化物の放射性炭素年代測定の結果では、較正年代calBC3620～3580、3530～3360(2 $\sigma$ )の値が得られており、住居形態や出土土器からの年代観との相違はない。またS I 5003との新旧関係においても矛盾はない。

S I 5005竪穴住居跡(遺構第24～27図 遺物第55図1～第56図7、第68図1～7)

《位置・確認状況》高位面M S・M T 52・53区、地山漸移層(B III層)上面で確認した。規模・形状から検出時に竪穴住居跡と判断した。

《重複》S Q5025配石遺構、S K 5067土坑、S K P 5048より旧い。

《形状・規模》平面不整楕円形である。長軸約5.1m、短軸約4.6m、床面積は15.2m<sup>2</sup>である。壁は開いて立ち上がる。南側の壁はなだらかで不明瞭であった。床面は段丘礫が一部露出するが、平坦で固く締まる。確認面から床面までの深さは約0.2m、床面標高は約186.9mである。

《炉》住居のほぼ中央に掘り込みを持つ地床炉が3基位置する(炉1～炉3)。炉1が最も新しく、炉3が最も旧い。炉の南東には重複するピットを3基確認した(P 5～P 7)。P 7が最も新しく、P 5が最も旧い。これらのピットは、炉と同数であり、重複状況が炉と類似すること、柱穴と思われるピット(P 1～P 4・P 8)とは位置、規模が異なることから、炉に伴う施設と推定する。ピットの新旧関係より炉1にP 7、炉2にP 6、炉3にP 5が伴うと判断した。炉周囲には、約1mの範囲で炭化物層が広がる。厚さは1～2mmで固化する。

炉1 掘込炉である。住居中央に位置する。掘り込み内面、掘り込み北東肩部、P 6上面に位置する焼土面が当炉に伴うと推定する。掘り込みは、炉2・炉3と重複する南西側で壁が不明瞭であった。北東側はなだらかに開いて立ち上がる。住居床面からの深さは5cmである。本炉に伴うP 7はP 5・P 6と重複するため住居床面では確認できなかったが、底面形状及び土層断面よりピットの存在を認めた。平面形は径約30cmの円形と推定する。床面からの深さは約30cmである。覆土は黒色土の單一層である。

炉2 掘込炉である。住居中央に位置する。掘り込みが炉1・炉3と重複するため平面では確認できなかったが、底面形状及び土層断面から、炉の存在を認定した。掘り込み内面で検出した焼土面が当炉に

伴う焼土面である。壁は炉1・炉3と重複するためほとんど検出できなかったが、残存部分は開いて立ち上がる。住居床面からの深さは9cmである。本炉に伴うP6は、平面形は長軸約50cm、短軸約40cmの楕円形で、住居床面からの深さは約30cmである。覆土は上下2層からなり、上位層は貼床の可能性が考えられる。

**炉3 挖込炉**である。住居中央に位置する。掘り込み北西肩部、P6北西肩部に位置する焼土面が当炉に伴う焼土面と推定する。P6北西肩部の焼土面は、本来さらに南西側に広がっていたものが、P6構築の際に削平されたと考えられる。掘り込みは北東側が炉1・炉2と重複するため、壁は不明瞭であった。北西側はなだらかに立ち上がる。住居床面からの深さは8cmである。本炉に伴うP5は、平面形は長軸約60cm、短軸約45cmの平面不整楕円形で、住居床面からの深さは30cmである。覆土は上下2層からなり、上位層は貼床と判断する。

**《柱穴・付属施設》**柱穴様ピット8基(P1～P8)、土坑1基(SK9)を検出した。前述の通り、P5～P7は炉に伴う施設と推定する。P1～P4は炉を中心に台形に位置することから、柱穴と考える。いずれも平面不整円形で、長軸22cm～36cm、床面からの深さ28cm～48cmである。覆土はいずれも竪穴の埋土である5層と類似することから、住居廃絶時に柱を抜き取り、竪穴と同時に埋め戻されたと推定する。P8はP4に接することから、柱の建て替えの可能性もある。

**SK9**は住居床面北西壁際で検出した。平面不整楕円形で長軸約75cm、短軸約40cmである。壁はやや垂直に立ち上がり、底面は平坦である。床面からの深さは約25cmである。覆土は暗褐色土の單一層であり、住居覆土とは異なるため、住居埋め戻し時には既に埋められていたと考えられる。このことから、SK9は本住居に重複する別の遺構の可能性も考えられる。

**《覆土》**覆土は4層に分層した(3層～6層)。5層は地山土由来で遺物の混入が少ないとから壁崩落土と推定する。3層・4層は遺物が多く混入し、接合できる土器も多い。ただし4層は地山土由来であることから人為による竪穴埋め戻し土、3層は地山土が混入しないことから廃棄場として利用されつつ、周囲の土が流れこんだ自然堆積と判断する。6層は掘削痕上の貼床と推測する。

**《出土遺物》**覆土から縄文土器128点、石匙1点、スクレイバー5点、剥片類6点、石皿2点、礫器1点が出土し、縄文土器12点、石匙1点、スクレイバー5点、礫器1点を図示した。

縄文土器はいずれも第1群に属する。遺物の多くが竪穴中央部覆土(3層～4層)から出土した。接合する個体が多いことから、竪穴の窓を利用した廃棄行為が行われた可能性が考えられる。また、S15004出土土器と接合したもの(第56図7)もあるが、本遺構とS15004とは接することから、遺物が混入したものと判断する。

**《時期・所見》**出土遺物から本住居跡の時期は縄文時代前期中葉(円筒下層b式期)と判断する。住居の形態が類似することや、出土した遺物が同時期のものであることから、接するS15003・S15004竪穴住居跡と連続して營まれたものと推定される。炉周囲より出土した燃料材と考えられる炭化材の放射性炭素年代測定の結果では較正年代calBC3510～3430, 3390～3340(2σ)の値が得られており、年代観との相違はない。

S15012竪穴住居跡(遺構第28～29図 遺物第56図8、第69図1～第70図5)

**《位置・確認状況》**高位面NA・NB49・50Ⅱ区、漸移層(BⅢ層)上面、小規模な段丘崖の肩部で確認した。

**《重複》**SK5017土坑より旧い。SK5024土坑とも重複するが、SK5024は本住居跡の床面で確認した

ため、新旧関係は不明である。

《形状・規模》段丘崖の肩部崩落により南西側が失われているが、壁溝の形状より平面不整梢円形と推定する。長軸は約4.9m、短軸は推定約4.4m、床面積は推定で11.0m<sup>2</sup>である。壁は開いて立ち上がり、床面は平坦で固く締まる。確認面からの深さは約0.2m、床面標高は約186.65mである。北側及び南東側の壁は上位で大きく開く。

《炉》掘込炉である。住居のはば中央に位置する。掘り込みは平面梢円形で、長軸約1.3m、短軸約1.0m、床面からの深さ約5cmである。北西側がより深い。焼土面は掘り込みの底面に形成される。長軸約90cmの梢円形平面で、厚さは約5cmである。周囲には炭化物が薄く堆積する。

《柱穴・付属施設》柱穴様ピットは4基検出した(P1～P4)。P1～P3は住居床面で、P4は壁溝内底面で確認した。P1・P2は炉を挟んで対向して位置することから、本住居の主柱穴である可能性が考えられる。P3は炉の北東に位置し、平面形は長軸約50cmの不整形である。底面に黒色土が堆積し、住居と合わせて埋め戻されていることから、開口状態で使用されていたと想定する。炉に伴う施設と判断できよう。

壁溝を住居床面で確認した。長軸約3.5m、短軸約3.0mの梢円形に巡るが、3か所で途切れる。壁溝の幅は7cm～50cm、床面からの深さは最も深い北側、西側で17cmである。壁溝内にはピットが1基(P4)存在する。性格は不明である。

《覆土》住居覆土は4層に分層した。3層・4層は地山由来土であることから人為堆積と判断する。3層は4層の腐植層である。3層が腐植することから、2層と3層・4層には時期差があると考えられる。2層は暗褐色土が斑状に混入し、遺物も多く含むことから人為堆積と判断する。1層は堆積土の沈下による窪みに堆積した自然堆積層である。5層は暗褐色土でしまりが強い。住居使用時に床面に堆積した土と判断する。6層は炉の上位に堆積した黒色土で、炉の使用に伴う堆積物と想定する。

《出土遺物》床面直上から縄文土器1点、剥片類4点、覆土からは縄文土器5点、スクレイバー6点、凹石1点、礫器1点、磨石1点、剥片類11点が出土した。また半円状扁平打製石器5点が出土している。覆土に含まれる遺物は流れ込みと判断する。床面直上から出土した遺物も小片であることから、流れ込みの可能性が高い。土器はいずれも第I群である。土器1点、スクレイバー4点、半円状扁平打製石器5点、礫器1点、凹石1点、磨石1点を図示した。

《時期・所見》出土した土器から、縄文時代前期中葉と推測する。炉より出土した燃料材と考えられる炭化物の放射性炭素年代測定の結果では較正年代calBC3650～3510, 3420～3390(2σ)の値が得られており、形態や出土土器からの年代観との相違はない。

#### b 中期の竪穴住居跡

##### S I 1015竪穴住居跡(遺構第29図 遺物第66図7)

《位置・確認状況》低位面L K・L L 71・72区に位置する。範囲確認調査時の試掘溝断面で、F V層上面に焼土面を確認した。これを竪穴住居跡の地床炉と想定し、F IV層を掘り込む竪穴住居跡の存在を予想した。しかし、F IV層中では、竪穴平面を明瞭に認定することができず、最終的にF V層上面で竪穴掘り込み平面を確認した。その時点で、竪穴壁はほとんど掘り下げており、南北に設定していた畦の断面土層で壁の立ち上がりを確認した。

《重複》重複する遺構はない。

《形状・規模》調査時の削平により竪穴平面形は不明である。残存長は約2.6mだが、残存部分の形状から、長軸約3.3mの平面楕円形と推測する。床面積は推定で5.1m<sup>2</sup>である。確認面から床面までの深さは約0.2mである。壁は残存部では比較的緩やかに立ち上がる。床面は中央がやや窪み、しまりがない。

《炉》竪穴中央付近に地床炉が存在する。焼上面はわずかに窪むが、明瞭な掘り込みは伴わない。東部が調査時の試掘溝により削平されているため、平面形は不明である。炉の南側には立石を検出した。しかし礎に被熱痕はなく、床面から僅かに表出するのみであることから、住居に伴うものではなく、自然礎の可能性も考えられる。

《柱穴・付属施設》なし。

《覆土》周囲の層(F IV層)と類似するため、覆土を分層することは不可能であった。

《出土遺物》覆土から縄文土器87点、凹石1点、剥片類2点が出土し、凹石1点を図示した。縄文土器はいずれも第I群に属する。遺構平面形を正確に捉えることができなかつたため、本遺構の遺物として取り上げたものの中には周囲の遺物包含層に含まれていた遺物が混入している可能性もある。

《時期・所見》遺構構築面(F IV層)が縄文時代中期後葉以降の堆積と推定されることから、本遺構も縄文時代中期後葉以降に構築されたものと推定する。出土した遺物はすべて縄文時代前期中葉に属するが、遺構覆土であるF IV層由来土に混入していたものと判断する。

S I 2001竪穴住居跡(遺構第30～35図 遺物第56図9～15、第70図6)

《位置・確認状況》氾濫原中位面M K・M L 70・71区に位置する。G IV①層上面で長軸約3.9m、短軸約3.3mの楕円形に巡る円礎を確認した。礎の内側を掘り下げたところ複式炉を検出したため、竪穴住居跡の壁に礎が巡らされたものと判断した。

《重複》S K 2013土坑、S K 2014土坑、S K P 2016より旧い。

《形状・規模》竪穴の形状は長軸約3.9m、短軸約3.3mの平面楕円形で、確認面からの深さは約0.45mである。床面積は約6.6m<sup>2</sup>である。壁は開き気味に立ち上がる。床は平坦で、南側は5cmほどの厚さで部分的に貼床を施す(30層)。床面の標高は約181.0mである。東壁に接して幅約0.6mのスロープ状の施設を検出した。地山土を固く締めて構築している。出入口の可能性が考えられる。

壁に巡る礎は検出段階では南東部分に礎が確認できなかつたが、精査の結果、本遺構埋没後に土坑(S K 2013)が掘り込まれたためであることが判明した。また検出段階には、東西方向に括れる8の字形にも見えたが、これは礎が内側に倒れ込んだためである。よって、本来は住居壁面全体に環状に礎が巡らされていたと復元できる。

壁に巡る礎は総数117個で、炉が接する部分、スロープ付近、それ以外の部分の3か所で組み方が異なる。炉と接する北側部分には、31個の円礎が使用される(S 106～S 112ほか)。長軸約30cmの礎が多い。炉前底部底面より壁に立て掛けるように立位で礎を1段据え(S 192～S 194)、その上に扁平な円礎を横に5段積み重ねる。上段はやや外側に広がる。炉を構築する礎と接することから、炉の最終構築段階に連続して構築されたと判断する。

出入口状のスロープが検出された東側では、礎が横位に階段状に検出された(S 14～S 20ほか)。この部分の裏込土は、ほかの部分と同じ地山由来土で構成されており、壁に貼り付けられた礎が崩れた結果ではなく、意識して配置したものと想定する。ただしスロープ状の施設と、階段状に礎が検出された部

分は若干位置が異なること、階段としては安定性に欠けることから、階段状に検出された礫が出口を意識したものか否かは定かではない。

それ以外の部分は長軸約40cm～60cmの扁平な円礫を壁に貼り付けるように、基本的に2重に巡らす。礫はやや傾いてはいるが、多くが立位状態で検出されており、それらはほぼ当時の位置を留めていると判断する。基本的に壁に直接立て掛けられており、礫の下位と背面には裏込として地山土が充填されるため(17層～18層)、礫は自立が可能である。立位の礫は上端が水平になるように据えられており、床面に直接礫を置くもの(S 2・S 6ほか)と、下端に小礫や地山土を噛ませるもの(S 103～S 104ほか)がある。上端の高さがほぼ揃うことから、礫の大きさに応じて、下部で調整を行ったと推定される。また、特に南壁部分では、50cm前後の大型の礫と礫の間に20cm前後的小形の礫を挟んでいる。裏込めであった可能性が考えられる。

なお、南側では立位の礫の上に横位の礫が置かれているが、横位の礫と立位の礫は直接接しない。横位の礫の下に堆積する土(9層)は、黒褐色砂質土であり、豊穴覆土とは異なる。このことから、9層は豊穴が埋め戻された後に堆積した土と考えられ、立位の礫と横位の礫には時間差があると推定する。本来南東側に据えられていた礫が、SK 2013を掘削する際に抜き取られ、その一部が立石上に置かれた可能性も考えられよう。

また、北東側に据えられたS 4～S 5・S 7～S 9は、本来垂直に立っていたであろうS 6が内側に倒れた隙間に据えられている。これらの礫は径10cm前後と小形であり、裏込土は他の箇所が地山由来土であるのに対し、黒褐色土である。これらのことから、豊穴が埋め戻されて一定期間経った後に、空いた隙間を修復した痕跡と推測される。

南西部の礫の下には柱穴様ピット(P 4)を検出した。P 4は規模・位置より豊穴住居の主柱穴と考えられることから、壁際に巡る石は住居機能時には構築されていなかったと判断できる。礫は住居廃絶後、上屋構造を解体した後に構築されたと推定する。

《炉》炉は前庭部、石組部、土器埋設部からなる複式炉で、住居北壁に接する。

前庭部と石組部は住居床面を約20cm掘り込み、「コ」の字状に礫を配する。礫は30cm～40cmの扁平な円礫が用いられ、東側と南側は1列であるが、西側は2列である。石組部には3cm以下の小礫が敷かれる。南東部分は全面に敷き詰めるが、ほかの部分はまばらである。石組部底面には弱い焼土面が認められる。前庭部には60cm×33cm×14cmの石皿が設置される。石皿の上面に接して壁際の石組が構築されることから、石皿設置後、壁際の石組が構築されたと判断できる。

土器埋設部には胴部下半を欠損した深鉢形土器(第56図9)が逆位に埋設され、土器を囲むように4個の縁石が半円状に据えられる。縁石は20cm前後の円礫で、炉に使用されるほかの礫よりも小形である。掘り込みではなく床面に直接置かれる。炉体土器は縦半分のみが埋設され、残りの半分は、縁石の上部に伏せられた状態で出土した。また上端の一部片は壁際に据えられた礫(S 191)の下から出土している。この土器片には、炉体土器としての被熱痕が認められ、炉体土器本体の被熱状況と差異がないことから、炉廃絶後に住居内壁際に捨てられたもしくは置かれたものと推測する。

炉内部には炭化物、焼土塊など炉使用に伴う堆積物が検出されなかったことから、廃絶時に清掃が行われたと判断する。また、炉を構成する礫には被熱痕が認められるが被熱痕の範囲と焼土の位置に整合性が認められないこと、埋設土器の縦半分が縁石の上に置かれていたこと、土器の抜き取り痕(24層

～25層)が確認できること、土器には炉使用時の被熱痕が確認できるが使用時の堆積物が一切ないこと、以上の4点から炉は廃絶時に解体され、清掃後再構築されたと判断する。機能時の炉の形態は不明であるが、焼土や埋設土器の抜き取り痕の位置より、検出時の状況とほぼ同形態であったと推定する。炉壁際の石積みが、炉機能時に存在していたか否かを知る手がかりは認められない。

『柱穴・付属施設』柱穴様ピットは4基(P 1～P 4)を検出した。P 1・P 2は炉の両脇に位置する。P 1とP 4は壁に巡らせた礎の下より検出された。平面円～楕円形で、長軸は25cm～35cm、床面からの深さは20cm前後である。柱痕は確認できない。東側のスロープ状の施設の両側には径9cm～13cmの平面円形の小規模なピット(P 5～P 8)が位置する。柱穴様ピットの覆土はいずれも地山由来土である。

遺構確認面では土器埋設遺構を確認した。埋設土器は鉢形土器(第56図10)で、ほぼ完形である。掘り込みはなく、竪穴埋め戻しの際に同時に埋設されたと推定する。複式炉の土器埋設部の直上付近に対応することから、炉体土器を意識して設置された可能性が考えられる。

遺構確認面ではほかに北壁際に柱穴様ピット(S K P 2016)を検出した。複式炉に設置された石皿の直上に位置するが、ピット底面は石皿には接しない。両者の関係は不明である。

『覆土』覆土は30層に分層した。1層は旧水田耕作土、2層～3層はS K 2013覆土、4層～6層はS K P 2016覆土である。7層～16層は竪穴覆土である。そのうち7層～9層は最上位に堆積する黒褐色～暗褐色土で、竪穴埋没後の窪みに自然に堆積した土と推定する。10層～11層・13層～16層は地山由来土で、12層は旧表土由来の可能性が高い。堆積状況より、北西から南東方向へ埋め戻された一連の人為堆積と推定される。17層～18層は地山土由来の礎裏込土で、壁際に巡らされる礎の背面と下位部分に充填される。19層～20層は炉体土器裏込土である。上位の19層は地山由来土であるが、下位の20層は黒色土であることから、炉内堆積物由来土の可能性を想定する。21層～23層は北壁礎裏込土である。上位の21層は地山由来土、下位の22層～23層は旧表土由来と推定する。24層～26層は炉体土器裏込土であり、地山土(24層・26層)と旧表土(25層)に由来する。27層は土器埋設部と石組部を仕切る立石の裏込土である。28層は石組部に敷かれた小礎層である。29層は地山土由来の炉縁石裏込土である。30層は地山土由来の貼床で、住居南側にのみ認められる。本住居の覆土には遺物や礎の混入が少ないとから、短期間の一括埋め戻しと判断する。

『出土遺物』遺物は覆土及び床面直上より縄文土器38点、土製品1点、スクレイバー1点、剥片類5点が出土し、縄文土器6点、土製品1点、スクレイバー1点を図示した。土器はいずれも第Ⅲ群2類である。覆土より出土した縄文土器はいずれも小片であり、ほかの住居と比較して遺物の混入率は低い。形状が復元できたのは炉体土器(第56図9)、覆土上位に埋設されていた埋設土器(第56図10)、北東壁際より出土した深鉢形土器(第56図14)のみである。第56図14は胴部1/3のみが遺存するように打ち欠かれ、内面を上に向け、床面直上に置かれた状態で出土した。本遺物はS K 2015土坑、S K 2019土坑より出土した縄文土器と接合した。また、北西壁際床面直上からは三角状土製品(第56図15)が出土した。第56図14と第56図15は炉を挟み対象に位置する。共に廃絶行為に伴う遺物であろうか。

『時期・所見』当遺構はその性格を変容しながら機能していたと推定する。当初は竪穴住居として構築され使用される。炉の被熱状況より、一定期間居住していたと推定する。住居廃絶後、上屋構造を解体し、壁際に礎が設置される。礎は短期間の自立ができるよう裏込めされることから、礎を据えた後、連続して埋め戻すのではなく、開口した状態で機能した期間があったと推測する。ただし、長期間礎は自立

できる状況ではないことから、開口期間は短期間であろう。住居の廃絶儀礼と考えられるが、廃屋墓的な性格も否定はできない。礎は上端が水平となるよう、下部で調節をして据えられることから、礎構築時すでに、竪穴を埋め戻して円形の配石造構にすることを前提としていたと推測する。竪穴埋め戻しの際は、地山土を用い、炉直上に土器埋設構、柱穴を構築するなど、計画性が認められる。埋め戻しに使用した地山土の土取り穴として、出土遺物が本住居の遺物と接合したSK2015土坑やSK2019土坑が想定される。竪穴が埋め戻された後は配石造構として、祭祀的性格を帯びていたと推定する。

当遺構が住居として機能した時期は、複式炉に設置された土器より縄文時代中期後葉(大木10式期)と判断する。ただし、当遺構は竪穴埋め戻し後も、配石造構として機能していたと考えられ、配石造構としては縄文時代後期まで下る可能性もあるが、遺構確認面での遺物の出土がないため下限は不明である。

なお、本遺構に用いられた礎は、安山岩、輝石安山岩が主体を占めるところから、外から持ち込まれたものではなく、遺跡内の段丘礎層起源の可能性が高い。

#### S 15013竪穴住居跡(遺構第36~37図 遺物第57図1~4、第70図7~8)

《位置・確認状況》高位面MN・MO51・52区、地山漸移層(BⅢ層)上面で確認した。規模・形状より検出時に竪穴住居跡と判断した。

《重複》SKP5026、SKP5027より旧い。

《形状・規模》径約3.3mの平面円形で、床面積は6.8m<sup>2</sup>である。壁は開いて立ち上がる。床面はやや段丘礎が露出するが平坦で固く締まる。確認面から床面までの深さ約0.3m、床面標高約187.3mである。

《炉》複式炉である。住居南壁に接する。床面を約10cm掘り下げて炉床とし、礎を配する部分は礎の大きさに応じてさらに掘り下げ、礎が設置される。南向きにやや口の開いた「コ」字状に、扁平な礎が9個配され、内側を3個の礎で「T」字状に仕切る。検出した礎の大きさは15cm~28cm、両端の礎は約40cmである。礎の内面には被熱痕が認められた。礎の裏込土は褐色土の單一層(6層)である。「T」字状に仕切られた炉内北側にはピット状の窪みと焼土を確認した。ピット状の窪みは約22cmの平面円形で、炉底面からの深さは8cmである。埋設土器の抜き取り痕の可能性も考えられる。焼土面は炉の中央東寄りに位置し、長軸15cmの楕円形で厚さは2cmである。焼土面西側に接して焼土塊が広がる。炉内には、竪穴覆土とは異なる土(3層・4層)が堆積していることから、竪穴埋め戻しに先行して、炉部分のみ埋め戻された可能性が考えられる。

《柱穴・付属施設》柱穴様ピットは2基(P1・P2)検出した。長軸30cm~50cm、床面からの深さは20cm前後である。いずれも柱穴となりうる。

《覆土》覆土は2層に分層した。2層は地山土や礎の混入が顕著であることから、人為堆積と判断する。周堤が存在したとすれば、周堤由来土の可能性も考えられる。本層より出土する遺物は同一個体とみられるものが多い。1層はしまりが弱く、混入物がほとんど認められないことから自然堆積と判断する。

《出土遺物》縄文土器50点、スクレイバー2点、剥片類4点が出土し、そのうち縄文土器4点、スクレイバー2点を示した。第57図2は深鉢形土器の口縁から胴部上半である。欠損部が水平に破損しており、炉体土器の可能性も考えられるが、現状では炉体土器としての使用痕は確認できない。

《時期・所見》炉が複式炉であることから縄文時代中期後葉と判断する。

## c 後期の竪穴住居跡

## S I 2004竪穴住居跡(遺構第38図 遺物第56図16~18、第71図1~2)

《位置・確認状況》氾濫原中位面M N 69・70、M O 69区に位置する。当初、調査区南壁際のG IV①層上位で焼土を確認した。調査区南壁土層断面を観察した結果、床面は必ずしも明瞭ではなかったものの、東西両側で壁の立ち上りを認定した。さらに、焼土の北側周辺では、壁の立ち上りは確認できなかつたが、褐色砂質土が斑状に混入する範囲を認めた。これを竪穴掘削痕と推定し、当該地点周辺に竪穴住居跡が存在したものと判断した。その後、調査区を南に拡張した結果、竪穴南半部については、掘り込みを確認した。

《重複》竪穴南西側が倒木痕によって一部破壊されている。

《形状・規模》前述したように、竪穴住居跡認定時には、竪穴北半は既に床面まで掘り下げており、壁は削平していた。北半部の竪穴掘削痕と遺存していた竪穴南半部とから、竪穴は長軸4.7m、短軸4.0m前後の楕円形平面と推定する。床面積は推定で12.6m<sup>2</sup>である。南半側の壁は緩やかに開きながら立ち上がる。確認面からの深さは0.2m前後、床面標高は約181.1mである。床面は明瞭な硬化面を形成しない。東西土層断面では竪穴底面と基盤層(G IV①層)との境界には若干の凹凸がある。貼床は認めることができない。

《炉》竪穴のほぼ中央付近に掘込炉が1基存在する。掘り込みは長軸62cm、短軸50cmの楕円形平面で、浅い椀形をなす。竪穴床面から掘り込み底面までの深さは6cmである。掘り込み底面北側は最大で厚さ4cm前後焼土化している。掘り込み覆土には焼土粒及び炭化物粒が含まれる。

《柱穴》竪穴南西側と南端側とに柱穴各1基が存在する。長軸25cm~30cm前後の楕円形平面で、深さは19cm~24cmである。共に覆土は暗褐色砂質土からなる單一層で、明瞭な柱痕跡は認定できない。

《覆土》竪穴覆土はG IV①層起源の砂質土塊を含む暗褐色砂質土である。G IV①層の基質が粗砂を主体とするのに対し、竪穴覆土基質は細砂で、その層相はG IV⑥層と類似する。G IV①層起源の砂質土塊を多量に含むことから、その直接の由来は判然としないが、竪穴覆土は当該砂質土塊と当時の表土とを埋め立てたものと推定する。

《出土遺物》竪穴西壁際覆土中から縄文土器片が若干まとめて出土している。これらは2個体の深鉢形土器の口縁部～胴部もしくは胴部～底部の小破片である(第56図16・18)。縄文時代後期前葉に属する。竪穴中央付近及び北端側では縄文土器破片各1点が出土した。これらも縄文時代後期前葉に属する深鉢形土器の小破片である。P 1 覆土中からも縄文土器破片1点が出土している(第56図17)。縄文時代中期～後期に属する深鉢形土器胴部破片であるが、より詳細な時期は不明である。このほか、北端床面直上からは磨石1点(第71図2)が出土している。なお、竪穴床面上で長径15cm~30cm前後の円礫4点も出土している。1点は掘込炉に隣接するものの、いずれの円礫にも意図的な配置は認めることはできない。また、明瞭な使用痕・被熱痕等も確認できない。縄文土器3点、スクレイバー1点、磨石1点を図示した。

《時期・所見》竪穴覆土出土土器から、縄文時代後期前葉に属する可能性が強いと判断する。

## S I 5010竪穴住居跡(遺構第39図 遺物第57図5~6、第71図3)

《位置・確認状況》高位面M R 50・51区、地山漸移層(B III層)上面で確認した。

《重複》S K I 5064竪穴状遺構、S K P 5019、S K P 5065より旧い。

《形状・規模》平面楕円形を呈し、長軸約3.2m、短軸約2.6mである。壁はやや開き気味に立ち上がる。床面は平坦で固く締まる。床面積は5.5m<sup>2</sup>である。40cm～100cmの段丘礫が8個露出しており、実質の床面積は狭い。確認面から床面までの深さは0.2m、床面標高は約187.2mである。

《炉》掘込炉である。住居のはば中央に位置する。掘り込みは長軸約60cmの平面不整円形で、床面からの深さ約10cmである。中に焼土塊が混入した黒褐色土が堆積する(6層)。底面には段丘礫が露出する。段丘礫に被熱痕は認められない。焼土面は確認できず、焼土塊が堆積することから、灰・焼土を搔き出したものと考えられる。

《柱穴・付属施設》遺構内、遺構周辺には当遺構に伴う柱穴様ピットは確認できなかった。

《覆土》覆土は4層に分層した。4層は地山由来土で、壁崩落土と推定する。3層は地山塊が混入することから人為的に埋め戻されたものと考えられる。1層～2層は遺物がまばらに混入し、摩滅していることから、自然堆積と判断する。1層と2層は基質が同じであり、境界が漸移的であることから、1層は2層の腐植層と考える。

《出土遺物》覆土から縄文土器13点、剥片類3点、凹石1点が出土し、縄文土器2点、凹石1点を図示した。縄文土器は小片・摩滅しているものが多く、流れ込みと判断する。全て粗製土器片で詳細な時期は不明であるが、縄文時代後期と推定する。

《時期・所見》出土遺物から縄文時代後期と推測する。

#### d 晩期の竪穴住居跡

##### S I 3266竪穴住居跡(遺構第39図 遺物第57図7～12、第71図4～7)

《位置・確認状況》高位面L B54区、地山層(C VII層)上面で確認した。緩斜面に位置する。

《重複》S K3265土坑、S K3288土坑より新しい。

《形状・規模》北側が削平されている。現存部分及び炉の位置より直径約3.5mの円形と推定できる。壁はやや開き気味に立ち上がる。床面は平坦で固く締まる。床面積は推定で9.0m<sup>2</sup>である。確認面から床面までの深さは、遺存状態の良好な南側で約0.2m、床面標高は約188.3mである。

《炉》地床炉である。住居のはば中央に位置する。長軸約40cmの平面不整円形に焼土塊が広がる。焼土面は認められることから、焼土、灰等の搔き出しが行われたと推定する。

《柱穴・付属施設》住居壁際に沿って13基の柱穴を確認した(P 3～P 4・P 6～P 7・P 9～P 17)。平面形は20cm以下の不整円形である。深さは、調査段階で基盤層まで掘り込んでしまったため不明であるが、削平されている北側で柱穴が確認されなかったことから、床面と削平面の高低差である20cm以下と推定できる。覆土はいずれも黒褐色土(10YR3/2)の單一層である。また、炉の60cm南東には径35cmの平面円形のピットが位置する(P 2)。底面中央に高低差4cmほどの凸部をもつ。性格は判然としない。

《土器埋設遺構》住居南東壁際に土器埋設遺構を1基確認した(S R 01)。口縁が下を向く逆位埋設で、胸部から底部は破損している。土器内覆土はしまりが強く、覆土内から縄文土器が出土していないことから、設置時すでに胸部から底部は破損していたと判断する。掘り方は住居覆土を掘り込み、住居床面を底面とする。住居廃絶に伴う儀礼的な行為と想定する。

《覆土》1層はS R 01内の覆土、2層はS R 01の埋設土器の裏込土である。3層～5層は竪穴覆土であり、遺物が多く含まれることから一括の人為堆積と判断する。特に住居南西部3層は土器片が集中して

出土することから、意図的に廃棄されたものと推測する。6層はしまりが強く、水平に堆積しており、上面で焼土塊の広がりを確認したことから、貼床と判断する。

《出土遺物》縄文土器38点、凹石(磨石)3点、敲石2点、磨石1点が出土した。土器6点、凹石3点、磨石1点を図示した。遺構南西部3層から土器片、石器がまとまって出土したが、いずれも小片で接合はない。土器片はすべて第V群(大洞B式)に属する。埋設土器(第57図7)はB～BC式と推定する。

《時期・所見》出土遺物から縄文時代晚期後葉(大洞B～BC式期)と判断する。

本住居跡の南西には、SK3267土坑が位置する。近接することから、本住居跡に伴う可能性もあるが、出土土器は本住居のほうが若干旧いことから、両者の関係は特定しがたい。

## ②土坑

### SK2010土坑(遺構第40図)

《位置・確認状況》氾濫原中位面MO69区に位置する。GIV①層上面で確認した。

《重複》重複する遺構はない。

《形状・規模》平面形は長軸約1.1m、短軸約0.8mの不整楕円形で、確認面からの深さは最大で約0.3mである。壁は開いて立ち上がり、底面は平坦である。

《覆土》3層に分層した。GIV①層起源の自然流入土と判断する。

《出土遺物》遺物は出土していない。

《時期・性格》時期、性格ともに不明である。

### SK2012土坑(遺構第40図 遺物第58図1)

《位置・確認状況》氾濫原中位面ML・MM70・71区に位置する。GIV①層上面で確認した。

《重複》重複する遺構はない。

《形状・規模》平面形は長軸約2.1m、短軸約1.5mの不整楕円形で、確認面からの深さは最大で約0.8mである。壁は開いて立ち上がり、底面は擂鉢状である。

《覆土》3層に分層した。堆積状況よりGIV①層由来の連続した流入土と推定する。

《出土遺物》縄文土器4点と石匙未製品1点が出土し、縄文土器を1点図示した。縄文土器は小片であり詳細な時期の比定は困難だが、第III群～第IV群に比定できようか。

《時期・性格》出土土器より縄文時代中期後葉～後期と推定する。性格は不明である。基盤が均質な砂層であることと、不整楕円形で擂鉢状をなす形態とから、倒木痕の可能性もある。

### SK2013土坑(遺構第30・32・35図)

《位置・確認状況》氾濫原中位面MK・ML70区に位置する。S I 2001堅穴住居跡上面を精査中、環状に巡る礫が途切れる南東部に黒褐色土の広がりを確認した。

《重複》S I 2001より新しい。

《形状・規模》平面形は長軸約1.8m、短軸1.2mの不整楕円形である。確認面からの深さは最大で約0.8mで、S I 2001の床面を若干掘り込む。壁は開いて立ち上がり、底面は擂鉢状である。

《覆土》4層に分層した。いずれも基盤層と基質を同じくすること、掘削の際に抜かれたと想定する礫が底面より出土したことから、掘削後まもなく、掘り込み掘削土で埋め戻されたものと推定する。

《出土遺物》縄文土器1点が出土した。また、底面には約15個の礫が、横位に積み重ねられた状態で出

土した。礫は10cm～50cm程度の扁平な円礫で、S I 2001の立石と大きさや形状が類似する。このことから、本遺構を掘削する際に、S I 2001の立石を抜き取り、埋め戻す際に入れたものと想定する。

《時期・性格》 S I 2001に重複して位置することから、S I 2001を意識して構築したものと想定される。このことから土坑墓の可能性が考えられようか。構築時期はS I 2001とほぼ同時期と推測し、縄文時代中期後葉～後期と判断する。

#### S K 2014土坑(遺構第30・32・35図)

《位置・確認状況》 沼澤原中位面ML 70区に位置する。S I 2001堅穴住居跡上面を精査中、環状に巡る礫に接して黒褐色土の広がりを確認した。

《重複》 S I 2001より新しい。

《形状・規模》 本遺構は平面形は長軸約0.9m、短軸約0.4mの不整形円形で、確認面からの深さは最大で約0.4mである。壁は開いて立ち上がるが、東側はS I 2001の立石が露出し、ほぼ垂直に立ちあがる。底面は東側に低く傾斜する。

《覆土》 黒褐色土の單一層である。東壁に露出する立石が現位置を保っていることから、掘削後まもなく埋め戻されたと推定される。

《出土遺物》 遺物は出土していない。

《時期・性格》 本遺構は、位置関係からS I 2001を意識して構築したものと想定される。このことから土坑墓の可能性が考えられようか。構築時期は中期後葉～後期と推定される。

#### S K 2015土坑(遺構第40図 遺物第56図14、第58図2～7)

《位置・確認状況》 沼澤原中位面MK・ML 72区に位置する。G IV①層上面で確認した。

《重複》 重複する遺構はない。

《形状・規模》 遺構北側は地形が落ち込み、遺構は不整帯状に落ち込みへ続く。長軸は現存で約3.7m、短軸約1.9m、確認面からの深さは最大で約0.2mである。壁は開き、底面は凹凸が顕著である。

《覆土》 G IV①層由来の暗褐色砂質土が堆積する。

《出土遺物》 覆土より縄文土器42点と剥片類6点が出土し、縄文土器7点を図示した。縄文土器はいずれも第Ⅲ群2類に比定される。本遺構出土土器は遺構間で接合する個体が一定量存在し、第56図14はS I 2001堅穴住居跡出土土器及びS K 2019土坑出土土器と、第58図4～6はS K 2019出土土器と、第58図7はSD 2007溝跡出土土器とそれぞれ接合した。

《時期・性格》 出土土器より縄文時代中期後葉と推定する。遺構の形状は不整形で、出土遺物がS I 2001出土の土器と接合したことから、S I 2001埋め戻し土の土取り穴であった可能性を想定する。

#### S K 2019土坑(遺構第41図 遺物第56図14、第58図4～6・8～59図2、第72図1～2)

《位置・確認状況》 沼澤原中位面ML・MM 72区に位置する。G IV①層上面で確認した。

《重複》 重複する遺構はない。

《形状・規模》 平面不整形で、長軸は約4.0m、短軸約2.8m、確認面からの深さは最大で約0.3mである。皿状の浅い落ち込みで、底面は凹凸が顕著である。

《覆土》 G IV①層由来の暗褐色砂質土が堆積する。

《出土遺物》 覆土から縄文土器62点と剥片類2点、凹石1点、磨石1点が出土し、縄文土器8点、凹石1点、磨石1点を図示した。縄文土器はいずれも第Ⅲ群2類に比定される。本遺構出土土器は遺構間で接

合する個体が多く、第56図14はS I 2001竪穴住居跡出土土器及びS K 2015土坑出土土器と、第58図4～6はS K 2015出土土器と、第59図1・2はS D 2007溝跡出土土器とそれぞれ接合した。

《時期・性格》出土土器から縄文時代中期後葉と推定する。遺構の形状は不整形で、出土遺物がS I 2001出土の土器と接合したことから、S I 2001埋め戻し土の土取り穴であった可能性を想定する。

#### S K 2021土坑(遺構第41図)

《位置・確認状況》氾濫原中位面MQ69・70区に位置する。G IV①層上面で確認した。

《重複》重複する遺構はない。

《形状・規模》北西部分は削平により消失している。平面形は長軸約3.8m、短軸約2.3mの楕円形で、確認面からの深さは最大で約0.2mである。壁は開いて立ち上がり、底面は平坦で、北側に低く傾斜する。南壁際にピットを1基伴う。

《覆土》2層に分層した。1層は地山土が混入する黒褐色土、2層は地山土由来の褐色土である。一連の人為堆積と推定する。

《出土遺物》遺物は出土していない。

《時期・性格》確認面より縄文時代中期後葉～後期の可能性が考えられる。性格は特定しがたい。

#### S K 2022土坑(遺構第40図 遺物第71図8)

《位置・確認状況》氾濫原中位面MM68区に位置する。G IV①層上面で確認した。

《重複》S D 2007溝跡より新しい。

《形状・規模》平面形は長軸約1.6m、短軸約1.3mの不整楕円形で、確認面からの深さは最大で約0.3mである。壁は開いて立ち上がり、底面は擂鉢状である。

《覆土》5層に分層した。いずれも崖錐性堆積物である黄褐色粘質土が混入する。このことから、短期間の自然堆積と推定する。

《出土遺物》縄文土器3点とスクレイバー1点が出土し、スクレイバー1点を図示した。

《時期・性格》確認面より縄文時代中期後葉～後期の可能性が考えられる。性格は不明である。基盤が均質な砂層であることと、不整楕円形で擂鉢状をなす形態とから、調査時には明確に確認できなかったが、倒木痕の可能性もある。

#### S K 2023土坑(遺構第42図)

《位置・確認状況》氾濫原中位面MN67区に位置する。S D 2007溝跡底面で確認した。

《重複》S D 2007より旧い。

《形状・規模》平面楕円形で、長軸約1.3m、短軸約1.0mである。確認面からの深さは最大で約0.3mである。壁は開いて立ち上がり、底面は平坦で北側に傾斜する。

《覆土》2層に分層した。いずれも炭化物と小礫が顕著に混入する。一連の人為堆積であろうか。

《出土遺物》遺物は出土していない。

《時期・性格》縄文時代中期後葉のS D 2007より旧く、中期中葉の洪水堆積層を掘り込んで構築されることから、縄文時代中期中葉以降、後葉以前と推定する。性格は不明である。

#### S K 2029土坑(遺構第42図)

《位置・確認状況》氾濫原中位面MR65・66区に位置する。G IV①層上面で確認した。

《重複》重複する遺構はない。

《形状・規模》平面楕円形で、長軸約1.2m、短軸約0.9mである。確認面からの深さは最大で約0.2mである。壁はなだらかに開いて立ち上がり、底面は平坦である。

《覆土》2層に分層した。平面では、中央に地山土を含む暗褐色土(1層)、周間に黒褐色土(2層)がドーナツ状に認められる。2層堆積後の中央の窪みに1層が堆積したものと考えられる。

《出土遺物》2層上面で円礫が1点出土した。

《時期・性格》時期は、遺構掘り込み面から縄文時代中期中葉～後葉と推定する。性格は不明である。

#### S K 3101土坑(遺構第42図 遺物第60図1～2)

《位置・確認状況》高位面L A53区地山層(C VII層)上面で確認した。遺構上部は削平されている。

《重複》S K P 3161より新しく、S K P 3276より旧い。

《形状・規模》壁は南東側がやや袋状を呈する。遺構の上位平面形は不整形だが、中位平面形はほぼ径1.0mの円形平面を呈する。底面は平らで固く締まる。確認面からの深さは約0.7mである。

《覆土》4層に分層した。1層～3層は地山塊や礫の混入が認められるなど人為堆積の様相を示す。2層は地山土の混入が顕著であり、遺構の上位平面形が不整形であることから、上位壁崩落土と推定する。4層は底面直上に薄く堆積し、砂質土が多く含まれる。1層～3層とは異なり、土坑使用時の堆積と考えられる。

《出土遺物》縄文土器32点、剥片類7点、ベンガラ素材1点が出土し、縄文土器2点を図示した。土器片は第IV群に比定されるものが多く、遺構内全体に散らばるように出土した。1層・3層からの出土が多い。ほかに、長軸8cmの赤い礫が1層から出土している。また、遺構内から礫を6個検出した。東側底面直上に円礫2個、1層と3層の境界付近に円礫3個と扁平な角礫1個である。

《時期・性格》出土土器より縄文時代後期前葉と推定する。底面直上に薄い堆積層を確認したことから、貯蔵穴などとして一定期間開口状態で利用されたと考えられる。また一括で埋め戻されていること、礫がまとまって出土したことから、貯蔵穴から土坑墓へ転用した可能性も考えられる。

#### S K 3121土坑(遺構第42図)

《位置・確認状況》高位面L F53区、地山層(C VII層)上面で確認した。遺構上部は削平されている。

《重複》S K P 3194より新しい。

《形状・規模》平面楕円形で、長軸約1.0m、短軸約0.8mである。壁はなだらかに外傾して立ち上がり、底面はやや丸底で凹凸がある。確認面からの深さは約0.2mである。

《覆土》黒褐色土の單一層である。地山由来土が混入することから人為堆積と考えられる。

《出土遺物》縄文土器が1点出土した。小片であるが、第IV群もしくは第V群と推定する。

《時期・性格》出土土器より縄文時代後期～晩期と考えられる。詳細な性格は不明である。

#### S K 3175土坑(遺構第43図)

《位置・確認状況》高位面L A・L B53区、地山層(C VII層)上面で確認した。遺構周辺に倒木痕があり、確認時の遺構平面形はやや不明瞭であった。遺構上部は削平されている。

《重複》S K P 3105、S K P 3106より旧い。

《形状・規模》平面円形で、長軸約1.5m、短軸約1.4mである。壁は開き気味に立ち上がる。特に南東側の傾斜は緩い。底面は平坦で固く締まる。確認面からの深さは約0.5mである。

《覆土》黒褐色～暗褐色土が塊状に混入し、その構成割合の相違により3層に分層できる。各層の差異

は黒褐色～暗褐色土塊の混入の割合のみであることから、一括の人が堆積と考えられる。

《出土遺物》覆土から縄文土器片が12点出土した。第IV群もしくは第V群と推定する。

《時期・性格》出土土器から縄文時代後期～晩期の可能性が考えられる。詳細な性格は不明である。

#### S K 3181土坑(遺構第43図)

《位置・確認状況》高位面L D 53区、地山層(C VII層)上面で礫と黒褐色土のプランを確認した。遺構上部は削平されている。

《重複》S B 3259掘立柱建物跡と重複する。S B 3259は古代以降に比定できることから、本遺構が旧いと判断する。

《形状・規模》平面不整円形を呈する。長軸約1.2m、短軸約1.0mである。壁はなだらかに開いて立ち上がる。底面はやや丸みを帯び、固く縮まる。確認面からの深さは約0.2mである。遺構内や西寄りには径約50cmの円礫を検出した。遺構確認時点で礫上面が露出していた。重機による表土除去の際に、西側に押された痕跡があり、本来は遺構のほぼ中心に置かれたものと推定できる。

《覆土》2層に分層した。下位(2層)に地山由来土を含む暗褐色土、上位(1層)には黒褐色土が堆積する。大形の円礫が混入していることから、人為堆積と推定する。

《出土遺物》縄文土器が6点出土した。いずれも小片であるが、第IV群もしくは第V群と推定する。

《時期・性格》出土した土器から縄文時代後期～晩期と推定する。遺構内で検出した礫は大形であり、自然に混入したとは考えがたいことから、人為的に置かれたものと推定される。このことから、本遺構は土坑墓の可能性が考えられる。

#### S K 3213土坑(遺構第43図)

《位置・確認状況》高位面L B 53区、地山層(C VII層)上面で確認した。遺構周辺は倒木痕が多く、基盤層の濁りが強いが、遺構プランは明瞭であった。遺構上部は削平されている。

《重複》S B 3260掘立柱建物跡と重複する。S B 3260は古代以降に比定できることから、本遺構が旧いと判断する。

《形状・規模》平面不整円形で、長軸約1.1m、短軸約0.9mである。壁は開いて立ち上がる。北側はより急峻である。底面は平坦で固く縮まる。確認面からの深さは約0.4mである。

《覆土》暗褐色土の單一層である。堆積要因は判然としない。

《出土遺物》確認面で径10cm前後の円礫を2個検出した。

《時期・性格》詳細な時期は不明である。周辺で確認されている土坑群とは、覆土が均質であるという点で差異がある。このことから、周間に位置する土坑群とは時期や性格が異なる可能性が考えられる。

#### S K 3218土坑(遺構第44図)

《位置・確認状況》高位面L H・L I 54・55区、地山層(C VII層)上面で確認した。遺構上部は削平されている。当初、S K 3228土坑、S K 3236土坑と共に、一基の竪穴状遺構と考えたが、土層断面で重複を確認し、土層断面で確認した切り合いと底面の凹凸が対応したことから、3基の土坑であると判断した。

《重複》S K 3236、S K P 3216より旧い。S K 3228とも重複するが、新旧は不明である。

《形状・規模》確認時すでに遺構北側の掘削を進めていたため平面形は明確でないが、楕円形と推定する。長軸約2.9m、短軸は推定で約1.8mである。壁は緩やかに開いて立ち上がる。底面は凹凸がある。確認面からの深さは0.1m前後である。

《覆土》黒褐色土の單一層である。基盤層由來の黄褐色土塊が混入するため、人為堆積と推定する。

《出土遺物》剥片が1点出土している。

《時期・性格》当遺構と重複するSK3236が縄文時代前期後葉であることから、縄文時代前期後葉を下限とする。性格は不明である。

#### SK3228土坑(遺構第44図)

《位置・確認状況》高位面LH55区、地山層(CVII層)上面で確認した。遺構上部は削平されている。当初、SK3218土坑、SK3236土坑と共に、一基の竪穴状遺構と考えたが、土層断面及び底面の状態より3基の土坑であると判断した。

《重複》SK3236より古い。SK3218とも重複するが、新旧は不明である。

《形状・規模》南西側がSK3236と重複するが、残存部分より平面梢円形と判断する。長軸は約1.9m、短軸は推定で約1.1mである。壁は北側に段があり、やや緩やかに開いて立ち上がる。底面は若干丸みを帯び、固く縮まる。確認面からの深さは約0.3mである。

《覆土》暗褐色土の單一層である。基盤層由來の黄褐色土が混入する。

《出土遺物》遺物は出土していない。

《時期・性格》当遺構と重複するSK3236が縄文時代前期後葉であることから、縄文時代前期後葉を下限と判断する。性格は特定しがたい。

#### SK3236土坑(遺構第44図)

《位置・確認状況》高位面LH55区、地山層(CVII層)上面で確認した。遺構上部は削平されている。当初、SK3218土坑、SK3228土坑と共に、一基の竪穴状遺構と考えたが、土層断面で重複を確認し、土層断面で確認した切り合いと底面の凹凸が対応したことから、3基の土坑であると判断した。

《重複》SK3218、SK3228より新しい。

《形状・規模》平面不整梢円形である。長軸約1.1m、短軸約0.9mである。壁は北西側は緩やかに開き、南東側は急傾斜に立ち上がる。底面は南東部分が最も深く、北西方向へ高くなる。段丘礫が露出する。確認面からの深さは約0.3mである。

《覆土》2層に分層した。上位(1層)に黒褐色土、下位(2層)に暗褐色土が堆積する。1層上部には10cmの円礫が1個含まれる。同一個体と判断できる土器片が両層に出土したことから、一括の堆積と考えられる。

《出土遺物》縄文時代前期後葉(円筒下層d式)の土器片が3点出土した。

《時期・性格》出土土器から縄文時代前期後葉と推定する。性格は特定しがたい。

#### SK3261土坑(遺構第43図)

《位置・確認状況》高位面KS53・54区、地山層(CVII層)上面で確認した。遺構上部は削平されている。

《重複》なし。

《形状・規模》平面円形で、径約1.3mを測る。南壁はやや袋状を呈し、北壁は急傾斜で開き気味に立ち上がる。底面は平坦だが段丘礫が露出する。確認面からの深さは約0.4mである。

《覆土》6層に分層した。1層と4層は地山由来土であることから、壁崩落土と推定する。2層～3層、5層～6層は色調・土質・混入土等には相違があるが、一括の人為堆積と推定する。

《出土遺物》縄文土器2点、剥片類1点が出土した。土器は小片で磨滅していることから、いずれも覆

土に混入したものと判断する。第IV群もしくは第V群と推測する。

《時期・性格》立地及び形状、覆土の様相が、隣接するSK3263土坑と類似することから、縄文時代晚期前葉以降と推定する。一括の人が堆積と考えられることから、土坑墓の可能性が推測できる。

#### SK3262土坑(遺構第44図 遺物第60図5)

《位置・確認状況》高位面K S・K T53・54区、地山層(C VII層)上面で確認した。確認面は北側にやや傾斜する。遺構上部は削平されている。

《重複》なし。

《形状・規模》平面円形で、径約1.4mを測る。壁はやや袋状を呈する。底面は平坦だが、段丘礫が露出する。確認面からの深さは約0.5mである。

《覆土》7層に分層した。1層～6層は色調・土質・混入土等には相違があるが、いずれも地山塊が混入することから、一括の人が堆積である可能性が高い。7層は基盤層由来の粗砂が多く混入し、固く締まる。遺物の混入もなく、他層と様相が異なることから、使用時の堆積と推測する。

《出土遺物》遺構中位から縄文土器8点、剥片類1点が出土し、縄文土器1点を図示した。底部片が2点、ほかは胴部片である。いずれも小片で、摩滅することから覆土に混入したものと判断する。第IV群もしくは第V群と推定する。

《時期・性格》近接するSK3263土坑と立地及び形状が類似することから、同種の遺構と判断し、縄文時代晚期前葉と推測する。7層から検出した炭化物の放射性炭素年代測定では、calBC1890～1680(2σ)の値が示されているが、炭化物は覆土に混入したものと判断する。形状が袋状を呈することや、斜面肩際に構築されていることから、貯蔵穴の可能性が考えられる。また一括で埋め戻されていることから、その後土坑墓へ転用された可能性も考えられる。

#### SK3263土坑(遺構第44図 遺物第60図3～4、第72図3)

《位置・確認状況》高位面L A53・54区、地山層(C VII層)上面で確認した。北側へ低く傾斜する斜面の肩部に位置する。遺構上部は削平されている。

《重複》なし。

《形状・規模》平面円形で、径約1.2mを測る。壁はやや袋状を呈する。底面は平坦で、確認面からの深さは約0.6mである。

《覆土》7層に分層した。1層～6層は、色調・土質・混入土等には相違があるが、地山塊が全体に混入することから、一括の人が堆積と判断する。7層は基盤層由来の粗砂が多く混入し、非常に固く締まる。遺物の混入もなく、他層と様相が異なることから、使用時の堆積と推測する。

《出土遺物》覆土から縄文土器13点、石鏃1点、剥片類2点が出土し、縄文土器2点、石鏃1点を図示した。土器片は台付鉢形土器の底部1点、ほかは小片、もしくは粗製の深鉢形土器の胴部片である。第IV群のものが多いが、図示したものは第V群である。

《時期・性格》時期は、最下層(底面5cm上)から出土した炭化物の放射性炭素年代測定ではcalBC1310～1040(2σ)の値が示されている。SK3282土坑などと遺構の形状が類似していることから同時期と推測され、また年代測定の結果も合わせ、縄文時代晚期前葉と推定する。出土遺物は後期前葉のもののがほとんどであるが、小片であり覆土からの出土であることから、混入したものと判断する。形状が袋状を呈することや、斜面肩際に構築されていることから、貯蔵穴の可能性が考えられる。7層直上より石

塚(第72図3)が出土していることから、土坑墓へ転用された可能性を考えられる。

S K 3265土坑(遺構第45図)

《位置・確認状況》高位面L B 54Ⅳ区、地山層(C VII層)上面で確認した。北側へ低く傾斜する斜面に位置する。遺構上部は削平されている。

《重複》北半がS I 3266竪穴住居跡と重複し、S I 3266より旧い。

《形状・規模》S I 3266により北半が消失しているが、平面楕円形と推定できる。径は約1.0mである。壁は開いて立ち上がる。底面は平坦で、確認面からの深さは約0.2mである。

《覆土》黒褐色土の單一層である。20cmの角礫を1点含む。

《出土遺物》遺物は出土していない。

《時期・性格》S I 3266より旧いことから、縄文時代晚期を下限とするが、時期を決定づける出土遺物がないため詳細な時期は不明である。性格は不明である。

S K 3267土坑(遺構第45図 遺物第60図8~13)

《位置・確認状況》高位面L B・L C 54Ⅳ区、地山層(C VII層)上面で確認した。北側へ低く傾斜する斜面の肩部に位置する。遺構上部は削平されている。

《重複》なし。

《形状・規模》フラスコ状土坑である。掘り込み上面は平面楕円形で、長軸約1.3m、短軸約1.0mを測る。確認面以下約0.2m付近で径約0.8mほどに狭くなり、そこから末広がりに開く。底面は不整円形で径約1.7mである。平坦だが、段丘礫が露出する。確認面からの深さは約1.3mである。

《覆土》11層に分層した。4層~10層は地山塊が全体に混入することから、一括の人为堆積と推定する。9層~10層には炭化物の混入が認められる。11層は暗褐色砂質土で遺物は混入しない。開口時の堆積と判断する。1層~3層は空隙に堆積した流土と推定する。

《出土遺物》縄文土器45点、剥片類7点が出土し、土器片6点を図示した。土器片はいずれも小片で、土坑覆土から散らばるように出土した。同一個体と認められる土器片も多い。赤彩土器片は少なくとも2個体あり、いずれも壺形土器である(第60図8~10)。

《時期・性格》出土遺物から縄文時代晚期前葉(大洞B C式期)と判断する。赤彩土器片が覆土全体に混入していることから、土坑墓と推定される。堆積状況から一定の開口期間が認められ、貯蔵穴から転用されたものと考えられる。

本遺構の北東にはS I 3266竪穴住居跡が位置する。近接することから、本遺構はS I 3266に伴う貯蔵穴である可能性も考えられるが、出土土器は本遺構のほうが若干新しいことから、両者の関係は特定しがたい。

S K 3268土坑(遺構第45図)

《位置・確認状況》高位面L C 54Ⅳ区、地山層(C VII層)上面で確認した。北側へ低く傾斜する斜面の肩部に位置する。遺構上部は削平されている。また、南側も後世の暗渠により破壊されている。

《重複》なし。

《形状・規模》南側は暗渠により削平されているが、残存部分より平面楕円形と推定する。長軸約1.1m、推定短軸1.0mである。壁は緩やかに開いて立ち上がる。底はやや丸みを帯びる。確認面からの深さは約0.3mである。

《覆土》2層に分層した。2層には地山塊が含まれる。1層・2層とともに土器小片がまんべんなく出土することから、一括の人為堆積と推定する。

《出土遺物》遺物は遺構内全体に分布する。いずれも覆土からの出土である。縄文土器が12点、剥片類が2点出土した。縄文土器のほとんどが小片で接合はしないが、同一個体片も認められる。縄文時代後期前葉の土器片が出土している。

《時期・性格》出土遺物から縄文時代後期前葉以降と推定する。性格は不明である。

#### S K 3281土坑(遺構第46図 遺物第60図6～7)

《位置・確認状況》中位面K T 55区、地山漸移層(E V層)上面で確認した。しかし、覆土がE IV層由来であることから、遺構掘り込み面はE IV層であった可能性が高い。

《重複》なし。

《形状・規模》掘り込み上面は平面不整円形を呈するが、壁の崩落による変形とみられ、本来は径約1.2mの円形と推定できる。壁は直線的に立ち上がる。南東部分は崩落によりなだらかに開く。底面は平坦で確認面からの深さは約0.6mである。

《覆土》6層に分層した。5層は地山由来土であり、壁際に堆積することから、壁崩落土と推定する。2層は地山土由来のブロックである。ほかは色調・土質・混入土等には相違があるが、地山塊や同一個体土器片が全体に混入することから、E IV層由来の一括の人為堆積と判断する。

《出土遺物》覆土から縄文土器が16点出土し、そのうち2点を図示した。接合はしないが同一個体片も認められる。縄文時代後期前葉の土器片が遺構上位から出土した。

《時期・性格》縄文時代後期前葉の土器片が出土したが、小片であり、遺構上位からの出土であることから覆土に混ざり込んだものと推測する。形状や位置から、近接するS K 3282土坑と同種の遺構と考えられ、縄文時代晚期前葉と推測する。貯藏穴や土坑墓の可能性が想定できよう。

#### S K 3282土坑(遺構第46図 遺物第61図1～8、第72図5～7)

《位置・確認状況》中位面K T・L A 55・56区、地山漸移層(E V層)上面で確認した。しかし、覆土がE IV層由来土であることから、遺構掘り込み面はE IV層であった可能性が高い。

《重複》なし。

《形状・規模》平面は径約1.7mの円形である。壁はやや開いて立ち上がる。底面は平坦で確認面からの深さは約0.5mである。

《覆土》4層に分層した。2層は焼土塊混入土、4層は壁崩落土である。1層・3層はE IV層に由来する黒色土である。同一個体片の混入状況より一括の人為堆積と判断する。覆土下位(2層付近)より焼土塊、炭化物、被熱した遺物がまとまって出土しており、遺構の外で火を用いた祭祀を行った後、土坑内に残滓を投げ入れた可能性が考えられる。

《出土遺物》縄文土器が56点、礫器1点、凹石1点、磨石1点、剥片類6点が出土し、そのうち土器8点、礫器1点、凹石1点、磨石1点を図示した。ほとんどが1層の出土である。2層底面直上からも土器片が1点出土したが、小片のため時期は不明である。接合する土器片の色調が異なる資料が一定量認められ、破損後に火を受けたと考えられる。第V群(縄文時代晚期前葉)の土器片が出土した。

《時期・性格》出土遺物から縄文時代晚期前葉と判断する。一括で埋め戻されていることや、焼土塊や炭化物が多く混入することから土坑墓の可能性が考えられる。

S K 3285土坑(遺構第45図)

《位置・確認状況》中位面L A56区、E IV層で遺構の存在を確認したが、平面形が不明瞭であったため、地山漸移層(E V層)上面で平面形を確定した。

《重複》なし。

《形状・規模》平面不整円形である。長軸約0.7m、短軸約0.6mである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、南側にやや低い。確認面からの深さは約0.3mである。

《覆土》黒色土の單一層である。暗褐色土塊が混入する。基本層序E IV層に由来する一括の人为堆積と判断する。

《出土遺物》なし。

《時期・性格》詳細な時期、性格は不明であるが、周辺に位置する同形態の土坑群と同種の遺構と推定し、縄文時代晚期前葉と推測する。周辺に位置する土坑群と同種の遺構とすれば、貯蔵穴や土坑墓の可能性が考えられようか。

S K 3286土坑(遺構第46図)

《位置・確認状況》中位面L F・L G55区、地山層(E VI層)上面で確認した。北側へ低く傾斜する斜面の肩部に位置する。遺構上部は削平されている。

《重複》なし。

《形状・規模》径約1.0mの平面円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面北側は段丘礫が露出する。南側は平坦である。確認面からの深さは約0.3mである。

《覆土》覆土は4層に分層した。底面中央に黒褐色土がマウンド状に堆積し(4層)、上位(1層~3層)には暗褐色土が堆積する。暗褐色土は混入物の差異により3層に分層した。各層はブロック状に堆積することから、人为堆積と判断する。

《出土遺物》なし。

《時期・性格》時期、性格は不明である。

S K 3288土坑(遺構第46図)

《位置・確認状況》高位面L B54区、S I 3266竪穴住居跡床面で確認した。

《重複》S I 3266より旧い。

《形状・規模》平面楕円形で、長軸約0.9m、短軸約0.4mである。北側をS I 3266P 2と、南側はS I 3266 S R01と重複する。壁は緩やかに開いて立ち上がる。底面は平坦で、確認面からの深さは約0.1mである。

《覆土》黒褐色土の單一層である。

《出土遺物》なし。

《時期・性格》詳細な時期は不明であるが、S I 3266より旧いことから縄文時代晚期前葉以前である。性格は不明である。

S K 3289土坑(遺構第47図 遺物第73図1)

《位置・確認状況》中位面L D57区、地山漸移層(E V層)上面で確認した。しかし、覆土がE IV層由来土であることから、遺構掘り込み面はE IV層であった可能性が高い。

《重複》なし。

《形状・規模》平面楕円形で、長軸約1.1m、短軸約0.9mである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平

坦で、確認面からの深さは約0.2mである。

《覆土》3層に分層した。色調などに差異はあるが、地山塊が全体に混入することから、E IV層に由来する一連の人為堆積と判断する。1層と3層の境には長軸25cmの角礫が検出された。

《出土遺物》遺構上位～中位で縄文土器6点、凹石1点、剥片類1点が出土し、凹石1点を図示した。縄文土器はいずれも小片のため詳細な時期は不明である。摩滅していることから、覆土に混入したものと判断する。

《時期・性格》詳細な時期は不明である。近接するSK 3290土坑と同種の土坑とすれば、縄文時代晚期前葉と推測できようか。貯蔵穴の可能性が考えられるが、遺構中位から角礫が検出されていることから、土坑墓の可能性も想定できよう。

#### SK 3290土坑(遺構第47図 遺物第60図14～17、第73図2)

《位置・確認状況》中位面L C・L D 56区、地山漸移層(E V層)上面で確認した。しかし、覆土がE IV層由来土であることから、遺構掘り込み面はE IV層であった可能性が高い。

《重複》なし。

《形状・規模》平面梢円形で長軸約1.2m、短軸約1.0mである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、北西は段丘礫が露出する。確認面からの深さは約0.2mである。

《覆土》4層に分層した。地山粒が全体に混入することから、E IV層に由来する一括の人為埋め戻しと判断する。2層～3層には遺物、礫が多く混入する。

《出土遺物》2層～3層より縄文土器片18点、凹石2点が出土し、縄文土器4点と凹石1点を図示した。出土土器は第V群が多いが、第IV群も数点確認している。

《時期・性格》遺物から縄文時代晚期前葉(大洞B式期)と判断する。赤彩土器片が出土したこと、一括で埋め戻されていることから、土坑墓の可能性が考えられる。

#### SK 3291土坑(遺構第47図 遺物第60図18～22)

《位置・確認状況》中位面L A 56区、地山漸移層(E V層)上面で確認した。しかし、覆土がE IV層由来土であることから、遺構掘り込み面はE IV層であった可能性が高い。

《重複》なし。

《形状・規模》平面梢円形で長軸約1.5m、短軸約1.3mである。本来は径約1.3mの円形であったものが、北側の壁が崩落したためと推測する。壁は中位まではほぼ垂直もしくは袋状を呈し、上位はやや開く。底面は平坦で、確認面からの深さは約0.5mである。

《覆土》3層に分層した。3層は地山塊が多く混入することから、壁崩落土と考えられる。1層～2層は混入土の差異により分層したが、E IV層由来の一括の人為堆積と判断する。1層上位には遺物が混入する。

《出土遺物》1層上位で縄文土器片11点が出土し、5点を図示した。また、検出面付近では被熱痕のある円礫が1点出土した。

《時期・性格》縄文時代後期末の遺物が出土しているが、覆土上位からの出土であり、覆土に混入したものと判断する。周囲の土坑群と一連の遺構と考えられることから、縄文時代晚期前葉に属すると推測する。貯蔵穴や土坑墓が想定できようか。

S K 3292土坑(遺構第47図 遺物第61図10、第73図3～4)

《位置・確認状況》中位面L D 57区、地山漸移層(E V層)上面で確認した。しかし、覆土がE IV層由来土であることから、遺構掘り込み面はE IV層であった可能性が高い。

《重複》なし。

《形状・規模》径約1.5mの平面円形を呈する。壁はやや開いて立ち上がる。底面は平坦で、確認面からの深さは0.4mである。南西壁際には平面楕円形のピットが位置する。長軸約40cm、短軸約30cm、S K 3292底面からの深さは約30cmである。

《覆土》2層に分層した。1層と2層は混入土の差異により分層したが、層界は漸移的であることから、E IV層に由来する一括の人為堆積と判断する。1層にはE III層由来土も混入する。なお、底面で確認したピットの覆土は、E IV層由来土で、地山塊が多く混入する。

《出土遺物》遺構内覆土から遺物が出土した。縄文土器5点、凹石1点、磨石2点、剥片類1点が出土し、そのうち土器1点、凹石1点、磨石1点を図示した。縄文土器は第V群に属する。

《時期・性格》周囲の土坑群と一連の遺構と考えられることから、縄文時代晚期前葉と推測する。貯蔵穴や土坑墓が想定できようか。

S K 3294土坑(遺構第47図 遺物第61図9)

《位置・確認状況》中位面L B・L C 56区、地山漸移層(E V層)上面で確認した。しかし、覆土がE IV層由来土であることから、遺構掘り込み面はE IV層であった可能性が高い。

《重複》なし。

《形状・規模》確認時、南側は既に地山上面まで掘り下げていたため平面形は不明であるが、長軸約1.3m、短軸推定1.2mの楕円形と推定する。壁はやや開いて立ち上がる。底面は丸みを帯び、やや凹凸が認められる。確認面からの深さは約0.4mである。

《覆土》2層に分層した。2層は地山塊の混入が顕著であることから、壁の崩落土と推定する。1層は地山土が混入することからE IV層由来の人為堆積と判断する。

《出土遺物》遺構内覆土より出土した縄文土器6点のうち1点を図示した。第V群である。ほかは、第II群が2点、第IV群が3点である。いずれも小片であり、覆土に混入したものと推定する。

《時期・性格》周囲の土坑群と一連の遺構と想定し、縄文時代晚期前葉と推測する。貯蔵穴であろうか。

S K 3295土坑(遺構第48図)

《位置・確認状況》中位面L B 57区、地山漸移層(E V層)上面で確認した。しかし、覆土がE IV層由来土であることから、遺構掘り込み面はE IV層であった可能性が高い。

《重複》なし。

《形状・規模》径約1.0mの平面円形を呈する。壁はやや開いて立ち上がる。底面は平坦である。確認面からの深さは約0.3mである。

《覆土》2層に分層した。1層は地山塊が混入することから、人為堆積と判断する。E IV層由来土であろう。2層は地山塊の混入が顕著であることから、壁の崩落土と推定する。

《出土遺物》1層から縄文土器小片1点が出土した。第V群と推定する。覆土に混入したものであろう。

《時期・性格》周囲の土坑群と一連の遺構と考えられることから、縄文時代晚期前葉と推測する。貯蔵穴や土坑墓が想定できようか。

## S K 3304土坑(遺構第48図 遺物第72図4)

《位置・確認状況》中位面M G 64区、地山漸移層(E V層)上面で確認した。

《重複》なし。

《形状・規模》平面不整梢円形で、長軸約1.7m、短軸約1.3mを測る。壁はなだらかに開く。底面は緩やかな掘鉢状を呈し、中央付近が最も深い。確認面からの最深値は約0.3mである。

《覆土》5層に分層した。1層～3層は礫及び地山塊が混入することから、一括の人为堆積と判断する。4層は壁崩落土、5層は掘削痕に暗褐色土が堆積したものと推定する。

《出土遺物》確認面付近より石匙が出土し、図示した。

《時期・性格》時期及び性格は不明である。

## S K 3313土坑(遺構第48図)

《位置・確認状況》中位面K P・K Q 54区、地山漸移層(E V層)上面で確認した。

《重複》なし。

《形状・規模》北側は削平されているが、平面円形もしくは梢円形と推定する。長軸は約1.0mである。壁はなだらかに開く。底面は丸みを帯び、確認面からの深さは約0.2mである。

《覆土》2層に分層した。1層は均質な黒褐色土である。2層は地山塊を含む暗褐色土であることから、人为堆積と判断する。

《出土遺物》なし。

《時期・性格》時期及び性格は不明である。

## S K 5007土坑(遺構第48図 遺物第61図11)

《位置・確認状況》高位面M S 53区、地山漸移層(B III層)上面で確認した。

《重複》重複する遺構はない。

《形状・規模》平面不整梢円形で長軸約2.2m、短軸約1.6mを測る。壁はやや開き気味に立ち上がる。底面は平坦で固く締まる。確認面からの深さは約0.1mである。

《覆土》暗褐色土の單一層である。堆積要因は不明である。底面東側には長径約50cmの不整円形に炭化物の広がりを確認した。厚さは2cm前後である。

《出土遺物》覆土より縄文土器片が7点出土し、1点を図示した。縄文時代中期中葉(円筒上層c式)の土器片があり、ほかも同時期と判断する。

《時期・性格》遺物から、縄文時代中期中葉に属すると推定する。性格は不明である。

## S K 5008土坑(遺構第48図)

《位置・確認状況》高位面M R 53区、地山漸移層(B III層)上面で確認した。

《重複》重複する遺構はない。

《形状・規模》直径約0.9mの平面円形を呈する。壁はやや開き気味に立ち上がる。底面は平坦で確認面からの深さは約0.4mである。

《覆土》暗褐色土の單一層である。堆積要因は不明である。

《出土遺物》遺物は出土していない。

《時期・性格》時期・性格ともに不明である。覆土が近接するS K 5007土坑と同じであることから、同時期とすれば、縄文時代中期中葉と推測できよう。

S K 5009土坑(遺構第48図)

《位置・確認状況》高位面M R 53区、地山漸移層(B III層)上面で確認した。

《重複》重複する遺構はない。

《形状・規模》平面楕円形で長軸約0.8m、短軸約0.7mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西側は段がある。底面は平坦で固く締まる。確認面からの深さは約0.3mである。底面形状及び壁の状況より、西側は壁が崩落したものと考えられ、本来は円形だったと推定する。

《覆土》2層よりなる。1層には長軸約30cmの扁平な円礫が混入することから、人為堆積と判断する。2層は地山由来土で、壁の崩落土と推定する。

《出土遺物》遺物は出土していない。

《時期・性格》詳細な時期は不明である。遺構ほぼ中央より扁平な礫が検出されていることから、土坑墓の可能性も考えられるが、判然としない。

S K 5017土坑(遺構第49図)

《位置・確認状況》高位面N B50区、S I 5012竪穴住居跡精査中に覆土上面で確認した。

《重複》S I 5012より新しい。

《形状・規模》径約0.7mの平面円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、部分的に袋状を呈する。底は平坦で確認面からの深さは約0.4mである。底面直上には円礫が6個重なって検出された。大きさは長径10cm～30cmである。いずれの円礫も青白色であるが、上から2段目に置かれた、長径30cmの平面楕円形の円礫のみは赤色である。意図的に配されたと考えられる。

《覆土》暗褐色土の単一層である。礫の混入状況より人為堆積と判断する。

《出土遺物》遺物は出土していない。

《時期・性格》S I 5012より新しいことから、縄文時代前期中葉以降と判断する。遺構底面直上に円礫がまとめて置かれていることから、土坑墓の可能性が指摘できる。

S K 5018土坑(遺構第49図 遺物第61図12)

《位置・確認状況》高位面N A52区、S I 5004竪穴住居跡精査中にS I 5004覆土上面で確認した。

《重複》S I 5004 S K P 5040より新しい。

《形状・規模》根による擾乱により北側は不明瞭であったが、北端のみ平面形を確認することができ、平面不整楕円形と推測した。長軸約1.2m、短軸推定0.9mである。壁は西側は段があり、東側は直線的に開いて立ち上がる。底面は擂鉢状で、確認面からの深さは約0.3mである。

《覆土》褐色土の単一層である。地山塊が多く混入することから人為堆積と判断する。西側上位に焼土塊が混入するが、当遺構はS I 5004炉を壊して構築されており、S I 5004炉の焼土が流れ込んだものと推定する。

《出土遺物》覆土より縄文土器5点、剥片類1点が出土した。土器はすべて第I群に属するが、当遺構はS I 5004の覆土を掘り込んでおり、S I 5004の遺物が混入した可能性が高い。土器1点を図示した。

《時期・性格》遺物はS I 5004の遺物の混入と考えられることから、詳細な時期は不明である。性格も定かではない。

S K 5024土坑(遺構第49図 遺物第61図13、第74図1)

《位置・確認状況》高位面N A-49・50区、S I 5012竪穴住居跡精査中に床面で確認した。

《重複》 S I 5012と重複する。S I 5012を調査した時点では土坑の存在は想定しておらず、S I 5012掘削後に床面で確認したため、新旧関係は不明である。

《形状・規模》 西側はS I 5012と重複するため、平面形は不明であるが、東側の形状から楕円形と推測する。壁は東側は中位まで垂直に、それ以上は開いて立ち上がる。西側はS I 5012と重複するため遺存状況は悪いが、やや開き気味に立ち上がると推測できる。東壁と対比すると、おそらく失われている上位は開いて立ち上がったものと推測される。底面は平坦でS I 5012床面から底面までの深さは約0.3mである。

《覆土》 地山層由來の單一層であることから、掘り込み掘削土由来の人為堆積と判断する。

《出土遺物》 覆土より土器片1点、凹石1点が出土し、ともに図示した。遺構中位で長径約20cmの円礫が、底面直上では、長径約10cmの円礫が出土した。

《時期・性格》 時期は不明である。遺構内に礫がまとまって置かれる事から、土坑墓の可能性がある。

#### S K 5057土坑(遺構第49図)

《位置・確認状況》 高位面M N 50区、地山漸移層(B III層)上面で確認した。

《重複》 重複する遺構はない。

《形状・規模》 平面不整楕円形で、長軸約2.1m、短軸約1.3mである。壁はなだらかに開いて立ち上がる。底面は凹凸があり、確認面からの最深値は約0.3mである。

《覆土》 黒色土の單一層である。焼土塊が混入し、地山塊の混入も顕著であることから、人為堆積と判断する。

《出土遺物》 遺物は出土していない。

《時期・性格》 詳細な時期・性格は不明である。

#### S K 5063土坑(遺構第49図 遺物第52図5、第53図12)

《位置・確認状況》 高位面M S 49区、S I 5001A堅穴住居跡壁面で確認した。

《重複》 S I 5001Aより旧い。

《形状・規模》 西側をS I 5001Aに壊されているが、平面楕円形と推定する。長軸約0.9mである。壁は開いて立ち上がる。底面は丸みを帯びる。確認面からの深さは最大で約0.6mである。

《覆土》 地山由來土の單一層であることから、掘り込み掘削土由来の人為堆積と推定する。

《出土遺物》 繩文土器5点と割片類1点が出土した。第I群土器片が3点、第II群土器片が2点である。そのうち第I群土器片1点(第52図5)、第II群土器片1点(第53図12)がS I 5001出土土器と接合した。遺構が重複するため混入したものと考えられる。

《時期・性格》 S I 5001Aより旧いことから、繩文時代前期中葉(円筒下層b式期)以前と推測する。括の人為堆積であり、土坑墓の可能性が考えられる。

#### S K 5067土坑(遺構第49図 遺物第74図2)

《位置・確認状況》 高位面M T・N A53・54区、地山漸移層(B III層)上面で確認した。

《重複》 S I 5005堅穴住居跡より新しい。

《形状・規模》 平面不整楕円形で、長軸約2.6m、短軸約1.5mである。壁はなだらかに開いて立ち上がる。底面は凹凸があり、南東側がやや低く、確認面からの深さは最大で約0.4mである。

《覆土》 褐色土の單一層である。

《出土遺物》覆土から縄文土器6点と石皿1点が出土し、石皿を図示した。土器片は小片であるが第I群に属すると推定する。摩滅していることから、覆土に混入したものと判断する。

《時期・性格》S 15005より新しいことから、縄文時代前期中葉以降と判断する。性格は不明である。

### ③溝跡

S D 2007溝跡(遺構第9・16~18図 遺物第58図7、第59図1~2、第62図1~2、第74図3~4)

《位置・確認状況》氾濫原中位面M J 70区からM T 64区にかけてのG IV①層上面で確認した。当初、黒褐色土覆土からなる部分をS D 2007と確認し調査した後、その下位に基盤土類似の覆土からなる溝跡(S D 2011)を確認した。精査の結果、S D 2007とS D 2011とは一連の溝跡の覆土上部と下位部とにそれぞれ相当するものと判断し、最終的にS D 2007に統合した。溝跡は比高約4mの南東側の段丘崖下端に沿って、北東から南西に向かって延びている。

《重複》SK 2022土坑より旧く、SK 2023土坑より新しい。

《形状・規模》確認長は45mで、さらに南西方向に延びる。幅は1.9m~3.6m前後で、平面形は凹凸があり、全体にやや不整である。底面は丸みを帯び、壁は内湾気味に立ち上がる。確認面から底面までの深さは0.3m~0.6m前後である。底面標高は、北東側で約181.1m、南西側で約180.6m前後で、北東から南西に向かって緩やかに傾斜している。

《覆土》覆土は南西端側を除き、大きさは上下に大別できる。上層はG IV①層に類似した黒褐色系の砂質土で、主に段丘崖側には崖錐起源の地山主体の再堆積層を含む。下層は暗褐色系の砂質土と基盤砂層との混合土である。いずれも葉理の発達を認めることはできず、流水下の堆積とは想定できない。ただし、南西端側では底面直上に細砂が葉理状に堆積する。当該地点では溝跡下位は流水下で細砂により埋積されたものと判断する。

《出土遺物》北東側で縄文土器が18点の遺物収納箱に4箱、石器が1箱出土し、縄文土器5点、凹石2点を図示した。土器はいずれも第Ⅲ群2類に属する。第58図7はSK 2015土坑出土土器片と、第59図1~2はSK 2019土坑出土土器片と接合した。

《時期・性格》本溝跡は全体の形状がやや不整である。段丘崖際に沿い、小又川の下流方向に向かって傾斜することも勘案すると、人工的な溝跡ではなく、自然の營力で形成されたものと推定する。流水性堆積は南西端部のみにしか認められないことから、常時水流が生じていたような河道であったとは判断し難い。ここでは降雨時に水流が生じる程度の段丘崖沿いに形成された雨裂であった可能性を想定しておく。確認面と覆土出土遺物から、本溝跡形成の上限時期は縄文時代中期前半、下限時期は縄文時代中期後葉(大木10式期)と判断する。

S D 3315溝跡(遺構第50図)

《位置・確認状況》中位面M B 62・63区、地山漸移層(E V層)上面で確認した。

《重複》なし。

《形状・規模》長軸約2.8m、短軸約2.5mの楕円形に遡る。部分的に確認できない箇所もあったが、底面レベルが浅かったために削平されたと推定する。北部、南東部はかろうじて平面形は確認できるが、根により攪乱されている。幅は約0.2mで、底面は部分的に根による攪乱により凹凸が認められる。確認面からの深さは0.1m未満と推定する。

《覆土》 黒褐色土の單一層である。地山土粒が少量混入する。

《出土遺物》 遺物は出土していない。

《時期・性格》 時期は不明である。形状より床面以下まで削平された竪穴住居跡の壁溝の可能性が推定できる。炉、柱穴などは確認していない。

#### ④焼土遺構

S N04焼土遺構(遺構第50図)

《位置・確認状況》 低位面L H・L I 76区に位置する。地山上面を精査中に焼土塊を確認し、周囲を精査したところ、焼土塊を含む広い範囲で暗褐色土の広がりを確認した。この暗褐色土の性格を把握するために試掘溝を十字に掘削し、断面を観察した結果、地滑りにより崩落した可能性が推測された。このことから、焼土塊は本来焼土面であったと推定し、焼土遺構と判断した。

《重複》 重複する遺構はない。

《形状・規模》 暗褐色土の広がりは長軸約4.0m、短軸2.7mの平面不整梢円形で、北側に低く傾斜する。焼土塊は東側に4か所散在する。

《覆土》 1層は暗褐色土で焼土塊を含む。2層との層界は明瞭である。2層は地山土由来の褐色土で、基盤層との層界は不明瞭である。地滑りにより、北側へ基盤層がずれ落ちたものと推定する。

《出土遺物》 1層焼土塊周辺より剥片類18点が出土した。

《時期・性格》 焼土周辺の遺物出土状況や土の堆積状況より、竪穴住居跡が地滑りにより崩落した可能性を想定する。1層は竪穴住居跡の覆土であろうか。時期は不明である。

S N2005焼土遺構(遺構第51図)

《位置・確認状況》 泥濫原中位面M N 70区 G IV①層中で焼土面を確認した。

《重複》 なし。

《形状・規模》 焼土面は長軸約0.4m、短軸約0.1mの平面不整梢円形である。焼土層の厚さは1cm程度である。

《出土遺物》 なし。

《時期・性格》 周囲には竪穴掘り込みもしくは床面、あるいは柱穴・壁溝等の関連する施設を認めるることはできない。このことから、竪穴住居跡に伴う炉跡とは想定し難く、当時の地表面での焚き火痕跡と判断する。G IV①層中に位置することから、上限時期は縄文時代中期後葉であろう。

S N2030焼土遺構(遺構第51図)

《位置・確認状況》 泥濫原下位面M Q・M R 66区で泥濫原の堆積状況を確認するため試掘溝を掘削中、中位面より約2m下の褐色シルト層(G VIII層)上面で、ブロック状の焼土と炭混じりの暗褐色土が斑状に分布する状況を確認した。

《重複》 なし。

《形状・規模》 焼土面は長軸10cm~30cmで、6か所に分布し、その周囲に炭混じりの暗褐色土が長軸約1.5m、短軸約0.5mの範囲に不整形に広がる。焼土面の厚みは3cm前後である。周囲に柱穴や竪穴の掘り込みなどは確認できなかった。

《覆土》 3層に分層した。1層は炭混じりの暗褐色土である。焼土面形成時の炭が堆積したものと判断

する。2層は焼土面である。

《出土遺物》15cmほどの炭化物が出土したのみである。

《時期・性格》S D2007溝跡の下位に位置することから、下限は縄文時代中期後葉と判断できる。出土した燃料材と考えられる炭化物の放射性炭素年代測定結果では、較正年代calBC3660～3520(2σ)の結果が得られており、縄文時代前期に相当する。

#### S N3303焼土遺構(遺構第51図 第74図5)

《位置・確認状況》中位面L T・L S61・62区に位置する。E V層上面で焼土を確認した。試掘溝により断面の形状を確認したところ、掘り込み内に混入した焼土塊であることが判明した。

《重複》なし。

《形状・規模》掘り込みは径約0.8m、確認面からの深さ0.2mの平面不整円形で、長軸10cm～40cmの平面不整形の焼土塊が3個混入する。

《出土遺物》焼土付近より石皿が出土し、図示した。

《時期・性格》焼土塊の周囲は径2m～3mの範囲で、上位段丘礫の崩落が少ないことから、豎穴掘り込みに対応する可能性があり、掘り込みは地床炉の搔き出し痕と考えられる。しかし、柱穴や周溝などは認められず、特定はしがたい。時期は不明である。

#### ⑤配石遺構

##### S Q5025配石遺構(遺構第25・27図 第73図5～7)

《位置・確認状況》高位面M T53区に位置する。S I 5005豎穴住居跡覆土上位で確認した。豎穴住居跡覆土で確認したことから、覆土に混入したものとも考えられるが、礫はいずれも使用痕があり、意図的な廃棄の可能性が高いと判断したため、ここでは配石遺構として報告する。

《重複》S I 5005より新しい。

《形状・規模》4個の円礫(S 1～S 4)が上面の高さを揃えて配される。周辺には礫を3個(S 5～S 7)検出したが、当遺構に伴うかは不明である。S 1は長軸30cmで最も大きく、ほかは10cm前後である。

《出土遺物》S 1は石皿、S 2とS 4は凹石、S 6は磨石である。凹石2点と磨石1点を図示した。

《時期・性格》S I 5005に廃棄された遺物と一連の時期と考えられることから、縄文時代前期中葉と推定する。

#### ⑥柱穴様ビット

縄文時代に属すると推定されるビットは32基を検出した。その多くが高位面北東部分に位置する。上位が削平されていたため構築面を特定することができず、時期を特定するのは困難であった。しかし、覆土は土壤化の進んだ黒色～黒褐色土でしまりが弱いものと、にぶい黄褐～暗褐色土でしまりの強いものの2種類に大きく分類できた。前者は古代以降の遺構の覆土と類似していることから、古代以降のものと推定する。一方、縄文時代の遺構の覆土は、いずれもしまりが強いことから、後者を縄文時代のものと推定した。縄文時代の柱穴様ビットが多く検出された高位面北東部分は縄文時代晚期の住居や土坑が集中することから、柱穴様ビットも縄文時代晚期に属する可能性が考えられる。一覧を第6表に記載した。

第6表 繩文時代柱穴様ピット

遺構番号	調査ID	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	底面標高(m)	土色	備 考
SKP2016	ML71	円	0.22	0.22	0.48	180.90	10YR2/1 ~ 3/4	SI200より新しい
SKP3145	LE53-54	不整円	0.29	0.27	0.53	188.59	10YR3/3	SKP314より古い
SKP3146	LE53	楕円	0.24	0.22	0.12	188.69	10YR3/3	
SKP3157	LA53	楕円	0.40	0.33	0.11	188.73	10YR3/3	SKP3154より古い
SKP3159	LA53	楕円	0.21	0.17	0.09	188.82	10YR3/4	
SKP3161	LA53	楕円	0.37	0.30	0.47	188.38	10YR2/3-4/3	SKP3101より古い
SKP3183	LE54	楕円	0.38	0.24	0.12	188.84	10YR3/3	
SKP3188	LG53	楕円	0.37	0.18	0.20	188.61	10YR3/4	
SKP3193	LG54	不整楕円	0.34	0.25	0.23	188.67	10YR3/3	
SKP3194	LF53	楕円	0.40	0.33	0.35	188.37	10YR3/3 ~ 5/6	SK3121より古い
SKP3200	LC-LD54	不整楕円	0.80	0.61	0.64	188.23	10YR3/4	
SKP3209	LF54	楕円	0.45	0.49	0.15	188.82	10YR2/2	SKP3210より古い
SKP3210	LF54	円	0.31	0.31	0.11	188.53	10YR3/3	SKP3209より新しい
SKP3214	LC53	円	0.22	0.21	0.38	188.32	10YR3/4	SKP3215-SKP3220より新しい
SKP3215	LC53	(円)	0.34	0.30	0.34	188.36	10YR3/4	SKP3214より古いSKP3220より新しい
SKP3217	LC53	楕円	0.54	0.25	0.29	188.44	10YR3/4	SKP3220より新しい
SKP3219	LB64	円	0.37	0.35	0.34	188.22	10YR3/4	
SKP3220	LC53	(楕円)	0.40	0.30	0.29	188.39	10YR3/4	SKP3214-SKP3215より古い
SKP3232	LC54	楕円	0.35	0.28	0.28	188.33	10YR4/4	
SKP3235	LC53	楕円	0.46	0.34	0.57	188.14	10YR3/4	
SKP3242	LG53	円	0.22	0.22	0.16	188.61	10YR3/3	
SKP3270	LA53	不整楕円	0.63	0.54	0.26	188.61	10YR4/3	SKP3271より新しい
SKP3271	LA53	円	0.38	0.33	0.38	188.44	10YR4/4	SKP3270より古い
SKP3273	LB63	不整楕円	0.28	0.26	0.59	188.20	10YR4/3	
SKP3274	LB63	楕円	0.31	0.24	0.52	188.25	10YR4/3	
SKP3275	LB53-54	不整楕円	0.39	0.35	0.21	188.63	10YR3/3	
SKP3277	LC54	不整	0.31	0.25	0.26	188.33	10YR4/3	
SKP3278	LB54	不整円	0.31	0.27	0.44	188.30	10YR4/3	
SKP5035	MS550	楕円	0.18	0.15	0.14	186.91	10YR4/4	
SKP5037	MQ-MR51	楕円	0.33	0.28	0.20	187.00	10YR3/4	
SKP5040	NA53	(楕円)	0.45	~	0.38	186.44	10YR2/3 ~ 4/6	SI5004より新しいSKP518より古い
SI2001 P1	ML71	不整円	0.25	0.22	0.17	180.76	10YR3/4	
SI2001 P2	ML71	不整楕円	0.35	0.26	0.13	180.77	10YR3/4	
SI2001 P3	MK-ML71	楕円	0.25	0.18	0.21	180.84	10YR3/4	
SI2001 P4	ML70	不整円	0.29	0.26	0.15	180.83	10YR3/4	
SI2001 P5	ML71	楕円	0.09	0.07	0.08	180.90	10YR3/4	
SI2001 P6	MK71	不整円	0.13	0.11	0.10	180.96	10YR3/4	
SI2001 P7	MK71	円	0.10	0.09	0.08	181.03	10YR3/4	
SI2001 P8	MK71	円	0.13	0.12	0.09	181.01	10YR3/4	
SI2004 P1	MN69	(楕円)	0.30	0.26	0.19	180.92	10YR3/4	
SI2004 P2	MN69	楕円	0.25	0.21	0.24	180.85	10YR3/4	
SI5001 LA P1	MT49	楕円	0.70	0.40	0.59	186.04	10YR3/3 ~ 4/6	
SI5001 LA P2	MT49	楕円	0.49	0.40	0.57	185.95	10YR4/4	
SI5001 LA P3	MT49	楕円	0.41	0.30	0.50	186.09	10YR4/4	
SI5001 LA P4	MT49	楕円	0.28	0.24	0.30	186.22	10YR4/4 ~ 4/6	
SI5001 LA P5	MT49	楕円	0.33	0.29	0.15	186.41	10YR3/3	
SI5001 LA P6	MT49	不整楕円	0.71	0.41	0.39	186.20	10YR4/4 ~ 5/6	
SI5001 LA P7	MT49	円	0.55	0.54	0.27	186.28	10YR2/2 ~ 4/3	
SI5001 LA P8	MT49	楕円	0.45	0.36	0.39	186.19	10YR4/6	
SI5001 B P9	MT49-50	楕円	0.66	0.46	0.29	186.41	10YR3/3	SI5001B P10-P11より新しいP10より古い
SI5001 B P10	MT49	楕円	0.50	0.30	0.23	186.44	10YR3/4	SI5001B P11より新しいP10より古い
SI5001 B P11	MS5-MT50	不整	0.63	0.18	0.16	186.54	10YR3/4	SI5001B P9-P10より古い
SI5001 B P12	MS549	楕円	0.30	0.28	0.31	186.58	10YR4/4	
SI5001 B P13	MS5-MT49	(楕円)	0.31	0.20	0.22	186.62	10YR4/4	
SI5003 P1	MT51	不整円	0.18	0.16	0.26	186.50	10YR4/3	
SI5003 P2	MT52	楕円	0.38	0.33	0.40	186.37	10YR4/3	
SI5003 P3	MT51-52	楕円	0.67	0.56	0.31	186.43	10YR4/3 ~ 5/4	
SI5003 P4	MT52	円	0.30	0.29	0.14	186.59	10YR4/3	
SI5004 P1	NA52	不整円	0.25	0.25	0.18	186.65	10YR3/4	
SI5004 P2	NA53	楕円	0.31	0.28	0.09	186.68	10YR3/4	
SI5004 P3	NA52	楕円	0.27	0.22	0.07	186.73	10YR3/4	
SI5004 P4	NA52-53	(楕円)	0.59	0.45	0.40	186.39	10YR3/4	SI5004Pより古い
SI5005 P1	MT53	不整円	0.31	0.30	0.40	186.55	10YR4/6	
SI5005 P2	MT52-53	楕円	0.23	0.20	0.43	186.46	10YR4/6	
SI5005 P3	MT52	不整	0.26	0.21	0.22	186.69	10YR4/6	
SI5005 P4	MT53	不整楕円	0.36	0.32	0.36	186.68	10YR4/6	
SI5005 P5	MT53	(楕円)	0.52	0.43	0.31	186.63	10YR3/3	HSKP5053 SI5005 P6-P7より古い
SI5005 P6	MT53	楕円	0.48	0.38	0.31	186.64	10YR2/1 ~ 3/1	HSKP5054 SI5005 P5より新しいP7より古い
SI5005 P7	MT53	不整楕円	0.28	0.29	0.30	186.65	10YR2/1	HSKP5056 SI5005 P5-P6より新しい
SI5005 P8	MT53	不整円	0.79	0.46	0.21	186.60	10YR3/2 ~ 4/3	HSKP5041
SI5012 P1	NA50	楕円	0.30	0.21	0.32	186.31	10YR4/4	
SI5012 P2	NIS60	不整	0.58	0.40	0.25	186.45	10YR3/4	
SI5012 P3	NA50	不整円	0.53	0.48	0.26	186.44	10YR2/1	
SI5012 P4	NIS60	不整円	0.34	0.22	0.38	186.28	10YR3/6	
SI5013 P1	MN-MC502	楕円	0.52	0.49	0.23	187.06	10YR5/6	
SI5014 P2	M051	楕円	0.31	0.26	0.15	187.15	10YR5/6	

## (2) 遺構外出土遺物

遺構外からは18ℓの遺物収納箱で縄文時代の土器210箱、石器84箱が出土した。土製品・石製品の出土は極僅かである。古代以降の遺物は、18世紀代の国産陶磁器が18ℓの遺物収納箱で1箱出土したほか、寛永通宝4枚、煙管の雁首が1点など、金属製品が少量出土した。これらは遺構に伴う遺物でないため、今回は掲載していない。

本遺跡は昭和50年代のは場整備の際に地山層まで削平が及んでおり、大部分で包含層が残存しない。そのため遺構外より出土した遺物は、削平を免れた低位面沢状部分、氾濫原、中位面南側町道部分からの出土である。地点により時期の傾向があり、低位面は縄文時代前期中葉および中期後葉、氾濫原は縄文時代中期中葉～中期後葉、中位面南側町道部分は縄文時代後期～晚期の遺物が出土している。ここでは適宜遺構内の遺物にも触れながら、遺物についての記述を行う。

### ① 土器・土製品

縄文時代前期中葉から晚期前葉の遺物が出土した。推定期より以下の第Ⅰ群～第Ⅴ群に大別した。各群は器形や文様などの特徴で型式比定が可能なものは細分した。

第Ⅰ群 縄文時代前期中葉

第Ⅱ群 縄文時代中期前葉～中葉

第Ⅲ群 縄文時代中期後葉

第Ⅳ群 縄文時代後期

第Ⅴ群 縄文時代晚期

#### 第Ⅰ群(第75図1～第81図1)

縄文時代前期中葉に属する一群である。低位面沢状部分、及び高位面南西部で検出した遺構(S I 5001、S I 5003～S I 5005、S I 5012など)から出土した。器形は円筒形の深鉢形土器である。底部から胴部はやや外傾しながら立ち上がり、胴部上半でやや膨らむものもある。口縁部は外反するものが多い。口縁は、第77図1が4単位の波状であるほかはすべて平縁である。胎土には纖維を多く含む。頸部の横位文より3類に細分した。本群は円筒下層b式に比定されるが、1類は円筒下層a式に上の可能性もある。

なお、本群の土器は、基本的に口頸部と胴部では地文の施文方向が異なり、それにより文様帯を区分することができる。ここでは、口頸部に横位に施文される文様範囲を「口頸部文様帶」、それ以外の胴部に施文される文様範囲を「胴部文様帶」とする。また、口頸部に横位に施される隆帯や縄側面圧痕は、口頸部文様帶にタガ状に施されるものが多いことから、区画文ではなく、口頸部に施された横位文様として捉え、「頸部横位文」と呼称する。

1類(第75図1～第76図4)：頸部横位文を施さないものである。本類はさらに、口頸部文様帶を施さないもの(第75図1～4)と、口頸部文様帶を施すもの(第76図1～4)の2種類に細分が可能である。

口頸部文様帶を施さないもの(第75図1～4)は口頸部から胴下部まで、縄文や單軸絡条体第1類を縦方向に施文する。そのうち第75図4は2種類以上の施文具を用い、口縁部付近と胴上部、胴下部の文様に変化を持たせている。口頸部に横位の文様が施されるもの(第76図1～4)は口頸部文様には縄側面圧痕や結節回転文、胴部文様には單軸絡条体第1類が回転施文される。第76図4は胴下部にも結節回

転文を横位に施文する。

**2類(第77図1～第81図1)**: 頸部横位文に隆帯を用いるものである。本類は、隆帯が1条のもの(第77図1～第79図2)と2条のもの(第79図3～第81図1)に細分が可能である。なお後者のうち第80図4～第81図1は隆帯の両脇に沈線を巡らす。隆帶上に施される文様は、1条の隆帯のものでは横位の単軸絡条体第1類(第77図3、第79図2)や指頭圧痕(第77図2)、斜繩文(第78図6)、爪形刺突文(第78図3～5)など多様だが、2条の隆帯では、すべてが爪形刺突文である。また、爪形刺突文が施されるものは比較的隆帯が低い傾向が看取できる。

地文は口頸部文様を横位に、胴部文様を縦位に施す。口頸部文様は結節回転文(第77図2・4～5、第78図1)、斜繩文(第77図1・3、第78図2～4・6、第79図3～4、第80図1・4)、羽状繩文(第79図1～2、第80図2～3、第81図1)があり、第77図2～3を除いて頸部横位文の下位まで施される。胴部文様は単軸絡条体第1類を縦や斜めに回転施文するものが最も多く、ほかに組繩文(第77図2)や羽状繩文と単軸絡条体第1類を交互に施文するもの(第79図2、第81図1)がある。

**3類(第52図1～14、第54図1～第56図8ほか)**: 頸部横位文に繩などの側面圧痕を用いるものである。高位面南西部の竪穴住居跡S I 5001、S I 5003～S I 5005、S I 5012などから出土し、低位面からは出土していない。地文上に2～3条の繩側面圧痕を施すもの(第52図1～3、第54図1～2・4～6、第55図1～2)と、低い隆帶上に2～3条の繩側面圧痕を施すもの(第52図4～5、第54図3・7)、単軸絡条体側面圧痕を用いるもの(第55図3・5)がある。口頸部地文は結束第1種羽状繩文を菱形状に組み合せたもの(第52図3・5、第54図6～7、第55図1～3)が最も多い。

#### 第II群(第82図1～第90図4)

繩文時代中期前葉～中葉に比定される土器群である。調査区南西部の氾濫原G VI層からの出土が大半を占める。遺構内では高位面南西部に位置するS I 5001覆土より出土している。円筒上層式に属するものをA類、大木式に属するものをB類とした。

**A類(第82図1～第87図4)**: 円筒上層式に属する一群である。器形はすべて深鉢形で、胴部地文は横方向に施文することを特徴とする。文様などの要素でさらに4細分した。

**A 1類(第82図1～2)**: 成形時、口縁下部を胴部より突出させて接合し隆帯を形成するものである。平口縁で、底部から胴部にかけては外傾して直線的に立ち上がる。口頸部文様帶には単軸絡条体を横位に4条押压し、その上に瘤状突起を貼り付ける。瘤状突起上には単軸絡条体が縦位に押压される。口唇部には刻目状の繩圧痕を施す。大和久震平により設定された仮称孤岱1式に比定される。

**A 2類(第82図3～第83図4)**: 主文様を繩側面圧痕で施す一群である。

器形は、口縁部は平縁(第82図3・5、第83図2・4)や波状(第82図4、第83図3)、小型の突起がつくものの(第83図1)があり、胴部は円筒状のものが多いが、球胴状のもの(第82図4)もある。第83図1～4は比較的小形のものであり、煮沸痕は認められない。そのうち第83図1～2・4は胎土に混入物が少なく、非常に軟質である。

文様は口頸部文様帶を区画するもの(第82図3～第83図2)と区画しないもの(第83図3～4)があり、区画には貼付隆線(第82図3～4)と繩側面圧痕(第82図5～第83図2)が用いられる。胴部文様は横回転の斜繩文が主であるが、羽状繩文(第82図5)も認められる。本類は円筒上層a式に比定できよう。なお、第82図5～第83図4は文様が簡易であり、典型的な円筒上層a式の特徴は持ち合はないが、

器形や胎土から円筒上層式と判断し、施文技法より本類に含めた。また、第83図1は胴部に垂下する2条一組の縄側面圧痕が施文されている。大木式土器の影響であろうか。

**A 3類(第83図5～第85図1)**: 口頸部文様帶を1～2条の貼付隆線で区画し、口頸部文様帶内を縦位の貼付隆線で4単位に分割するものである。

器形は口縁部が開き、胴部がやや膨らむものが多い。口縁部は平線(第83図5・7など)と、4単位の波状(第83図6・9など)があり、波状のものは頂部が平坦なもの(第83図9、第84図3など)とM字状を呈するもの(第83図6・8など)がある。口縁は貼付隆線により肥厚するもの(第83図5～9、第84図1～4)が多く、さらに鋸歯状の隆線が貼り付けられるもの(第83図5・7～8、第84図2～3)もある。

口頸部文様帶には3条一組の縄側面圧痕(第83図5～9)や貼付隆線(第84図2～4)で横位に文様を施し、文様間にはC字状縄圧痕(第83図5～8、第84図1～2)やC字状刺突(第83図9)、四角状刺突(第84図3～4)を充填する。いずれも隆帶上には縄側面圧痕もしくは単軸絡条体回転文が施される。胴部文様は結束第1種羽状縄文や単節斜縄文があり、いずれも横方向に施文される。

第84図6はすべて縄側面圧痕で文様を施文することから、本類の他の土器と様相を異にするが、器形や文様要素より本類に含めた。胴部には結節回転文が施文されることから、大木式土器の影響を強く受けたものと推定する。

従来、C字状縄圧痕が円筒上層b式の指標とされてきたが、本遺跡出土の土器には、C字状縄圧痕とC字状刺突が共に施文されるもの(第85図2)があること、器形や文様構成は類似するが充填文様がC字状縄圧痕(第86図1)のものとC字状刺突(第86図3)のものがあることから、C字状縄圧痕をもって円筒上層b式とすることは困難であると判断した。よってここでは、口頸部文様帶を縦位の貼付隆線で分割することを指標とし、円筒上層b式に比定する。

**A 4類(第85図2～第87図4)**: 口頸部文様帶を2本の貼付隆線で区画し、文様帶内には隆線を横位に連続させて文様を施すものである。

器形は、口縁部が開き、胴部は膨らむもの(第86図1～3、第87図2)と、膨らみの弱いもの(第85図4、第86図4、第87図1)がある。口縁は平線(第85図2～第86図3、第87図2)と波状(第86図4、第87図1・3～4)があり、平線では胴部が膨らみ、波状では胴部の膨らみが弱いものが多い。口縁端部は貼付隆線により肥厚するもの(第85図2～第87図2)と、貼付隆線が施されないもの(第87図3～4)がある。口縁端部には鋸歯状に隆線が貼り付けられるものが多い。

口頸部文様は、隆線間にC字状縄圧痕(第85図3～第86図1)やC字状刺突(第86図2～第87図1)、四角状刺突(第87図2～4)を充填する。第85図2はC字状縄圧痕とC字状刺突がともに施されている。第85図4は3条一組の縄側面圧痕が用いられることから、A 2類に含まれる可能性もあるが、文様の施文方向を重視し本類に含めた。胴部文様は結束第1種羽状縄文が多く、縄端は結節される。施文方向は横である。

本類はA 3類と同理由により、C字状刺突をもって円筒上層c式とはせず、口頸部文様帶に横位に連続した文様を施すことを指標とし、円筒上層c式に比定する。

**B類(第88図1～第90図4)**: 大木式に属する一群である。文様などの特徴より2細分した。

**B 1類(第88図1)**: 口縁の開く朝顔状の器形である。口縁には台形状の突起があるが、単位数は破損のため不明である。突起の頂部は平坦に肥厚し、その上にボタン状の突起が付く。区画文は波頂部より

垂下し、口縁より5cmの付近で緩やかに横位へと方向を変える。区画文は部分的に隆線がとぎれ、刺突列に置き換わっている。胴部文様は不定方向の単節繩文である。器形より円筒上層式には含まれないと判断し、本類に含めたが、詳細な型式比定は困難である。

**B 2類(第88図2～第90図4)：**深鉢形(第88図2～第89図6)のほかに、鉢形(第90図1～4)がある。深鉢形は円筒形を呈し、口縁部に段を持つもの(第88図4、第89図1・3～4)、口縁部が「く」の字状に開くもの(第88図3、第89図2・5～6)、口縁から胴部が直線的に繋がるもの(第88図2)がある。鉢形は小形で文様が施文されないもの(第90図1～2)と、中形で口頭部文様帯をもつもの(第90図3～4)がある。小形のものは胎土に混入物が少なく、軟質である。中形のものは、口縁部内側が肥厚し、内湾する。

口頭部文様帯は、1条の低い隆帶で区画される。文様は両脇に縄側面圧痕を伴う隆線もしくは縄側面圧痕で構成される。縦位に文様帯を分割するもの(第88図2～3、第89図1・3～4、第90図3～4)が多く、内部には三角状(第89図1～5)やY字状(第88図3)の文様を施す。口頭部文様帯の下にはY字状(第90図3)やV字状(第88図3)、弧状(第88図2、第89図1、第90図4)に縄側面圧痕が施される。胴部文様は無節繩文(第88図3)や単節繩文(第88図2など)、結束第1種羽状繩文(第89図3・5)などがある。施文方向は無節繩文や単節繩文では縦位と横位があり、結束第1種羽状繩文は縦位である。第89図1は胴部文様を横位に施文した後、結節繩文を縦に9条施文している。

本類は文様などの特徴より大木7b式に比定する。ただし胴部文様が横位に施文されるもの(第88図2～3、第89図1～2)やC字状縄圧痕をもつもの(第89図5)など、円筒上層式の影響が見られるものもある。

### 第III群(第91図1～第94図2)

縄文時代中期後葉に属する一群である。低位面沢状部分、氾濫原、中位面南側町道部分から出土した。文様などの特徴で2細分した。

**1類(第91図1～3)：**いずれも深鉢形を呈する。全形が復元できるものはないが、胴部が膨らみ、頭部でややくびれ、口縁が開く器形と推定される。第91図1は微隆線で縦位の梢円形文を施す。第91図2～3は単節斜繩文を地文とし、懸垂状の沈線を施す。本類は文様要素より大木9式に比定する。

**2類(第91図4～第94図2)：**いずれも深鉢形を呈する。第91図4～第92図8は文様が施されるものである。沈線でJ字状や横S字状などの文様を施し、単節繩文や複節繩文(第91図5、第92図7)が充填される。第92図7は微隆線で文様が施されている。第92図9～第94図2は繩文のみのものである。器形や胎土、焼成などで、本類に含まれると判断した。本類は器形、文様要素などより、大木10式に比定する。

### 第IV群(第95図1～第97図6)

縄文時代後期に属する一群である。深鉢形(第95図1～第96図5)のほか、鉢形(第96図6)、壺形(第97図1～3)、台付鉢形(第97図4～6)がある。主に中位面南側町道部分から出土した。

第95図1～11、第97図2～3は文様が施文される深鉢形土器である。第95図1～5は隆線で文様が施され、第95図1・3～5は隆線上に刺突が施される。第95図6～7は縄側面圧痕で文様が施されるものである。第95図8～11、第97図2～3は沈線で文様が施される。第95図12～第97図1・4～6は文様が認められないものである。また、第96図7はミニチュア土器である。これらは胎土、焼成状況が文様のある第95図1～11などに類似することから本群に含めた。

文様が施文される第95図1～11、第97図2～3は縄文時代後期初頭に属すると判断する。第97図2の

みは後期前葉まで下る可能性がある。文様のない第95図12～第97図1・4～6は詳細な時期比定は困難であるが、第97図1・4～6は、器形より縄文時代後期後葉に属する可能性が考えられる。

#### 第V群(第97図7～第98図7)

縄文時代晩期に属する一群である。高位面南東部及び中位面南側町道部分より出土した。器形は鉢形(第97図7～11、第98図1～2)、深鉢形(第97図12、第98図3～6)、浅鉢形(第97図13～15)、台付鉢形(第98図7)がある。鉢形としたものの中には底部に台が付く可能性のあるものもある(第97図8～10など)。

第97図7～15は文様をもつものである。第97図8～9は口縁部に三叉文が施文される。第97図13～15は雲形文が施文される。第98図1～7は文様が施文されないものである。地文には斜綱文(第98図1・3～5)もしくは条痕(第98図6)が施文されるものと、無文(第98図2)のものがある。

三叉文が施文される第97図8～9は大洞B2式に比定できる。おそらく第97図7・10・12も同時期であろう。雲形文が施文される第97図13～15は大洞C1式に比定するが、第97図13は大洞C2式に下る可能性もある。文様のない第98図1～7は詳細な時期は特定しがたい。

#### ②石器・石製品

ここでは、製品として加工、使用された狭義の石器に加え、使用痕や加工痕のある剥片類、石器製作工程に関わる石核、剥片類も含める。本遺跡では縄文時代前期中葉～晚期前葉にかけて、断続的に人が生活していたことが、遺構や出土土器より明らかとなっている。よって、出土した石器はそれに伴い使用されたものと推定できるが、各石器の詳細な時期は定かではない。ただし、半円状扁平打製石器については、縄文時代前期に特徴的に見られる石器であることから、縄文時代前期に属するものと判断する。出土した石器の数量は次の表の通りである。

第7表 石器・石製品出土量

種別	石核	石槍	石鏃	石鏡	石鑿	スクレイバー	二次加工も削り	剥片類	石核	台石
遺構内	5	1	3	5	4	36	5	251	0	0
遺構外	24	2	6	23	9	57	6	522	14	3
合計	29	3	8	28	12	93	10	773	14	3
種別	磨製石斧	半円状扁平打製石器	石鏃	研磨	凹石	磨石	磨石	石核	石製品	ベンガラ素材
遺構内	0	7	0	3	17	2	11	3	1	0
遺構外	4	0	1	2	8	12	21	9	3	2
合計	4	7	1	5	25	14	32	12	4	2

**石鏃(第99図1～24)** 石鏃は茎の無い無茎鏃(第99図1～4)、茎が作出される有茎鏃(第99図5～15)、茎の作り出しが明瞭でない尖・円基鏃(第99図16～24)に大別できる。無茎鏃は、基部の形状が逆V字を呈するもの(第99図1～2)、逆U字状を呈するもの(第99図3)、平坦なもの(第99図4)に細分できる。有茎鏃は第99図5が凹基である以外は凸基である。尖・円基鏃は平面の形状から第99図16～20が尖基、第99図21～22は円基、第99図23～24は柳葉形である。石鏃は両面に二次加工が施されるものが多数を占めるが第99図4・10～11・17～18は素材剥離面が大きく残る。特に第99図18は基部の加工が粗雑であることから、未製品の可能性も考えられる。図示した24点のうち、6点(約25%)には基部にアスファルトが付着する。

**石槍(第100図1～2)** 2点とともに、両面に二次加工が施される。平面形は木葉形を呈する。

**石錐(第100図3～7)** 第100図3～4は両面二次加工により錐部が作出されており、第100図4は基部

にも部分的に二次加工が施されている。第100図5～7は不定形の剥片の一部に錐部を作出したものである。いずれも両面ともに素材剥離面が残る。

**石匙(第101図1～第104図5)** 石匙は平面形状より縦型(第101図1～第103図3)と横型(第103図4～第104図5)に大別できる。縦型石匙はいずれも縦長剥片を素材とし、素材の打面側につまみを作出す。第101図1～4は刃部が尖るもので、第101図1～3は片側側縁端部が、第101図4は先端が尖る。第101図5～6は刃部先端が丸みを帯びるものである。第101図7～第103図1は刃部先端が平坦なもので、第101図7～第102図1はつまみに対して先端が平行であり、第102図2～第103図1はつまみに対して先端が斜めである。第103図2・3は刃部が折損するため、平面形は定かではない。横型石匙は縦長剥片を素材とするもの(第103図4～5、第104図4～5)と、横長剥片を素材とするもの(第104図1～3)がある。第103図4～第104図1は刃部に対してつまみがまっすぐつき、第104図2～5は刃部に対してつまみが斜めにつく。つまみは素材の打面側に作出されるもの(第104図1～3・5)と素材の側縁に作出されるもの(第103図4～5、第104図4)がある。なお、第104図3は刃部が形成されていないことから、未製品の可能性が高い。

**石箒(第105図1～第106図1)** 第105図1～3は両面に二次加工を施す。第105図4～6は横長剥片を素材とし、素材側縁に刃部を作出す。第105図7～第106図1は縦長剥片を素材とし、素材の末端縁に刃部を作出す。刃部は、第105図4のみが直刃で、ほかはすべて丸刃である。

**スクレイパー(第106図2～第108図7)** 第106図2～5、第108図6は箒状の刃部を作出した、いわゆる搔器である。いずれも縦長剥片を素材とし、第106図2～4は素材の末端縁に、第106図5は側縁に刃部を作出す。第106図6～7は素材の両側縁と末端縁に二次加工が施されるものである。どちらも長方形の縦長剥片を素材とする。第106図8～第107図5は素材の二辺に二次加工を施すものである。第106図8は方形、第107図1～4は木葉形、第107図5は錐状を呈する。素材は第107図1が横長剥片、ほかは縦長剥片である。第107図6～第108図1は片側の側縁端部が尖るものである。素材は第107図6、第108図1は縦長剥片、第107図7～9は横長剥片である。第108図2～5・7は素材の一辺に二次加工が施されるものである。いずれも縦長剥片を素材とし、片側側縁に刃部を作出す。

**礫器(第109図1～2)** 第109図1は扁平な円礫の一部に両面から調整加工を施し、刃部を作出したものである。第109図2はほぼ全面に二次加工が施されている。

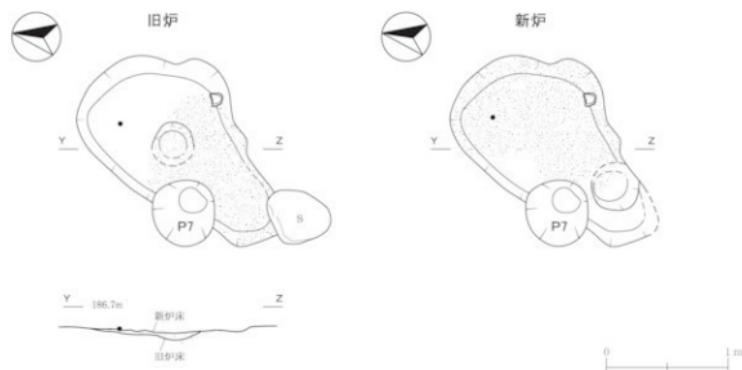
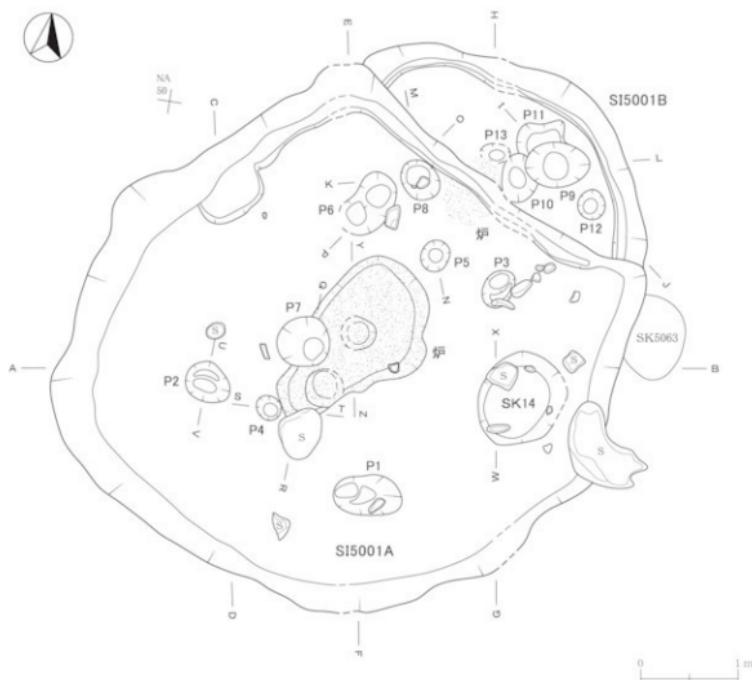
**磨製石斧(第109図3～5)** 平面形はいずれも撥形と推定される。刃部が残存する第109図3～4については両刃である。第109図4には刃こぼれの痕跡が残る。また、基部が折損しているが、折損部に加工が施されていることから、転用された可能性が考えられる。

**半円状扁平打製石器(第65図6～7、第69図6～7ほか)** 高位面南西部に位置する竪穴住居跡(S I 5001, S I 5003, S I 5012)より出土した。遺構外からは出土していない。半円状を呈するもの(第65図7、第69図6～7、第70図3)と隅丸長方形を呈するもの(第70図1～2)がある。半円状を呈するものは、すべて周縁に二次加工を施す。隅丸長方形を呈するものは長辺のみに二次加工を施すものと、周縁に二次加工を施すものとがある。

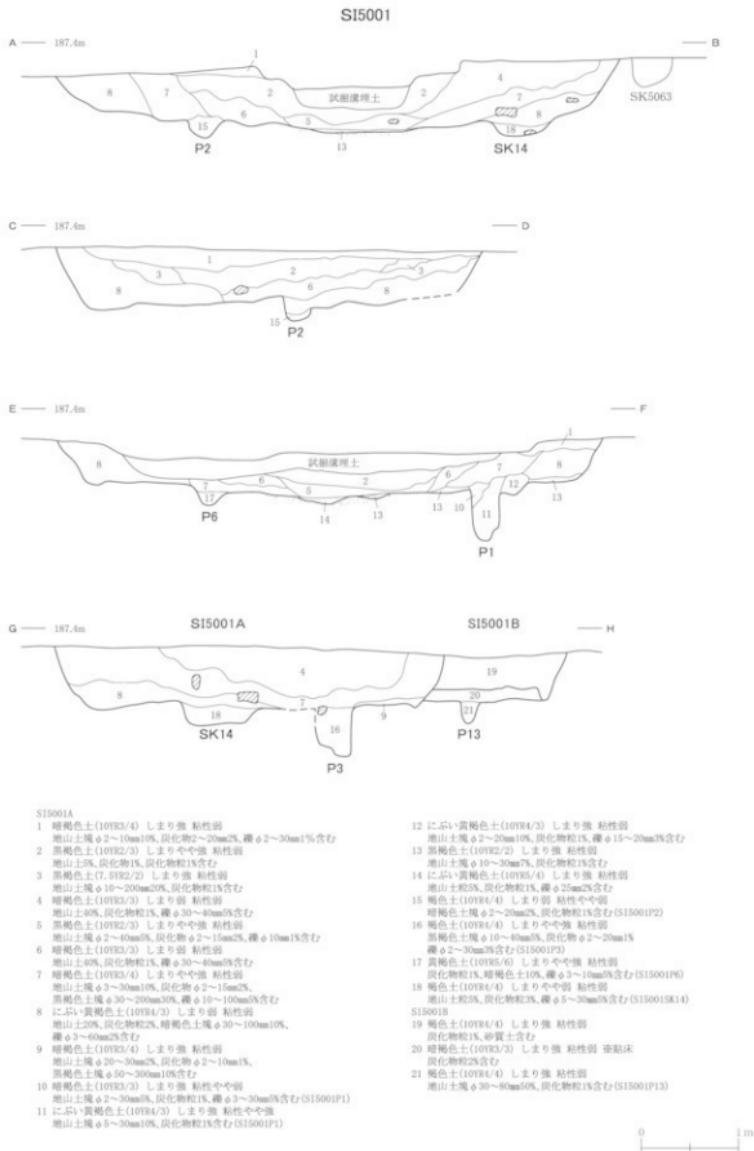
**石錘(第110図1)** 扁平な円礫を素材とし、抉りを左右対称に入れる。片面には調整加工が施される。

**凹石(第110図2～5)** いずれも円礫を素材とする。第110図2・4～5は表裏面に凹痕が形成される。第110図3は表面に凹痕が形成され、裏面には磨痕が確認できる。

SI5001

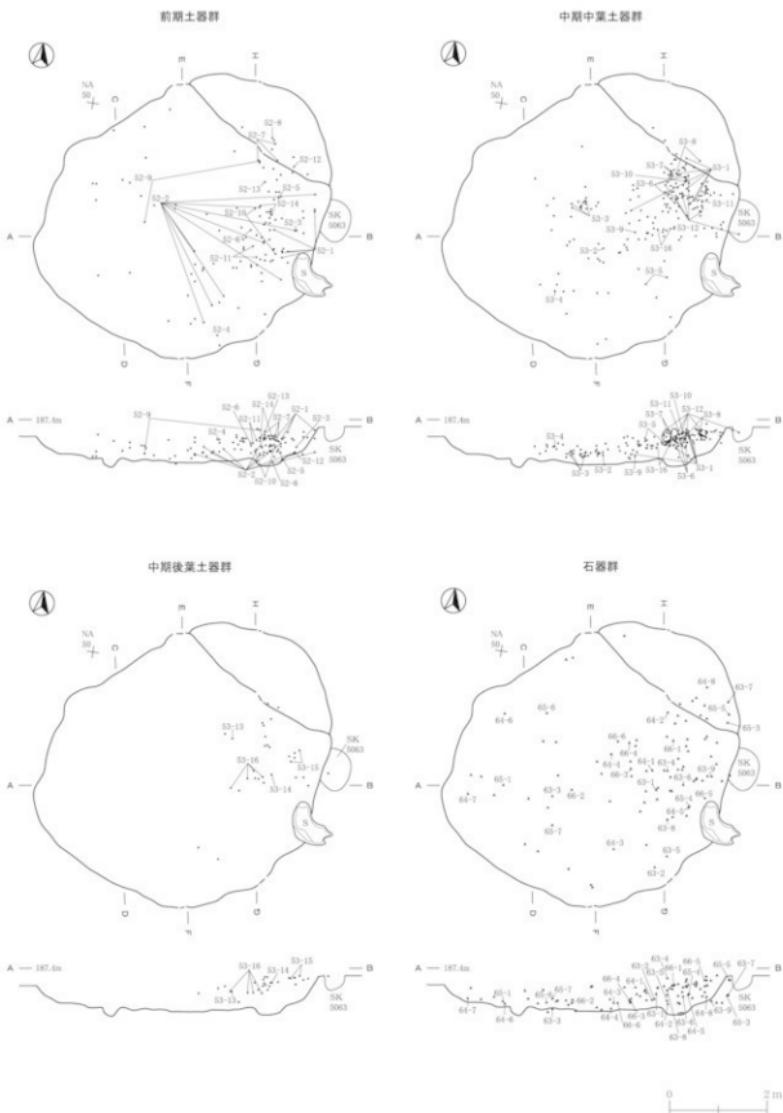


第20図 SI5001竪穴住居跡（1）



第21図 S I 5001竪穴住居跡（2）

SI5001



第22図 SI5001竪穴住居跡（3）

## SI5001

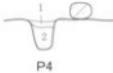
U —— 186.9m —— V



SI5001P2

1 黄褐色土(10YR4/4) しまり弱 粘性やや弱  
炭化物粒1%、細褐色土塊  $\phi$  2~20mm2%含む

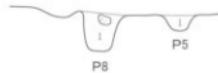
S —— 186.9m —— T



SI5001P4

1 黄褐色土(10YR4/4) しまり強 粘性やや弱  
地山土 $\phi$ 、炭化物粒5%、細褐色土塊10%含む  
2 黄褐色土(10YR4/6) しまりやや弱 粘性やや弱  
地山土 $\phi$ 、細褐色土塊10%含む

M —— 186.9m —— N



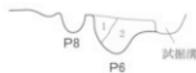
SI5001P8

1 黄褐色土(10YR4/3) しまりやや弱 粘性やや弱  
地山土 $\phi$ 1%、炭化物粒2%含む  
SI5001P9

1 黄褐色土(10YR4/6) しまりやや強 粘性やや弱  
炭化物粒2%， $\phi$  10~30mm5%含む

O —— 186.9m

—— P

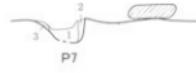


SI5001P6

1 黄褐色土(10YR5/6) しまりやや強 粘性弱  
炭化物粒1%、細褐色土 $\phi$ 10%、 $\phi$  3~10mm5%含む  
2 黄褐色土(10YR4/6) しまりやや強 粘性やや弱  
炭化物粒2%， $\phi$  3~10mm5%含む

Q —— 186.9m

—— R



SI5001P7

1 黒褐色土(10YR2/2) しまり強 粘性弱  
地山土 $\phi$ 1%， $\phi$  10mm2%含む  
2 細褐色土(10YR3/3) しまり強 粘性弱  
地山土 $\phi$ 1%  
3 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり強 粘性弱  
 $\phi$  10~20mm15%含む

K —— 187.5m

—— L



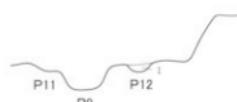
SI5001P9

1 細褐色土(10YR3/3) しまり強 粘性弱  
炭化物粒 $\phi$  1~8mm2%，砂質土20%、土器小片、被熱した小縫含む  
SI5001P10

2 細褐色土(10YR3/4) しまり強 粘性弱  
炭化物粒3%，砂質土10%、土器小片、被熱した小縫含む

I —— 187.5m

—— J



SI5001P12

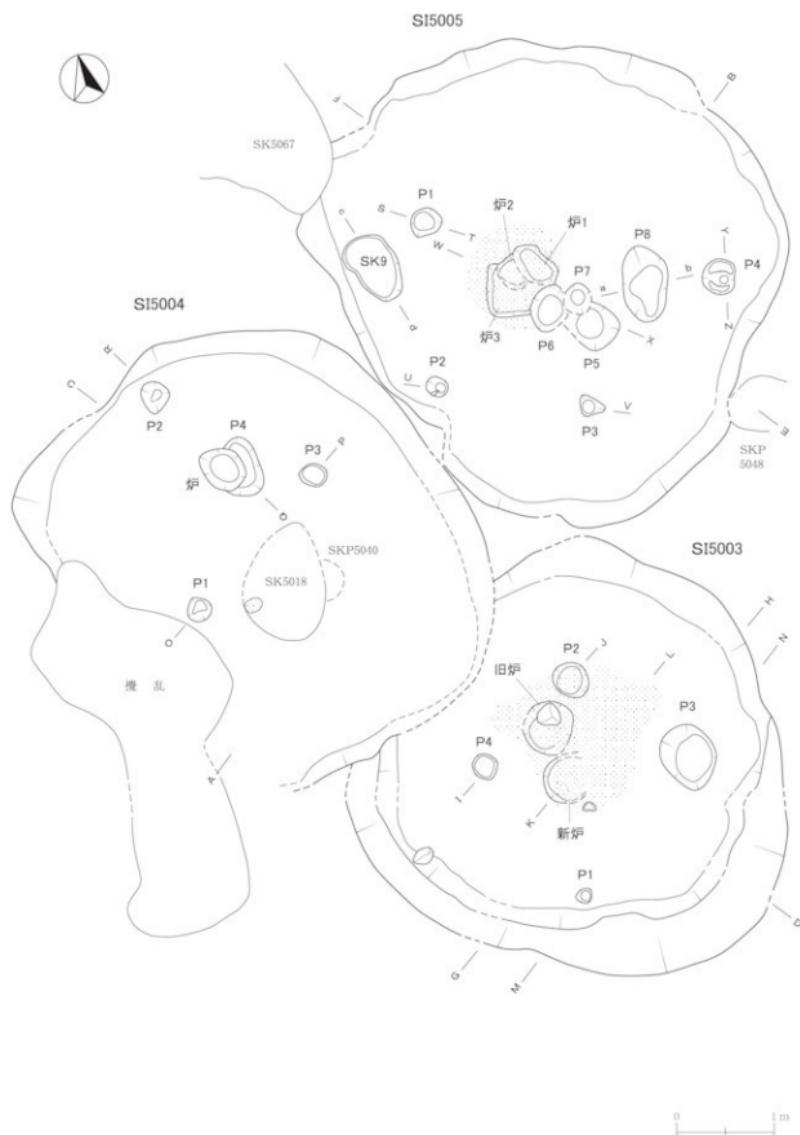
1 黄褐色土(10YR4/4) しまり強 粘性弱  
地山土 $\phi$  30~80mm50%，炭化物粒1%含む

## SK14

W —— 186.9m —— X



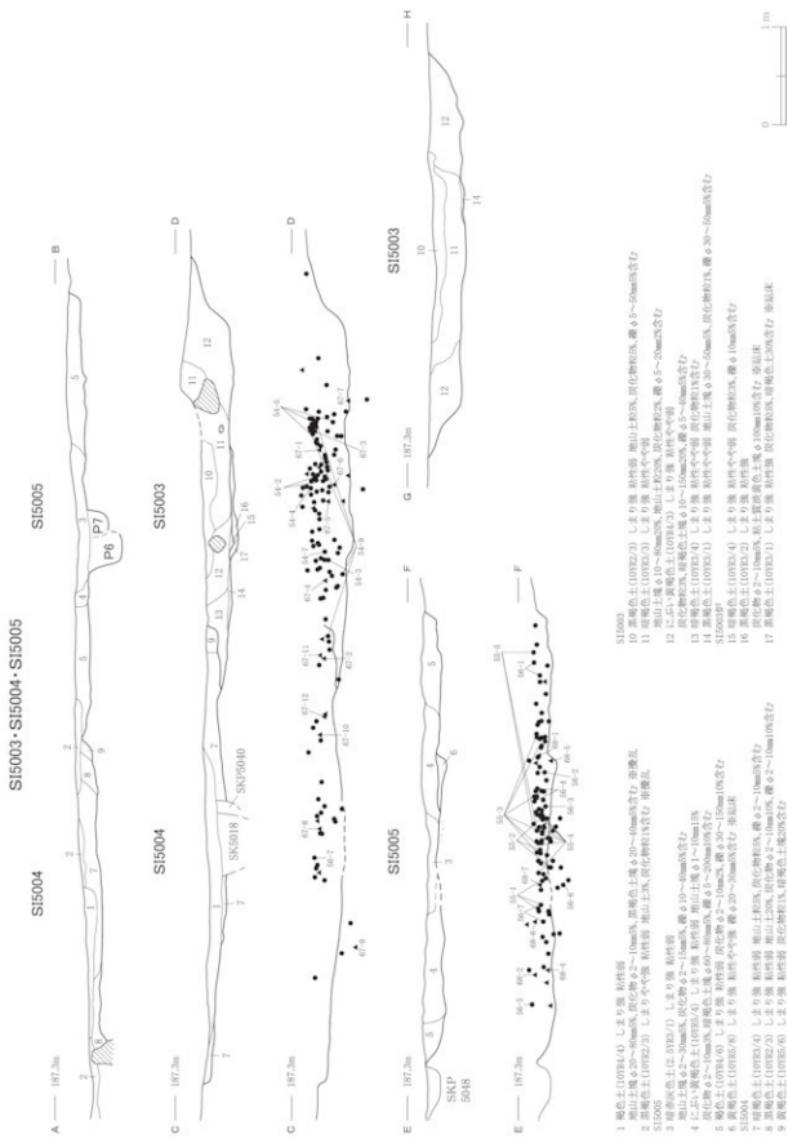
第23図 S I 5001竪穴住居跡 (4)



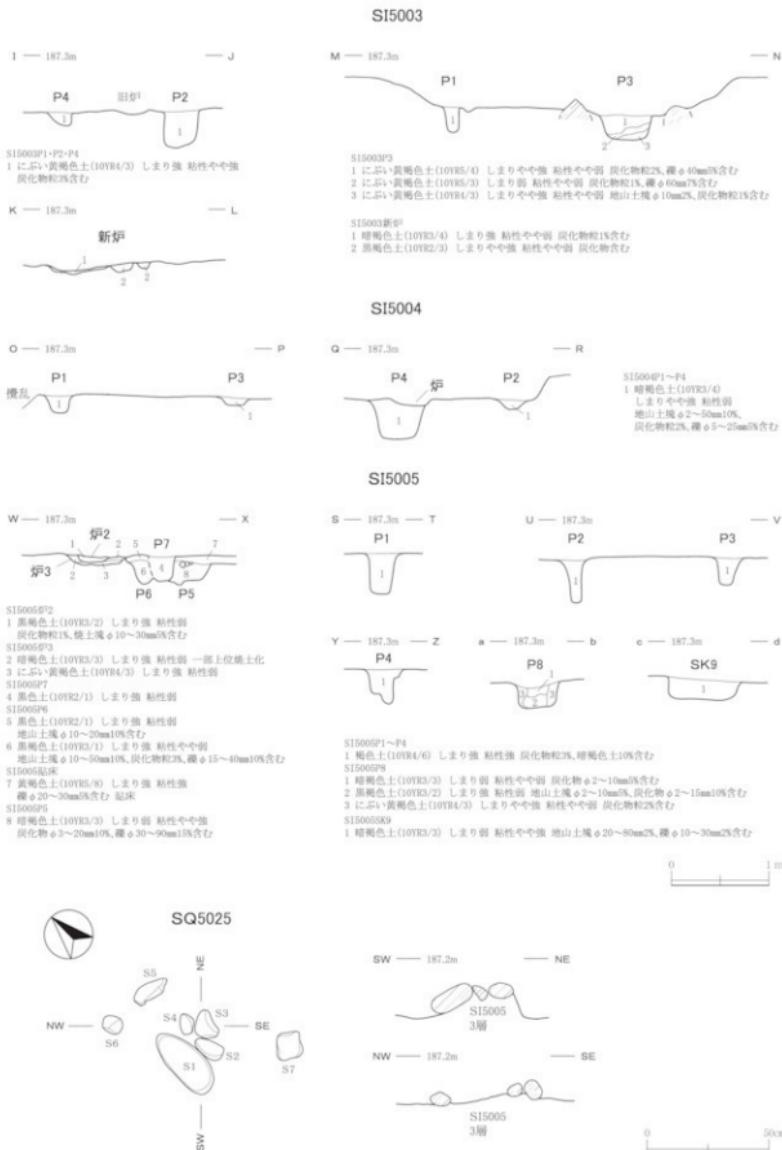
第24図 S I 5003・5004・5005竪穴住居跡（1）



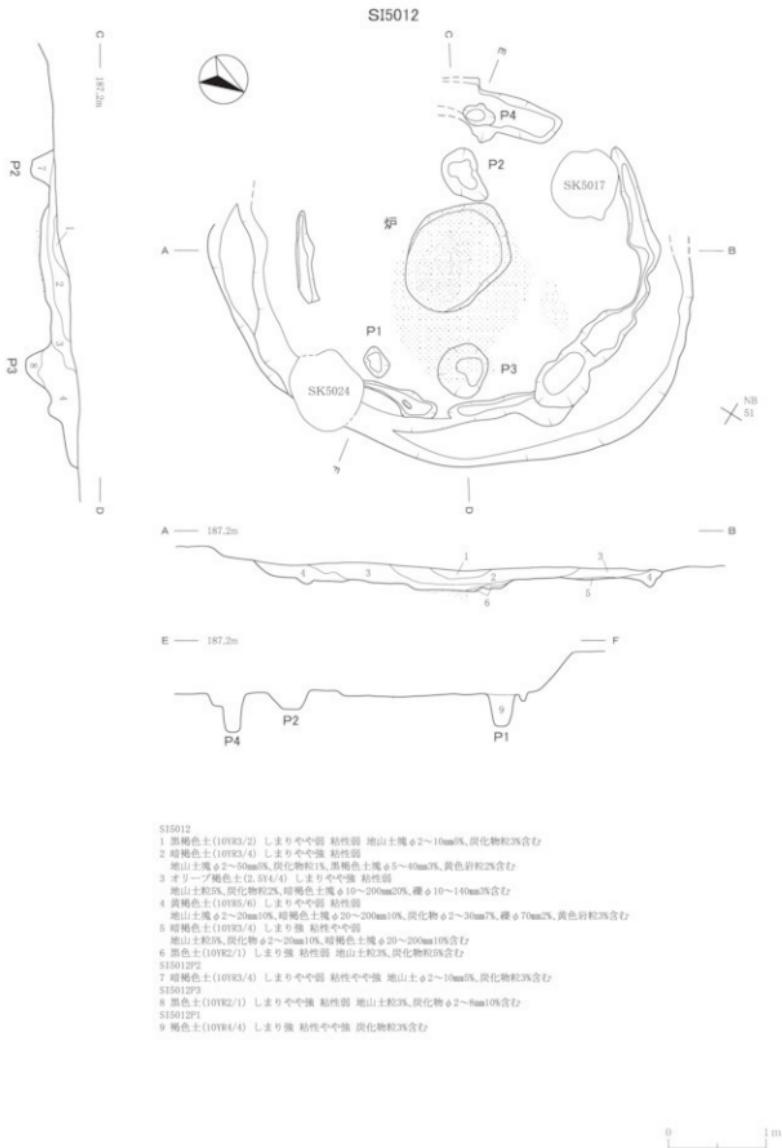
第25図 S I 5003・5004・5005竪穴住居跡 (2)・S Q 5025配石遺構 (1)



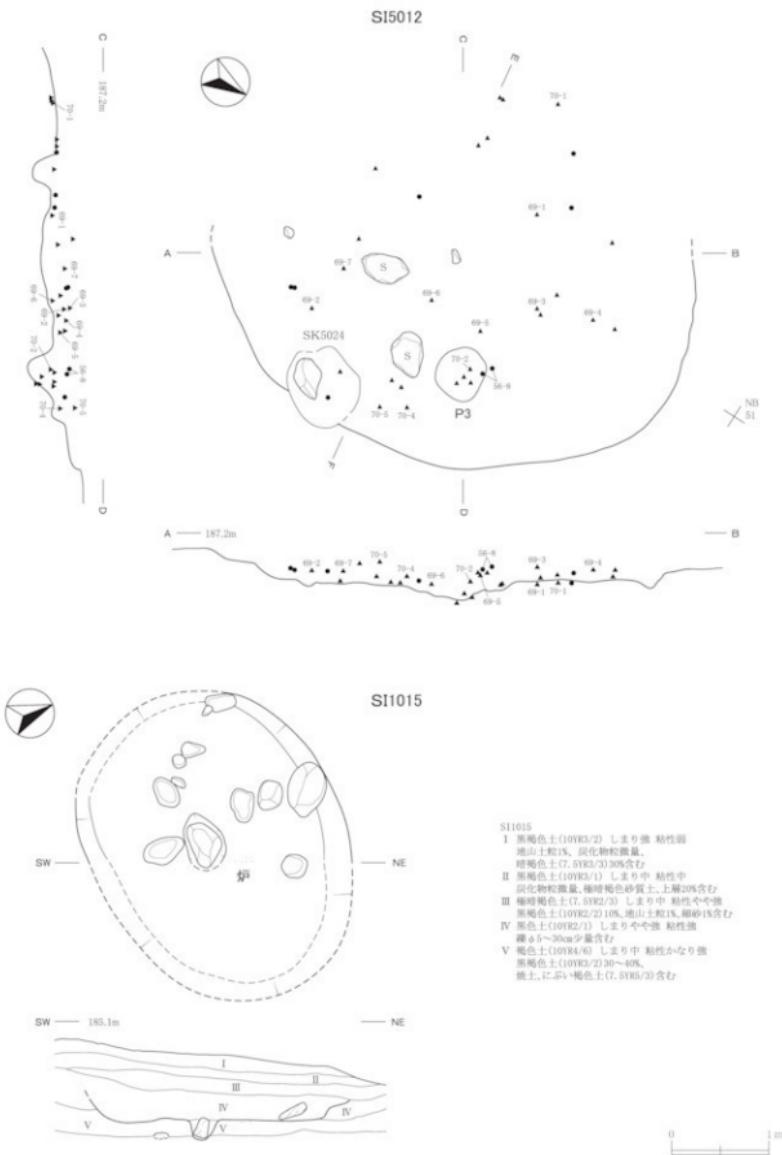
第26図 S I 5003・5004・5005竪穴住居跡（3）



第27図 SI5003・5004・5005竪穴住居跡 (4)・SQ5025配石遺構 (2)

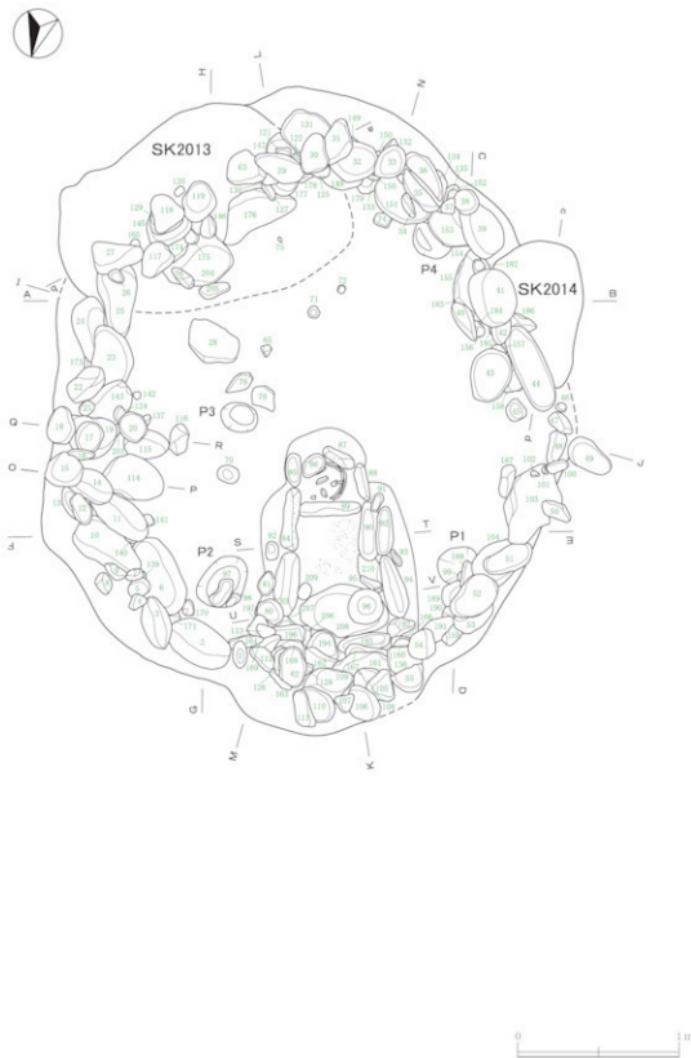


第28図 S I 5012竪穴住居跡（1）



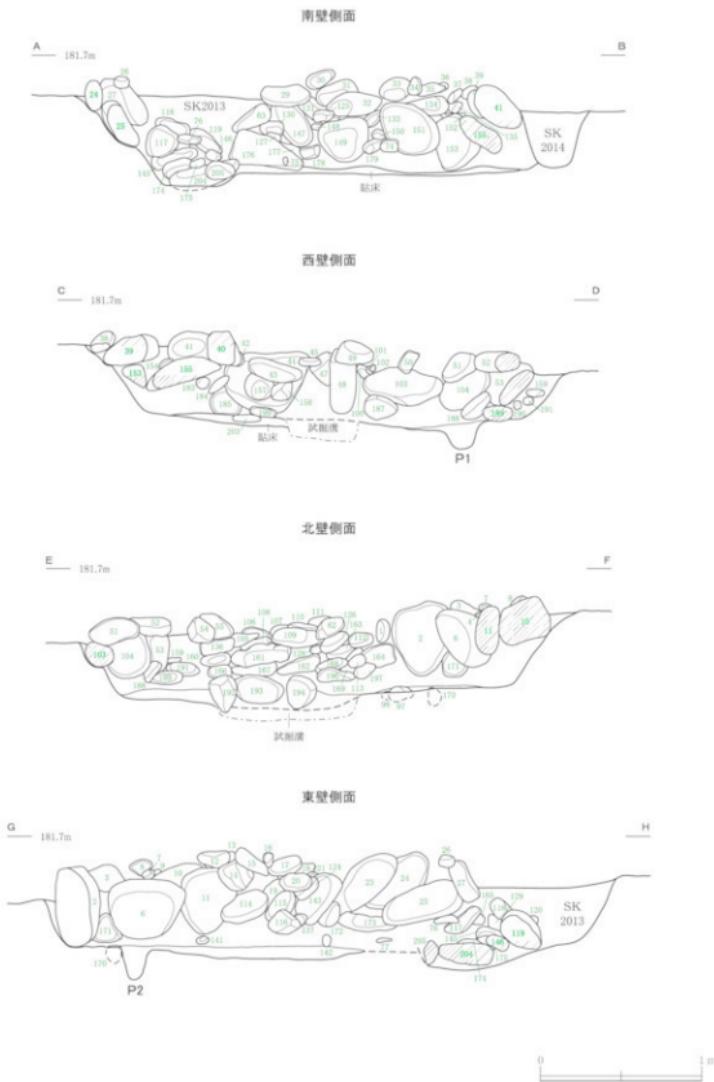
第29図 S 15012竪穴住居跡（2）・S 1015竪穴住居跡

SI2001



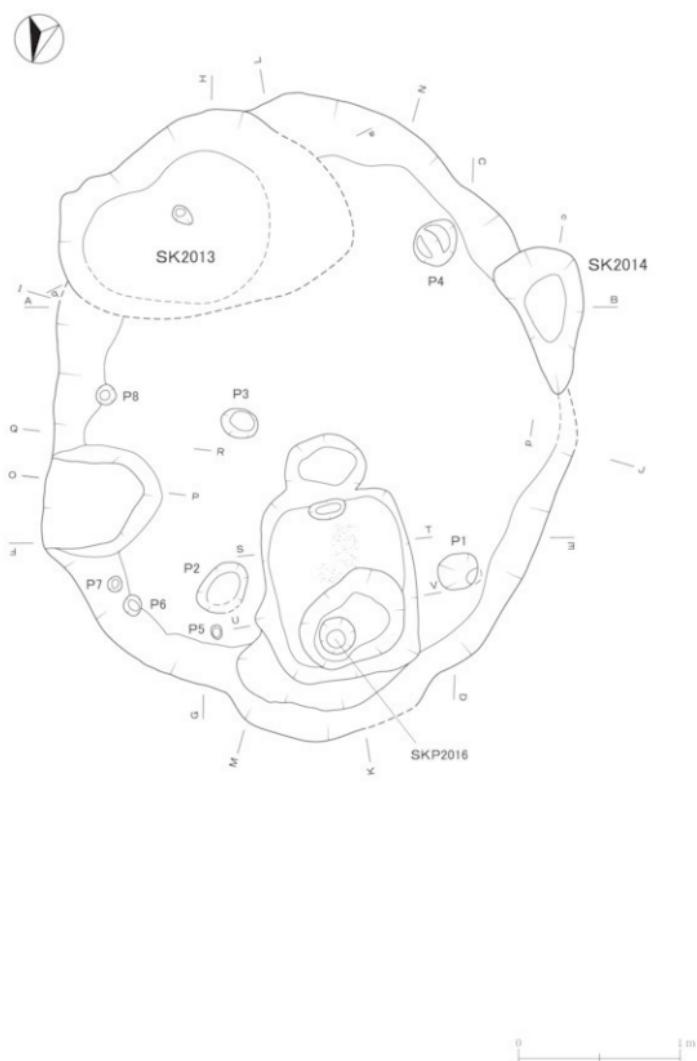
第30図 SI2001竪穴住居跡（1）・SK2013-2014土坑（1）

SI2001



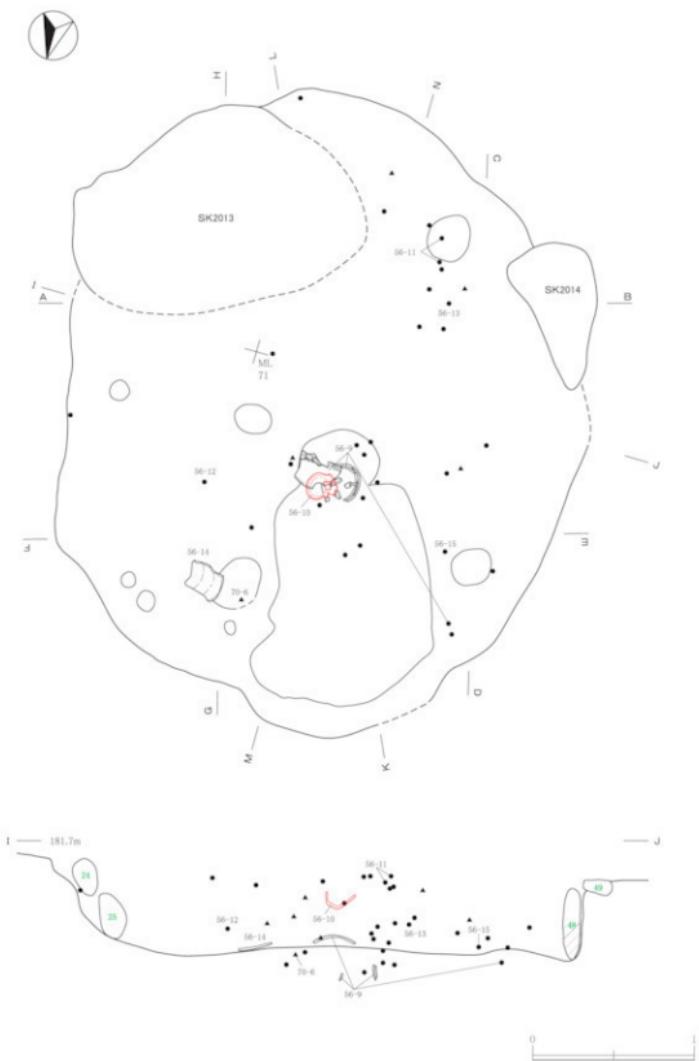
第31図 S I 2001竪穴住居跡（2）

SI2001



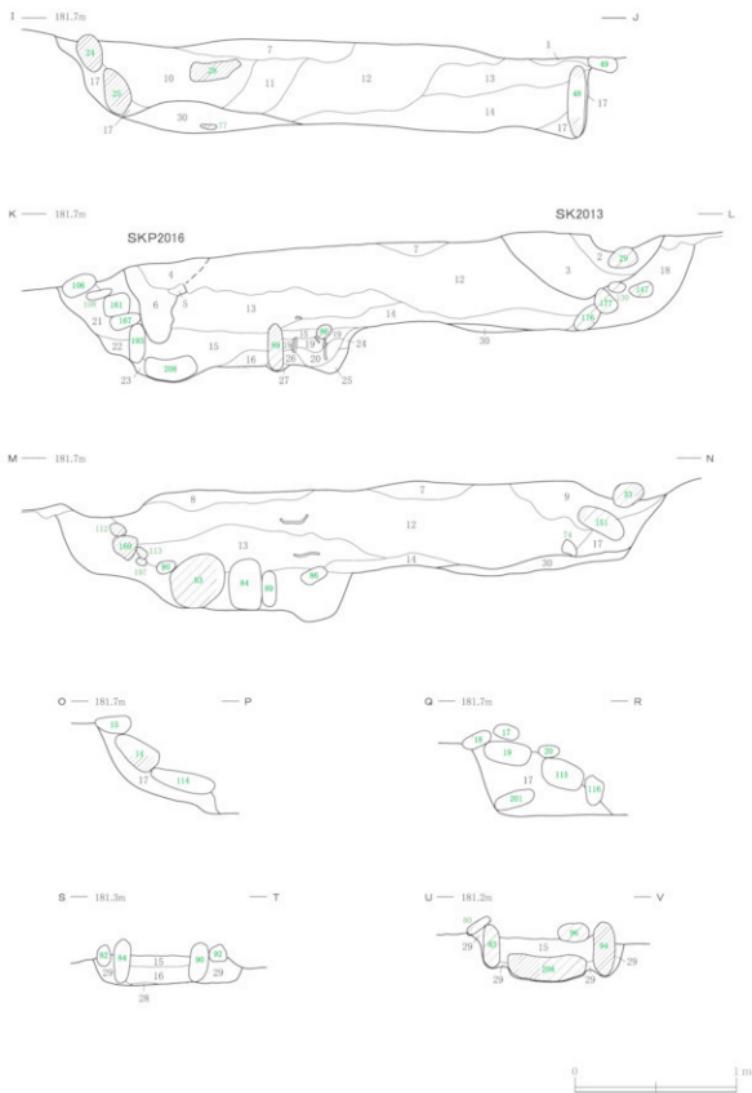
第32図 SI2001竪穴住居（3）・SK2013・2014土坑（2）

SI2001



第33図 S I 2001竪穴住居跡（4）

SI2001



第34図 SI2001竪穴住居跡（5）

SI2001

- 1 黑褐色土(10YR2/2) しまり強 粘性やや弱  
炭化粒2%, 地山砂含む 水田耕作土
- 2 黑褐色土
- 3 増褐色砂質土(10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや強  
地山砂0%, 炭化粒3%含む
- 4 黑褐色砂質土(10YR2/3) しまり強 粘性やや強  
地山砂0%, 炭化粒3%含む
- 5 黑褐色砂質土(10YR2/3) しまり強 粘性やや弱  
炭化粒2%含む
- 6 增褐色砂質土(10YR2/4) しまり弱 粘性やや弱  
炭化粒3%, 糜子10mm%含む
- 7 增褐色砂質土(10YR3/4) しまり強 粘性やや弱  
炭化粒5%, 地山砂含む
- 8 增褐色砂質土(10YR2/2) しまりやや強 粘性やや弱  
炭化粒3%, 糜子10~30mm%含む
- 9 黑褐色砂質土(10YR2/2) しまり強 粘性やや弱  
炭化粒3%, 地山砂含む
- 10 黑褐色砂質土(10YR4/4) しまり弱 粘性弱
- 11 增褐色砂質土(10YR3/2) しまり強 粘性弱
- 12 黑褐色砂質土(10YR2/3) しまりやや強 粘性やや強  
炭化粒3%, 地山砂含む
- 13 增褐色砂質土(10YR2/3) しまり強 粘性やや弱  
炭化粒0.2~10mm%, 地山砂含む~10~50mm%含む

14 増褐色砂質土(10YR3/4) しまりやや弱 粘性弱  
炭化粒2%, 地山砂10%含む15 増褐色砂質土(10YR3/4) 砂 しまり強 粘性弱  
地山砂含む16 増褐色砂質土(10YR3/2) 砂 しまり強 粘性弱  
小礫・砂5%含む17 増褐色砂質土(10YR4/4) しまり強 粘性弱  
黑褐色砂質3%含む18 増褐色砂質土(10YR3/2) しまりやや中弱 粘性強  
炭化粒1%, 地山砂5%含む19 増褐色砂質土(10YR3/2) しまり強 粘性弱  
炭化粒2%, 黑褐色砂6%10mm1個含む20 黑色砂質土(10YR1.7/1) しまり強 粘性弱  
炭化粒1%, 粗砂含む21 増褐色砂質土(10YR3/2) しまり強 粘性弱  
炭化粒1%, 地山砂4%含む22 黑褐色砂質土(10YR2/2) 砂 しまり強 粘性弱  
炭化粒1.5%, 地山砂30%含む

23 黑褐色砂質土(10YR3/2) しまり強 粘性弱

24 增褐色砂質土(10YR3/2) しまり強 粘性弱

25 黑褐色砂質土(10YR3/2) 砂・シルト しまり強 粘性弱

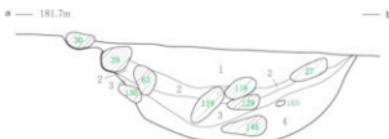
26 增褐色砂質土(10YR3/2) しまり強 粘性弱  
小礫・砂5%含む

27 黑褐色砂質土(10YR1.7/1) しまり強 粘性弱

28 小礫層

29 增褐色砂質土(10YR3/2) しまり強 粘性弱  
小礫・砂5%含む30 増褐色砂質土(10YR3/2) しまり強 粘性弱  
炭粘土

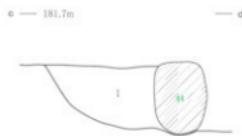
SK2013



SK2013

- 1 黑褐色砂質土(10YR2/2) しまり強 粘性やや強  
地山砂5%, 黑褐色砂塊 20~25mm%, 炭化粒5%含む
- 2 增褐色砂質土(10YR3/3) しまりやや弱 粘性やや強  
地山砂5%, 炭化粒3%含む
- 3 黑褐色砂質土(10YR2/2) しまり強 粘性やや強  
地山砂5%, 炭化粒2%含む
- 4 增褐色砂質土(10YR3/4) しまりやや弱 粘性やや弱  
地山砂5%, 炭化粒2%含む

SK2014



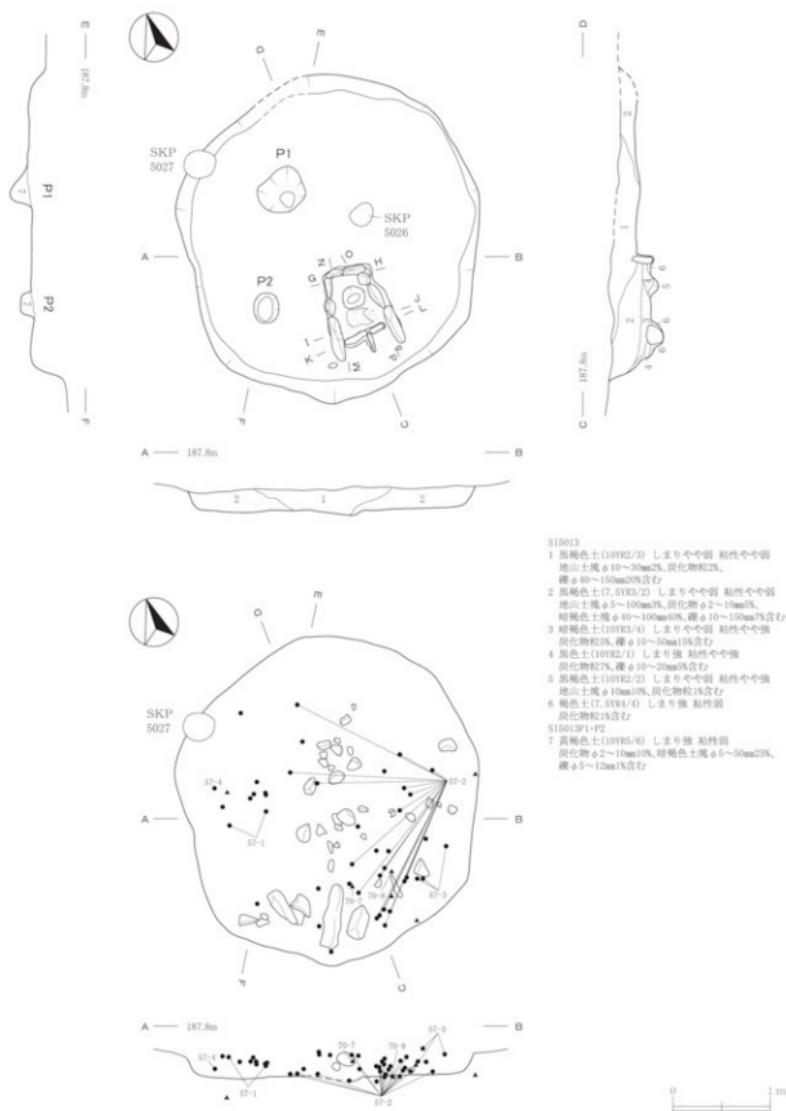
SK2014

- 1 黑褐色砂質土(10YR2/3) しまりやや弱 粘性やや強  
地山砂5%, 炭化粒2%含む



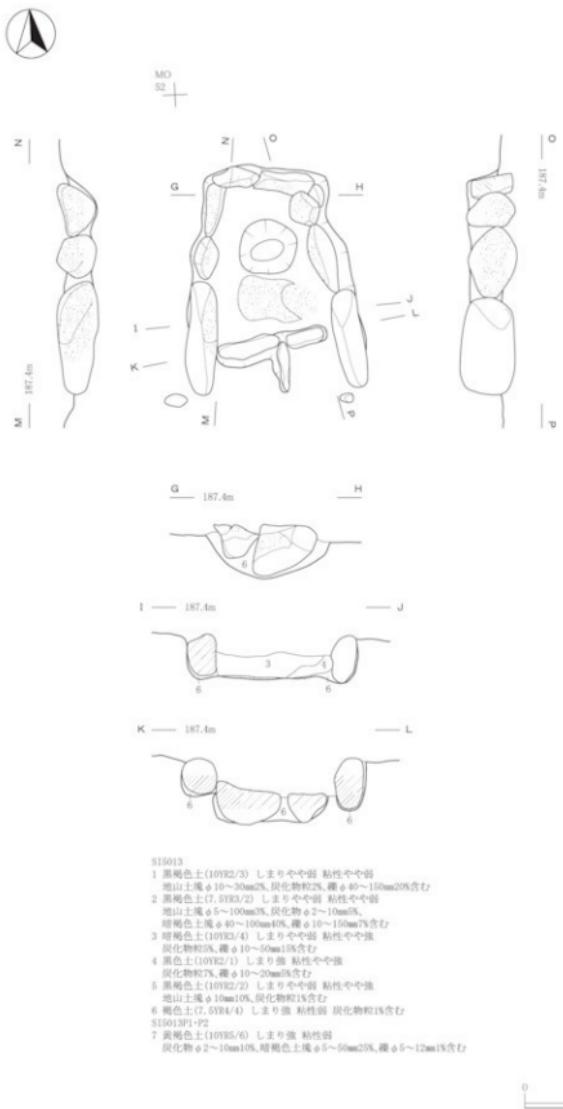
第35図 S I 2001竪穴住居跡（6）・SK 2013・2014土坑（3）

S15013



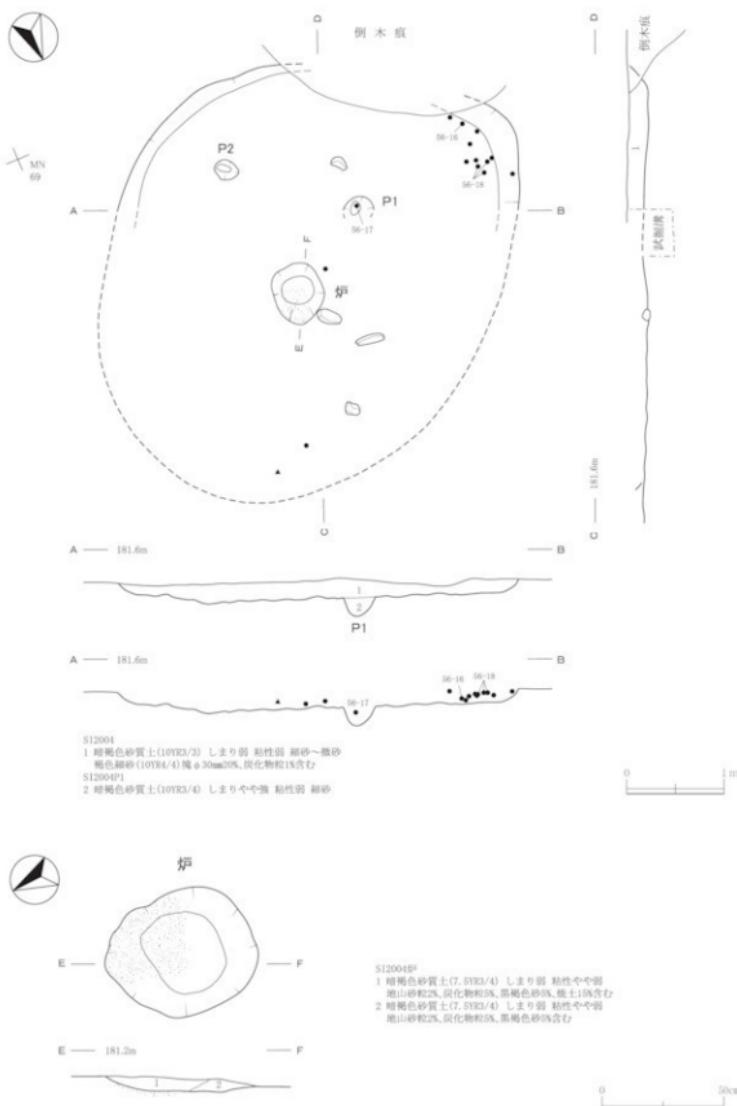
第36図 S15013竪穴住居跡 (1)

SI5013 炉

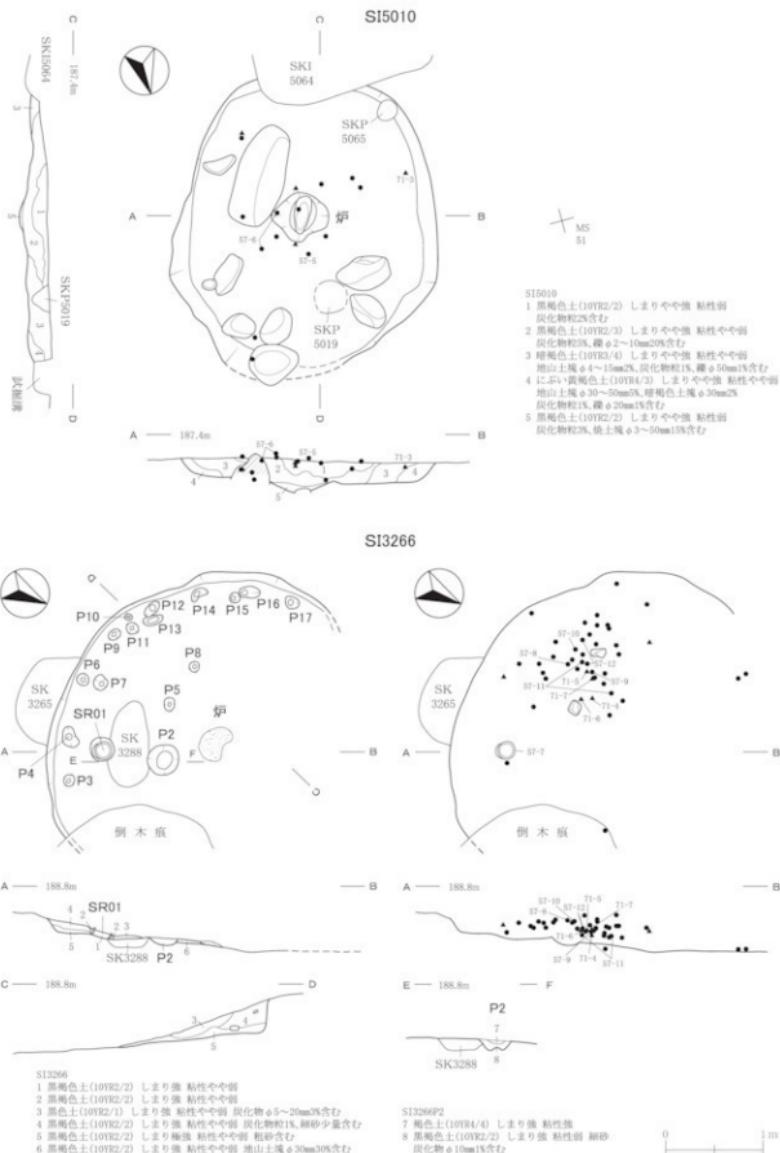


第37図 S I 5013竪穴住居跡（2）

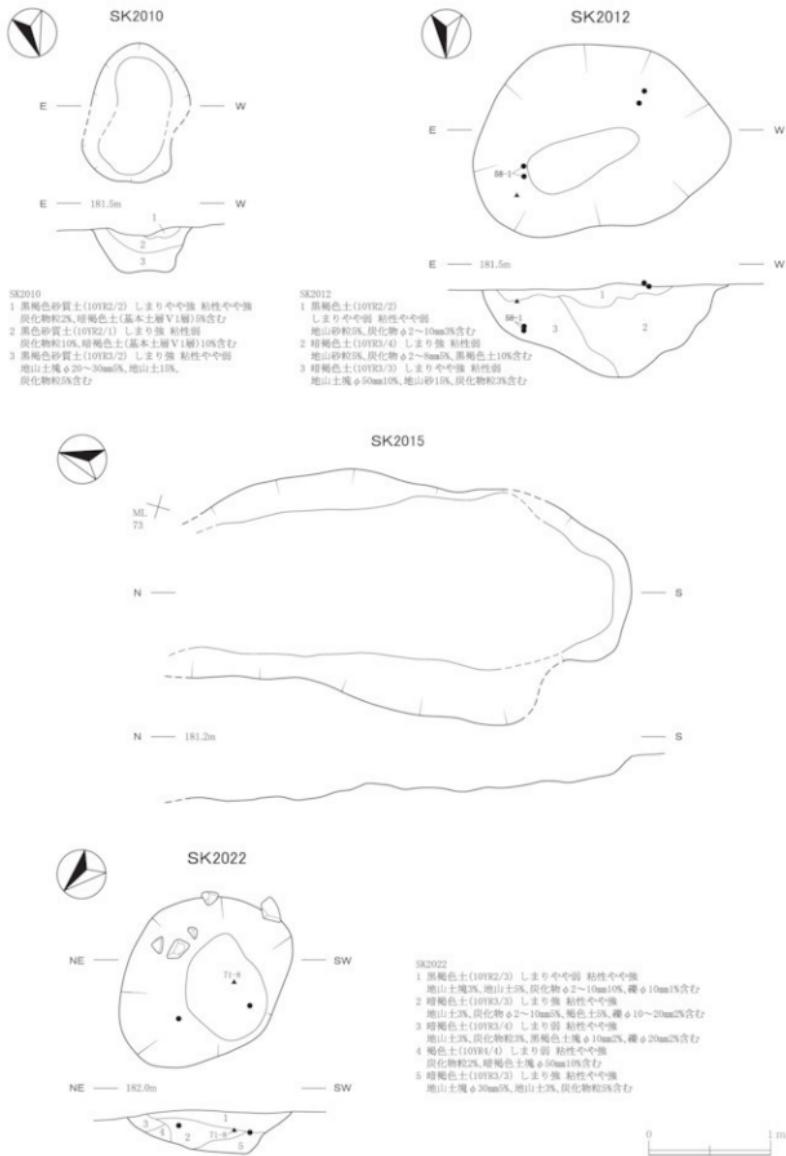
SI2004



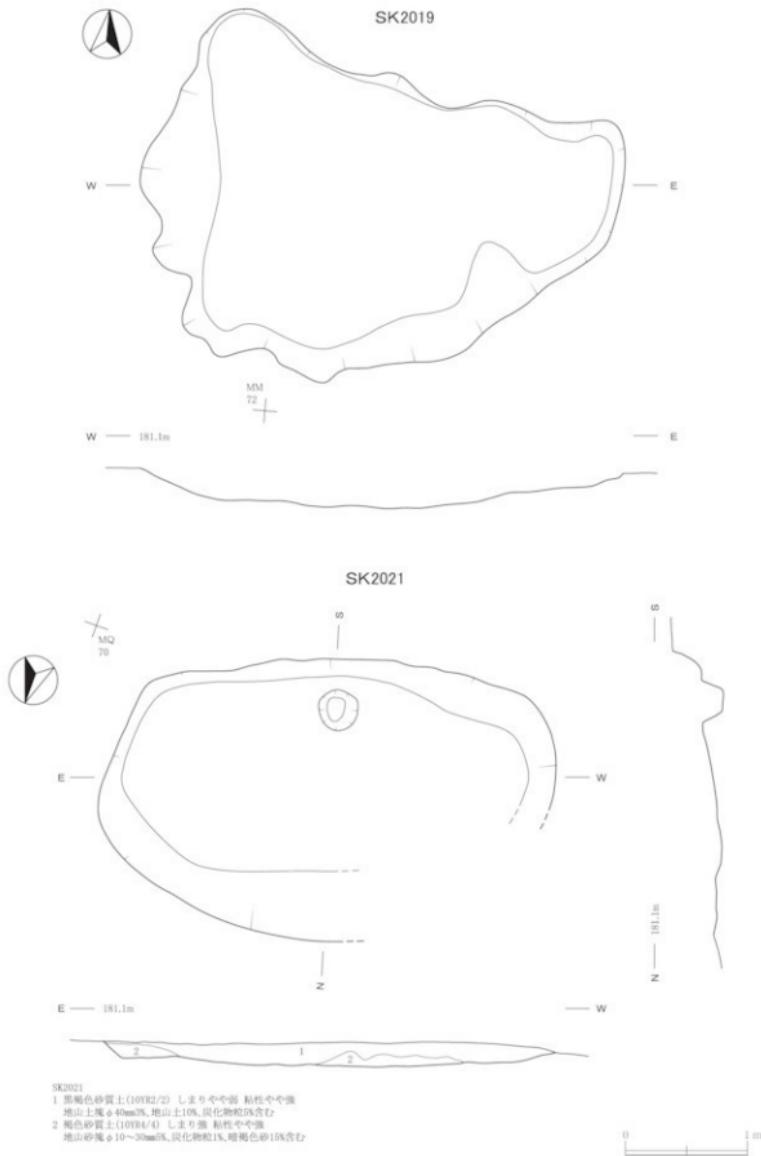
第38図 S I 2004竪穴住居跡



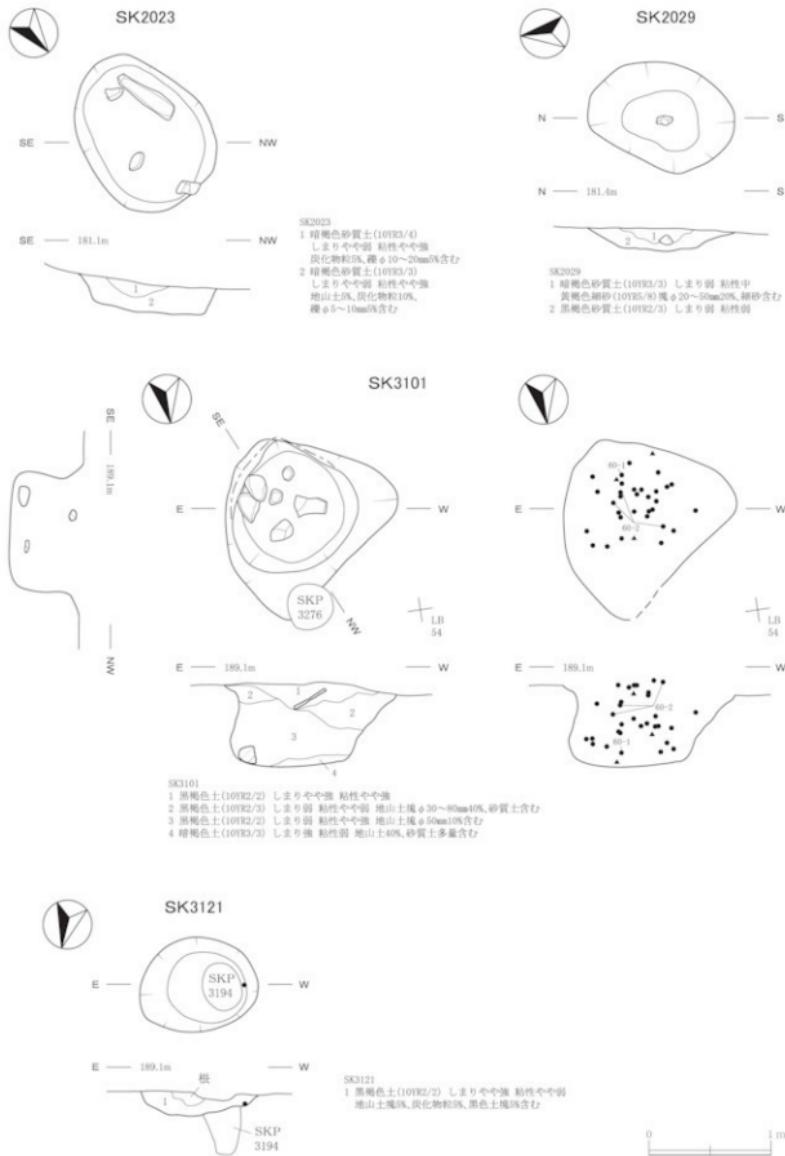
第39図 S I 3266・5010堅穴住居跡



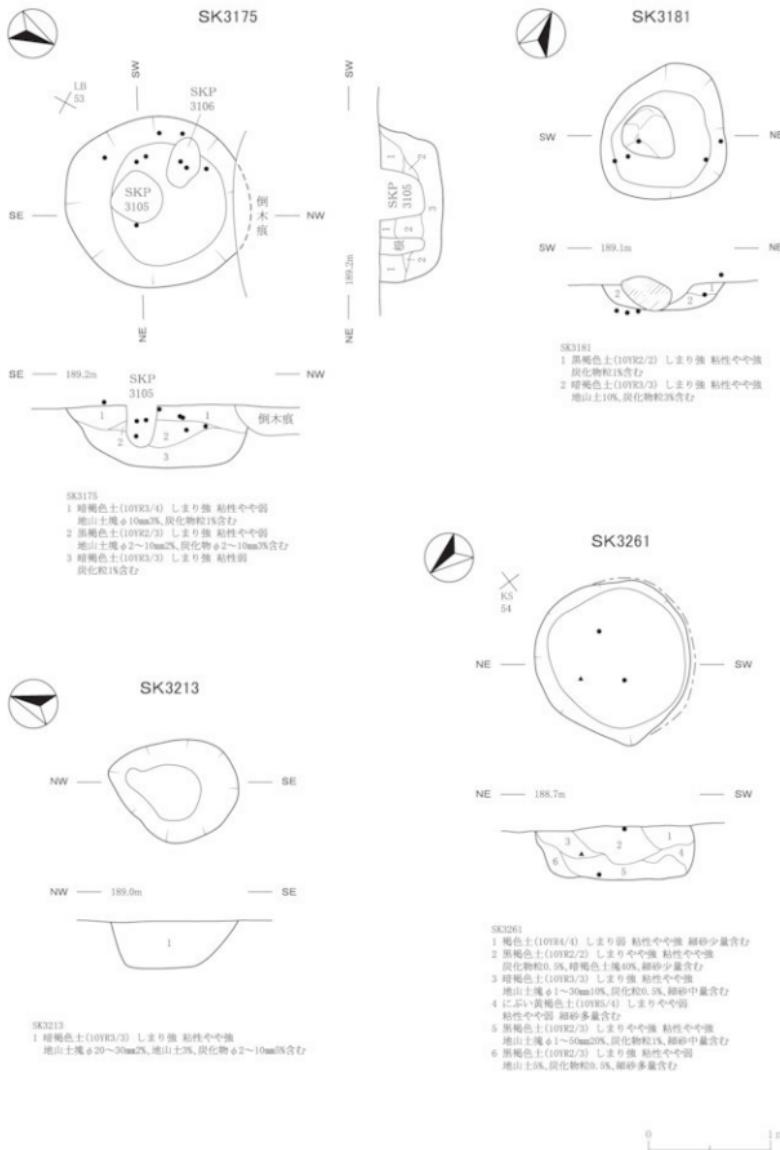
第40図 SK 2010・2012・2015・2022土坑



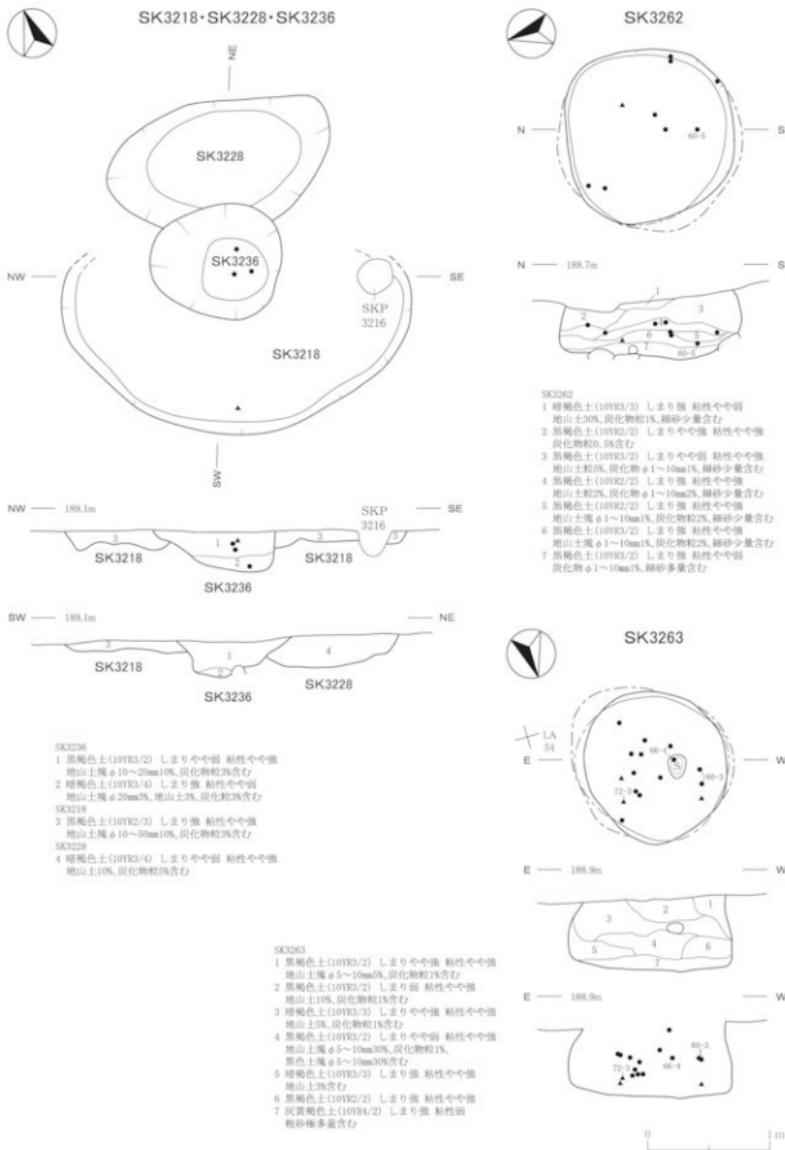
第41図 SK2019・2021土坑



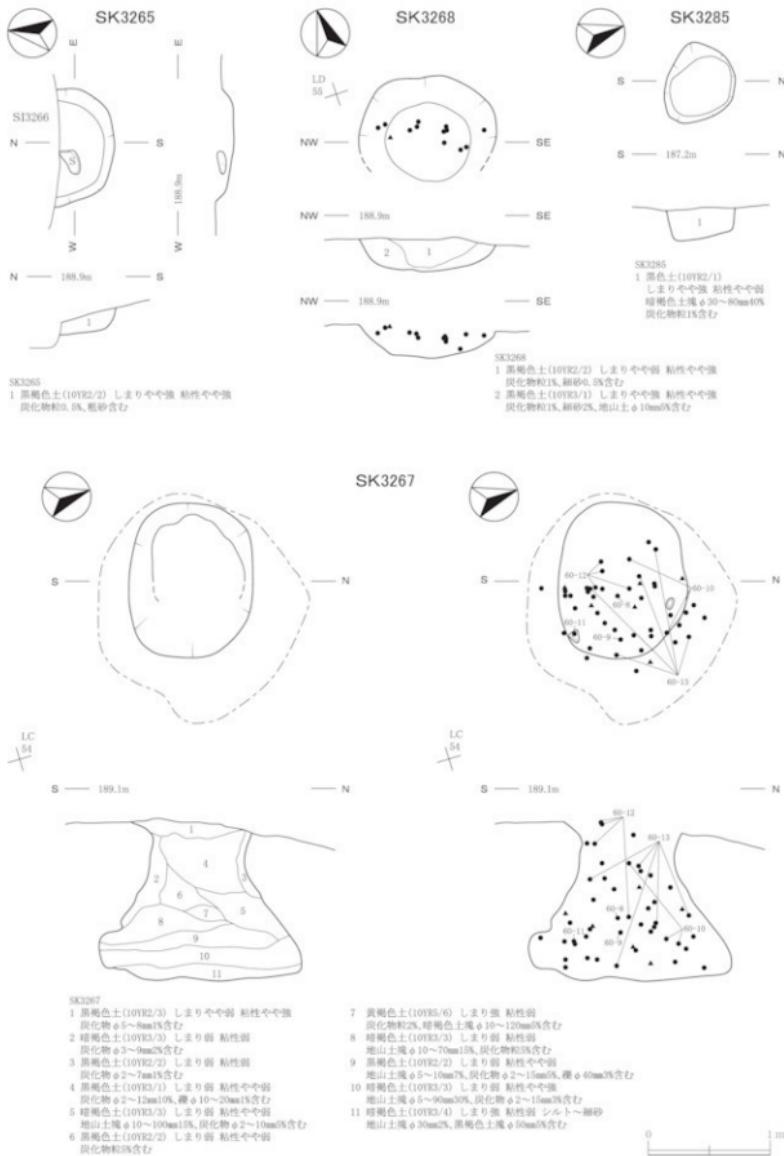
第42図 SK 2023・2029・3101・3121土坑



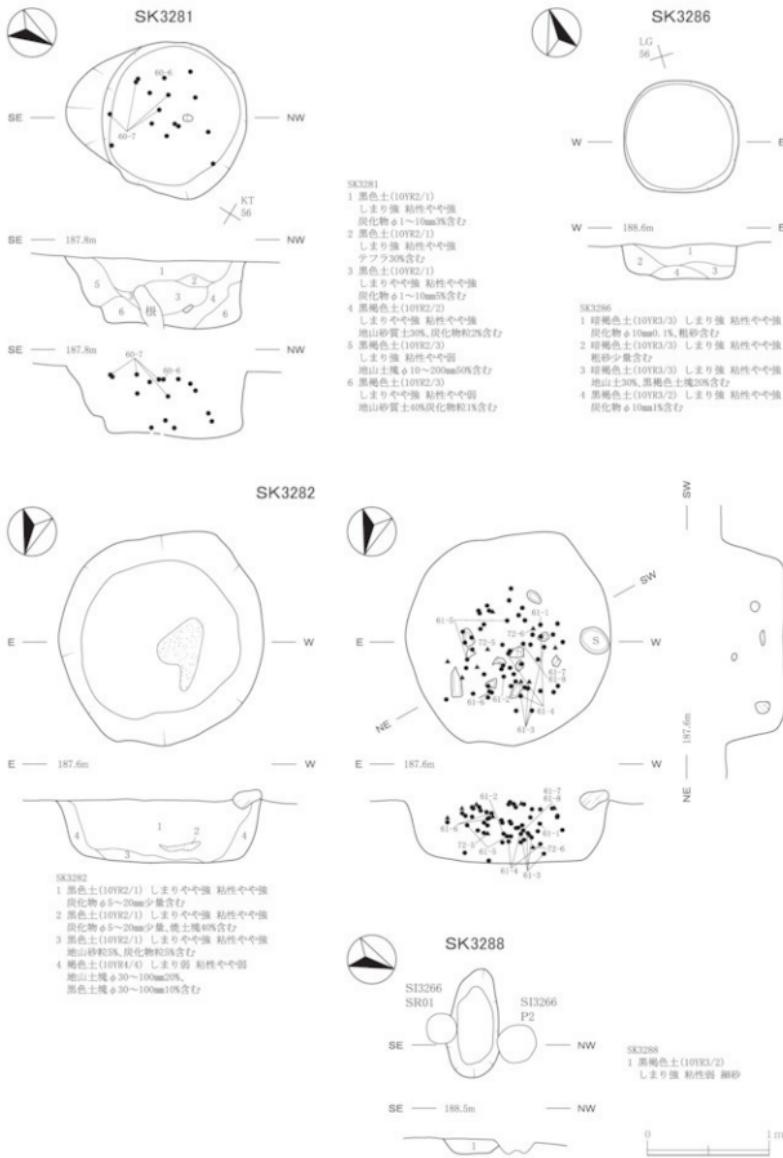
第43図 S K 3175・3181・3213・3261土坑



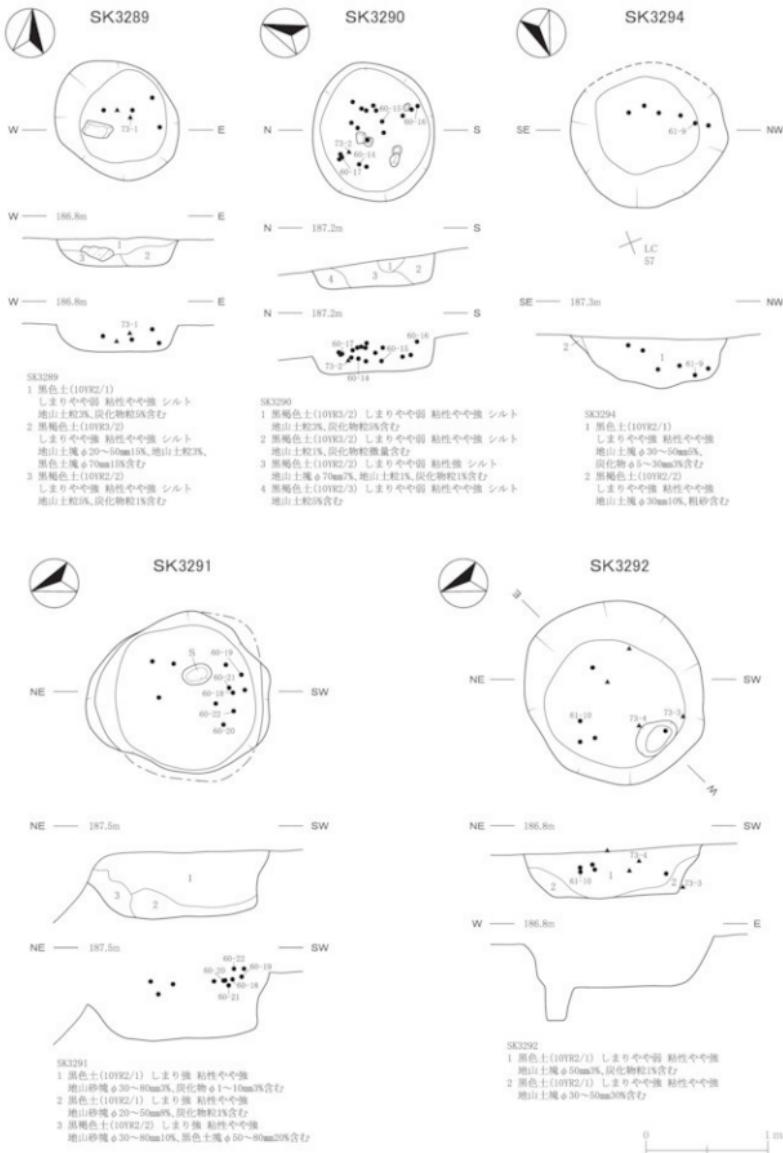
第44図 SK 3218・3228・3236・3262・3263土坑



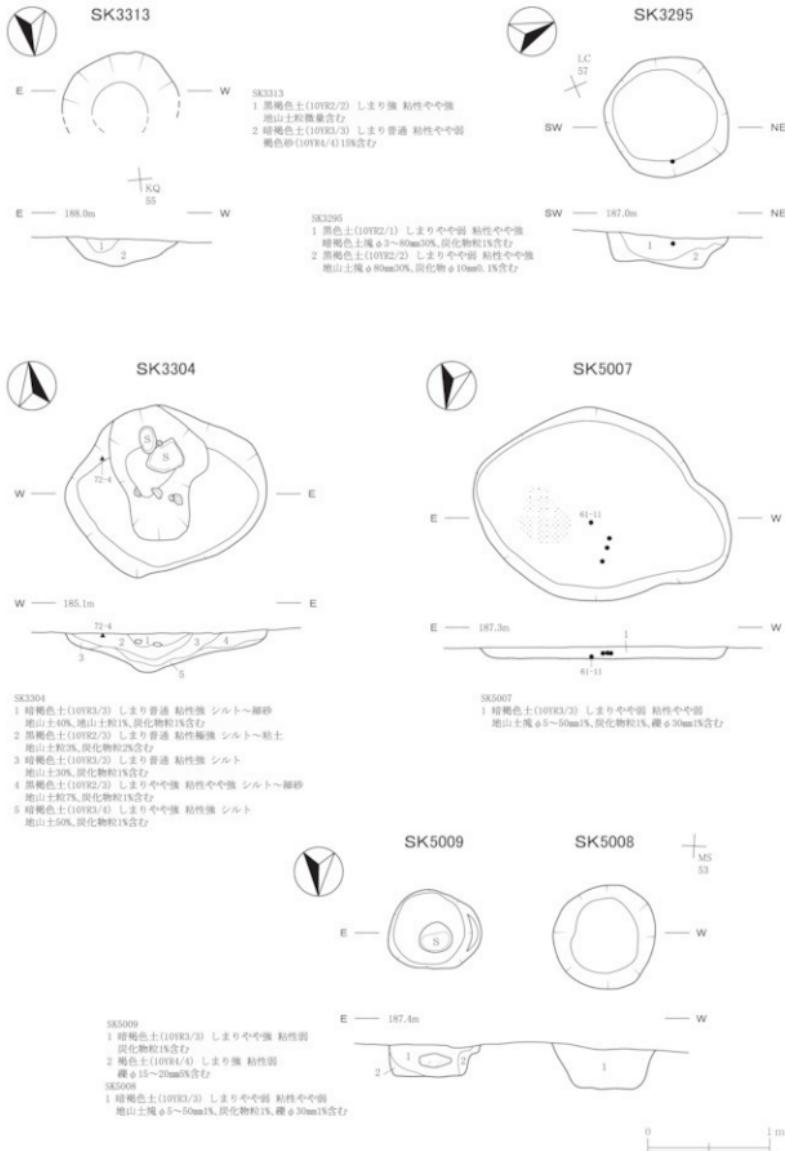
第45図 S K 3265・3267・3268・3285土坑



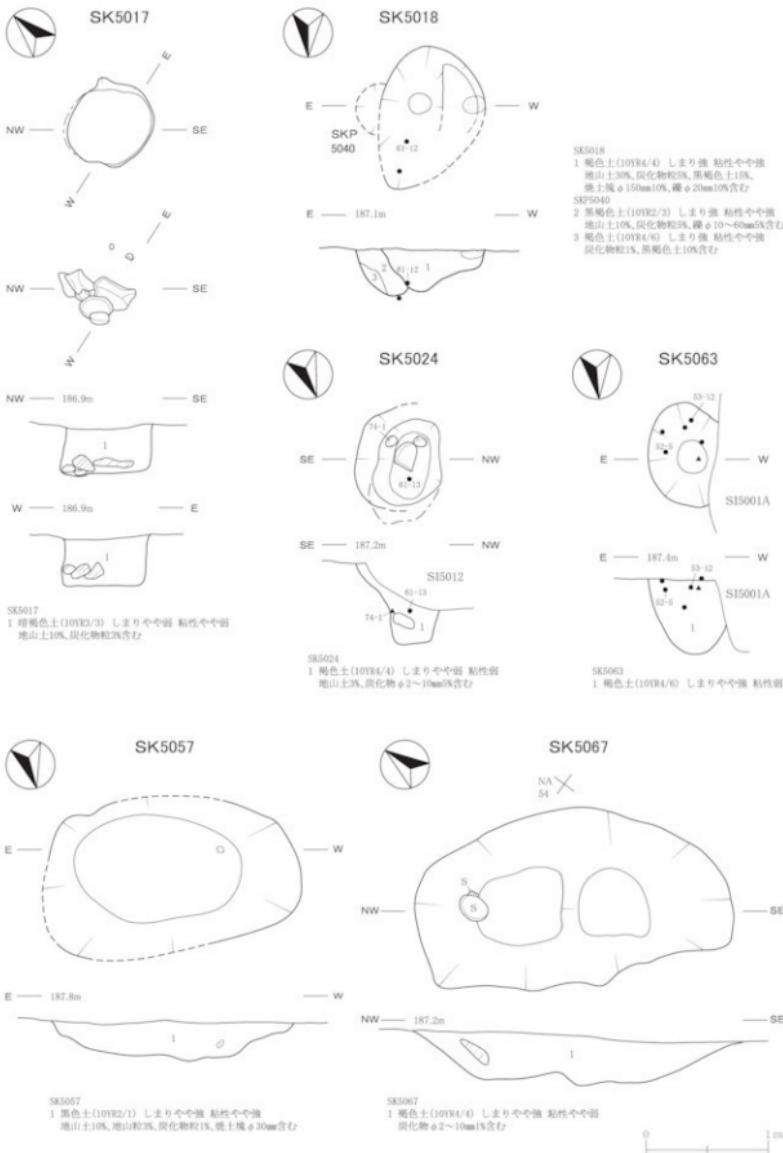
第46図 SK 3281・3282・3286・3288土坑



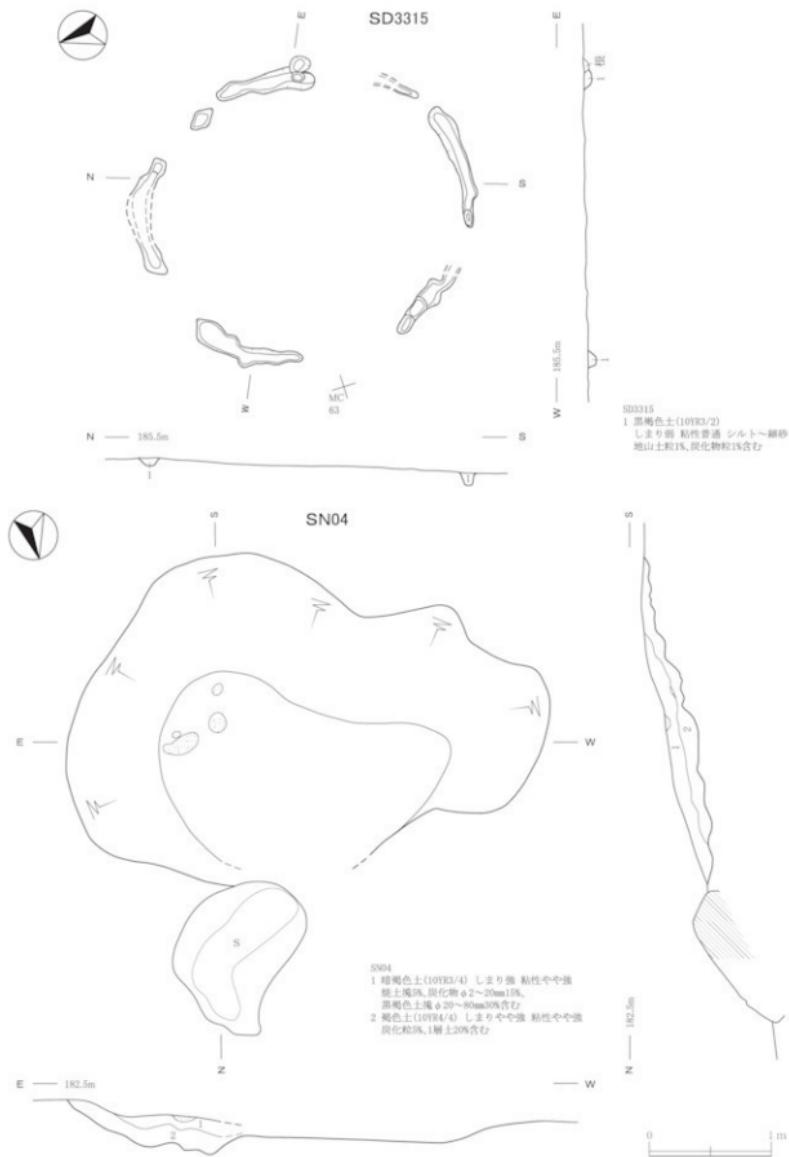
第47図 SK 3289・3290・3291・3292・3294土坑



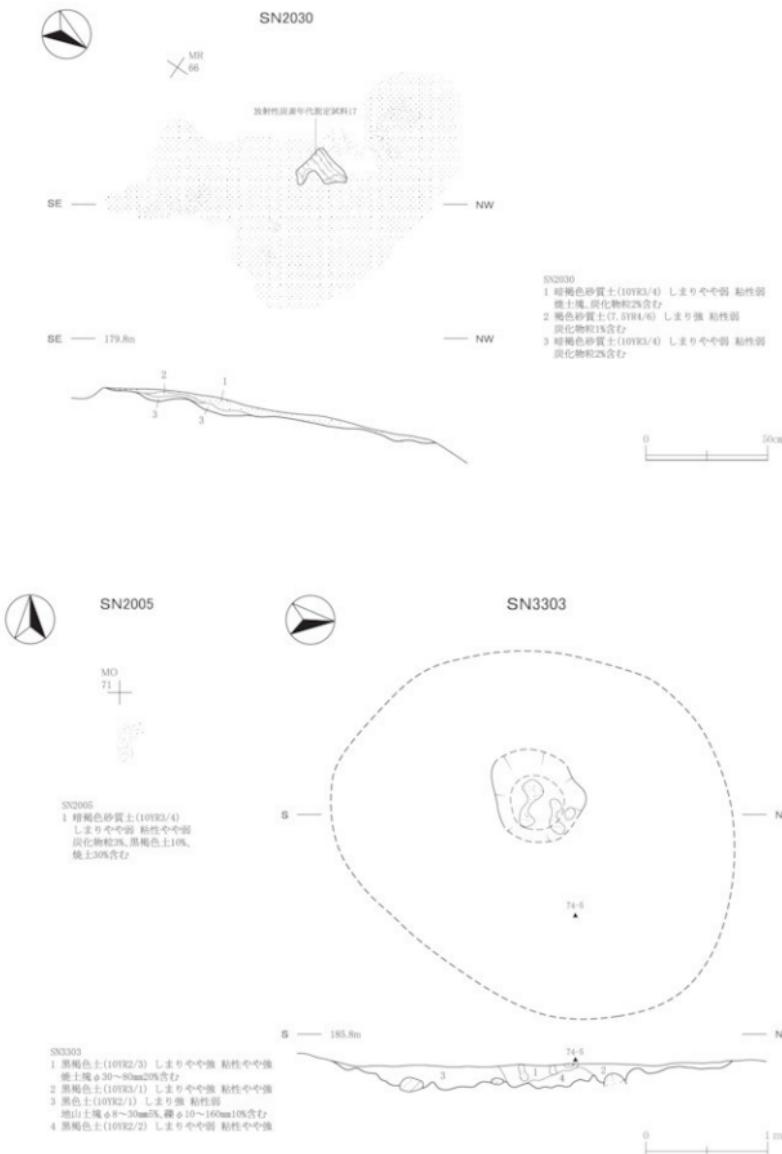
第48図 S K 3295・3304・3313・5007・5008・5009土坑



第49図 SK 5017・5018・5024・5063・5067土坑



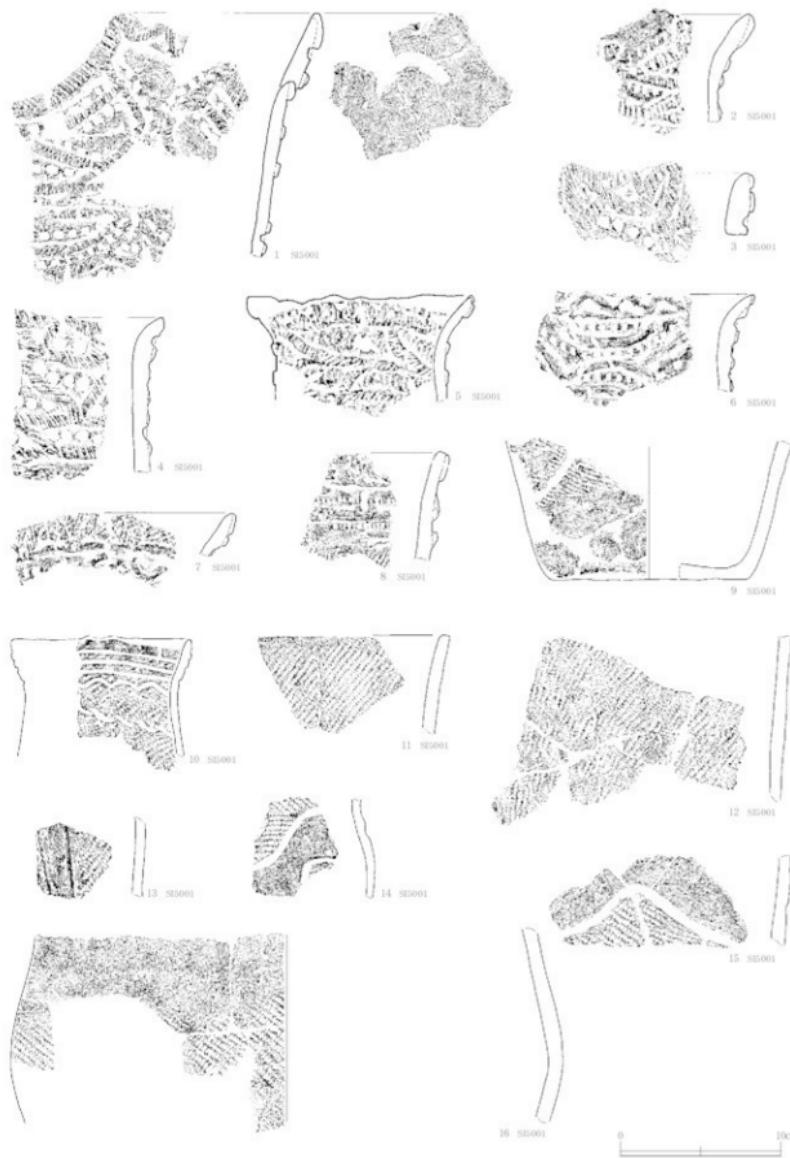
第50図 SD 3315溝跡・SN 04焼土遺構



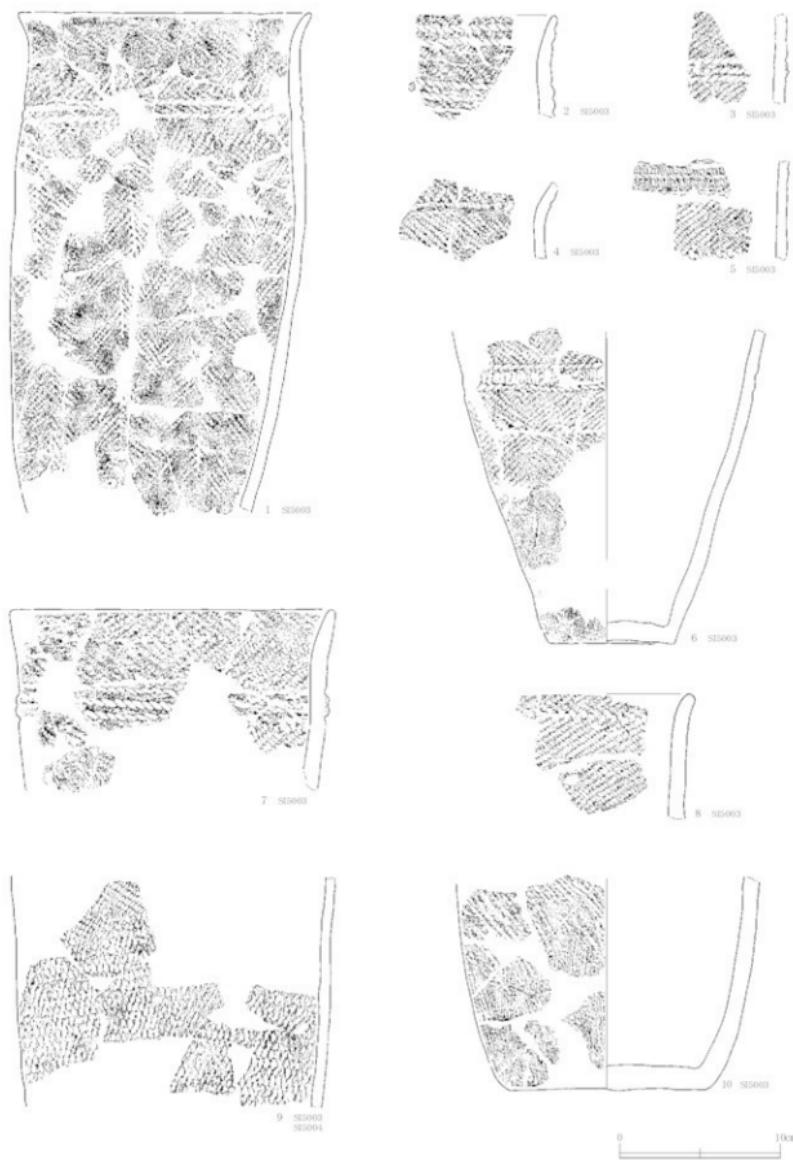
第51図 S N 2005・2030・3303焼土遺構



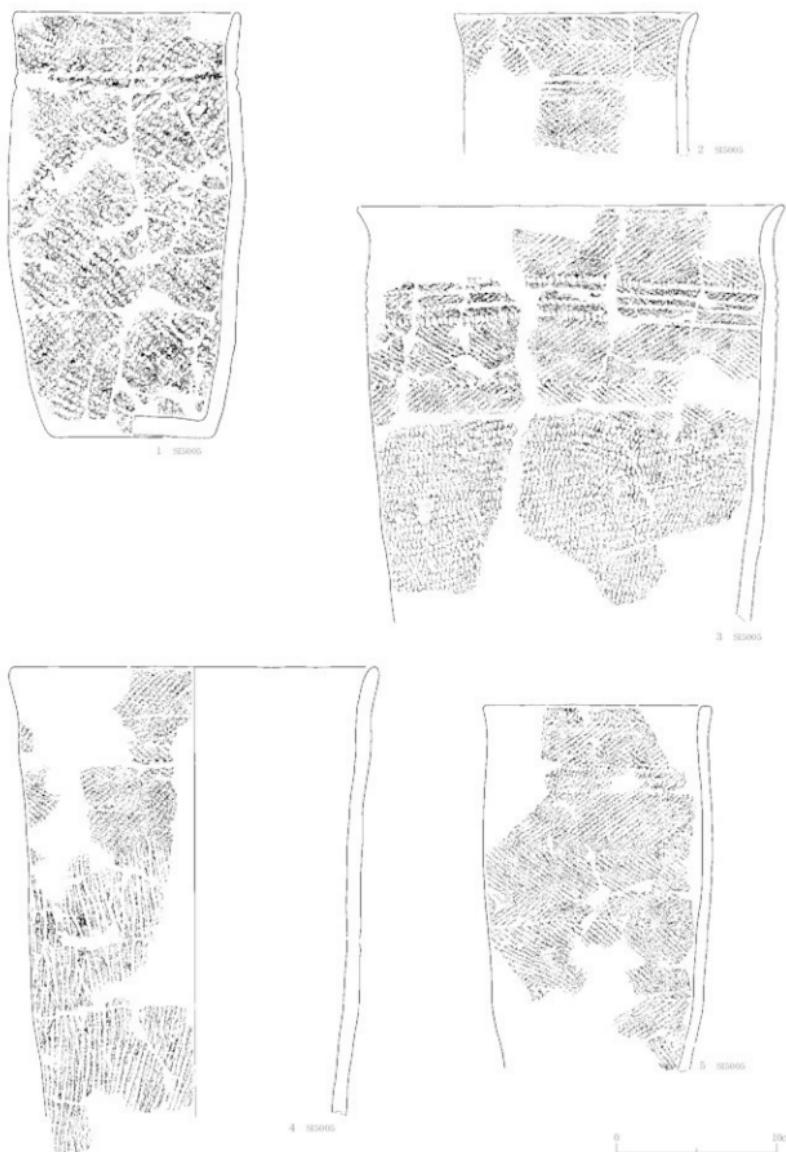
第52図 遺構内(S 15001)出土土器類(1)



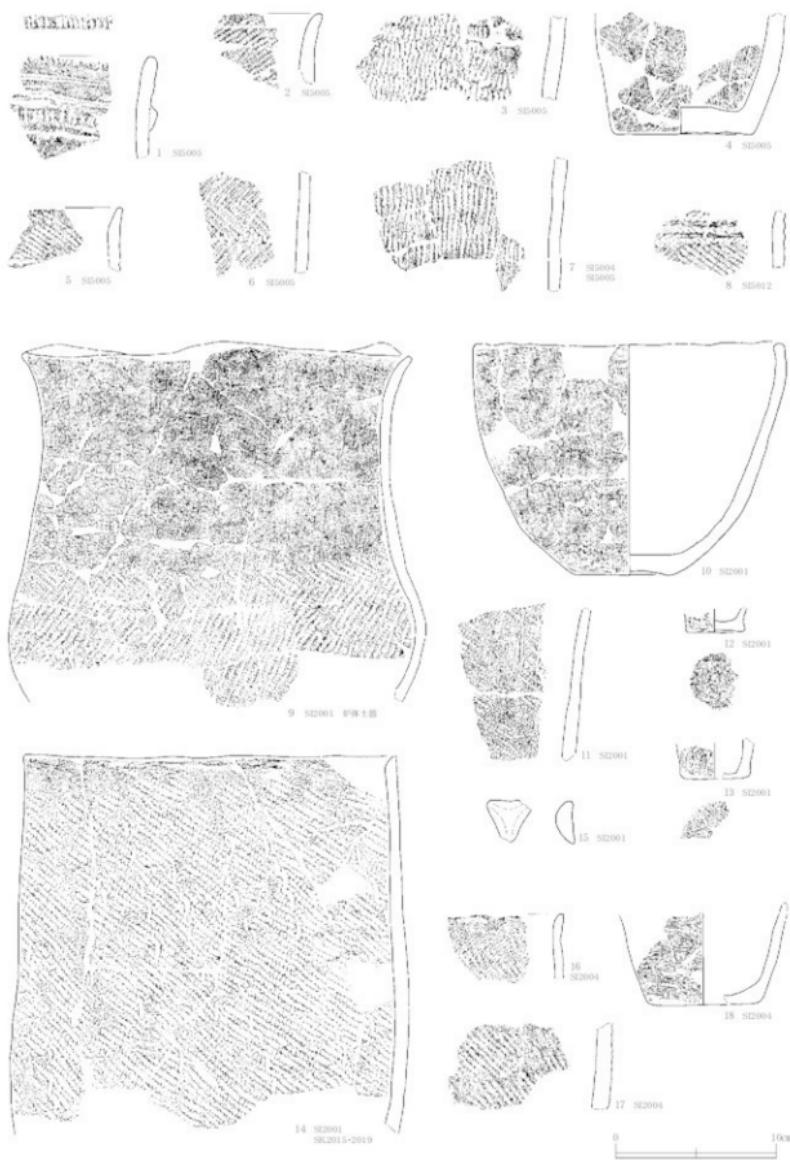
第53図 遺構内(S 15001)出土土器類(2)



第54図 遺構内(S15003-5004)出土土器類(3)



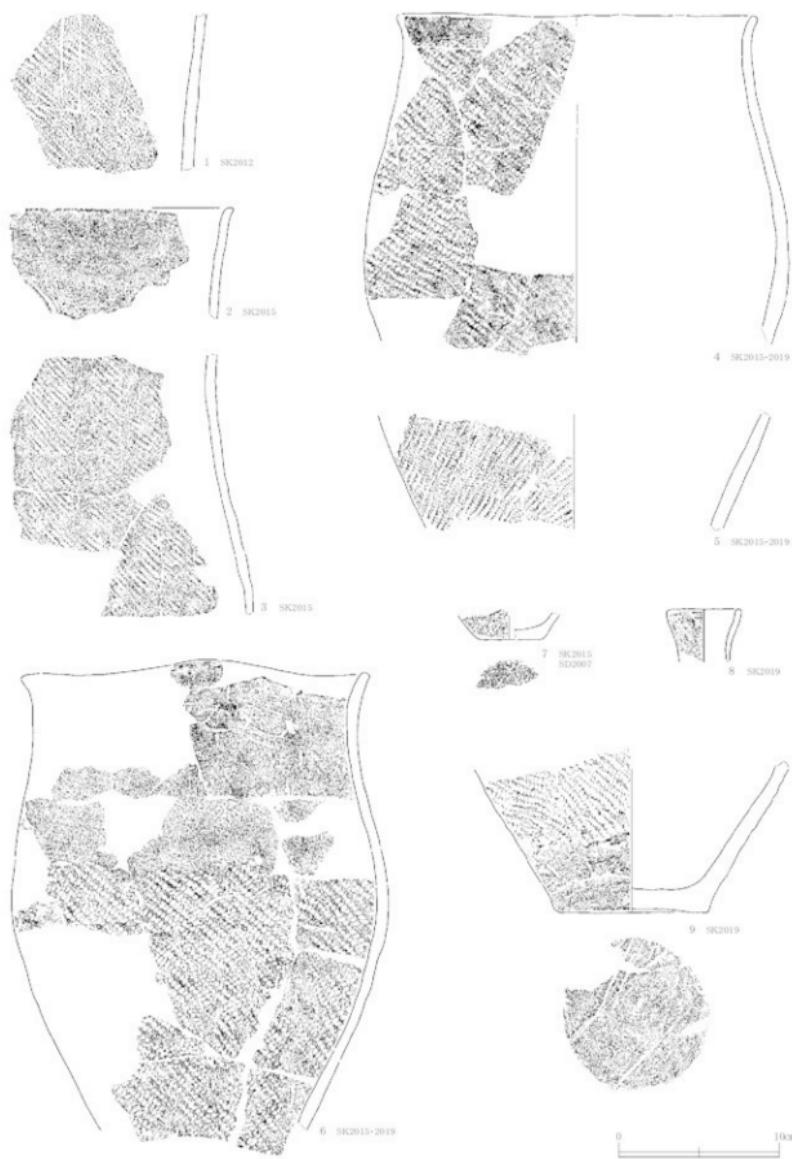
第55図 遺構内(S 15005)出土土器類(4)



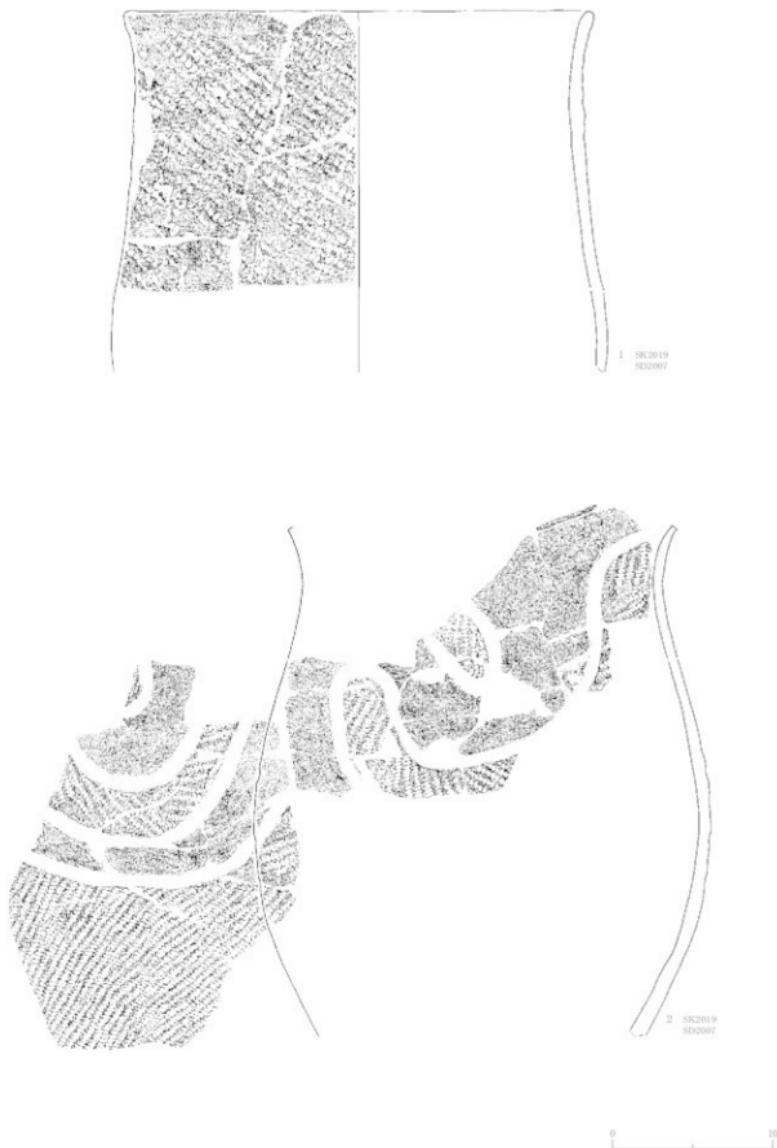
第56図 遺構内(S I 2001-2004・5004・5005・5012・S K 2015-2019)出土土器類(5)



第57図 遺構内(S 13266・5010・5013)出土土器類(6)



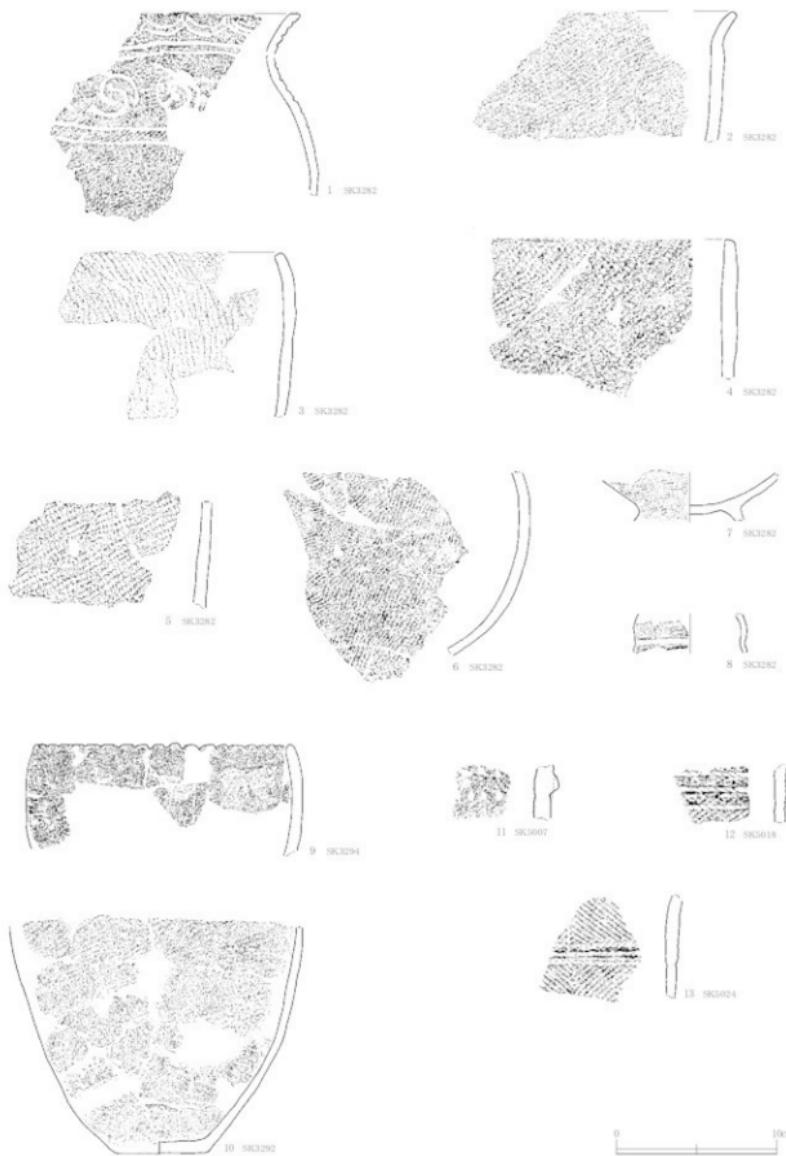
第58図 遺構内(SK 2012・2015・2019・SD 2007)出土土器類(7)



第59図 遺構内(SK2019・SD2007)出土土器類(8)



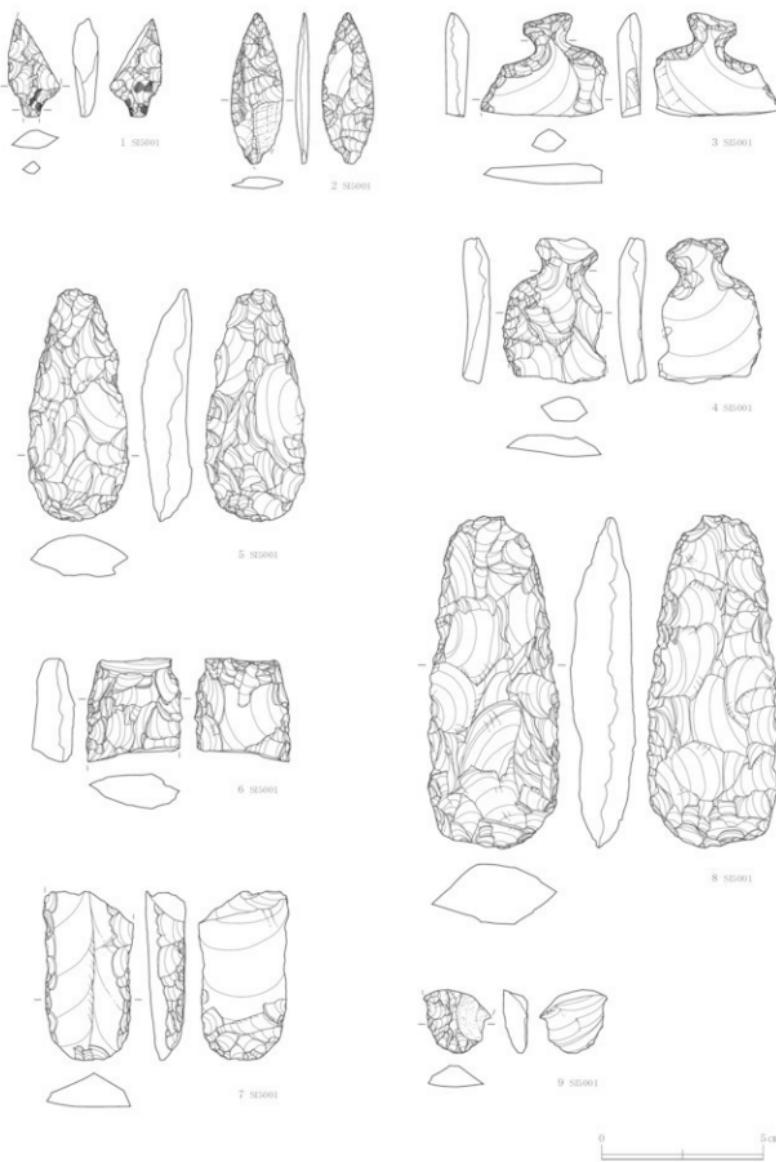
第60図 遺構内(SK 3101-3262・3263-3267・3281-3290・3291)出土土器類(9)



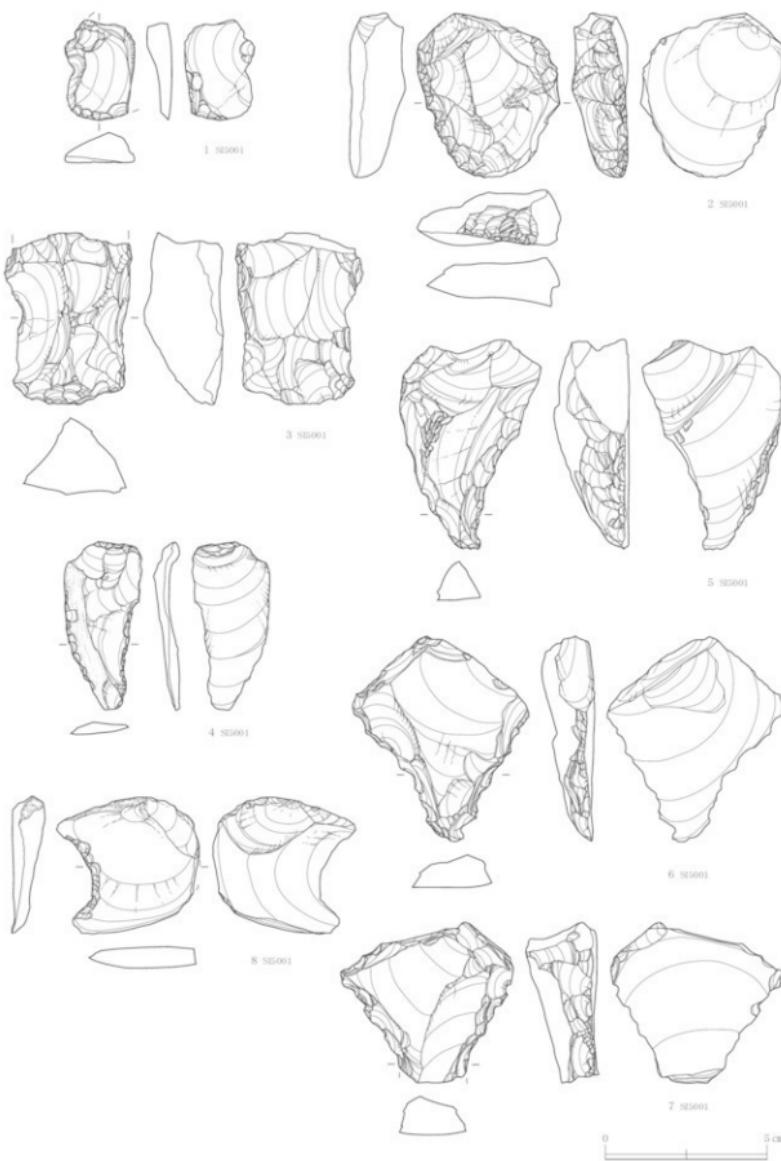
第61図 遺構内(SK 3282・3292・3294・5007・5018・5024)出土土器類(10)



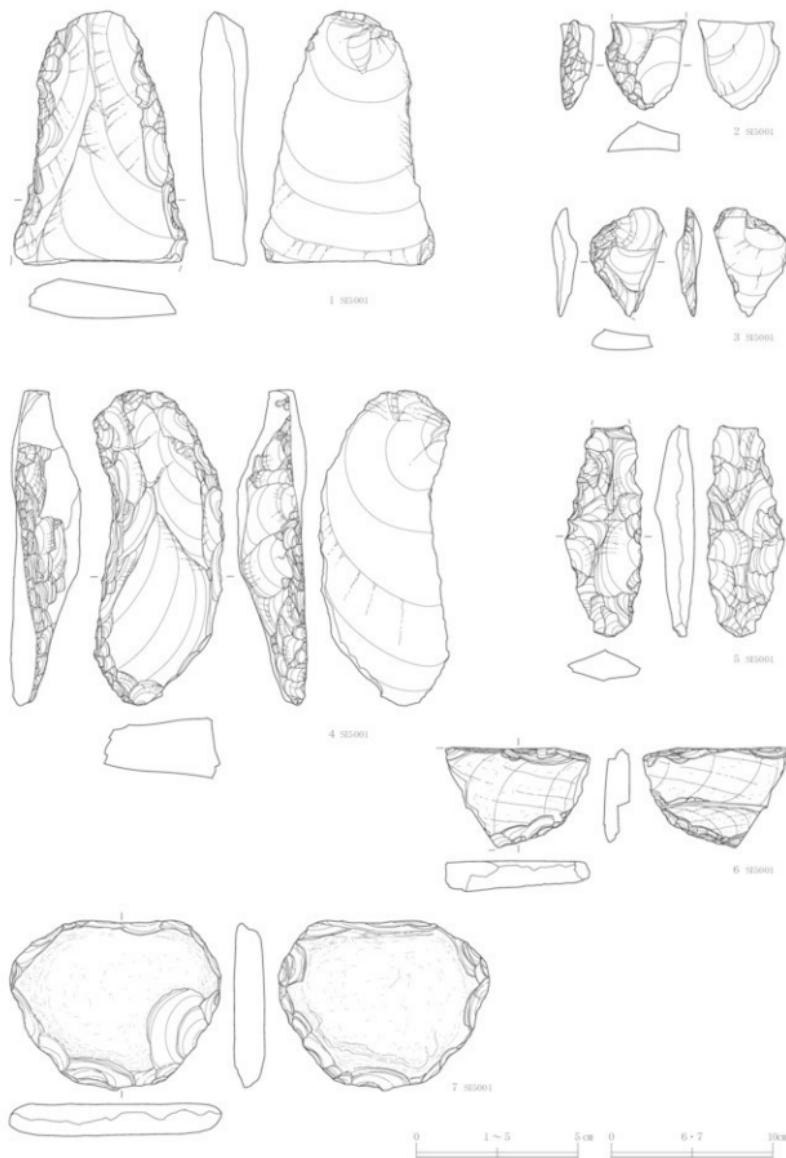
第62図 遺構内(SD2007)出土土器類(11)



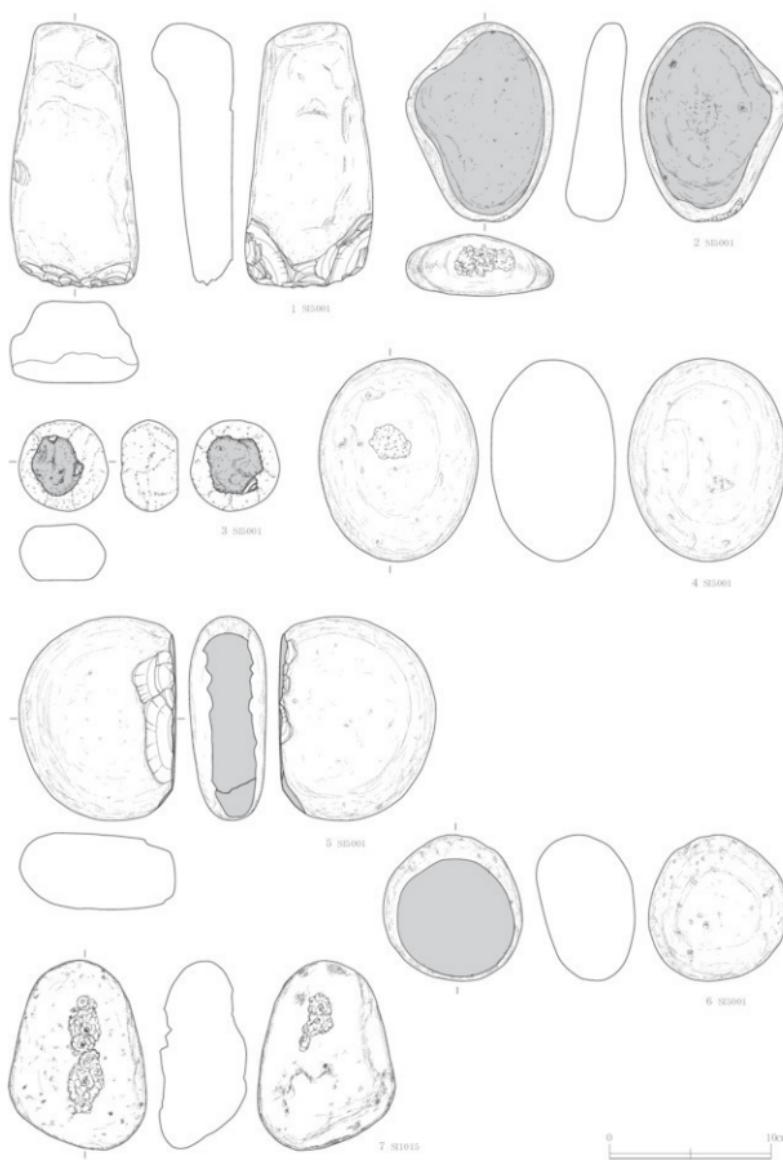
第63図 遺構内(S 5001)出土石器類(1)



第64図 遺構内(S 15001)出土石器類(2)



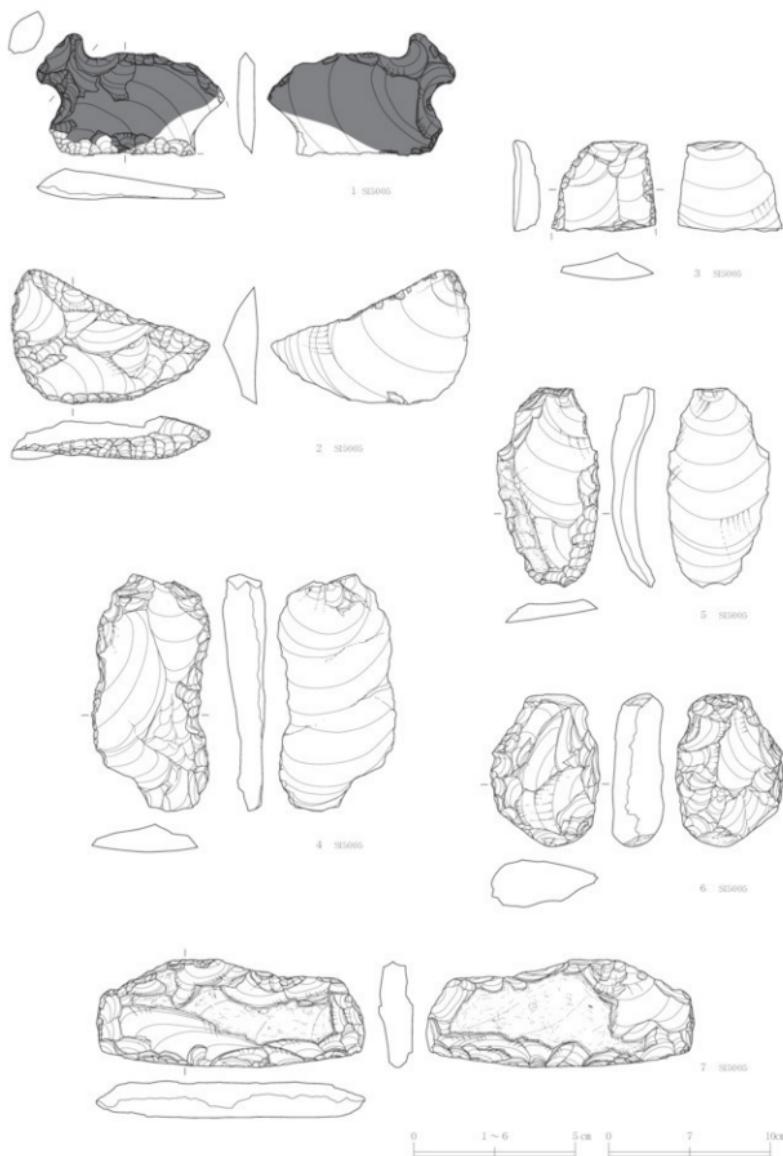
第65図 遺構内(S I 5001)出土石器類(3)



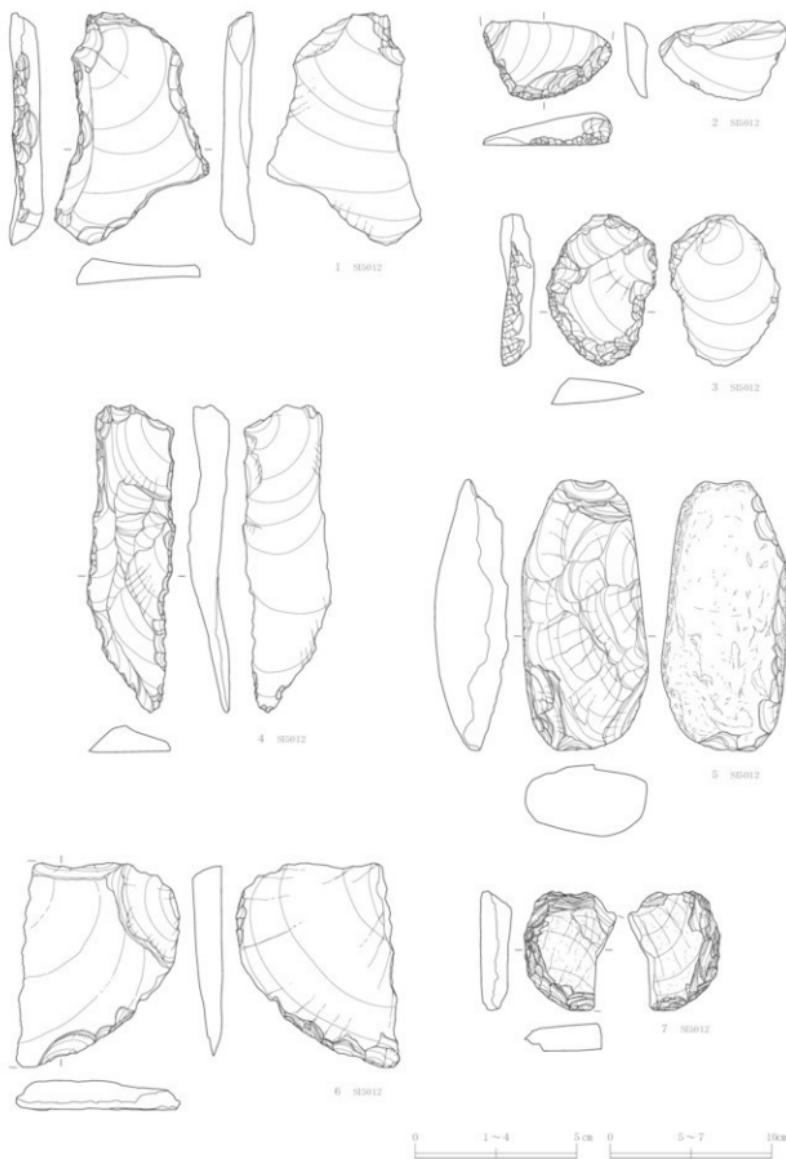
第66図 遺構内(S I 1015-5001)出土石器類(4)



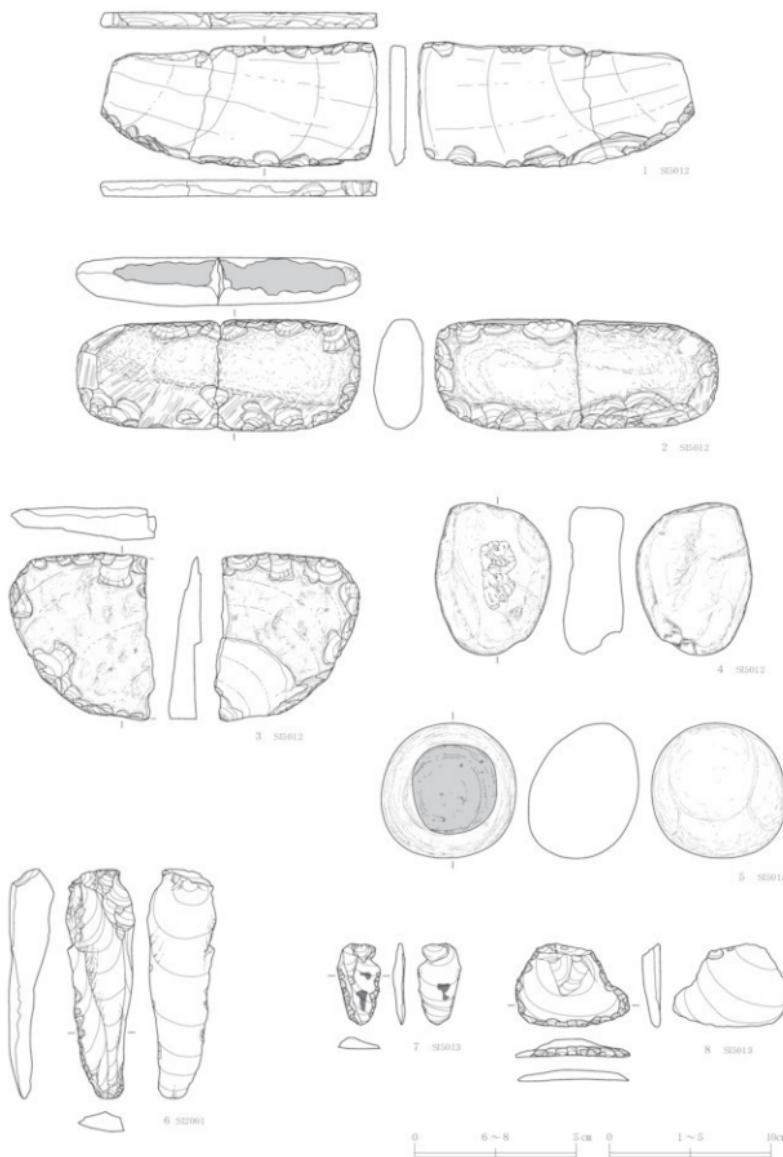
第67図 遺構内(S1 5003・5004)出土石器類(5)



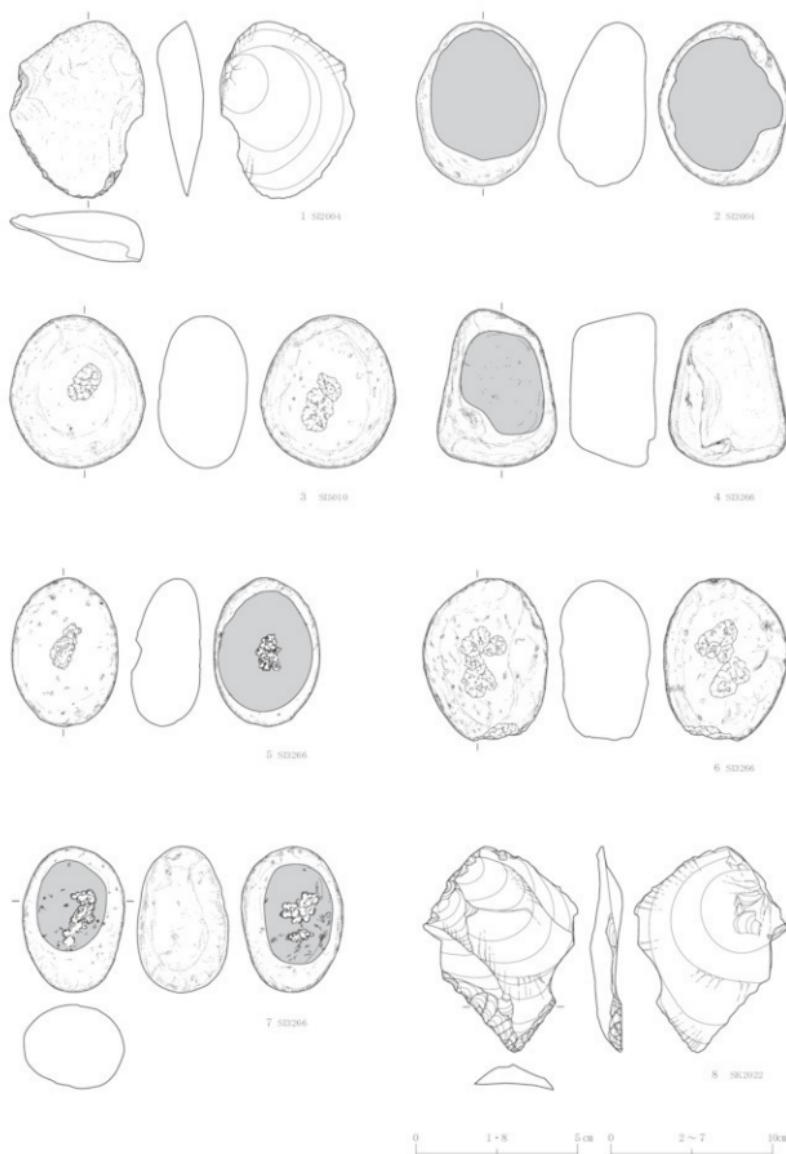
第68図 遺構内(S I 5005)出土石器類(6)



第69図 遺構内(S 15012)出土石器類(7)



第70図 遺構内(S I 2001-5012-5013)出土石器類(8)



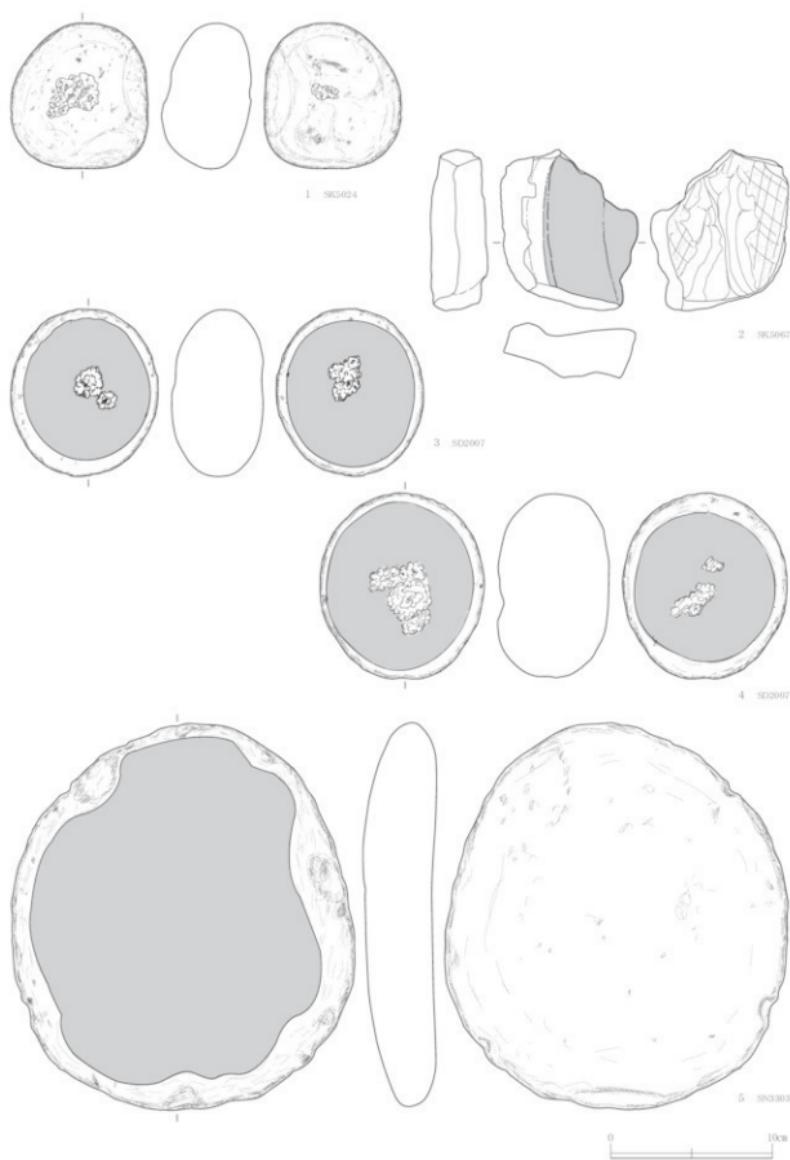
第71図 遺構内(S-I 2004・3266・5010・S-K 2022)出土石器類(9)



第72図 遺構内(SK 2019・3263・3282・3304)出土石器類(10)



第73図 遺構内(SK3289・3290・3292・SQ5025)出土石器類(11)



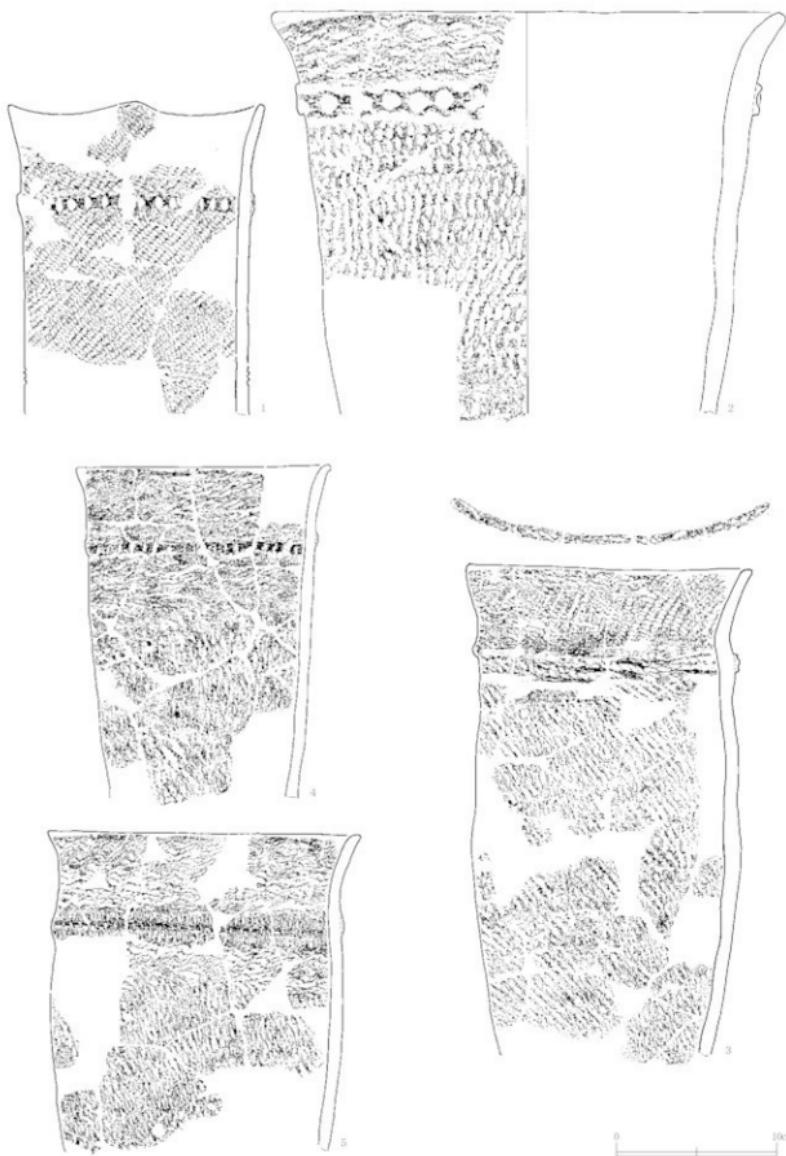
第74図 遺構内(S K 5024-5067・S N 3303・S D 2007)出土石器類 (12)



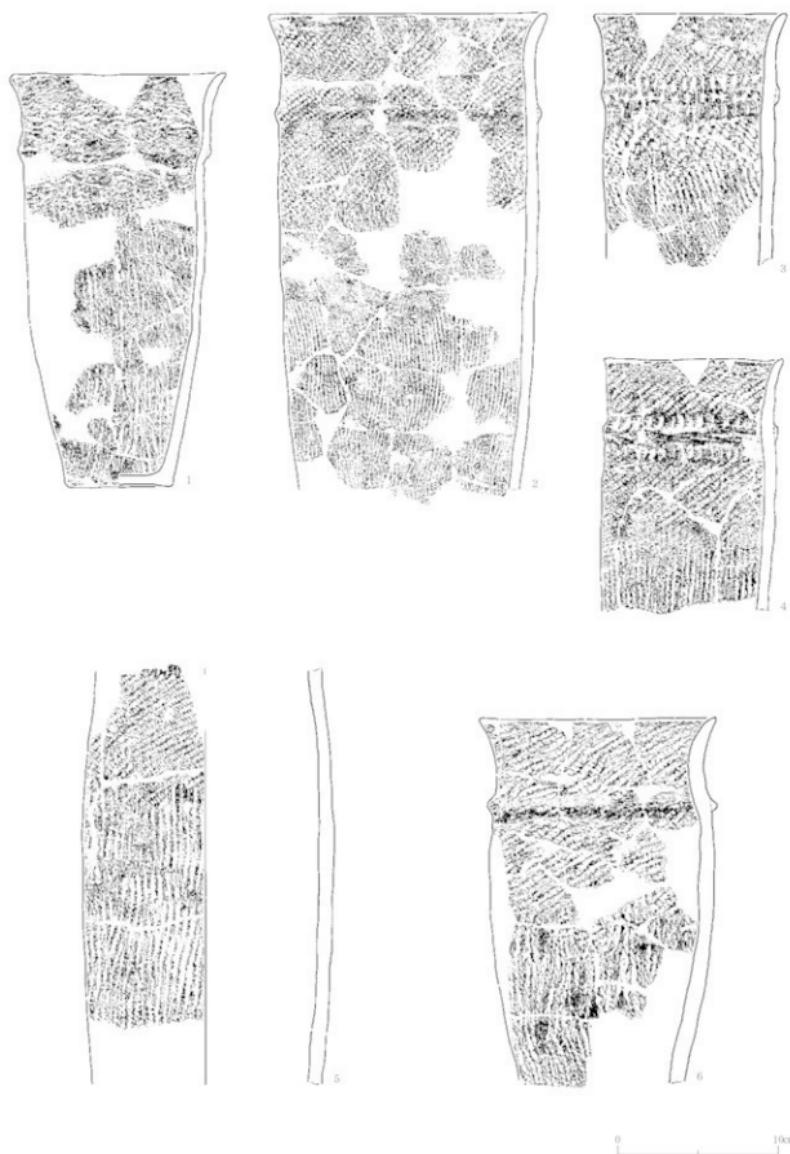
第75図 遺構外出土土器類（1）



第76図 造構外出土土器類（2）



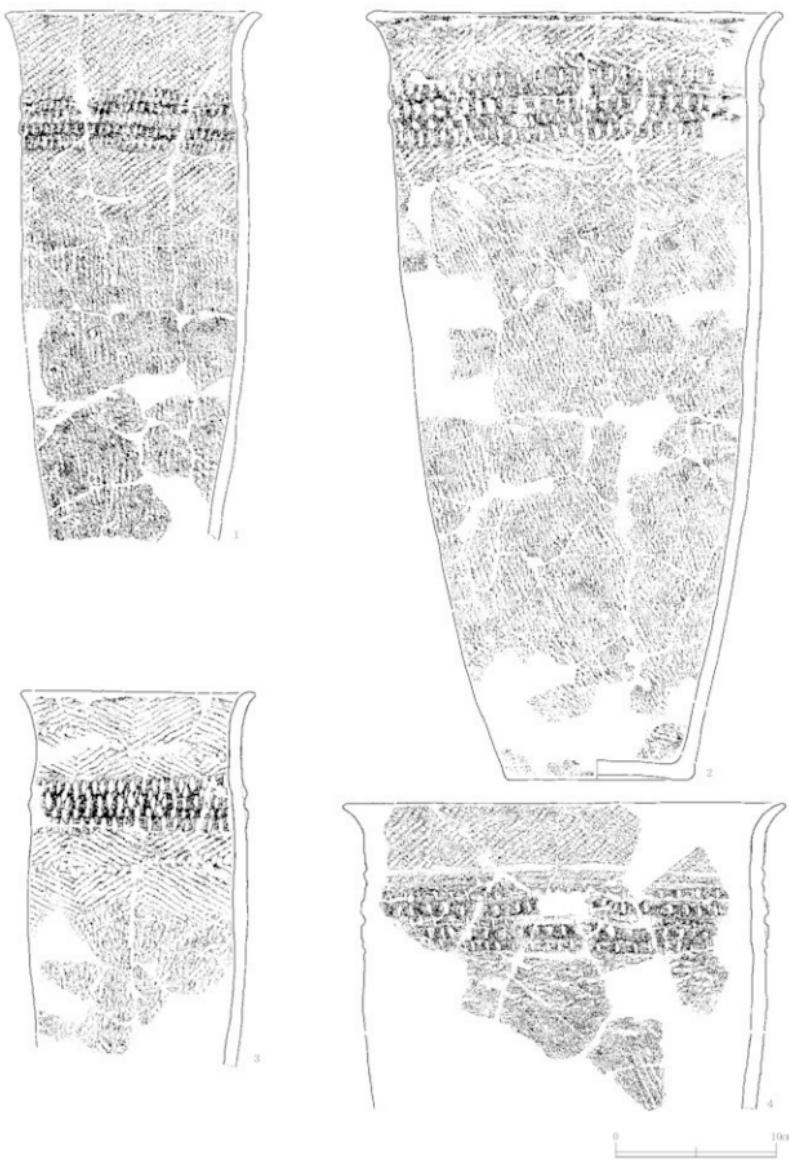
第77図 遺構外出土土器類（3）



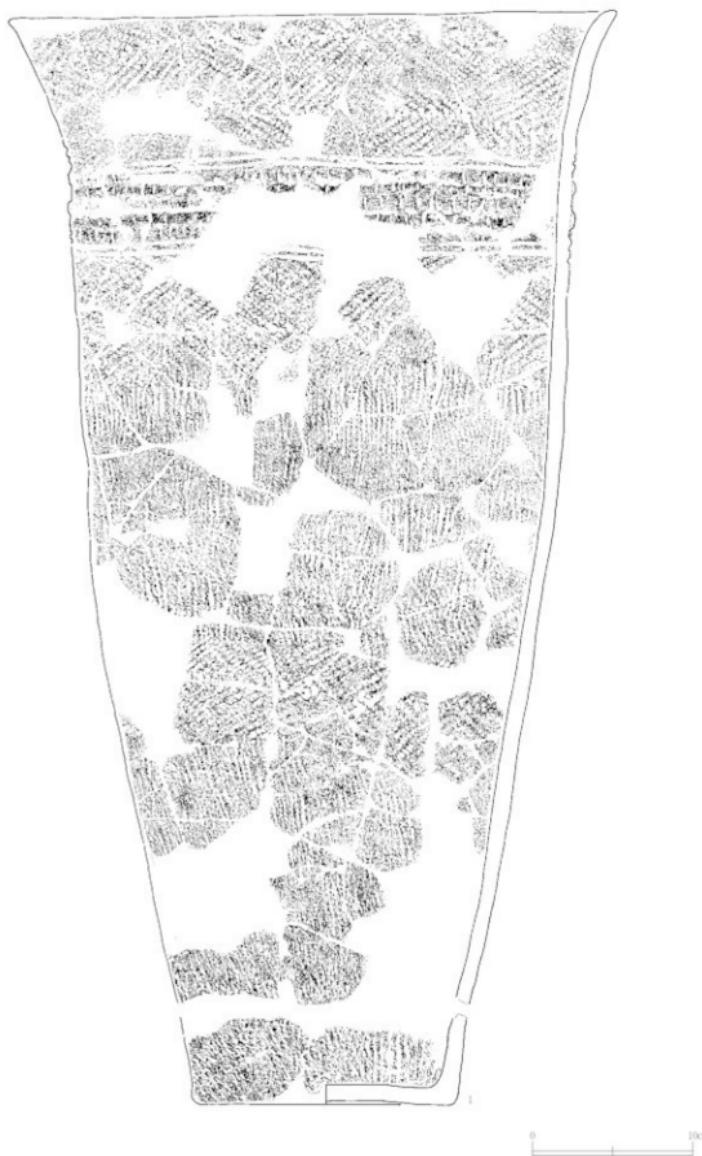
第78図 造構外出土土器類（4）



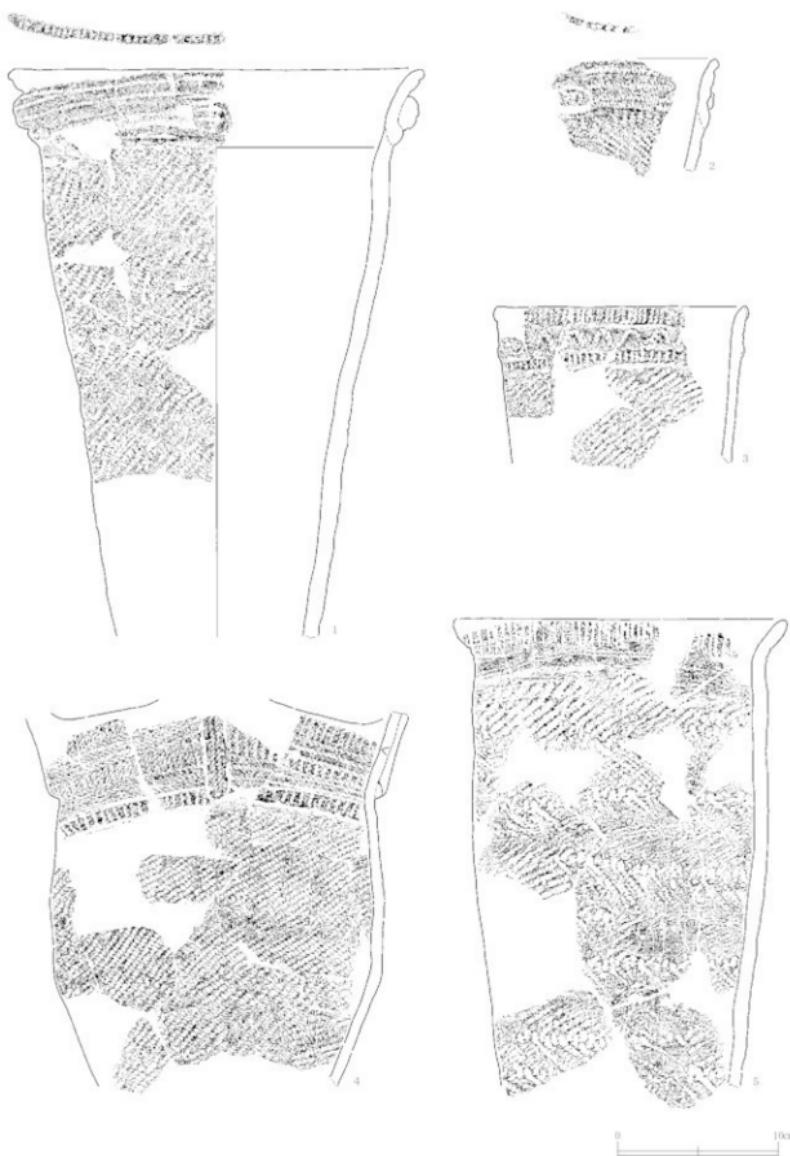
第79図 遺構外出土土器類（5）



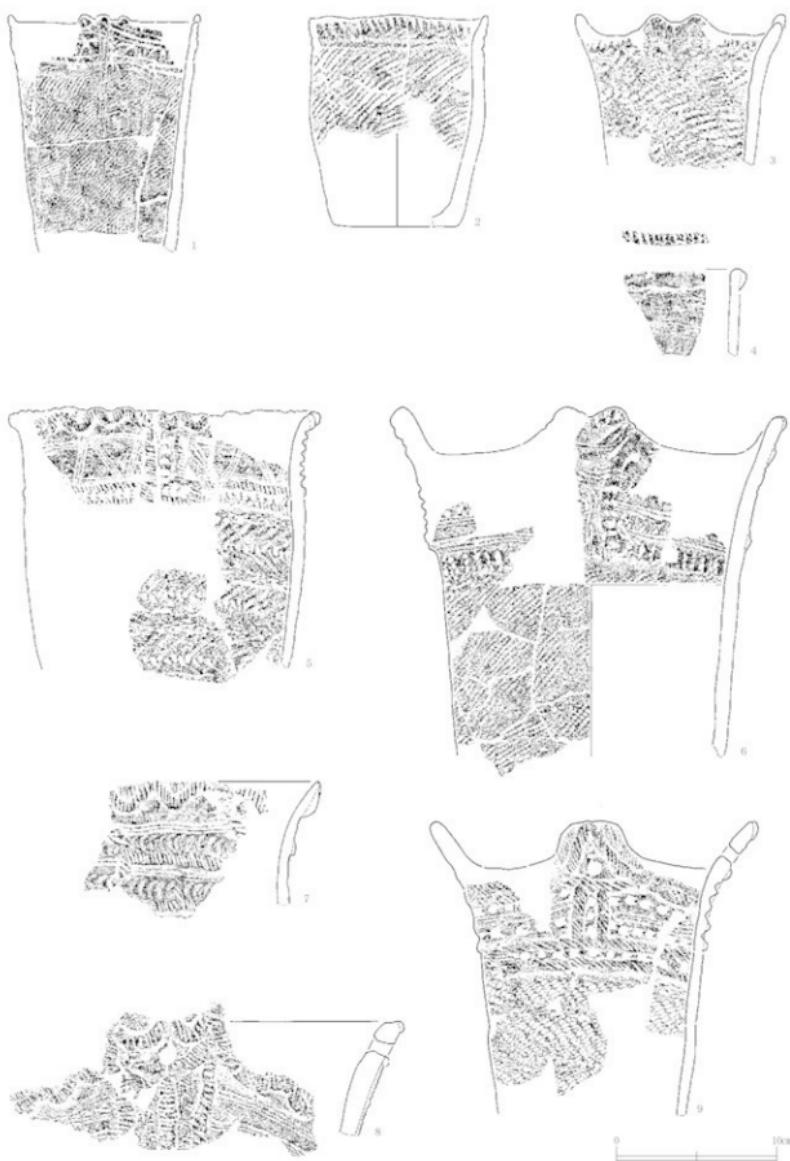
第80図 道構外出土土器類（6）



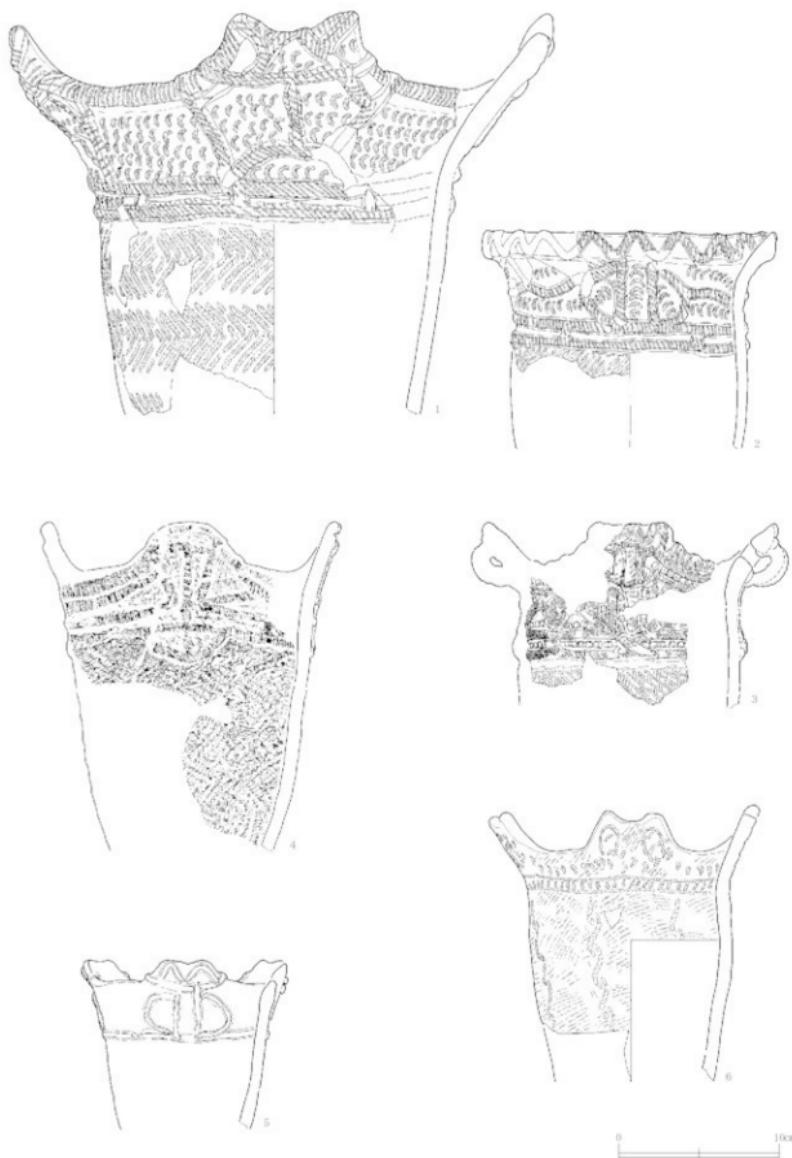
第81図 遺構外出土土器類（7）



第82図 遺構外出土土器類（8）



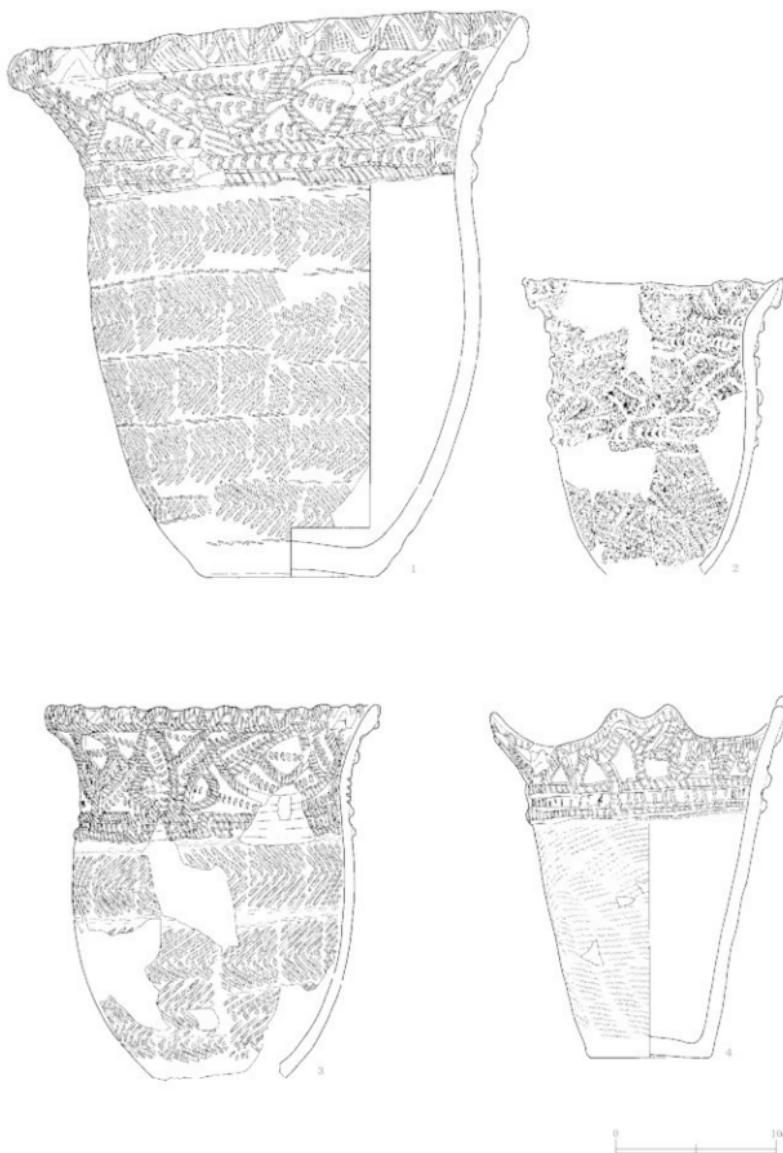
第83図 遺構外出土土器類（9）



第84図 遺構外出土土器類（10）



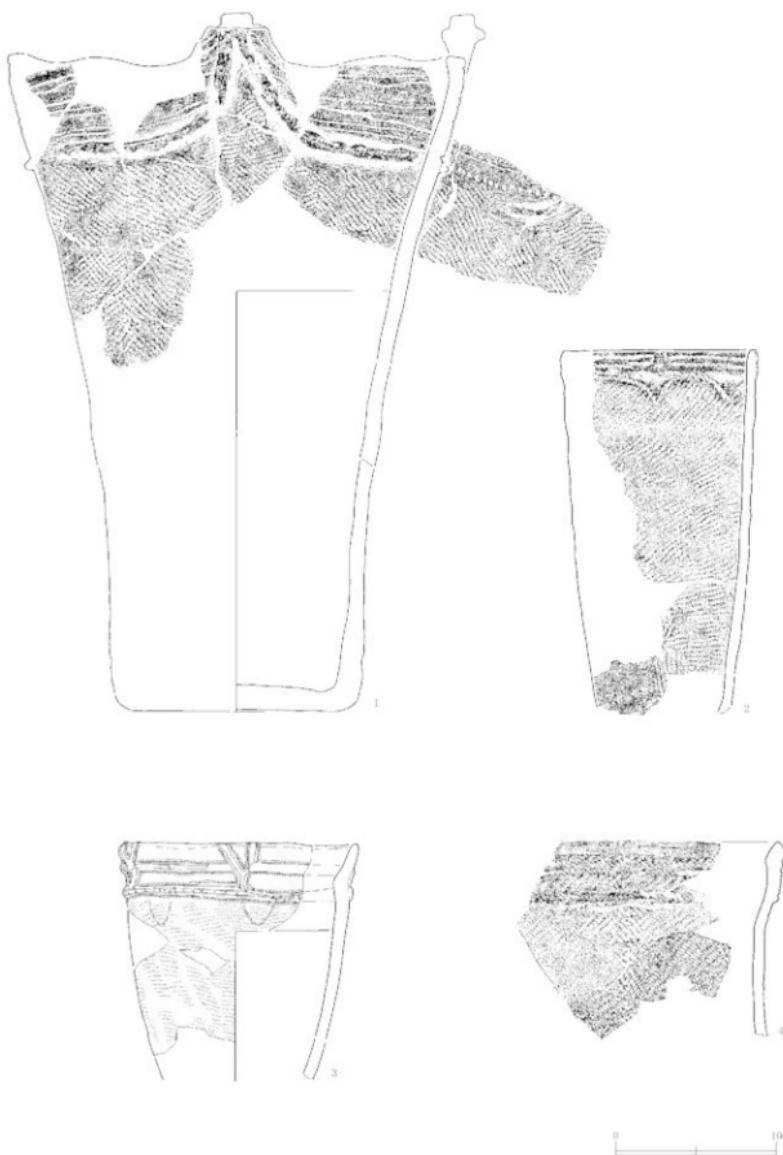
第85図 遺構外出土土器類（11）



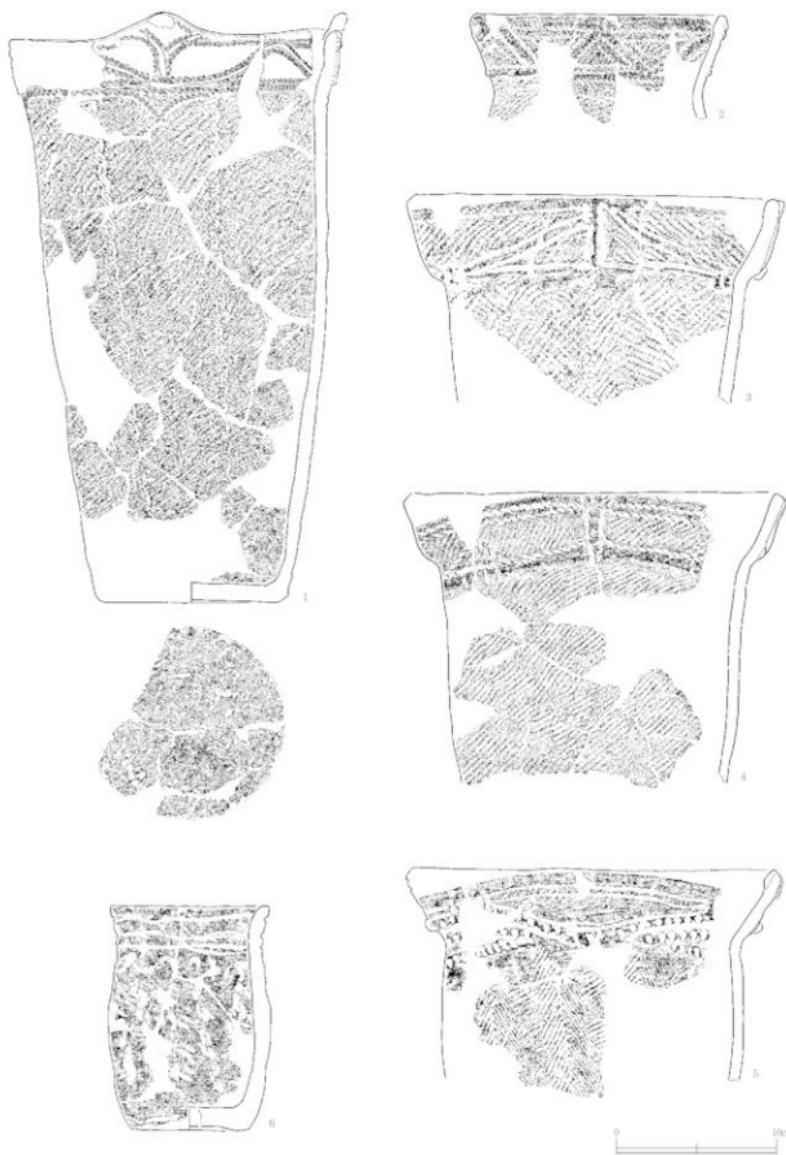
第86図 遺構外出土土器類 (12)



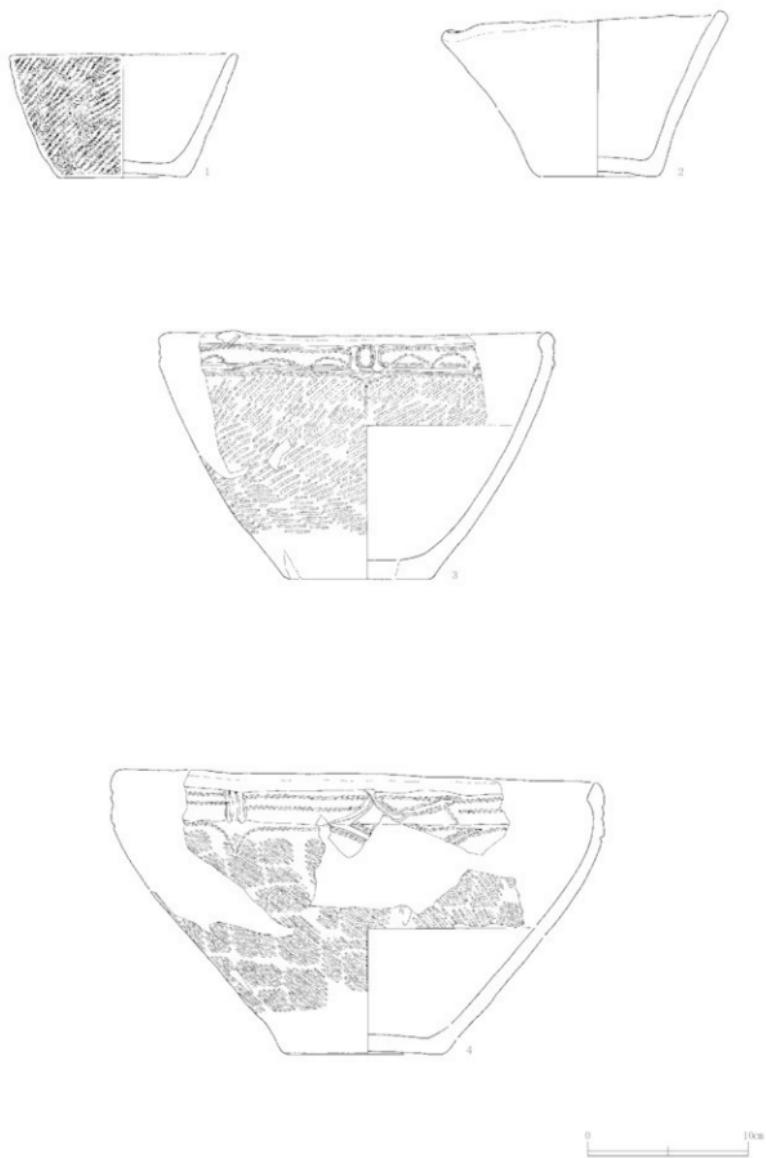
第87図 遺構外出土土器類 (13)



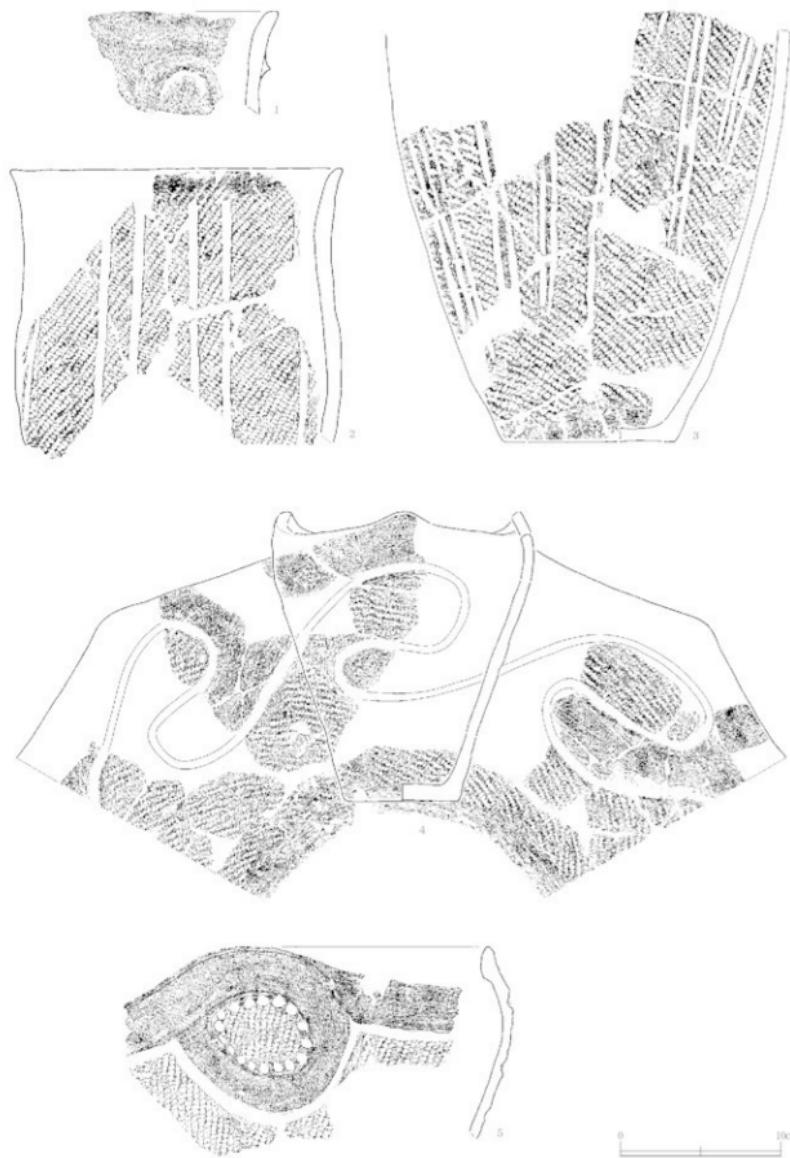
第88図 遺構外出土土器類（14）



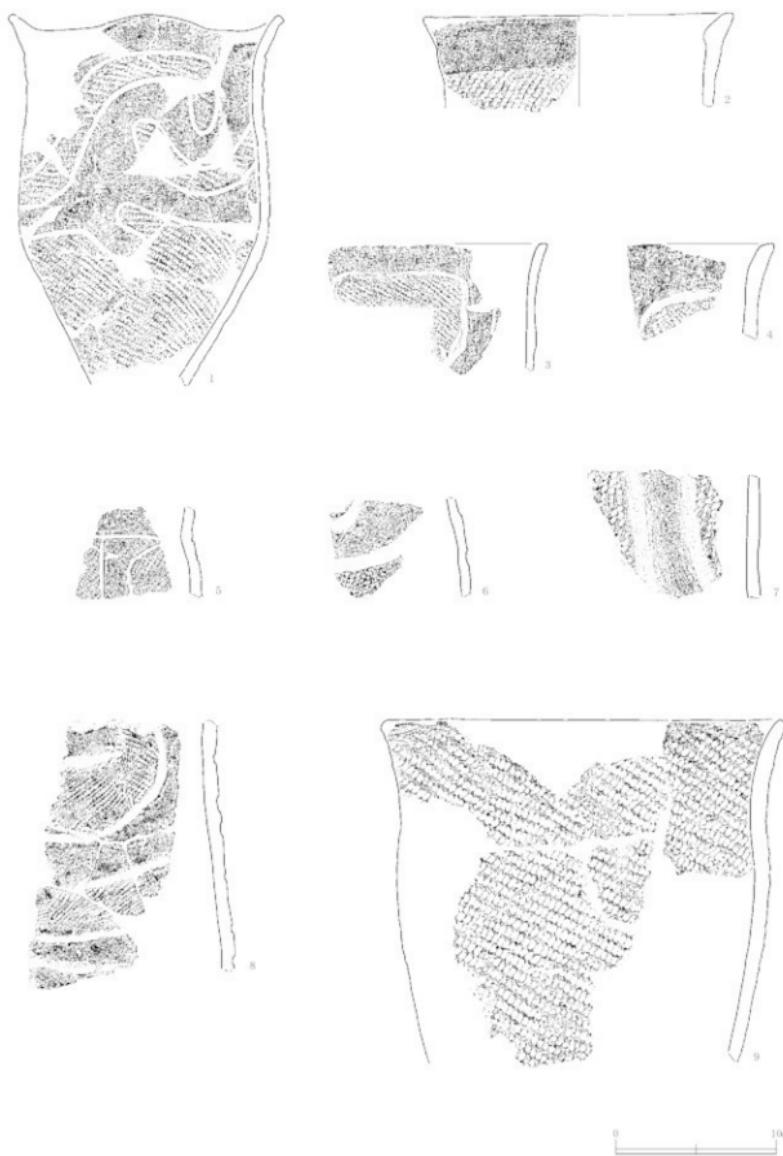
第89図 遺構外出土土器類（15）



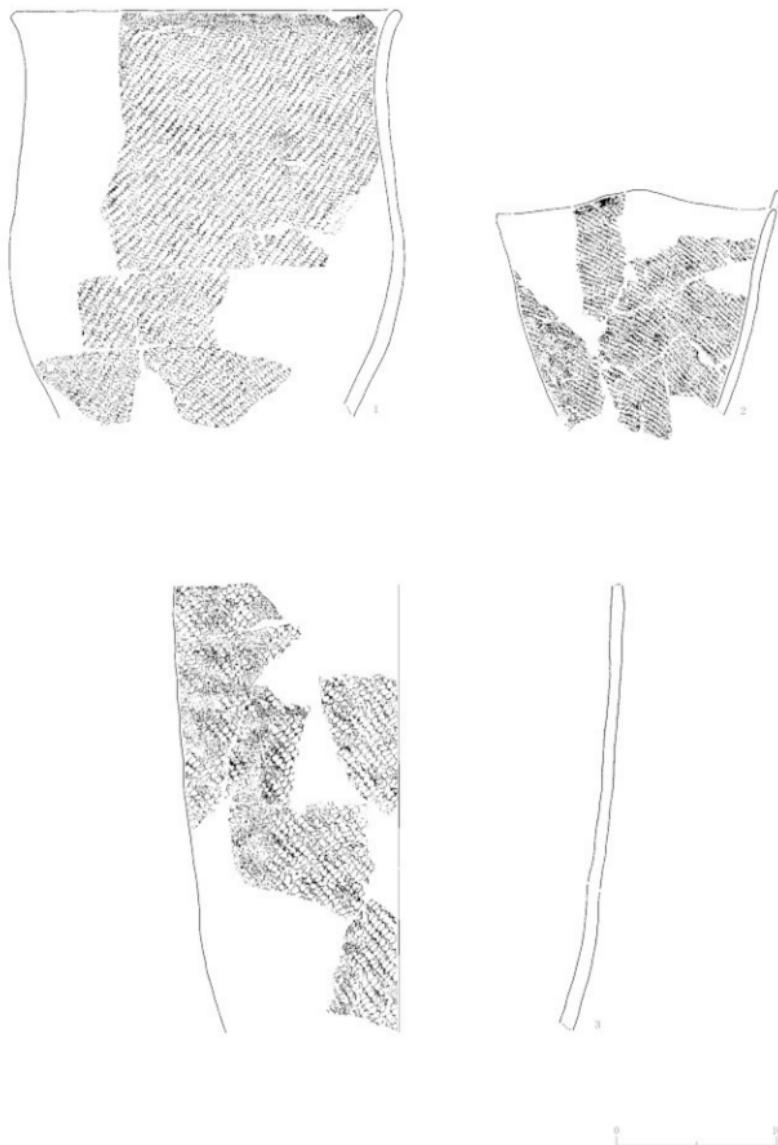
第90図 遺構外出土土器類（16）



第91図 遺構外出土土器類 (17)



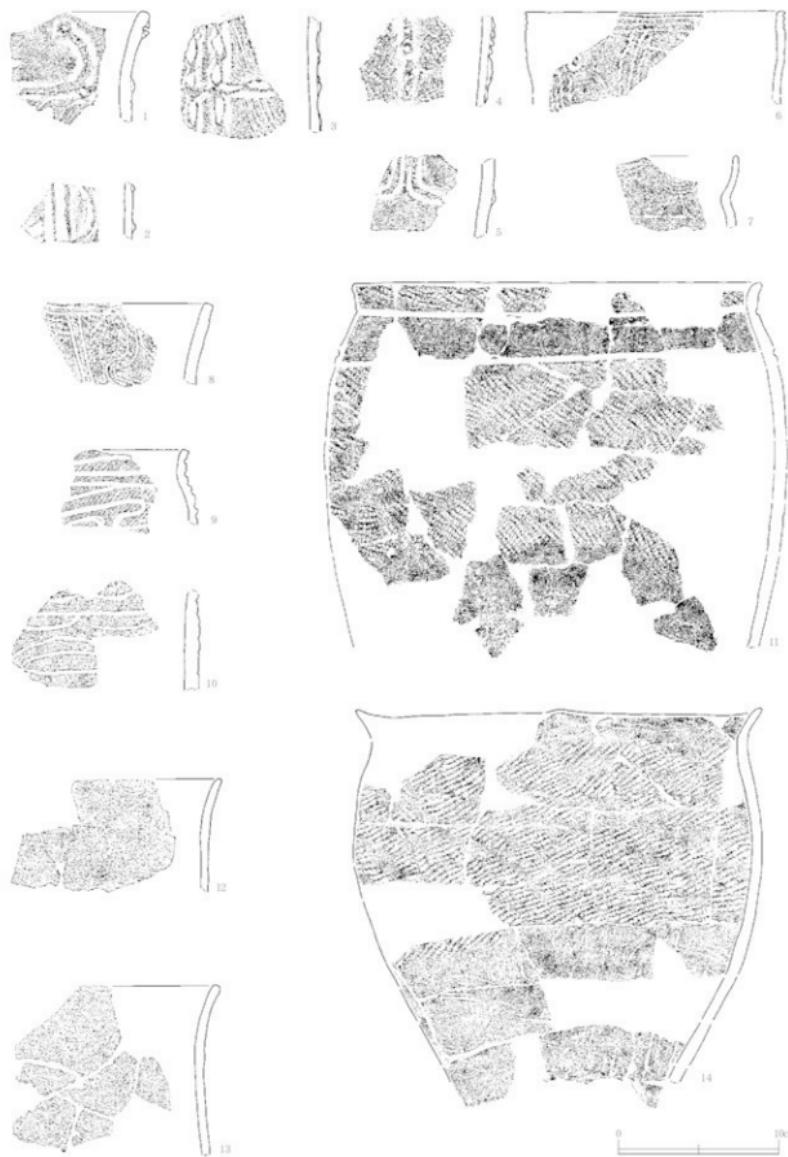
第92図 遺構外出土土器類 (18)



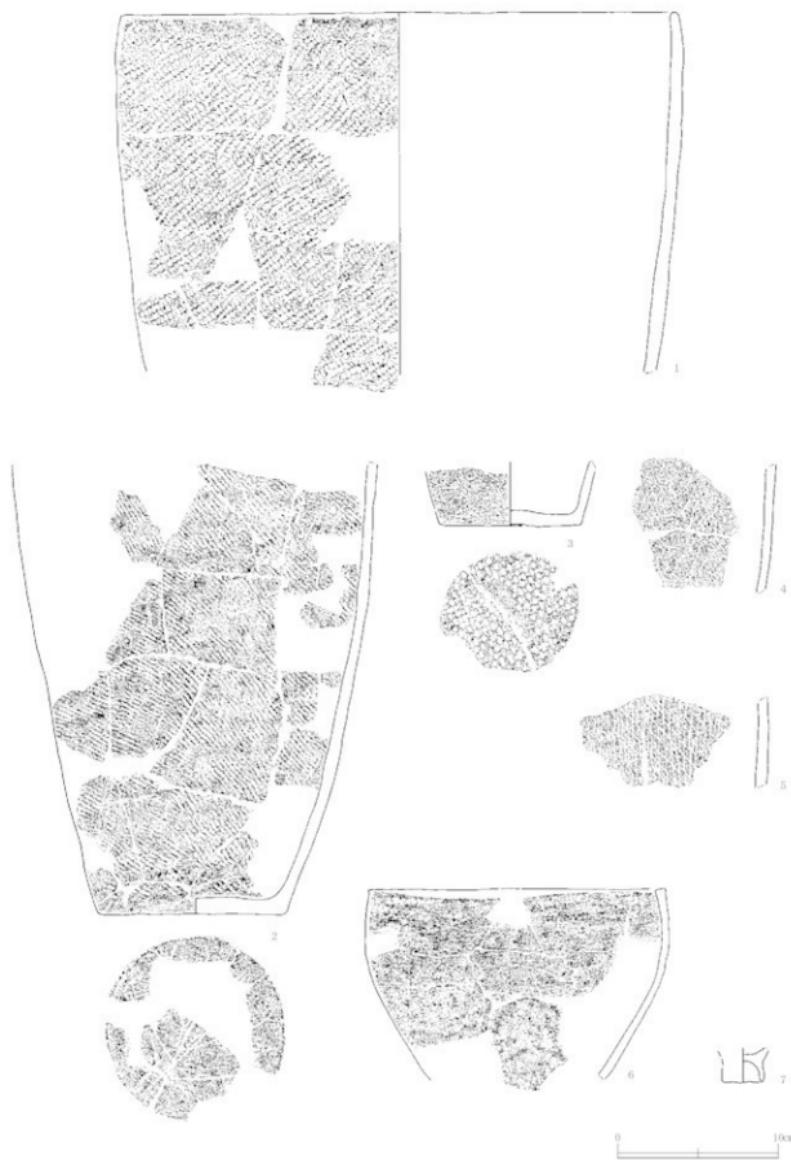
第93図 遺構外出土土器類 (19)



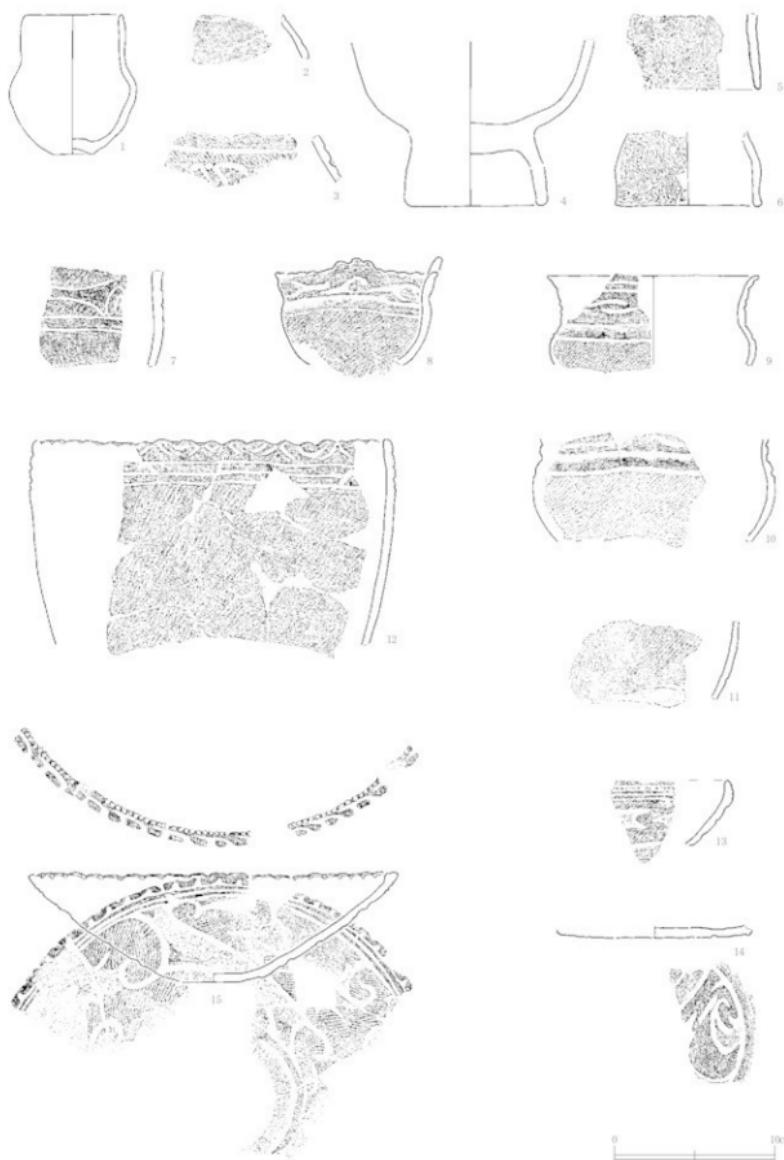
第94図 遺構外出土土器類 (20)



第95図 遺構外出土土器類（21）



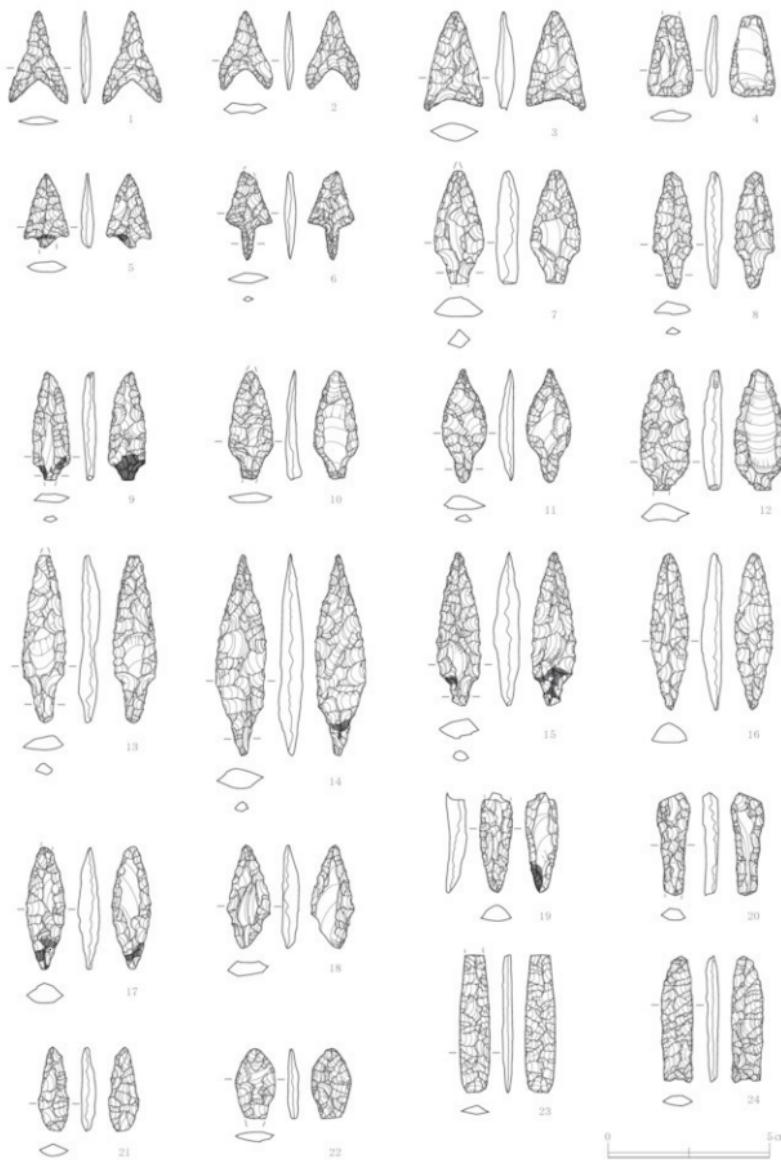
第96図 遺構外出土土器類 (22)



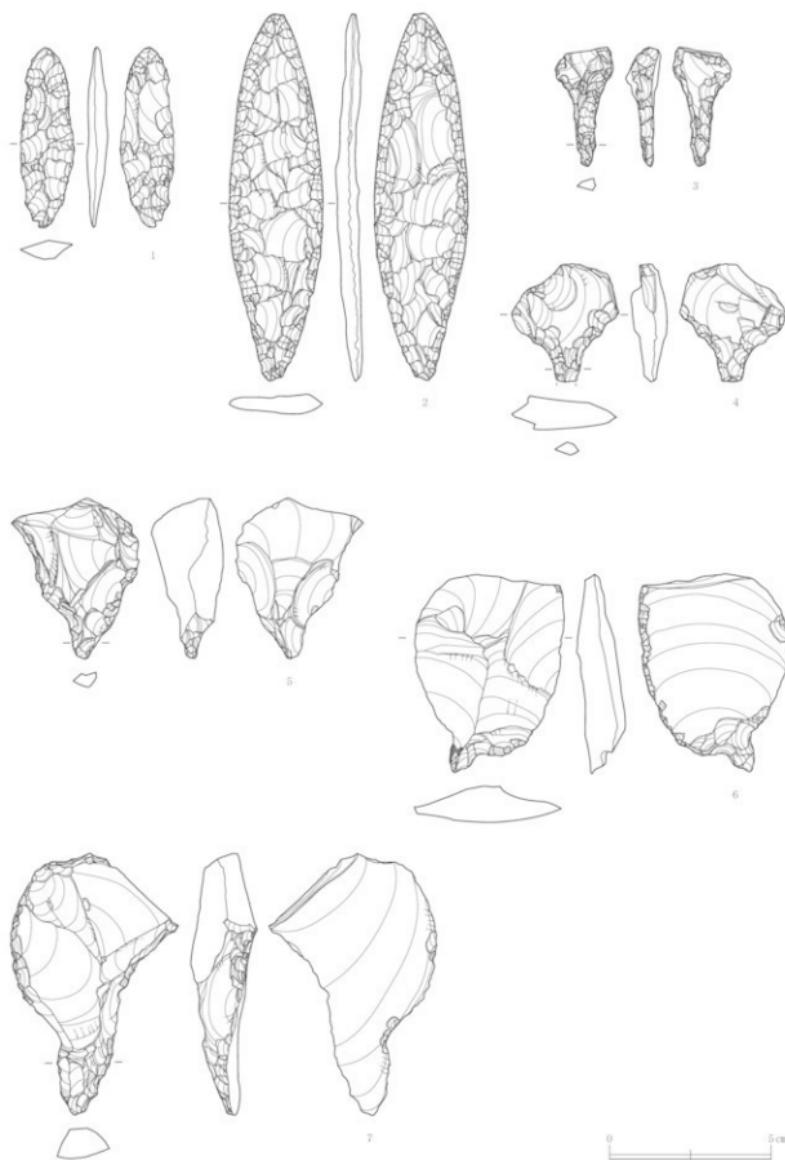
第97図 遺構外出土土器類 (23)



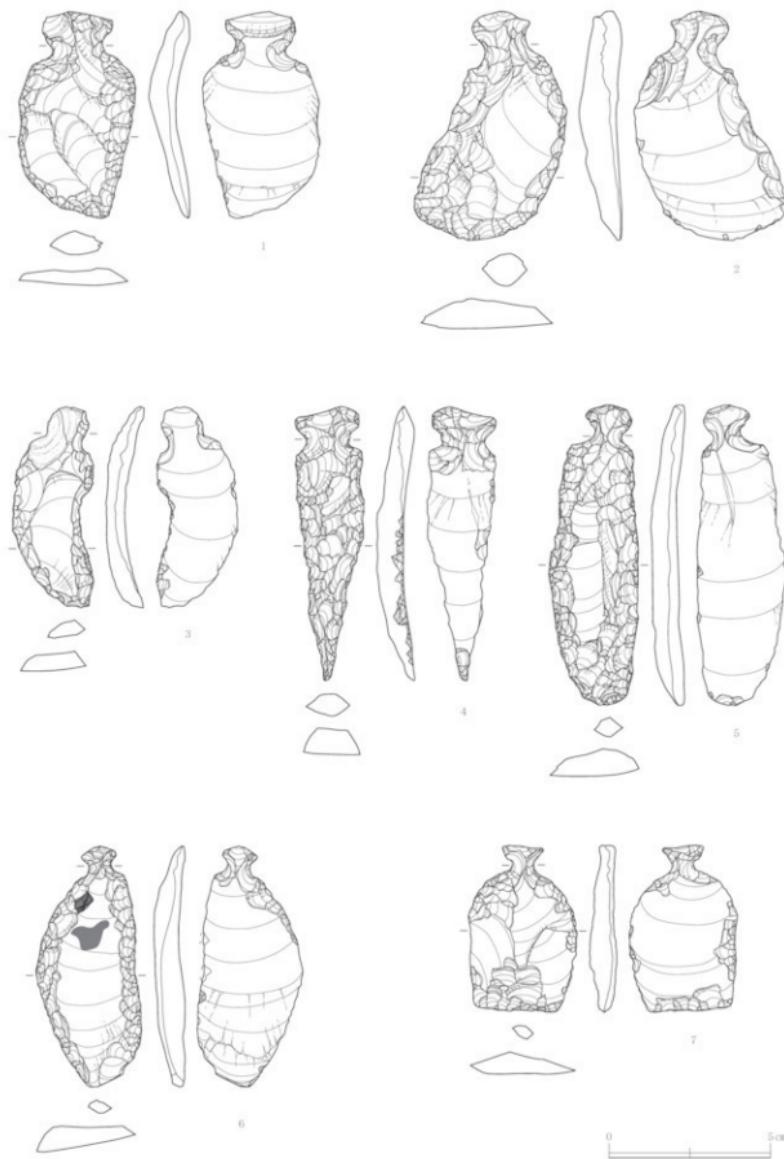
第98図 遺構外出土土器類 (24)



第99図 遺構外出土石器類（1）



第100図 遣構外出土石器類（2）



第101図 遺構外出土石器類（3）